野々市市中林土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1（都市計画道路 四十万末松線・堀内上林線）

上林イシガネ遺跡
末松遺跡

2023

石川県野々市市教育委員会

平成28年度調査 全景航空写真（南から）

平成28年度調査 2区・3区中世遺構（南東から）

平成29年度調査 1区全景（北西から）

平成30年度調査 1区全景航空写真（北西から）

令和2年度調査 1区全景航空写真（北から）

令和3年度調査 1区全景航空写真（右が北）

令和3年度調査　2-1区全景航空写真（南から）

令和3年度調査　2-2区全景航空写真（北から）

上林イシガネ遺跡
末松遺跡

2023

石川県野々市市教育委員会

例　　言

1　本書は、野々市市教育委員会が実施した上林イシガネ遺跡・末松遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　上林イシガネ遺跡の所在地は、上林三丁目、中林一丁目地内である。末松遺跡の所在地は、末松一・三丁目、中林一・二・三・五丁目地内である。今回の調査対象地は野々市市中林土地区画整理事業の都市計画道路建設地である上林三丁目、中林二・三丁目である。

3　調査原因は、野々市市中林土地区画整理事業による都市計画道路建設（四十万末松線、堀内上林線）である。

4　調査は、野々市市中林土地区画整理組合からの依頼を受けて、平成28（2016）～平成30（2018）年度、令和2（2020）～令和4年度（2022）年度に野々市市教育委員会が実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成である。

5　調査に係る費用は、野々市市中林土地区画整理組合が負担した。

6　現地調査は平成28～平成30年度、令和2・3年度に実施した。遺跡名・期間・面積・担当は次のとおりである。

（1）平成28（2016）年度（上林イシガネ遺跡）

期間：平成28年9月16日～同年11月30日

面積：1,570㎡

担当：西村　慈子

（2）平成29（2017）年度（末松遺跡）

期間：平成29年11月7日～平成30年1月23日

面積：600㎡

担当：西村　慈子

（3）平成30（2018）年度（末松遺跡）

期間：平成30年9月10日～同年12月12日

面積：589㎡

担当：田村　昌宏・腰地　孝大

（4）令和2（2020）年度（末松遺跡）

期間：令和2年6月25日～同年9月30日

面積：560㎡

担当：西村　慈子

（5）令和3（2021）年度（末松遺跡）

期間：令和3年7月26日～同年12月6日

面積：755㎡

担当：徳野　裕子

7　出土品整理は平成28～平成30年度、令和2・3年度に実施した。

8　報告書の作成作業の担当は以下のとおりである。

第1章～第3章　西村　慈子

第4章～第6章　腰地　孝大

第7章第1～2節　徳野　裕子

第7章第3節・第8章　田村　昌宏

出土品写真撮影・報告書執筆補助は花田　和希（野々市市教育委員会会計年度任用職員）である。

9　本書についての凡例は下記のとおりである。

(1)　遺構実測図その他の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。

(2)　上林イシガネ遺跡のグリッド杭は（X=56.280、Y=−50.370）を原点（A、1）　とし、西方向へ2、3…、北方向へB、C…を付した。

(3)　末松遺跡のグリッド杭は（X=56.630、Y=−50.920）を原点（1、A）　とし、東方向へB、C…、南北方向へ2、3…、北方向へ−2、−3…を付した。

(4)　水平基準は海抜高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。

(5)　出土遺物番号は、本文・観察表・挿図実測図・写真図版に対応する。

(6)　挿図の縮尺は土器・石器については、S=1/3、金属品についてはS=1/2または現寸である。

(7)　写真図版における遺物の縮尺については統一していない。

(8)　土層図・遺物観察表の色彩注記は、『新版標準土色帖』に拠った。

(9)　遺構名称の略号は以下のとおりである。

溝：SD　　土坑：SK　　小穴：P　　竪穴建物・竪穴状遺構：SI　　掘立柱建物：SB

柵列：SA　　自然河川：NR　　不明遺構・風倒木痕・その他：SX

(10)挿図の実測図にある網かけ表現は下記の通りである。また、炭化物及び油煙痕は黒塗である。

：赤彩　　：内黒

(11)参考文献は巻末に一括して記載している。

10　調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

目　次

第 1 章　調査の経緯と経過 …… 1
　第 1 節 調査に至る経緯 …… 1
　第 2 節 調査の経過 …… 2
　第 3 節 出土品の整理と報告書の作成 …… 4

第 2 章　遺跡の位置と環境と過年度の成果 …… 4
　第 1 節 位置と地理的環境 …… 4
　第 2 節 歴史的環境 …… 7
　第 3 節 過年度の調査成果 …… 8

上林イシガネ遺跡
第 3 章　平成28(2016)年度の調査成果 …… 13
　第 1 節 調査の概要 …… 13
　第 2 節 遺構 …… 13
　　1. 1区 …… 13
　　2. 2区 …… 14
　　3. 3区 …… 17
　　4. 4区 …… 19
　第 3 節　出土遺物 …… 24

末松遺跡
第 4 章　平成29 (2017) 年度の調査成果 …… 31
　第 1 節 調査の概要 …… 31
　第 2 節 遺構 …… 31
　　1. 1区 …… 31
　　2. 2区 …… 35
　第 3 節　出土遺物 …… 43

第 5 章　平成30 (2018) 年度の調査成果 …… 48
　第 1 節 調査の概要 …… 48
　第 2 節 遺構 …… 48
　　1. 1区 …… 48
　　2. 2区・3区 …… 53
　第 3 節 出土遺物 …… 53

第 6 章　令和2(2020)年度の調査成果 …… 59
　第 1 節 調査の概要 …… 59
　第 2 節 遺構 …… 59
　　1. 1区 …… 59
　　2. 2区 …… 75
　第 3 節 出土遺物 …… 75

第 7 章　令和3(2021)年度の調査成果 …… 82
　第 1 節 調査の概要 …… 82
　第 2 節 遺構 …… 82
　　1. 1区 …… 82
　　2. 2-1区 …… 84
　　3. 2-2区 …… 91
　第 3 節 出土遺物 …… 95

第 8 章　総括 …… 103
　第 1 節 上林イシガネ遺跡の調査成果まとめ …… 103
　第 2 節 末松遺跡の調査成果まとめ …… 103

引用・参考文献 …… 104
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図 野々市市市中林土地区画整理事業
都市計画道路発掘調査位置図 …… 2
第２図 野々市市位置図…… 4
第３図 遺跡分布図 …… 5
第４図 末松遺跡・上林イシガネ遺跡発掘調査範囲図…… 9

第５図 平成28年度調査区配置略図…… 13
第６図 1区1トレンチ・2トレンチ平面略測図・土層柱状図 …… 14
第７図 2区平面図 …… 15
第８図 調査区北壁・東壁土層断面図…… 16
第９図 3区平面図 …… 18
第10図 3区北壁土層断面図 …… 19
第11図 3区西壁土層断面図 …… 20
第12図 3区 SD1 土層断面図…… 21
第13図 3区 SD1 小刀出土平面・断面図 …… 21
第14図 SK25・26 平面・断面図 …… 21
第15図 4区平面図 …… 22
第16図 3区・4区 SD1 及び中世遺構平面図…… 23
第17図 4区北壁土層断面図 …… 23
第18図 平成28年度上林イシガネ遺跡出土遺物実測図1 …… 25
第19図 平成28年度上林イシガネ遺跡出土遺物実測図2 …… 26

第20図 平成29年度調査区配置略図…… 31
第21図 1区平面図 …… 32
第22図 SB1 平面・断面図…… 33
第23図 SD85・86・87、SK89 平面・断面図…… 34
第24図 SD106 平面・断面図 …… 34
第25図 2区平面図1（南側） …… 36
第26図 2区平面図2（北側） …… 37
第27図 SD640 平面・断面図…… 38
第28図 SB2 平面・断面図…… 39
第29図 P501・284・268・250・197・185 平面・断面図 …… 39
第30図 SB3 平面・断面図 …… 40
第31図 SB4 平面・断面図 …… 41
第32図 SB5 平面・断面図 …… 42
第33図 平成29年度末松遺跡出土遺物実測図1 …… 44
第34図 平成29年度末松遺跡出土遺物実測図2 …… 45

第35図 平成30年度調査区配置略図…… 48
第36図 1区平面図1（南側） …… 49
第37図 1区平面図2（北側） …… 50
第38図 SD3・4・5・6、SI428・429 平面・断面図…… 51
第39図 P170・180・186・237・250・257 平面・断面図 …… 52
第40図 2区・3区平面図…… 54
第41図 平成30年度末松遺跡出土遺物実測図1 …… 55
第42図 平成30年度末松遺跡出土遺物実測図2 …… 56

第43図 令和2年度調査区配置略図 …… 59
第44図 1区平面図1（北側） …… 60
第45図 1区平面図2（南側） …… 61
第46図 SI531 平面・断面図 …… 62
第47図 SD1・2 平面図 …… 66
第48図 SD1・2 断面図 …… 66
第49図 SK5・419・7・8 平面・断面図…… 67
第50図 SK9・16・18・11・19 平面・断面図 …… 68
第51図 SK20・21・136・13 平面・断面図 …… 69
第52図 SK12・17 平面・断面図…… 70
第53図 SK171・172・173、P108 平面・断面図…… 71
第54図 SI174・175、SK252 平面・断面図…… 72
第55図 SI254・255、SK256 平面・立面・断面図…… 73
第56図 SK22・128・15 平面・立面・断面図 …… 74
第57図 2区平面図 …… 76
第58図 令和2年度末松遺跡出土遺物実測図1 …… 77
第59図 令和2年度末松遺跡出土遺物実測図2…… 78
第60図 令和2年度末松遺跡出土遺物実測図3…… 79

第61図 令和3年度調査区配置略図 …… 82
第62図 1区平面図 …… 83
第63図 SK8 平面・断面図 …… 84
第64図 2-1区平面図…… 85
第65図 SI102、SK166 平面・断面図 …… 86
第66図 SB1 平面・断面図…… 87
第67図 SB2 平面・断面図…… 88
第68図 SA1 平面・断面図 …… 89
第69図 2-2区平面図 …… 90
第70図 SA2 平面・断面図 …… 91
第71図 SA3・4 平面・断面図 …… 92
第72図 SB3 平面・断面図 …… 93
第73図 SB4 平面・断面図 …… 94
第74図 令和3年度末松遺跡出土遺物実測図1…… 97
第75図 令和3年度末松遺跡出土遺物実測図2…… 98
第76図 令和3年度末松遺跡出土遺物実測図3…… 99

表目次

第１表 野々市市遺跡一覧表 …… 6
第２表 平成28年度遺物観察表（土器） …… 27
第３表 平成28年度遺物観察表（石製品） …… 28
第４表 平成28年度遺物観察表（金属製品） …… 28
第５表 平成29年度遺物観察表（土器） …… 46
第６表 平成29年度遺物観察表（土製品） …… 47
第７表 平成29年度遺物観察表（石製品） …… 47
第８表 平成29年度遺物観察表（金属製品） …… 47
第９表 平成30年度遺物観察表（土器） …… 57
第10表 平成30年度遺物観察表（石製品） …… 58
第11表 令和2年度遺物観察表（土器） …… 80
第12表 令和2年度遺物観察表（石製品） …… 81
第13表 令和2年度遺物観察表（金属製品） …… 81
第14表 令和3年度1区遺物観察表（土器） …… 100
第15表 令和3年度1区遺物観察表（金属製品） …… 100
第16表 令和3年度2区遺物観察表（土器） …… 101
第17表 令和3年度2区遺物観察表（土製品） …… 102
第18表 令和3年度2区遺物観察表（石製品） …… 102
第19表 令和3年度2区遺物観察表（金属製品） …… 102

図版目次

巻頭図版1　平成28年度調査（上林イシガネ遺跡）
平成28年度調査 全景航空写真（南から）
平成28年度調査 2区・3区中世遺構（南東から）

巻頭図版2　平成29・30年度調査（末松遺跡）
平成29年度調査 1区全景（北から）
平成30年度調査 1区全景航空写真（北西から）

巻頭図版3　令和2・3年度調査（末松遺跡）
令和2年度調査 1区全景航空写真（北から）
令和3年度調査 1区全景航空写真（右が北）

巻頭図版4　令和3年度調査（末松遺跡）
令和3年度調査 2-1区全景航空写真（南から）
令和3年度調査 2-2区全景航空写真（北から）

写真図版1　平成28年度調査（上林イシガネ遺跡）
1区 1トレンチ全景（東から）
1区 1トレンチ西壁土層断面（東から）
1区 2トレンチ全景（南西から）
1区 2トレンチ西壁土層断面（東から）
2区 全景（北西から）

写真図版2　平成28年度調査（上林イシガネ遺跡）
3区 全景（南東から）
3区 西半全景（完掘状況）（北東から）
3区 北壁土層断面（南東から）
3区 サブトレンチ1 SD1（e-f）断面（西から）
3区 サブトレンチ2 SD1（g-h）断面（北から）

写真図版3　平成28年度調査（上林イシガネ遺跡）
3区 SD1（i-j）断面（北から）
3区 西壁土層断面（北東から）
3区 SD1（k-l）小刀出土状況（東から）
3区 P3 土層断面（南から）
3区 SK25・26 遺構検出状況（東から）
3区 SK25 遺物出土状況（東から）
3区 SK25・26 完掘状況（東から）
3区上層遺構面検出状況（南西から）

写真図版4　平成28年度調査（上林イシガネ遺跡）
4区 全景（南東から）
写真図版4　平成29年度調査（末松遺跡）
1区 全景（北から）

写真図版5　平成29年度調査（末松遺跡）
1区 SD85・86（西から）
1区 SD86・87、SK89（東から）
1区 SD85 遺物出土状況（西から）
2区 調査区南端全景（SD640 以南）（北から）
2区 調査区南半全景（SB2 付近）（南から）
2区 調査区北半全景（SB3・4 付近）（南から）

2区 調査区北端全景（SB5 付近）（南から）
2区 調査区北端東西トレンチ全景（西から）

写真図版6　平成29年度調査（末松遺跡）
2区 調査区北半 東壁土層（南西から）
2区 調査区南半 東壁土層①（西から）
2区 調査区南半 東壁土層②（西から）
2区 調査区南半 東壁土層③（西から）
2区 SD640 土層断面（北西から）
2区 P268 遺物出土状況（南から）
2区 P185 遺物出土状況（東から）
2区 SK533 土層断面（南から）

写真図版7　平成30年度調査（末松遺跡）
1区 全景垂直航空写真（右が北）
1区 SD1・2・3 完掘（南から）
1区 全景（北から）
1区 全景（南から）
1区 南西部（東から）

写真図版8　平成30年度調査（末松遺跡）
1区 P237 遺物出土状況1（南東から）
1区 P237 遺物出土状況2（南から）
1区 P250 遺物出土状況（西から）
1区 SD4・5 完掘（西から）
1区 SI428 土層断面（北西から）
1区 SI429 土層断面（西から）
2区 南半全景（南から）
3区 全景（北から）

写真図版9　令和2年度調査（末松遺跡）
1区 SD1・2 完掘（北東から）
1区 SI531（竪穴住居）遺物出土状況（南から）
1区 SK419・5 完掘（北西から）
1区 SK7 完掘（北東から）
1区 SK8 完掘（北東から）
1区 SK9 完掘（南から）
1区 SK16 完掘（北東から）
1区 SK18 土層（南から）

写真図版10　令和2年度調査（末松遺跡）
1区 SK11・9 完掘（南東から）
1区 SK20・136 完掘（北東から）
1区 SK13 完掘（北東から）
1区 SK21・258 完掘（南東から）
1区 SK12・17 完掘（東から）
1区 SK171・172・173、P108 完掘（北西から）
1区 SK173 遺物出土状況（南西から）
1区 SK174・175 土層断面（南から）

写真図版11　令和2年度調査（末松遺跡）
1区 SI254・255、SK256 完掘（南東から）
1区 SI254・255 土層断面（西から）
1区 SK22 遺物出土状況（北から）
2区 全景（南から）
1区 全景（南から）

写真図版12　令和3年度調査（末松遺跡）
1区 全景（北から）
1区 全景（南から）
1区 SK8 遺物出土状況（北東から）
2-1区 SI102（竪穴住居）完掘（南西から）
2-1区 SB1・2（北西から）

写真図版13　令和3年度調査（末松遺跡）
2-1区 全景（南から）
2-2区 全景（南から）

写真図版14　令和3年度調査（末松遺跡）
2-2区 SB3・4、SA3・4（北西から）
2-2区 全景（北から）

〈出土遺物〉
写真図版15　平成28年度調査（上林イシガネ遺跡）
写真図版16　平成28年度調査（上林イシガネ遺跡）
写真図版17　平成29年度調査（末松遺跡）
写真図版18　平成29年度調査（末松遺跡）
写真図版19　平成30年度調査（末松遺跡）
写真図版20　平成30年度調査（末松遺跡）
写真図版21　令和2年度調査（末松遺跡）
写真図版22　令和2年度調査（末松遺跡）
写真図版23　令和3年度調査（末松遺跡）
写真図版24　令和3年度調査（末松遺跡）

第１章 調査の経緯と経過

第１節 調査に至る経緯

本調査は、野々市市中林土地区画整理事業施行地区内における都市計画道路（四十万末松線）と都市計画道路（堀内上林線）建設工事に伴い、野々市市教育委員会が実施したものである。

野々市市中林土地区画整理事業施行地区は、野々市市西南部地域にあたる。元は水田が広がる農業振興地域であったが、近隣に石川県立大学等が立地する特性から「金沢都市計画区域マスタープラン」において、産業拠点（産・学・官の連携による新産業の創出を図る複合拠点）及び住居ゾーン（居住環境の改善や土地の有効利用に努めるゾーン）として位置付けられており、産業や良質な住宅地と豊かな都市近郊農地とが調和した住みよい地域づくりのモデルフィールドとしての市街地形成を求める地区として計画されたことから、土地区画整理事業による整備を行い、道路・公園等の公共施設を配置し、適正な土地利用の誘導により、良好な市街地形成を図ることを目的に野々市市中林土地区画整理事業が計画された。

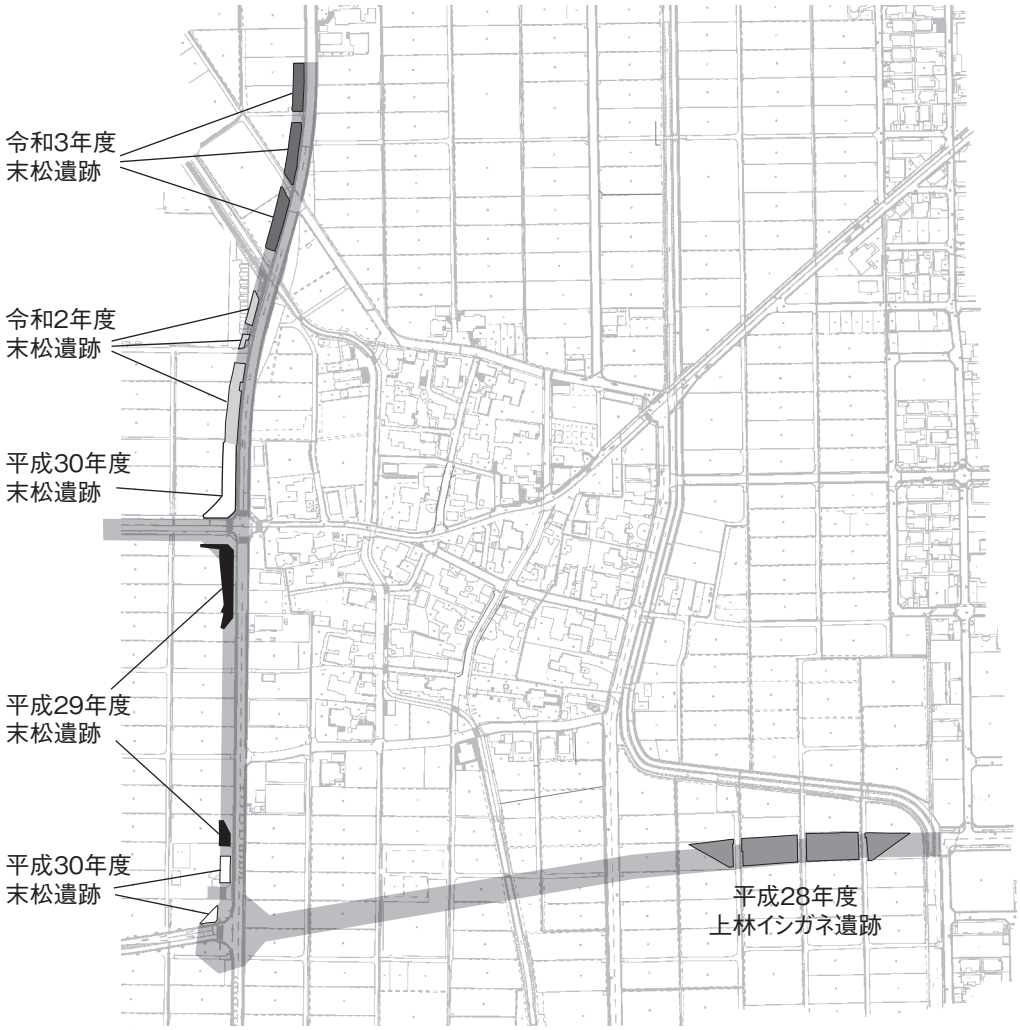
このことから、野々市市中林土地区画整理事業施行予定区域30.9ha内の埋蔵文化財の有無を確認するため、平成25年12月２日付けで野々市市産業建設部長から野々市市教育委員会教育長宛に土地区画整理事業施行予定区域内の埋蔵文化財の分布調査の依頼が出され、平成26年３月20日付けで同予定区域内での分布調査を行う旨の回答をした。これに基づき、野々市市中林土地区画整理事業施行予定区域内に試掘坑を設定し、同年11月20日～12月12日に54箇所、平成27年12月１日～12月９日に30箇所の計84箇所で試掘調査を実施した。その結果、以前より施行区域西側に存在していた末松遺跡が施行区域内にまで広がることを確認したほか、新たに上林イシガネ遺跡を発見した。

前述の分布調査の結果から、野々市市中林土地区画整理組合、野々市市産業建設部都市計画課（現建設部都市整備課）、野々市市教育委員会の間で協議を行い、遺跡の範囲内で整理事業設計図に基づく道路等建設部分、河川・調整池・水路・公園緑地等などのうち十分な保護層が確保できない部分については、発掘調査等による記録保存措置を施す旨で合意し、平成28年８月８日付けで野々市市と野々市市中林土地区画整理組合との間で「野々市市中林土地区画整理事業の埋蔵文化財に関する協定書」が交わされた。

これを受け、野々市市中林土地区画整理組合と野々市市教育委員会の間で協議を行い、平成28年から複数年かけて上林イシガネ遺跡、末松遺跡の発掘調査を実施することで合意した。

都市計画道路（四十万末松線）については、道路部分の東隅が埋蔵文化財包蔵地（上林イシガネ遺跡）である。上林イシガネ遺跡は平成28年度に記録保存措置のうち、現地調査を実施した。文化財保護法第93条第１項に基づく届出は、平成28年８月１日に野々市市中林土地区画整理組合理事長から提出されたものを平成28年８月８日付け教文第156号により野々市市教育委員会教育長から石川県教育委員会宛に進達した。これを受けて平成28年８月８日付け教文第1731号により野々市市中林土地区画整理組合理事長宛に石川県教育委員会教育長から埋蔵文化財発掘調査を実施する旨の通知がなされた。

都市計画道路（堀内上林線）についても、道路部分の３分の２が埋蔵文化財包蔵地（末松遺跡）である。末松遺跡は平成29年、平成30年、令和２年、令和３年までの４カ年に渡って記録保存措置のうちの現地調査を実施した。ただし、当該道路は既設道路であり、現状の道路幅を拡幅する事業設計であったことから、発掘調査は拡幅する範囲のみを実施した。文化財保護法第93条第１項に基づく届出は、平成28年９月９日に野々市市中林土地区画整理組合長から提出されたものを平成28年9月12日付け教文第274号により野々市市教育委員会教育長から石川県教育委員会宛に進達した。これを受けて平成28年９月12日付け教文第1735号により野々市市中林土地区画整理組合理事長宛に石川県教育委員会教育長から埋蔵文化財発掘調査を実施する旨の通知がなされた。



第１図　野々市市中林土地区画整理事業都市計画道路発掘調査位置図

第２節 調査の経過

１. 平成28年度調査（上林イシガネ遺跡）

平成28年８月１日に野々市市中林土地区画整理組合から発掘調査の依頼があり、同日付けで発掘調査承諾書が提出された。平成28年８月８日付けで野々市市と野々市市中林土地区画整理組合との埋蔵文化財発掘調査の受委託契約を取り交わした。文化財保護法99条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は平成28年９月９日付け教文第270号で野々市市教育委員会から石川県教育委員会へ報告した。

現地調査は９月17日より大型重機掘削を開始した。調査区は４つに分かれることから、重機掘削は複数回に分けて行っている。９月30日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出と遺構掘削を行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、11月18日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後、一部追加調査や記録を行い、11月28日に資機材の洗浄や搬出作業を行い、11月30日に完全撤収を確認して現地調査を完了した。

２. 平成29年度調査（末松遺跡）

平成29年４月12日に野々市市中林土地区画整理組合から発掘調査の依頼があり、４月13日付けで発掘調査承諾書が提出された。平成29年８月21日付けで野々市市と野々市市中林土地区画整理組合との埋蔵文化財発掘調査の受委託契約を取り交わした。文化財保護法99条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は平成29年９月

28日付け教文第300号で野々市市教育委員会から石川県教育委員会へ報告した。

現地調査は11月７日より大型重機掘削を開始した。11月10日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。１区のドローンによる略測平面用撮影は11月13日、ポールによる測量撮影は11月28日に行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、２区のドローンによる略測平面用撮影は11月28日、ポールによる測量撮影は天候と遺構掘削の進行状況を加味しながら12月４日、12月15日、12月21日に行った。その後、一部追加調査や記録を行い、平成30年１月９日に資機材の洗浄や搬出作業を開始し、１月23日に完全撤収を確認して現地調査を完了した。

３. 平成30年度調査（末松遺跡）

平成30年４月10日に野々市市中林土地区画整理組合から発掘調査の依頼があり、同日付けで発掘調査承諾書が提出された。平成30年７月10日付けで野々市市と野々市市中林土地区画整理組合との埋蔵文化財発掘調査の受委託契約を取り交わした。文化財保護法99条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は平成30年９月14日付け教文第319号で野々市市教育委員会から石川県教育委員会へ報告した。

現地調査は９月13日より大型重機掘削を開始した。調査区は３つに分かれることから、重機掘削は複数回に分けて行っている。１区は９月18日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。

１区のドローンによる略測平面用撮影は９月20日、９月25日に行い、10月30日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を行った。その後、11月８日まで追加調査や記録を行った。

２・３区の重機掘削は既存のアスファルトカット除去も含め11月15日より開始し、11月20日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、２区のポールによる測量撮影は11月21日、３区のドローンによる略測平面用撮影は11月27日に行い、ポールによる測量撮影は12月３日に行った。その後、12月５日に資機材の洗浄や搬出作業を行い、12月12日に完全撤収を確認して現地調査を完了した。

４. 令和２年度調査（末松遺跡）

令和２年４月１日に野々市市中林土地区画整理組合から発掘調査の依頼があり、５月７日付けで発掘調査承諾書が提出された。土地権利の関係から、１区は令和２年５月７日付け、２区は令和２年７月10日付けで野々市市と野々市市中林土地区画整理組合との埋蔵文化財発掘調査の受委託契約を取り交わした。文化財保護法99条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は令和２年６月26日付け教文第133号で野々市市教育委員会から石川県教育委員会へ報告した。

１区は７月９日より大型重機掘削を開始した。７月13日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、ドローンによる略測平面用撮影は７月16日に行い、８月22日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後、一部追加調査や記録を行い、９月30日に資機材の洗浄作業を行い、８月31日に現地調査を完了した。

２区は９月１日より大型重機掘削を開始した。９月７日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、ドローンによる略測平面用撮影は９月８日に行い、９月16日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後、一部追加調査や記録を行い、８月26日に資機材の洗浄作業、９月30日に撤去作業を行って現地調査を完了した。

５. 令和３年度調査（末松遺跡）

令和３年２月１日に野々市市中林土地区画整理組合から発掘調査の依頼があり、令和３年４月１日付けで発掘調査承諾書が提出された。耕作期間の関係から、休耕地である１区は令和３年４月１日付け、現耕作地である２区は令和３年６月１日付けで野々市市と野々市市中林土地区画整理組合との埋蔵文化財発掘調査の受委託契約を取り交わした。文化財保護法99条第１項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査報告は令和３年６月25日付け教文第173号で野々市市教育委員会から石川県教育委員会へ報告した。

１区は８月11日より大型重機掘削を開始した。同日より作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。同時進行で個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、ドローンによる略測平面用撮影は８月12日に行い、８月30日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。同日に資機材の洗浄作業を行い、９月２日に現地調査を完了した。

２区は10月４日より大型重機掘削を開始した。農道の関係から調査区を２つに分けて調査し、重機掘削も複数回に分けて行った。10月７日に作業員による人力掘削を開始し、遺構検出を行った。ドローンによる略測平面用撮影は10月８日と10月27日に行い、個別遺構の記録や写真撮影等を実施し、10月22日と11月19日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後、一部追加調査や記録を行い、11月29日に資機材の洗浄、撤去作業を行って12月６日に完全撤収を確認して現地調査を完了した。

第 3 節 出土品の整理と報告書の作成

１. 出土品整理

出土遺物の整理作業は平成28年～令和４年度に実施した。作業は遺物の洗浄、注記、分類、接合、実測、実測図のトレース作業などである。また、上林イシガネ遺跡からは完形の小刀１点が出土しており、平成28年に株式会社吉田生物研究所に委託して金属製品の保存処理等を行った。

２. 報告書の作成

平成28年～令和４年度に出土品の整理作業と並行して実施した。挿図・図版の作成、出土遺物の写真撮影、原稿執筆、編集作業を行った。執筆作業は文化財担当職員が行い、報告書は令和5年３月に刊行した。

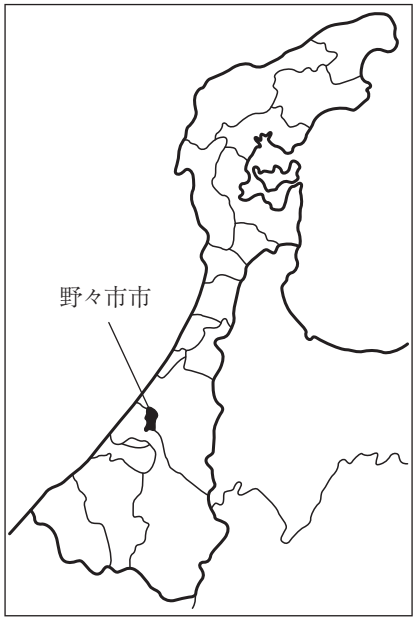
第 2 章 遺跡の位置と環境と過年度の成果

第 1 節 位置と地理的環境

野々市市は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。市域は白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東扇央部から扇端部に位置しており、市内の標高は最も高い地点で標高約50m、最も低い地点で標高約10m前後である。市の大部分は扇央部にあたり、南高北低の緩やかな斜面となる地勢を有している。

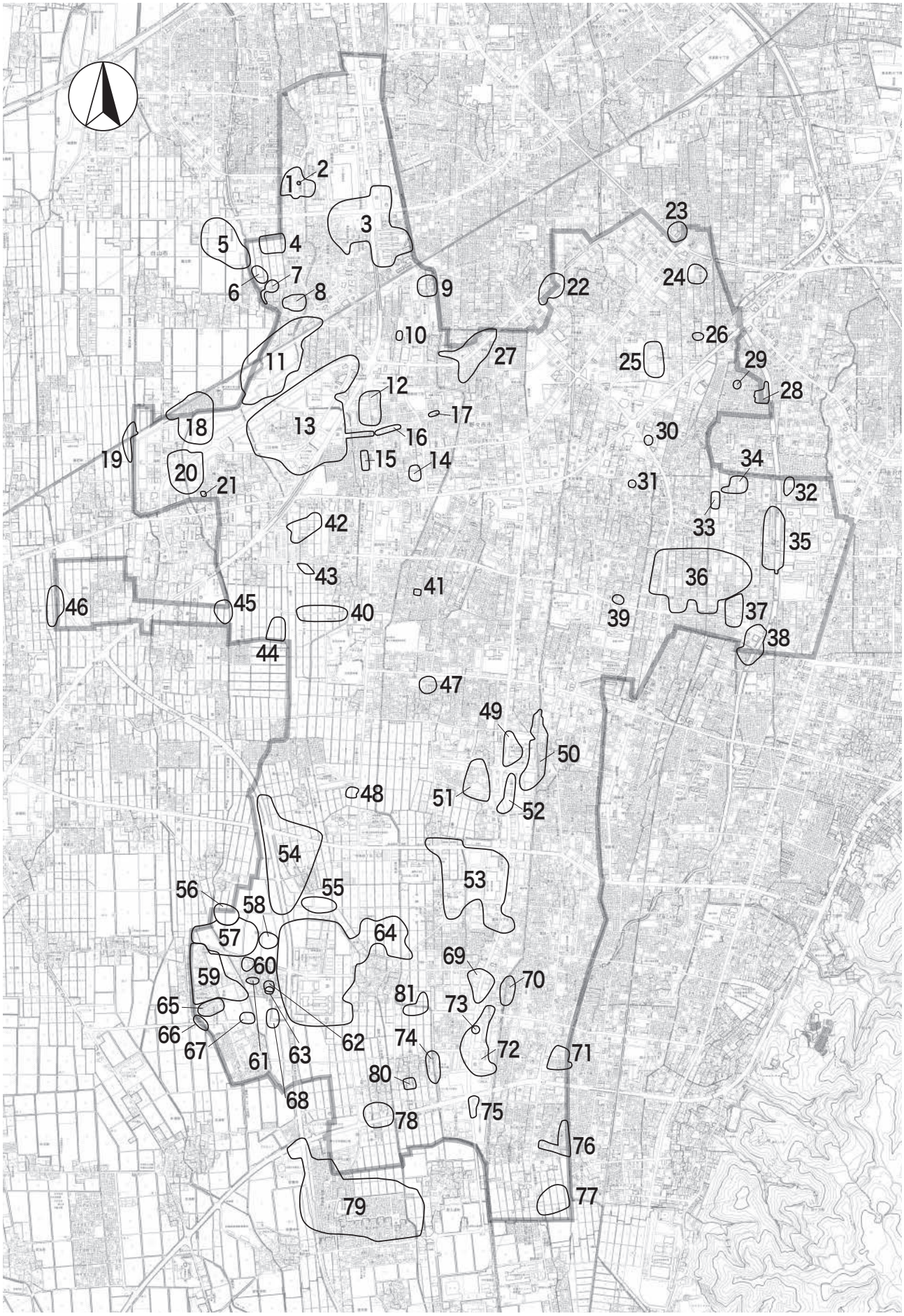
市の大きさは南北約6.7km、東西約4.5km、面積13.56㎢と県内で最も面積の小さい自治体である。近年では、土地区画整理事業によって市街地の拡大が進み人口も増え続け、現在では約54,000人を数える。

昭和30年代までは郊外の農村地域であり主産業も稲作農業であったが、昭和40年代の高度経済成長期以降は、金沢市に隣接している地理的条件から商業施設や住宅地としての開発が進み、現在に至る。



第２図　野々市市位置図

本書で取り上げる上林イシガネ遺跡・末松遺跡は野々市市南西部に位置している。現在はほぼ平坦な地形であるが、古くは手取川から派生する多くの小河川が氾濫を繰り返すことによる凸凹の地形で、島状地形といわれる微高地と、河川である微低地、またその氾濫原が混在している。当区画整理地内に郷用水と富樫用水が流れていることからもわかるように、遺跡からは古代から近世まで小河川の氾濫が繰り返されている様子が認められた。



第 3 図　遺跡分布図（S=1/30,000）

0　S=1/30,000　500m

第1表　野々市市遺跡一覧表

番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	時　代
1	御経塚シンデン遺跡 御経塚シンデン古墳群	御経塚	集落　古墳	縄文　弥生　古墳　中世
2	御経塚経塚	御経塚		
3	御経塚遺跡	御経塚	集落	縄文　弥生　古墳　古代　中世　近世
4	御経塚オッソ遺跡	御経塚　長池	集落	弥生　中世
5	横江古屋敷遺跡	長池	散布地　集落　古墳	弥生　古墳　古代
6	長池カチジリ遺跡	長池	集落	弥生　古墳
7	長池ニシタンボ遺跡	長池	集落	縄文　弥生　古墳　中世　近世
8	長池キタノハシ遺跡	長池	集落	縄文　弥生　中世　近世
9	野代遺跡	野代	散布地	縄文
10	野代オバナヤシキ遺跡	野代　二日市町	散布地	
11	二日市イシバチ遺跡	二日市町	集落　その他の墓	縄文　弥生　古墳　古代　中世　近世
12	三日市ヒガシタンボ遺跡	三日市町　稲荷	集落	弥生　古代　中世
13	三日市Ａ遺跡	三日市町　二日市町	集落　その他の墓	縄文　弥生　古代　中世　近世
14	稲荷マタベエタ遺跡	稲荷	散布地	
15	稲荷シマ	稲荷	散布地	
16	稲荷シチタン遺跡	稲荷	集落	古代
17	稲荷ウラドマリ遺跡	稲荷	集落	古代
18	郷クボタ遺跡	郷町　徳用町	集落	弥生　古代　中世　近世
19	番匠鎌田遺跡	郷町	集落　散布地	縄文　古代　中世
20	徳用クヤダ遺跡	徳用町　郷町	集落	縄文　弥生　古代　中世
21	徳用チャヤ遺跡	徳用町	集落	
22	上宮寺跡	押野	社寺	中世
23	押野大塚古墳	押野	古墳	古墳
24	押野大塚遺跡	押野	集落	縄文　弥生
25	押野タチナカ遺跡 押野館跡	押野	集落　城館	縄文　弥生　中世
26	押野ウマワタリ遺跡	押野	集落	弥生　中世
27	押越ヨウカイチザカイ遺跡	押越	集落	弥生
28	横川・本町遺跡	本町	集落	弥生　古墳　中世
29	本町ジョウダイ遺跡	本町		
30	本町ババサンマイ遺跡	横宮町	散布地	
31	本町シラガダ遺跡	本町	散布地	
32	高橋セボネ遺跡	高橋町	散布地　集落	縄文　弥生　古墳　古代
33	山川館跡	高橋町　本町	散布地　城館	縄文　中世
34	高橋ウバガタ遺跡	高橋町	集落	弥生
35	扇が丘ゴショ遺跡	扇が丘　高橋町	散布地　集落	弥生　古代　中世
36	富樫館跡	住吉町　扇が丘	散布地　城館　その他の墓	縄文　古代　中世　近世
37	扇が丘ヤグラダ遺跡	扇が丘	散布地　集落	縄文　古代　中世
38	扇が丘ハワイゴク遺跡	扇が丘	散布地　集落	縄文　弥生　古代　中世
39	菅原キツネヤブ遺跡	菅原町	集落	中世　近世
40	堀内館跡	堀内	散布地　城館	縄文　中世　近世
41	太平寺イドノタカ遺跡	太平寺	集落	古代
42	田尻ジッタ遺跡	田尻町	集落	縄文　中世　近世
43	田尻ナワシロ遺跡	田尻町	集落	縄文　中世
44	蓮花寺アカグロ遺跡	蓮花寺町	集落	縄文　古代　中世
45	田中ノダ遺跡	蓮花寺町　郷町	集落	弥生　古墳
46	徳丸ジョウジャダ遺跡	柳町	集落	弥生　古墳　古代　中世
47	三林館跡	下林	城館	中世
48	下林バンジョウアケ遺跡	下林	集落	古代　中世
49	三納トヘイダゴシ遺跡	三納	集落	縄文　古代　中世
50	三納アラミヤ遺跡	三納　矢作　粟田	集落	縄文　古代　中世
51	藤平田ナカシンギジ遺跡	藤平田	集落	弥生　古代　中世
52	三納ニシヨサ遺跡	三納　粟田	集落	縄文　弥生　中世　近世
53	粟田遺跡	粟田　藤平　中林	集落	縄文　古代　中世　近世
54	清金アガトウ遺跡	清金　末松	散布地　集落	縄文　弥生　古墳　古代　中世
55	末松信濃館跡	清金	集落　城館	古代　中世
56	末松福正寺遺跡 福正寺跡	末松	集落　社寺	古墳　古代　中世
57	末松ダイカン遺跡	末松	集落	縄文　弥生　古墳　古代　中世
58	末松Ｂ遺跡	末松	集落	古代
59	末松廃寺跡	末松	散布地　集落　社寺	縄文　弥生　古墳　古代　中世　近世
60	古元堂館跡	末松	城館	
61	末松Ｃ遺跡	末松	散布地	古代
62	末松古墳	末松	古墳	古墳
63	末松館跡	末松	城館	中世
64	末松遺跡	末松　清金　中林	散布地　集落　その他の墓	縄文　弥生　古墳　古代　中世
65	大館館跡	末松	散布地　城館	古代　中世
66	末松砦跡	末松	城館	
67	法福寺跡	末松	社寺	中世
68	末松しりわん遺跡	末松	集落	古代　近世
69	下新庄アラチ遺跡	新庄　中林　上林	集落	古代
70	下新庄タナカダ遺跡	新庄	集落	古代
71	下新庄フルナワシロ遺跡	新庄	散布地　集落	弥生　古代
72	上林新庄遺跡	上林　新庄	集落	古墳　古代
73	上林古墳	新庄	古墳	古墳
74	上林テラダ遺跡	上林	集落	古代
75	上新庄ニシウラ遺跡	新庄　上林	集落	弥生　古墳　古代
76	新庄カキノキダ遺跡	新庄	集落	古墳　中世
77	上新庄チャンバチ遺跡	新庄	集落　古墳	弥生　古墳　古代
78	上林遺跡	上林	集落	弥生　古代
79	安養寺遺跡	上林	集落	弥生　古代
80	上林キドグチ遺跡	上林	集落	
81	上林イシガネ遺跡	上林	集落	古代　中世

第２節 歴史的環境

縄文時代では扇状地の地下を流れる豊かな伏流水に恵まれた地域である市域北部の手取川扇状地扇端部に縄文時代後・晩期の集落遺跡が数多く分布する。なかでも国指定史跡御経塚遺跡（3）は周辺集落の母村的役割であったと考えられ、出土品の一部は重要文化財に指定されている。一方末松遺跡周辺では明確な縄文遺跡はないが、北西に約２㎞離れた長竹遺跡・乾町遺跡（白山市）では縄文晩期末葉の集落跡が確認されており、また北東約２㎞離れた粟田遺跡（53）では石器の母岩と剝片が集中する石礫原が確認されたことから、石器製作等の生産活動域であったと考えられる。生活痕跡は確認されていないものの、周辺の遺跡の分布状況から当地が生活圏内であった可能性は高い。

弥生時代前・中期の遺跡は少ないが、弥生時代後期になると市域各所に数多くの集落遺跡が形成される。末松遺跡周辺では末松廃寺跡から保存状態の良い弥生後期後半の甕が出土していることから、未確認であるが弥生集落が存在していると考えられる。

古墳時代の遺跡は少なく、集落遺跡は数えるほどであるが、市域北部の御経塚シンデン遺跡（1）からは古墳時代前期の集落跡とともに前方後方墳と方墳で構成された御経塚シンデン古墳群が確認されている。

また末松遺跡から南東1.8㎞にある上新庄チャンバチ遺跡（77）から古墳時代前期の前方後方墳１基、方墳１基が確認されている。

古墳時代後期末葉になると、市域南部において市内唯一の横穴式石室である上林古墳（73）が造られるほか、末松大兄八幡神社境内の方墳である末松古墳（62）や末松遺跡（64）から周溝跡が数基認められるなど、狭い範囲に複数基の小墳墓が造られたことがわかっている。

古墳時代の集落は南東約1㎞にある上新庄ニシウラ遺跡（75）で古墳時代前期の集落が確認されているほか、末松遺跡内から古墳時代中期の竪穴建物が確認されている。

古代は、末松遺跡周辺は国指定史跡末松廃寺跡を筆頭に多くの遺跡が分布し、末松遺跡群とも称される。

７世紀後半に法起寺式の伽藍配置をもつ末松廃寺が創建され、末松廃寺周辺に７世紀後半～８世紀にかけて集落が形成される。末松遺跡群より南東側に分布する遺跡群（上林新庄遺跡（72）、下新庄アラチ遺跡（69）、粟田遺跡（53）等）では、８世紀から９世紀にかけて一帯の大規模開発が最盛期を迎える。

末松遺跡群では、末松ダイカン遺跡（57）からは同時期の近江系と丹波系の土師器甕を伴う竪穴建物が複数確認されている他、製塩土器や鞴羽口なども出土している。末松福正寺遺跡（56）からは竪穴建物が複数確認されており、壁に柱と考えられる痕跡が認められるものやカマドの一部であると考えらえる凝灰岩が出土している。なお、両遺跡で確認された竪穴建物は南東角にカマドを設ける青野型住居である。清金アガトウ遺跡（54）からは竪穴建物と掘立柱建物が多数確認されており、包含層内からではあるが土馬の脚部が出土している。これらのことから、末松遺跡群で確認される集落遺跡は、そもそもの在地集落が居住地として勢力が拡大して規模が大きくなったのではなく、末松廃寺の建立に際して外部からの人的流入があったと考えられる特徴的な遺跡群である。

このほか、国指定史跡東大寺領横江荘遺跡 荘家跡上荒屋遺跡（白山市・金沢市）といった初期荘園遺跡が形成され、古代北陸道が確認された三日市Ａ遺跡（13）からは道路方向を意識した大型掘立柱建物が認められる。

中世になると扇状地開発に伴って林氏や富樫氏などの在地領主武士団が興った。市内では数多くの館跡が見つかっており（富樫館跡（36）、押野館跡（25）等）、在地領主層の館跡とその周辺に広がる宅地区画などの様相がわかる。

生活集落は、14世紀頃まではごく小さな集団であり、散村的なものであったようであるが、その後大きく集村化する。この集落が、現在の市内旧村の原形であり、今も居住域単位として機能している。

末松遺跡周辺では清金アガトウ遺跡から13世紀前半の金属製品（鉄製犂先）や土師器皿を使用した祭祀遺構があるほかは14・15世紀の溝等が確認される程度であり、明確な集落跡は認められていなかったが、今調査のうち、令和２年度に中世集落の一端を確認できた。これは後に述べる。

近世には、農村が点在する金沢城下の近郊地かつ北国街道の宿場町のひとつであり、金沢城下から京都へ向かう北国街道沿いには駅馬などが整えられた「野々市宿」が置かれ、交通の要所としても栄えた。

第 3 節 過年度の調査成果

末松遺跡群は、石川県立大学や国道157号線敷設の関係で末松廃寺跡周辺の開発が進んだ際に発見された遺跡群である。現在の末松遺跡は、もとは「末松A遺跡」であって、平成14年以降からは末松遺跡と呼称が統一されている。周辺の末松B遺跡、末松C遺跡は令和4年時点では継続して利用されている。

以下には、末松A遺跡及び末松遺跡の過去の調査成果の概要を記す。詳しくは各報告書を参照されたい。

昭和60（1985）～昭和62（1987）年には、一般国道157号鶴来バイパス改築工事に先だち、計9,400㎡の発掘調査が行われた。7世紀後様から8世紀前半の竪穴建物を中心とした集落跡が確認された。この竪穴建物は所謂「青野型住居」と呼称される住居形式で、丹波型や近江型の土師器煮炊き具も出土するなど特定の集団が居住していたことがわかった。それに続く8世紀後半以降の掘立柱建物を中心とした集落跡も確認された。また、同時期の礫を用いた護岸施設をもつ大溝も確認された。（柿田・布尾2005）

昭和62（1987）年に石川県農業短期大学（現石川県立大学）の農業資源研究所増築に先立ち、315㎡の発掘調査が行われ、古代の畠地と道路状遺構が確認された。（北野1989）

平成4（1992）年に国道157号線西側にて、民間開発に伴う80㎡の発掘調査が行われ、その際には8世紀中ごろの土坑やピットが確認された。（横山2001）

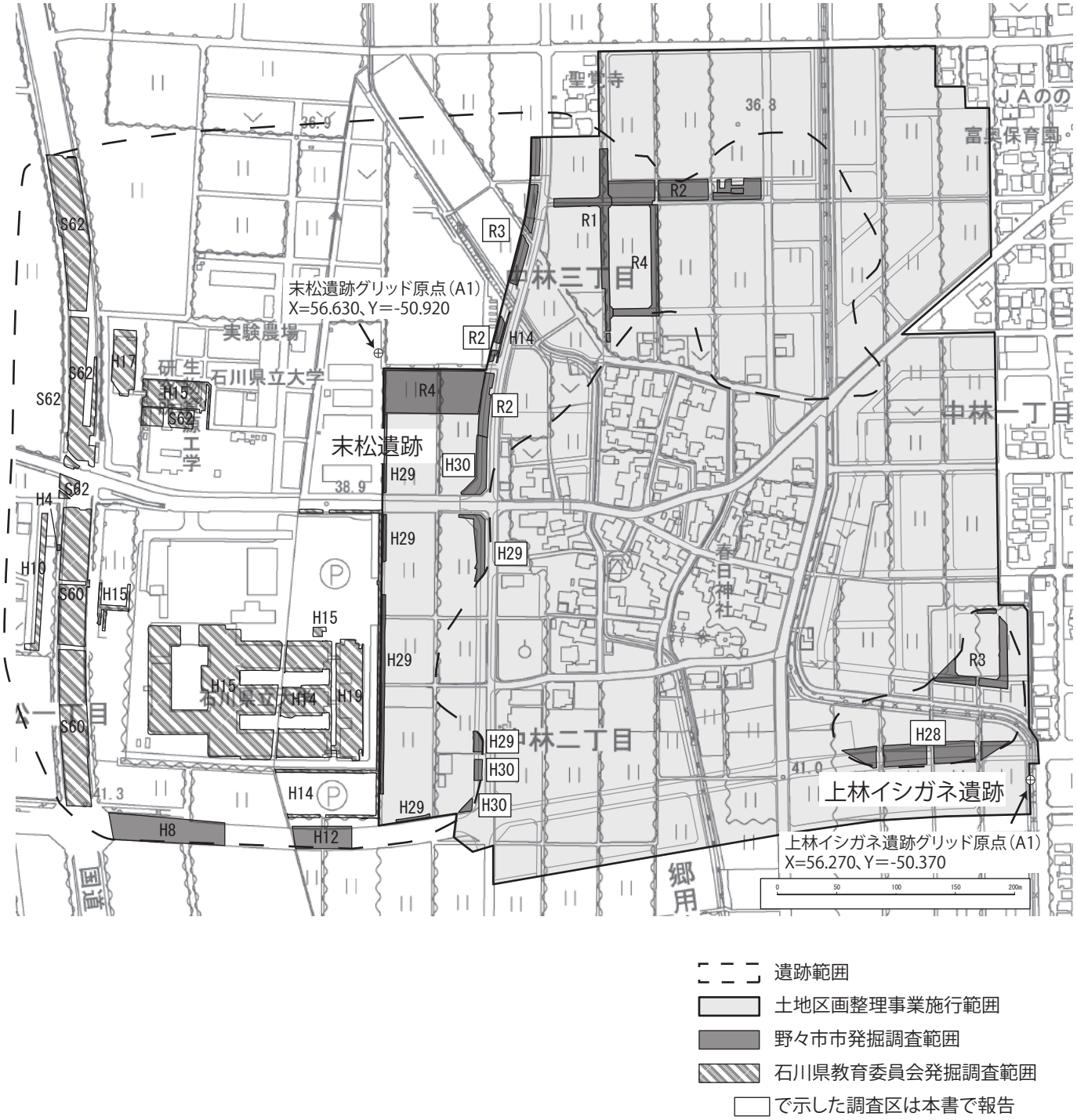
平成8・12（1996・2000）年には、ふるさと農道緊急整備事業として2,600㎡の発掘調査が行われた。遺構は溝や土坑で、遺物も少ない。集落の縁辺部と考えられる。（野々市町教育委員会2017）

平成10（1998）年には農村活性化住環境整備事業として、国道157号線と末松大兄八幡神社の間に800㎡の調査が行われ、微高地と微低地の間を9世紀以降の2間×3間の方形掘方を持つ掘立柱建物1棟、8世紀の竪穴建物1棟、中世の畝状遺構や多数の土坑・ピット、溝跡、河川跡が確認された。（安・立原・藤井2000）

平成14・15（2002・2003）年には、石川県立大学整備工事として14,685㎡の発掘調査が行われ、7世紀後葉から10世紀の集落跡が確認された。竪穴建物や掘立柱建物は確認されているが、遺構は北部に集中し、南部は旧河道や荒廃地である。明確な竪穴建物や掘立柱建物と判断されたものは少ないが多量の土坑やピットが検出されている。また、多数の土坑に切られて残存状態は良好ではないものの、古墳の周溝跡が複数確認された。また、中世の畝溝に切られて明確ではないものの、東西方向の道路状遺構なども確認された。（（財）石川県埋蔵文化財センター2006）

平成17・19（2005・2007）年には、石川県立大学大学院棟建設工事及び大学連携インキュベータ整備工事として3,500㎡の発掘調査が行われた。平成17年調査は、遺構は希薄であり、遺物は少ないが、調査地南東で行われた昭和62年及び平成15年に行った際に確認された道路状遺構の延長にあたると考えられる8世紀後半から9世紀の側溝の一部が確認されている。

平成19年調査は、墳墓の周溝と考えられる円形・方形の溝が複数確認された。この周溝跡は西隣の平成15年調査で確認された周溝と群を成す様相を呈している。7世紀前半の竪穴状遺構や奈良時代以降の畝状遺構、中世以降の集石土坑のほか、調査区を南北に縦断する道路状遺構と、西隣の平成14年調査で確認された東西方向の道路状遺構の延長部分も確認された。（（財）石川県埋蔵文化財センター2009）



第 4 図　末松遺跡･上林イシガネ遺跡発掘調査範囲図

上林イシガネ遺跡

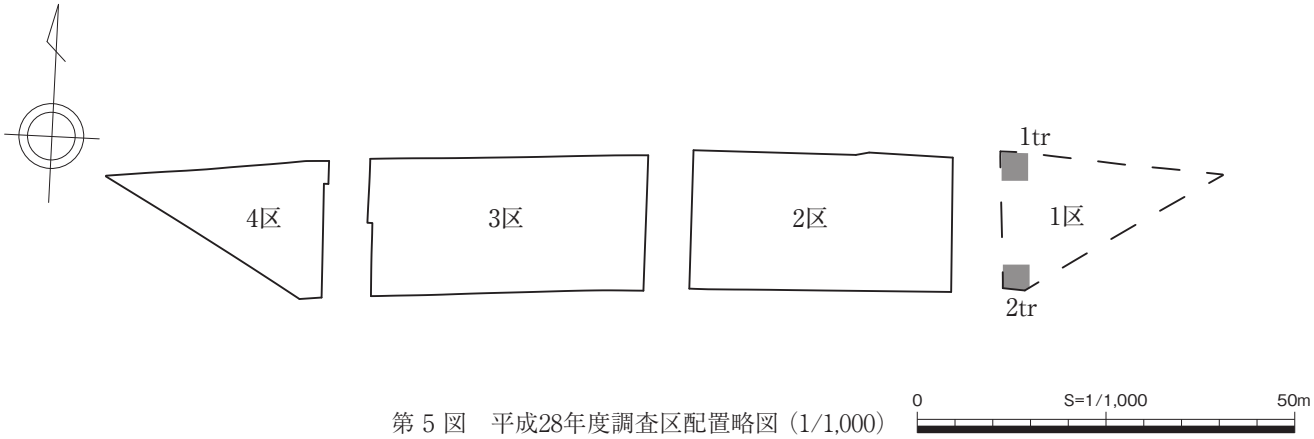
第 3 章　平成28 (2016) 年度の調査成果

第 1 節 調査の概要

1. 調査区と調査方法

調査区は上林イシガネ遺跡南辺に位置する。上林イシガネ遺跡は富樫用水の周辺に広がる遺跡であって、その広がりは、富樫用水の南北方向の流れが一旦西方向に折れ、中林集落に当たる手前で再び北方向に流れを変える周辺にあたる。当地域は近世以降、農業が主産業であって大規模な後世の削平などはないが、富樫用水が蛇行するその中にあることから、古くからの小河川等の後背湿地や氾濫原などの影響を受けている可能性があると考えられた。

調査区は1～4区に分けて調査を行った（第5図）。これは当時の農業水路の関係で区切ったもので、地形等は関係ない。また、遺構番号は各調査区で遺構種別ごとに付番している。



第 5 図　平成28年度調査区配置略図（1/1,000）

第 2 節 遺構

1. 1区（第6図）

1区は、重機掘削の時点で自然河川の後背湿地であると判断した。現表土・床土の下はグライ化した細砂・微砂が主体となる粘質土層が堆積しており、掘削中は壁面から湧水して壁が崩落する危険があった。

このことから1区は土層断面のみを記録するトレンチ調査に止めた。なお、当初は1区北東隅に3トレンチも設定したものの、掘削中に壁面が崩壊して記録ができなかったことから、ここには1・2トレンチの成果のみを掲載する。

(1) 1トレンチ

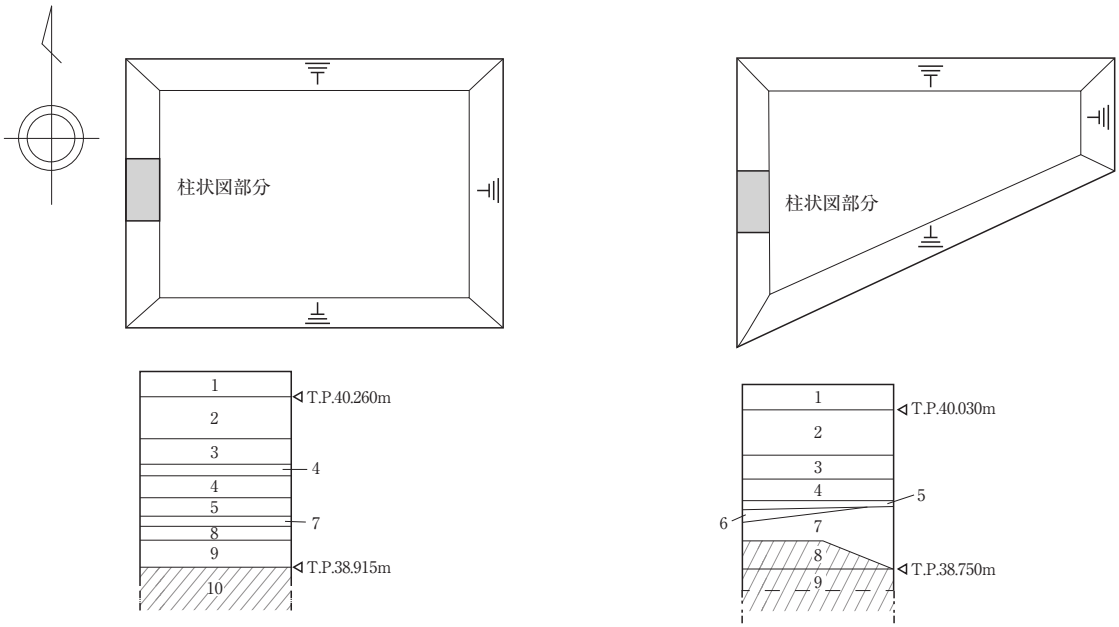
東西3.0m×南北2.0mのトレンチである。層位は、厚さ約0.2mの現代耕土以下に約1.0mのグライ化した細砂・微砂主体の粘質土が堆積する。グライ化した粘質土層には鉄分が多量に沈着し、しまりも良い。水流の痕跡が堆積土中に認められないことから後背湿地であったことがわかる。下層には約0.3mのシルト質粘質土の植物腐植土層が堆積する。遺構・遺物は確認できなかった。

(2) 2トレンチ

東西3.0m×南北2.0mのトレンチである。層位は、厚さ約0.2mの現代耕土以下に0.7～0.9mのグライ化した細砂・微砂主体の粘質土が堆積する。1トレンチと同じくグライ化した粘質土層には鉄分が多量に沈着し、しまりも良い。同じく水流の痕跡が堆積土中に認められなかった。下層には0.3～0.5mの粘土となった植物腐植土層が堆積する。層中では縦筋状に多量の鉄物が沈着し、植物根に付着した褐鉄鉱のような形状を有していた。1トレンチと同じく遺

構・遺物が確認できなかった。

これらのことから、1区付近には現在の林口川と同じように河川が近くにあって、当地はその後背湿地であったと考えられる。



1. 現耕土
2. 5GY3/1 暗オリーブ灰色 粘質土(細～微砂主体)
3. 10Y5/1 灰色 シルト
4. 7.5Y4/2 灰オリーブ色 粘質土(細～微砂主体)(Fe沈着)
5. 7.5Y4/2 灰オリーブ色 粘質土(細～微砂主体)(Fe多量沈着)
6. 5Y4/1 灰色 粘質土(細～微砂主体)(Fe多量沈着)
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質土(Fe多量沈着)
8. 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト質粘質土(φ1mmの礫少含)(Fe多量沈着)
9. 7.5Y3/1 オリーブ黒色 シルト(Fe多量沈着)
10. 2.5Y6/3 にぶい黄色 粘土(Fe多量沈着)(地山)

1区 1トレンチ

1. 現耕土
2. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色 粘質土(細～微砂主体)
3. 10Y5/1 灰 シルト(やや緑味がかる)
4. 7.5Y4/2 灰オリーブ色 粘質土(細～微砂主体)(Fe沈着)
5. 7.5Y4/2 灰オリーブ色 粘質土(細～微砂主体)(Fe多量沈着)
6. 5Y4/1 灰色 粘質土(細～微砂主体)(Fe多量沈着)
7. 10YR3/1 黒褐色 粘土(層の中央、筋状にFe多量沈着)(※≒1tr 8層・9層)
8. 10YR4/1 褐灰色 中砂(地山)
9. 10YR5/2 灰黄褐色 中～細砂(Fe微量沈着)(地山)

1区 2トレンチ

第 6 図　1区1トレンチ・2トレンチ平面略測図・土層柱状図（S=1/60）　0　S=1/60　2m

2. 2区（第7・8図）

東西約33m×南北約17.5mの調査区である。調査前は平坦な水田であったが、遺構を検出した旧地形は現在と大きく異なる。南高北低の緩やかな斜面であることは野々市市の地勢と同じくするが、調査区北西の標高が約39.65m、調査区北東の標高が約39.15mと、約30mの東西距離中に0.5mもの標高差があり、東に向かって一気に落ち込む地形である。この落ち込みを鞍部としないことは、この落ち込みを西端として東側には1区で確認した後背湿地になると判断したことによる。

自然河川であるNR1・2の他、SK・Pなどの人工的な掘削坑は確認できるものの、柱痕などは確認できなかった。標高が高い調査区西半では検出した地山に巨礫が多く含まれていた。大きな方形ないしは不定形土坑が散見されるが、これらは深さ10cm未満の自然な凹みである。標高が低い調査区東半では検出した地山に礫は含まれていなかった。いくつかの馬蹄形をした凹みを確認したが、埋土の堆積状況からこれらは風倒木痕であると判断した。

SK・Pは地山の上に堆積する黒色腐植土堆積を切るようであるが（第8図北壁土層断面参照）、遺構埋土が黒色腐植土層の再堆積であることから平面で検出することは困難であり、検出面は全て地山直上で行った。

遺物は土師質の小片などが少量出土したものの、年代等の判断ができるものではなかった。

第 7 図　2区平面図（S=1/150）

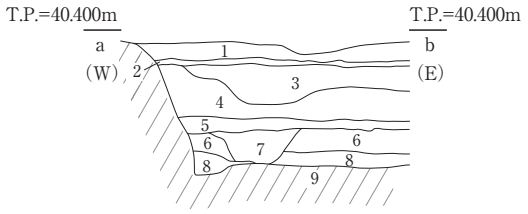
NR1

調査区南側4分の1を占める近世の自然河川である。現耕作土・床土直下で遺構上端が検出でき、拳大の礫が多く混じる。後に述べる3・4区でもNR1の延長が確認できることから、上林イシガネ遺跡の南限となる東西方向にのびる自然流路であると考えられる。

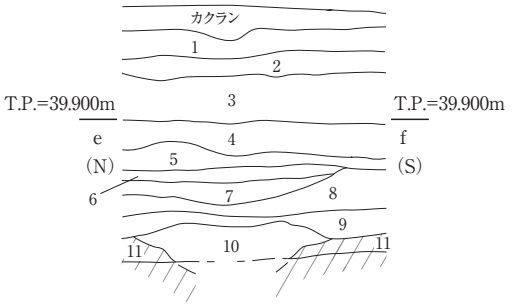
調査区内で検出したのは流路の北肩であり、南肩にあたる部分は調査区外であることから、NR1全体の幅は不明である。

NR2

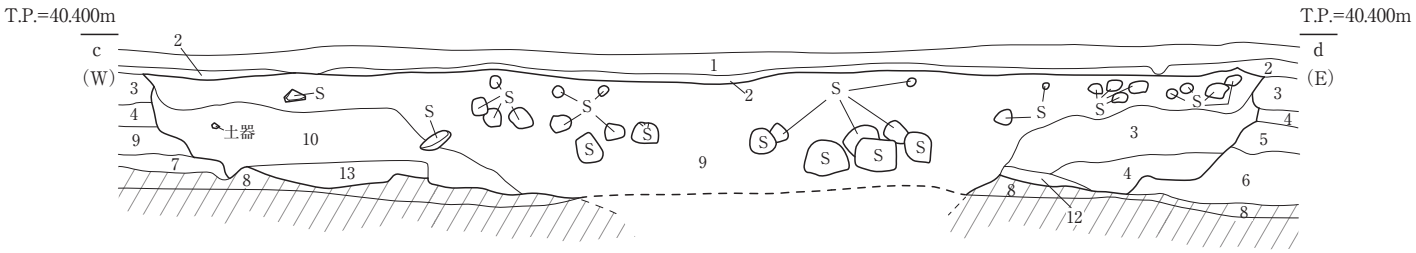
調査区のほぼ中央を流れる近代流路である。NR1と同じく現耕作土・床土直下で遺構が検出できるが、NR1を切ること、NR2の埋土が周囲の自然堆積土を千切るようにまきこみ、かつ人頭大礫が多量に混じること、近代陶磁器などの遺物少量認められることから、河川の氾濫による鉄砲水のようなものであったと考えられる。



1. 現耕土
2. 現床土
3. 2.5Y5/3 黄褐色 砂質土(Fe沈着、炭化物少混)
4. 10YR4/4 褐色 粘質土(Mn上半に多沈着、Fe多沈着)
5. 10YR2/3 黒褐色 シルト質粘質土(Fe多沈着)
6. 10YR2/3 黒褐色 シルト質粘質土(Fe沈着、炭化物少混)
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土(Fe、Mn沈着)
8. 6層と9層の混在層
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色～5/6 黄褐色 細～微砂(地山)



1. 現耕土
2. 2.5Y5/3 黄褐色 砂質土(Fe沈着、炭化物少混)
3. 2.5Y5/6 黄褐色 粘質土
4. 2.5Y5/6 黄褐色 粘質土(Fe多沈着、炭化物少混)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質土(Fe多沈着)
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂礫混粘質土
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂礫混粘土(Fe沈着、Mn沈着)
8. 10YR4/4 褐色 粘質土(Mn上半に多沈着、Fe多沈着)
9. 10YR2/3 黒褐色 シルト質粘質土(上半にFe沈着、炭化物少混)
10. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘質土(上半にFe、Mn沈着)(風倒木痕か?)
11. 10YR4/3 にぶい黄褐色～5/6 黄褐色 細～微砂(地山)



1. 現耕土
2. 現床土(Mn多量沈着)
3. 2.5Y5/3 黄褐色 砂質土(Fe沈着、炭化物少混)
4. 10YR4/4 褐色 粘質土(Mn上半に多沈着、Fe多沈着)
5. 2.5Y5/6 黄褐色 粘質土(Fe沈着)
6. 10YR2/3 黒褐色 シルト質粘質土(上半にFe沈着、炭化物少混)
7. 6層と8層の混在層
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色～5/6黄褐色 細～微砂(地山)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色 粘質土(Fe沈着、遺物少混)
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土(しまり良、遺物少混、炭化物少混)
12. 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土と10YR2/3 黒褐色 シルトの混在層
13. 10YR2/3 黒褐色 シルト質粘土

} NR2

第 8 図　調査区北壁・東壁土層断面図（S=1/40）

0　S=1/40　2m

3. 3区（第9～15図）

東西約35m×南北約17.5mの調査区で、2区と異なり調査区内の標高は39.80m前後でフラットである。

NR1が調査区南側を占める他、SK・Pが地山直上堆積の黒色腐植土堆積を切っている点や風倒木痕が多い点は2区と同じであるが、地山に礫が含まれなくなるグリッドC11付近より以西は黒色腐植土層が厚くなる。そしてグリッドB12N9より以西では黒色腐植土層が明確に複層化してそれぞれが遺構面として認識できるようになり、上層遺構面と下層遺構面の2面に分けて調査を行った。

上層遺構面は遺構埋土と遺構面の違いが明確である。小穴を複数基と土坑を2基、区画のためと考えられる溝を1条検出した。また遺構からは遺物も多く出土した。

下層遺構面は遺構埋土が黒色腐植土層の再堆積で、調査区壁面では地山の上に堆積する黒色腐植土堆積層を切っていることを確認できるが、平面で検出することは困難であり、検出は全て地山直上で行った。埋土はすべて単層であり、土師質の小片や須恵器の小片などが少量出土したものの、年代を特定できるものはなかった。

よって、下に記す遺構は全て上層遺構面のものである。

SD1（第 12・13・16 図）

南北方向に2条、東西方向に1条延びる溝である。南北溝は、東側溝をSD1（東側）、西側溝をSD1（西側）、東西溝をSD1（南側）とした。

SD1（東側）は長さ12mの溝で、N10°-Wと西に振っている。当初遺構があることに気づかず北側の一部上半を欠損させてしまったが、掘方が明瞭なところでは、溝幅約1.0m、深さ0.3～0.4mでU字形の掘方である。埋土の最下層ではラミナが認められることから、継続的な水の流れがあった後に埋没したことがわかった。溝底からは全長25.7cmの小刀が出土している。小刀は完形であり、ラミナが認められる堆積層中に置かれた状態で出土したことから、溝に水が流れている段階で意図的に溝底に小刀を置き納める行為がなされたと考えられる。（第13図）

SD1（西側）は長さ11mの溝で、N10°-Wと西に振っている。掘方が明瞭なところでは、溝幅約0.9m、深さ約0.2mで台形の掘方である。SD1（西側）の南端上半はNR1によって切られているが、SD1（西側）の南全体がNR1に削られたのではなく、SD1（西側）の南限が当初よりこの状態であったと考えられる。（第12図）

SD1（南側）は長さ8mの溝で、2条の南北溝を結ぶ溝で切り合うことはない。掘方が明瞭なところでは、溝幅約0.8m、深さ0.2mでU字形の掘方である。（第12図）

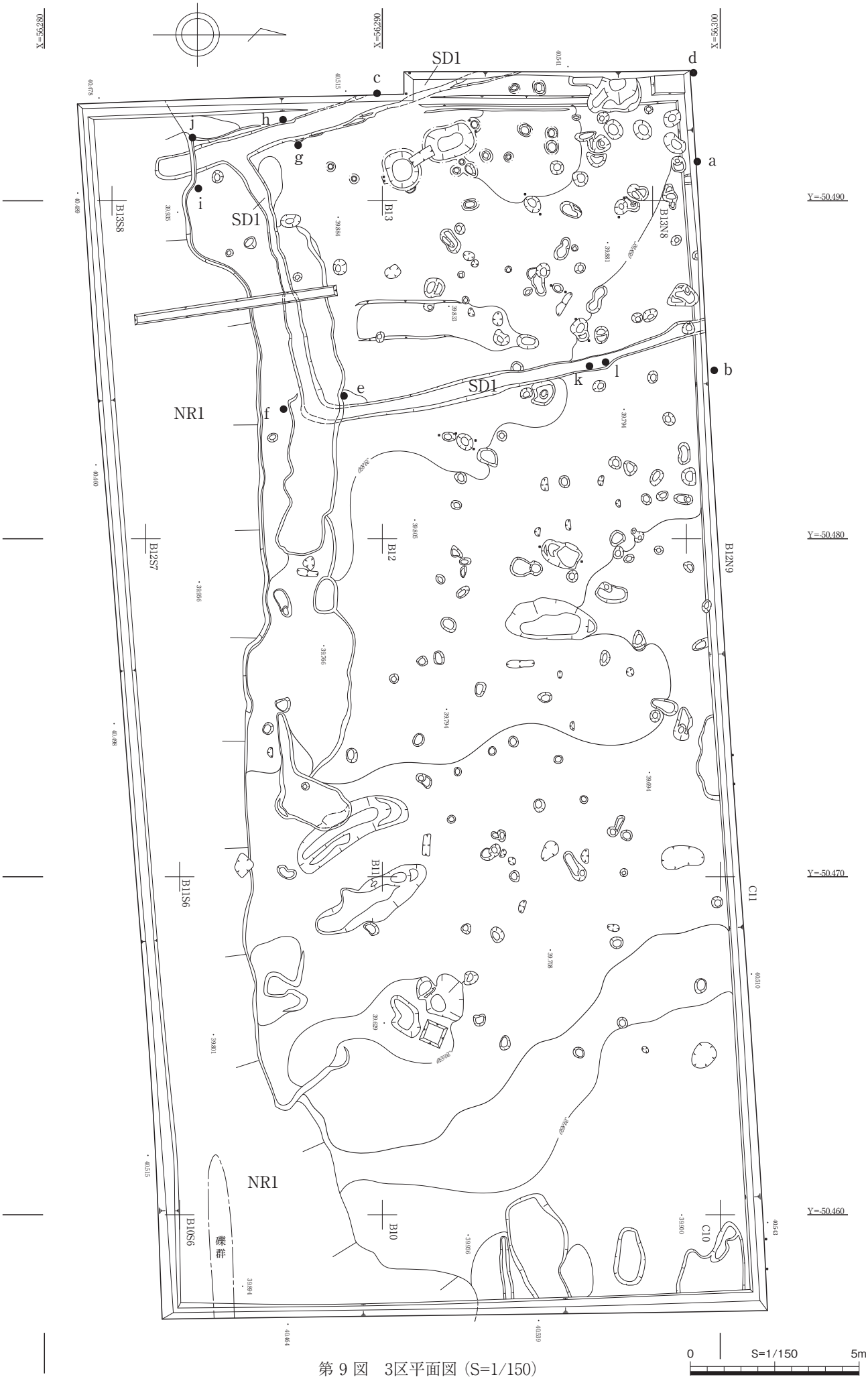
以上のことから、SD1は区画溝であって、その区画内にピットや土坑などが集中している。またSD1埋没後はその上に厚さ約20cmの盛土整地が行われており、区画溝の特殊性を示すといえる。（第11図）

SD1からは14世紀後半の土師器皿が出土しており、区画溝が機能したのもほぼ同時期であると考えられる。

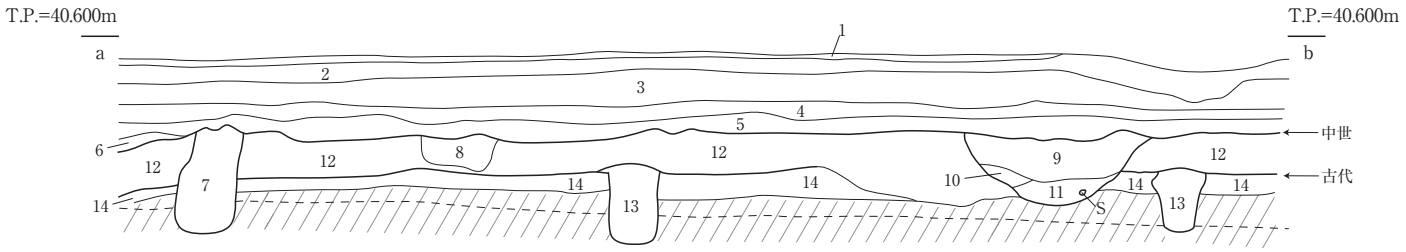
SK25・26（第 14 図）

SK25は直径144cm、短径90cm、深さ50cmの楕円形土坑である。遺構検出後に約10cm程度全体を下げたところ、20個程度の拳大～人頭大の巨礫を土坑内一面で確認した。その後の遺構掘削を行う段階で、調査担当者の指示に誤りがあり、石積部分の図面及び写真等の記録を仕損じた。よって土層断面の石積部分については担当者のスケッチを基に復元したものである。石積みの下からは底部が欠損したほぼ完形の珠洲焼の擂鉢が口縁を上にして出土していることから、何らかの土器埋納遺構であると考えられる。

SK26は直径104cm、短径90cm、深さ30cmの円形土坑である。SK26と並んでおり、埋土も同じであるが遺物等は出土していない。



第 9 図　3区平面図（S=1/150）



1. 現耕土
2. 旧耕土
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質土(φ1cm礫極少混)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質土(細～微砂主体)(φ1～2cmの礫少混)
5. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘質土(Fe沈着)
6. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘質土(φ1cm前後の礫多混)(Fe多沈着)
7. 2.5Y6/4 にぶい黄色 細～微砂と10YR 黒褐色 シルト質粘土の混在層
8. 2.5Y6/4 にぶい黄色 細～微砂
9. 10YR4/ 4褐色 砂質土(細砂主体)
10. 10YR4/4 褐色 砂質土と10YR2/2 黒褐色 シルトの混在層
11. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土(粗砂主体)、
最下層には粗砂～中砂のラミナ(Fe沈着、土器片混)
SD1
12. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘質土(地山がブロック状に混じる)
13. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘質土に地山ブロック混
14. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘質土と地山の混在層
15. 10YR4/4 褐色 細～微砂(地山)

第 10 図　3区北壁土層断面図 (S=1/40)

0　S=1/40　2m

4. 4区 (第16・17図)

東西約28m×南北約18mの三角形をした調査区で、3区と異なり調査区内の標高は東高西低である。3区西端の地山標高が39.80m前後であったが、農業水路を挟んで西隣する4区東端の標高は40.0m前後であり、1～4区の中で最も標高が高い。調査区西端は標高が約39.5m前後である。

遺構は希薄であるが、4区の特徴として、他調査区にて確認された黒色腐植土層が極薄い、または全く確認できなかった。また、地山の標高が高いため、現地表面から地山面までが約30cm程度であったこともあり、遺構面の標高が高い4区は、東隣の3区と異なり、近代以降の攪乱が大きく影響を及ぼしている特徴をもつ。

遺構検出面はすべて地山直上で行った。

NR1 (第 15 図)

調査区東側の南北方向に延びる幅約2.5m～5.0m、深さ0.4mの近世の自然河川である。現耕土のほぼ直下で遺構を検出した。

NR1は2・3区の南側を占めていたNR1と同じであり、2・3区のNR1が当調査区南東付近で大きく流れの向きを変えて南北方向の自然流路になったと考えられる。この流れの変化の理由については不明であるが、先述したように東側の地山が急な斜度をもって標高が高くなることが一因とも考えられる。

SD1 (第 16 図)

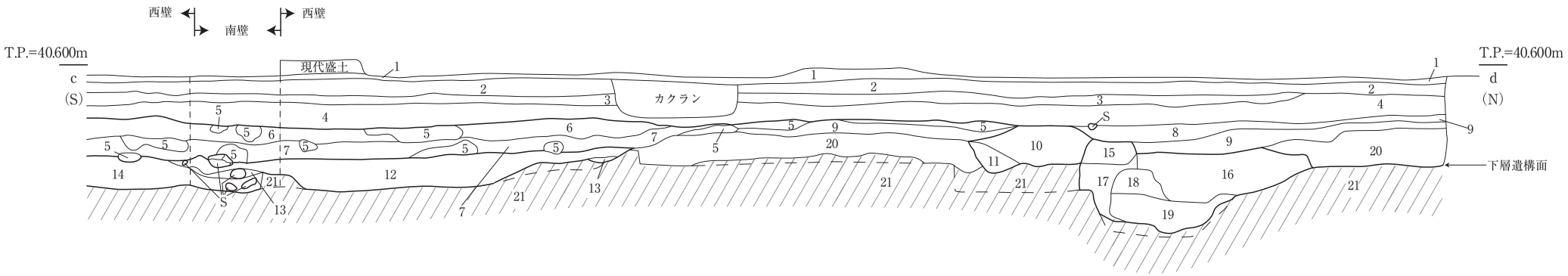
南北方向に延びる1条の溝である。3区で検出した上層遺構面の区画溝であるSD1 (東側) ・SD1 (西側) と同規模の溝で、長さ15.0m以上、N10° -Wと西に振っており、軸方向も類似している。このことから、これら3条の溝が本来の区画域であったと考えられる。

溝幅は約50cm、深さ約15cmで台形の掘方である。現表土直下に遺構上端が確認でき、その壁面断面でみると、本来の溝幅は70cm、深さは25cmでより明確な台形であったことがわかる。遺構埋土の最下層は粗砂層で、ラミナは確認できないが3区SD1 (東側) の埋土と土質が類似する。

遺物は出土しているが、年代を決定できるものではない。

SK1 (第 17 図)

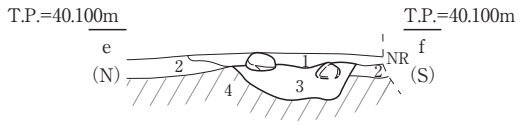
4区のうち、明らかに人為的な土坑はこれだけである。直径2.5m、深さ0.48mの土坑である。調査区北壁に接しているが、出土した遺物が近世磁器であったため、これ調査区の拡張は不要と考え、記録に留めた。



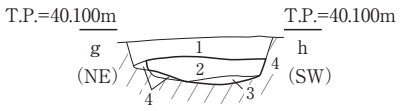
1. 現耕土
2. 旧耕土
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質土(Fe沈着)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質土(φ1cm礫極少混)
5. 2.5Y6/4 にぶい黄色 細～微砂
6. 10YR5/6 黄褐色 粘質土
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂礫混粘質土(Mn沈着)
} 整地土
8. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘質土(Fe沈着)
9. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘質土と10YR2/2 黒褐色 シルトの混在層
(φ1cm前後の礫多混、Fe多沈着)
10. 10YR4/4 褐色 砂礫混粘質土と2.5Y6/4 にぶい黄色 粘質土の混在層
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色 砂質土(中～細砂主体、Mn沈着)
12. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質土(粗砂主体、土器片混)
13. 10YR4/4 褐色 砂質土(細砂主体)
14. 10YR4/1 褐灰色 粗砂主体砂礫層(φ5cm前後の礫多混)
} SD1
15. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘質土と地山の混在層
16. 10YR2/2 黒褐色 シルト
17. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘質土と地山の混在層(Mn沈着)
18. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘質土と地山の混在層
19. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘質土(φ2～3cmの地山ブロック混)
20. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘質土(地山ブロックφ2cm～10cm礫多混)
21. 10YR4/4 褐色 細～微砂(地山)
} SK6

第 11 図　3区西壁土層断面図 (S=1/40)

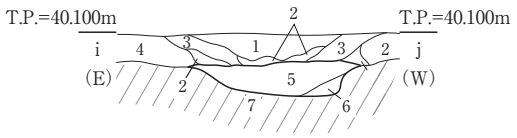
0　S=1/40　2m



1. 10YR5/2 灰黄褐色 粘質土と10YR5/6 黄褐色 粘質土の混在層(Fe･Mn沈着)(整地土)
2. 7.5YR3/2 黒褐色 粘質土(Mn沈着)
3. 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂～中砂主体(φ2～3cm礫多混)(SD1)
4. 10YR5/6 黄褐色 細～微砂(地山)



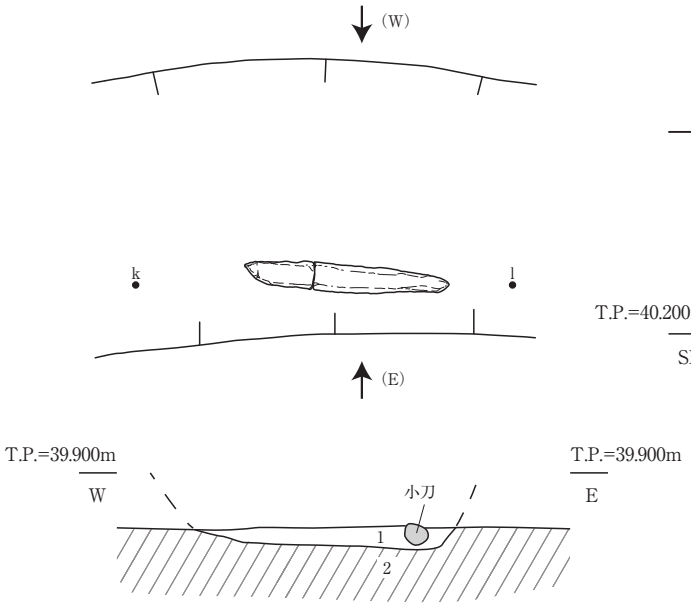
1. 10YR5/6 黄褐色 粘質土(Mn･Fe多沈着)(整地土)
2. 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂(φ2～3cm礫少混)
3. 10YR5/2 灰黄褐色 中～細砂(φ2～3cm礫混)
} SD1
4. 10YR5/6 黄褐色 細～微砂(地山)



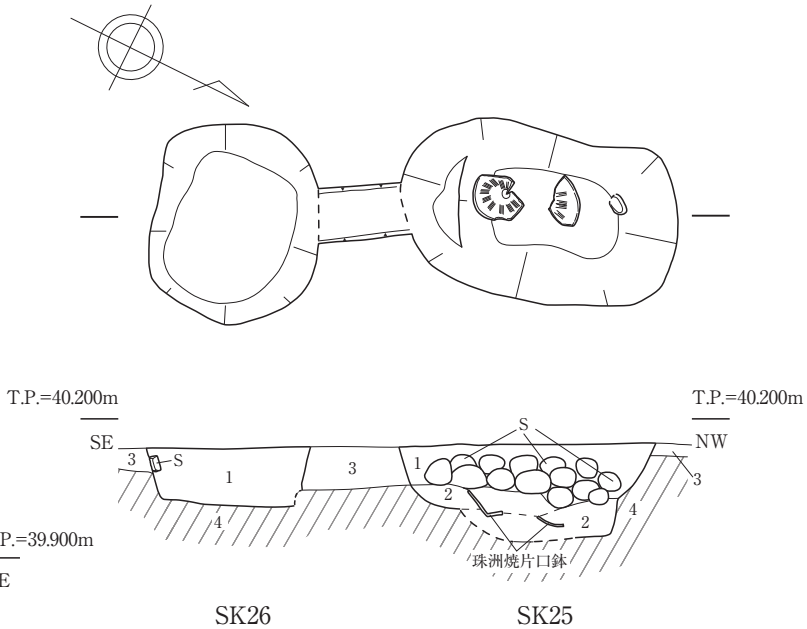
1. 7.5YR4/1 褐灰色 粗砂混粘質土、(Fe沈着)
2. 7.5YR4/1 褐灰色 粘質土
3. 7.5YR4/1 褐灰色 中～細砂混粘質土(Fe･Mn沈着)
} NR1
4. 7.5YR3/2 黒褐色 粘質土
5. 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂混粘質土(φ2～3cm礫多混)
6. 10YR5/2 灰黄褐色 中～細砂
} SD1
7. 10YR5/6 黄褐色 細～微砂(地山)

第 12 図　3区 SD1 土層断面図 (S=1/40)

0　S=1/40　2m



1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂(φ2～3mmの礫少混)
2. 10YR4/4 褐色 細砂～微砂(地山)



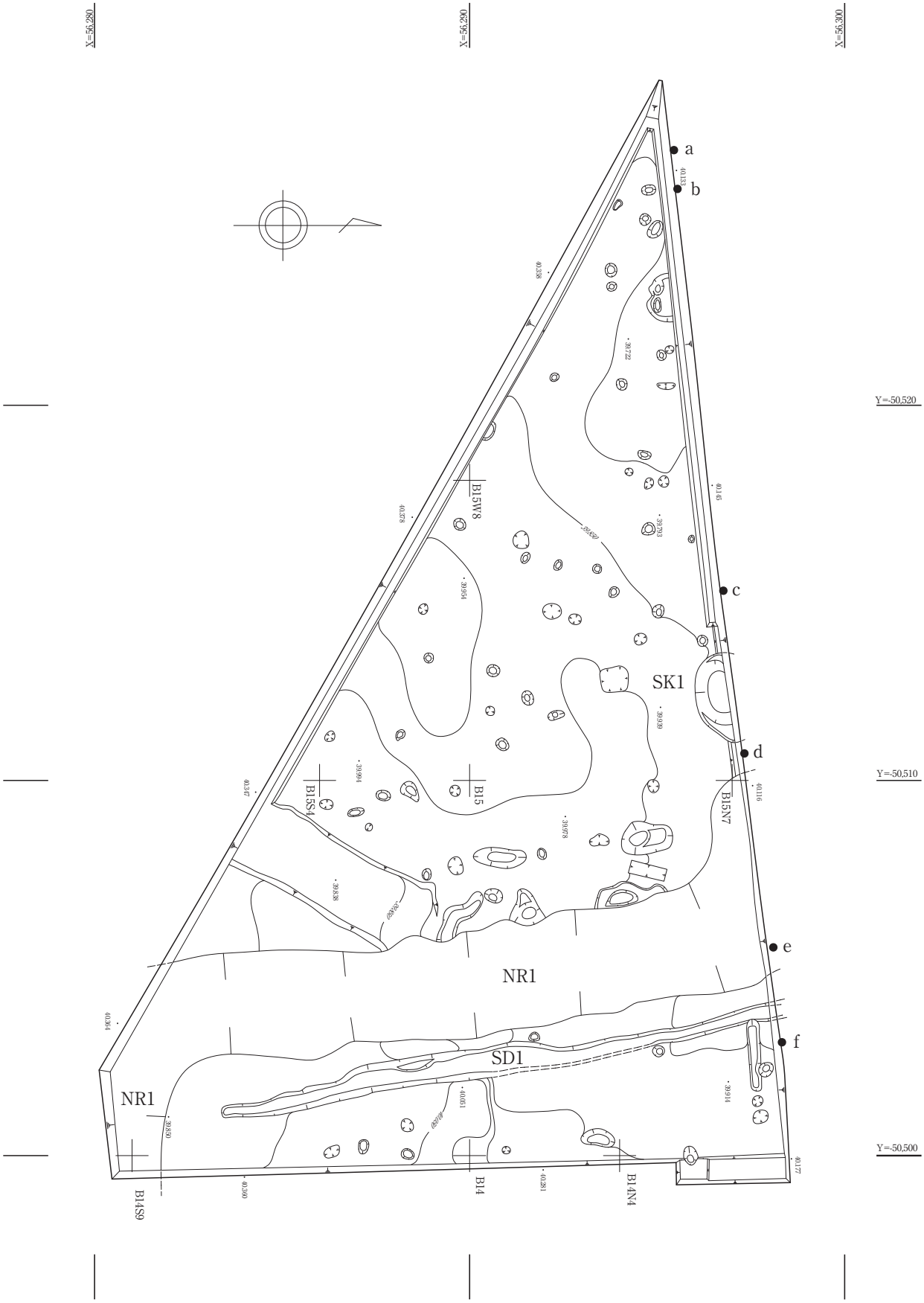
1. 7.5YR3/4 暗褐色 細砂(Mn少沈着、Fe沈着、炭化物混)
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 細砂(やや粘性あり)(Mn･Fe少沈着)
3. 10YR3/2 黒褐色 細砂～微砂(Mn多沈着)
4. 2.5Y5/6 黄褐色 微砂(Fe沈着)(地山)

0　S=1/10　25cm

第 13 図　3区 SD1 小刀出土平面･断面図 (S=1/10)

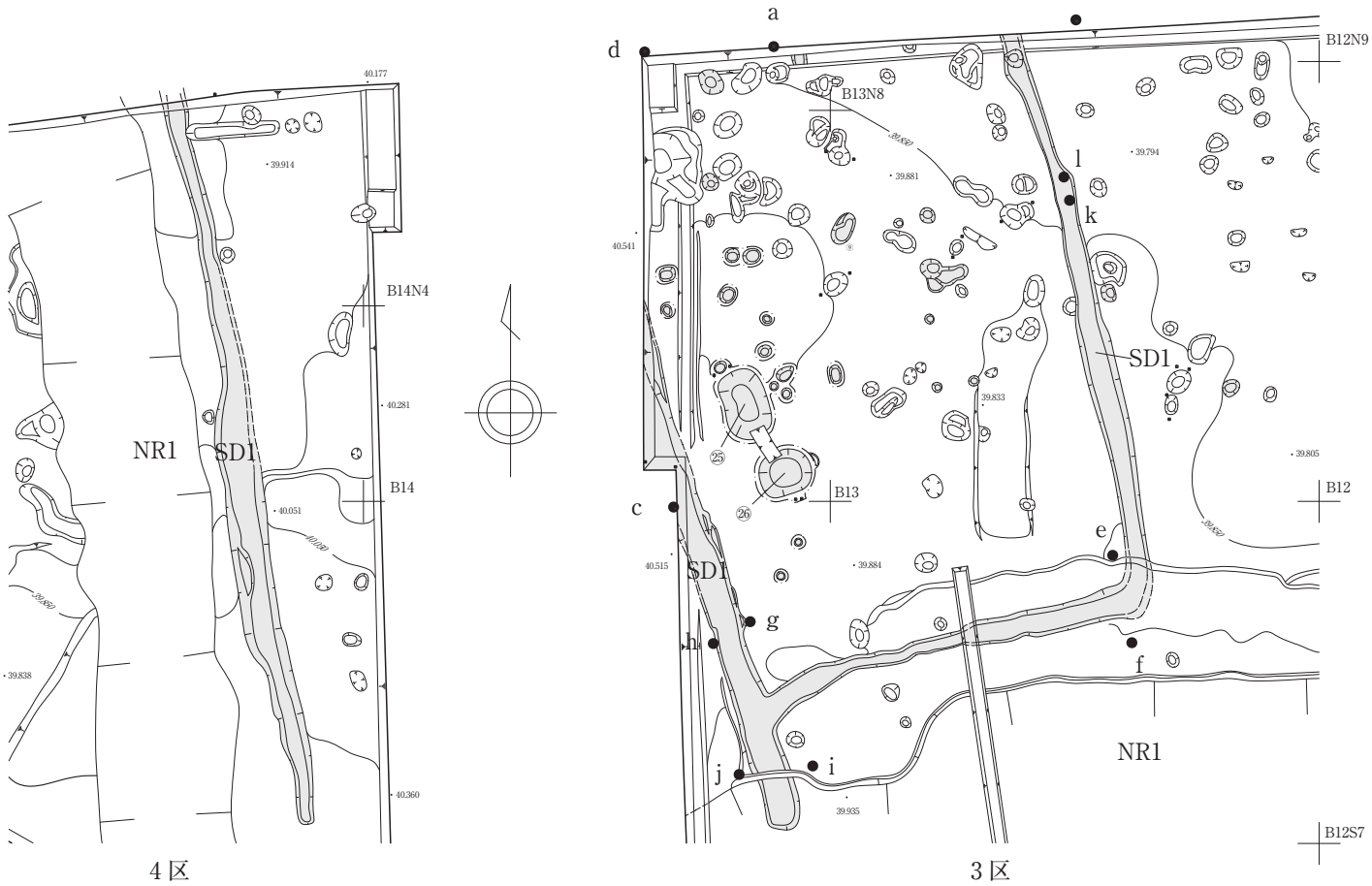
0　S=1/40　2m

第 14 図　SK25･26 平面･断面図 (S=1/40)



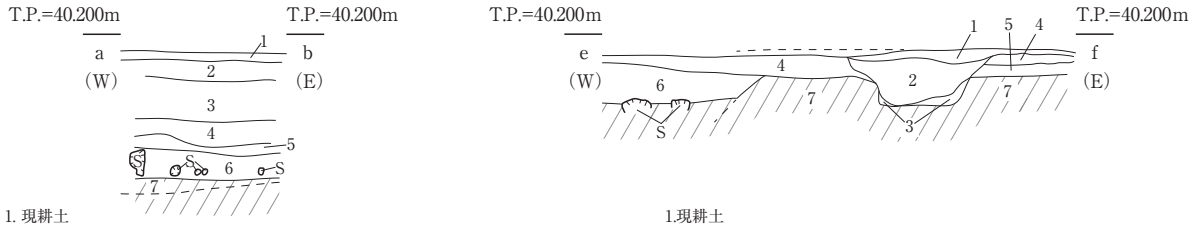
第 15 図　4区平面図（S=1/150）

0　S=1/150　5m



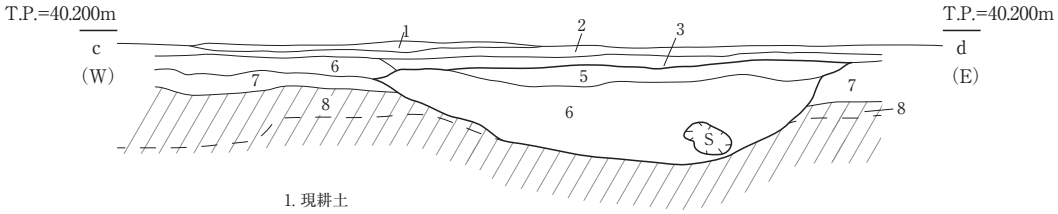
第 16 図　3区･4区 SD1 及び中世遺構平面図（中世遺構は網かけ）（S=1/150）

0　S=1/150　5m



1. 現耕土
2. 旧耕土
3. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質土（φ1cm礫極少混）
4. 2.5Y6/4 にぶい黄色 粘質土（Fe沈着）
5. 4層と6層の混在層（φ1cm前後の礫多混、Fe多沈着）
6. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘質土（地山ブロック少混）
7. 10YR4/4 褐色 細～微砂（地山）

1.現耕土
2. 2.5Y5/2 暗灰褐色 砂質土（やや粘性あり）
3. 2.5Y4/2 暗灰褐色 粗砂
} SD1
4. 5YR3/1 黒褐色 粘質土（Mn多沈着）
5. 5Y3/1 黒褐色 粘質土と地山ブロックの混在層
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質土（Fe沈着）（NR1）
7. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中～細砂（地山）



1. 現耕土
2. 現床土
3. 10YR6/8 明黄褐色 砂質土（Mn微沈着、Fe沈着）
4. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粘質土（Mn沈着）
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土（Mn･Fe沈着）
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂礫混粘質土（Fe沈着、Mn多沈着）
} SK1
7. 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂質土(地山ブロック混)
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色 中～細砂（地山）

第 17 図　4区北壁土層断面図（S=1/40）

0　S=1/40　2m

第3節　出土遺物（第18・19図）

1は調査区の含包層に混入していた縄文土器で、八日市新保式の浅鉢小片である。

2～19は3区の上層遺構面から出土した遺物である。

2～4はピットから出土した土師器である。2がもっとも残存率がよく、14世紀後半頃のものと考えられる。

5・6は3区の整地土から出土した土器で、6の須恵器頸部は混入品であると思われるが、5は古瀬戸灰釉平埦の口縁部である。

7～10はSK25から出土した土器である。10は祭祀的埋置をされていた珠洲焼の擂鉢である。図版15でみてわかるとおり、実物の内面は使用痕跡が強く、卸目は摩耗している。また、底部の欠損は意図的な穿孔というよりも使用による欠損で、それを利用したとも考えられる。14世紀前半のものと考える。

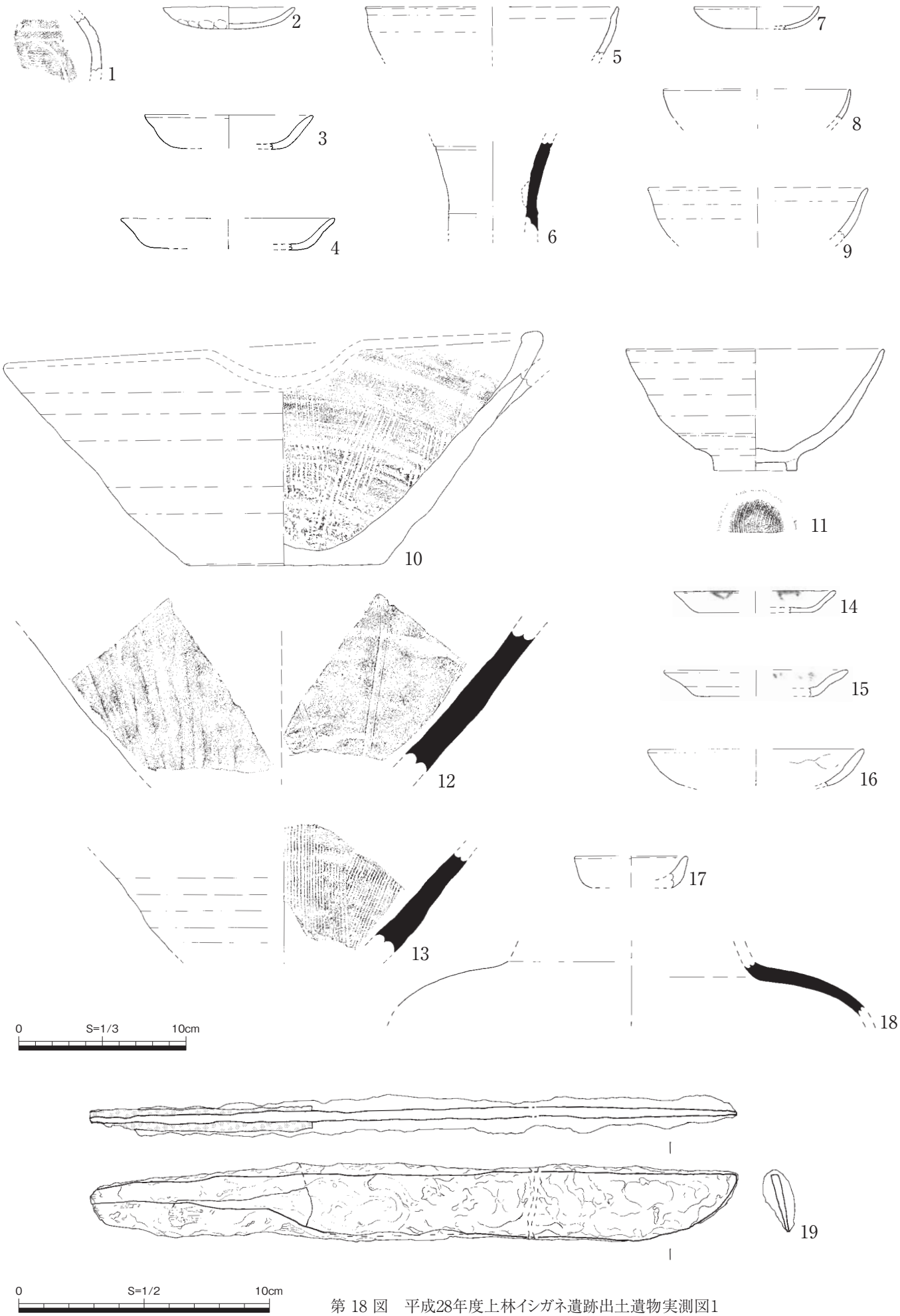
11～13は3区SD1（西側）から出土した土器である。11の古瀬戸灰釉平埦は調査区の拡張中に出土したもので、SD1の最上層から出土したか整地土から出土したか不明瞭な点がある。しかし、漆継痕跡が明瞭に残り全体の1/2が出土した。高台は付高台で、体部下半に回転ケズリの痕跡を残す。14世紀後半頃のものと考えられる。

14～16は3区SD1（南側）から出土した土師器で、14・15は灯明皿である。これも14世紀後半頃のものと考えられる。

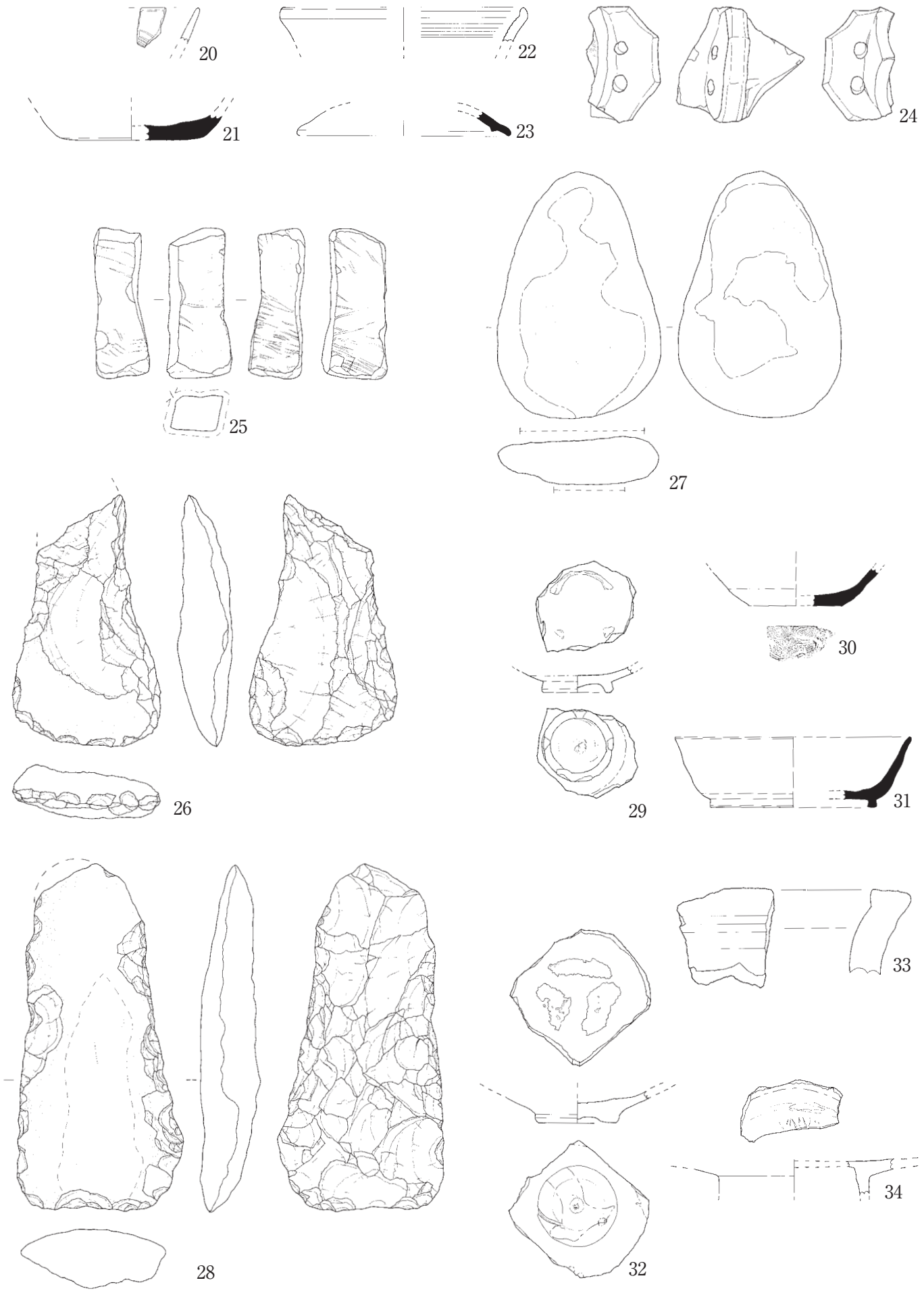
17～19は3区SD1（東側）から出土した遺物で、19の小刀については先に述べたとおりである。

25は3区の上層遺構面検出した際に出土した砥石である。

その他は状態の良いもの、年代の基準となるものを選んで掲載した。



第 18 図　平成28年度上林イシガネ遺跡出土遺物実測図1



第 19 図　平成28年度上林イシガネ遺跡出土遺物実測図2

0　S=1/3　10cm

第 2 表　平成28年度遺物観察表（土器）

番号	遺構 出土位置	器種	口径（㎜）	残存高（㎜）	底径（㎜）	調整（外） 調整（内）	色調（外） 色調（内）	残存率	備考
1	3区 西側拡張	縄文土器 浅鉢　口縁	—	—	—	沈線文、縄文 無文	10YR7/4にぶい黄橙 10YR7/3にぶい黄橙	小片	沈線
2	3区 中世P	土師器 皿	80.0	13.0	—	ナデ ナデ、ユビオサエ	7.5YR6/6橙 2.5YR7/6橙	1/6	全体に歪みあり
3	3区 中世P	土師器 皿	100.0	20.0	—	ナデ ナデ	5YR7/6橙 5YR7/6橙	口縁1/7	
4	3区 中世P	土師器 皿	126.0	18.0	—	ナデ ナデ	7.5YR7/3にぶい橙 7.5YR8/3浅黄橙	1/12	
5	3区 中世整地土	陶器（古瀬戸） 埦	150.0	—	—	回転ナデ 回転ナデ	5Y7/2灰白 5Y7/2灰白	1/12	
6	3区 中世整地土	須恵器 瓶　頸部	—	—	—	回転ナデ 回転ナデ	5Y4/2灰オリーブ 5Y4/3暗オリーブ（自然釉）	頸部1/4	沈線2条 自然釉
7	3区 SK 25	土師器 皿	74.0	13.0	46.0	ナデ ナデ	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR7/4にぶい橙	1/3	
8	3区 SK 25	土師器 皿	(112.0)	—	—	ナデ ナデ	5YR7/6橙 5YR7/6橙	小片	
9	3区 SK 25	陶器（古瀬戸） 天目茶埦	(130.0)	—	—	回転ナデ 回転ナデ	10YR2/1黒 7.5YR3/3暗褐	口縁部小片	鉄釉
10	3区 SK 25	珠洲焼 擂鉢	325.0	141.0	120.0	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y7/1灰白 10YR7/2にぶい黄橙	ほぼ完形	底部ヘラ切り痕 片口欠損、卸目11本
11	3区 SD 1 （西溝）	陶器（古瀬戸） 埦	154.0	73.0	50.0	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y7/2灰白 7.5Y7/2灰白	1/2	底部糸切り痕あり 漆継ぎ痕断面に残る
12	3区 SD 1 （西溝）	加賀焼 擂鉢	—	(80.0)	—	縦方向ヘラナデ ヨコナデ	2.5Y7/1灰白 2.5Y7/1灰白	小片	卸目4～5本
13	3区 SD 1 （西溝）	珠洲焼 擂鉢	(220.0)	(60.0)	—	回転ナデ 卸目	7.5Y6/1灰 7.5Y6/1灰	小片	卸目20本
14	3区 SD 1 （南溝）	土師器 灯明皿	96.0	13.0	70.0	ナデ ナデ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR8/4浅黄橙	1/8	煤付着
15	3区 SD 1 （南溝）	土師器 灯明皿	110.0	16.0	70.0	ナデ ナデ	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR8/4浅黄橙	1/8	煤付着
16	3区 SD 1 （南溝）	土師器 皿	(130.0)	—	—	ナデ ユビオサエ、ナデ	10YR7/4にぶい黄橙 10YR6/4にぶい黄橙	口縁1/12	煤付着
17	3区 SD 1 （東溝）	土師器 坏	66.0	—	—	ナデ ナデ	5YR6/8橙 5YR6/8橙	1/6	
18	3区 SD 1 （東溝）	須恵器 壺（肩部）	—	—	—	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y6/1黄灰 5YR5/1褐灰	小片	肩部径（194㎜）
20	4区 SK 1	青磁 碗	—	—	—	— —	7.5YR6/2灰オリーブ 7.5Y5/2灰オリーブ	小片	貫入あり
21	4区 SK 1	須恵器 坏	—	—	82.0	回転ナデ 回転ナデ	10YR7/4にぶい黄橙 2.5Y7/3浅黄	底部1/3	焼成不良
22	4区 SK 8	土師器 甕　口縁	(142.0)	—	—	ヨコナデ カキメ	7.5YR6/6橙 7.5YR7/6橙	小片	
23	4区 SK 8	須恵器 坏蓋	124.0	—	—	回転ナデ 回転ナデ	10YR6/2灰黄褐 10YR6/3にぶい黄橙	1/12	

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外) 調整(内)	色調(外) 色調(内)	残存率	備考
24	3区	須恵器 双耳瓶	最大長 68.0	最大幅 76.0	—	回転ナデ、ナデ	5Y4/3暗オリーブ(自然釉)	小片	耳部は完形
	包含層					回転ナデ	5Y6/1灰(自然釉)		
29	3区	陶器 埦	—	—	42.0	回転ナデ	10YR8/2灰白	高台部完存	トチン痕 削りだし高台
	NR 1					回転ナデ	10YR8/2灰白		
30	3区	須恵器 無台坏	—	—	54.0	回転ナデ	2.5Y7/1灰白	1/4	底部糸切り痕 一部自然釉付着
	NR 1					回転ナデ	2.5Y7/1灰白		
31	3区	須恵器 有台坏	136.0	42.0	98.0	回転ナデ	2.5Y灰白	1/4	
	NR 1					回転ナデ	2.5Y灰白		
32	4区	陶器 埦	—	—	46.0	回転ナデ	7.5YR7/3にぶい橙	底部完存	トチン痕、回転ヘラ起こし
	NR 1					回転ナデ	7.5Y6/2灰オリーブ		
33	4区	陶器(越前焼) 甕	—	—	—	ヨコナデ	5YR4/1灰褐	小片	自然釉 部分的に降灰
	NR 1					ヨコナデ	5YR4/1灰褐		
34	4区	陶器(古瀬戸) 埦?皿?	—	—	—	回転ナデ	2.5Y6/4にぶい黄	底部1/6	釉剥がれあり(重ね焼き痕)
	NR 1					回転ナデ	2.5Y7/3浅黄		

第 3 表　平成28年度遺物観察表(石製品)

番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石　材	備考
25	3区	石製品	89.0	39.0	33.0	140	凝灰岩	上部欠損 下部欠損
	上層遺構検出面	砥石						
26	3区	石製品	149.0	87.0	32.0	345	凝灰岩	上部欠損
	遺構検出	打製石斧						
27	2区	石製品	145.0	96.0	29.0	540	凝灰岩	
	遺構検出	磨石						
28	2区	石製品	205.0	98.0	35.0	740	砂岩	上部欠損
	NR 1	打製石斧						

第 4 表　平成28年度遺物観察表(金属製品)

番号	遺構 出土地点	器種	全長 (mm)	元幅 (mm)	重ね (mm)	重量 (g)	備考
19	3区	鉄製品	257.0	32.0	17.0	147.1	茎木質残存
	SD 1(東溝)	小刀					

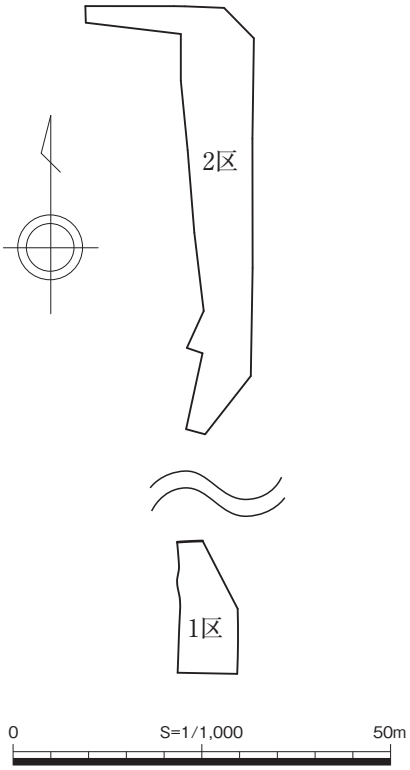
末松遺跡

第 4 章　平成29 (2017) 年度の調査成果

第 1 節　調査の概要

平成29年度の発掘調査範囲は都市計画道路堀内上林線拡幅範囲のうち、中林交差点の南西 (2区) 及びその南側 (1区) である。

発掘調査は1区から開始した。地山面まで重機で掘り下げ、遺構検出し、遺構を掘削した。遺構番号は種別を問わず通し番号を附番した。いずれの遺構も半裁またはベルトを残して掘削し、土層を確認したうえで必要に応じて図化、写真等の記録作業を実施した。



第 20 図　平成29年度調査区配置略図
(S=1/1,000)

第 2 節　遺構

1. 1区 (第21図)

1区は遺跡南側の南北17.3m、東西8mの調査区である。地山検出面の地形はほぼ平坦であった。北東隅は事前の試掘調査で遺跡範囲外と判断した。検出した遺構は掘立柱建物1棟、溝4条及び小穴である。

SB1 (第 22 図)

調査区中央から南側で検出した南北3間、東西1間の掘立柱建物である。北西隅の柱は調査区外に伸びるため確認できなかったが、東西5.1m、南北7.8mを測り、柱間は南北が2.5から2.7mであるのに対して東西が5.1mと広い。方位はN15° -Wとやや西に振る。検出した柱穴は検出面から大凡60から90cm程度掘り込み、周辺の小穴と比べても特に深い。北東隅のP89はSD87に切られていることから、この溝より先行する建物と考えられる。柱穴から出土した遺物がないため直接時期を限定できる根拠はないものの、後出する溝SD87から土師器有台埦 (第33図37) が出土している。

SD85・86・87 (第 23 図)

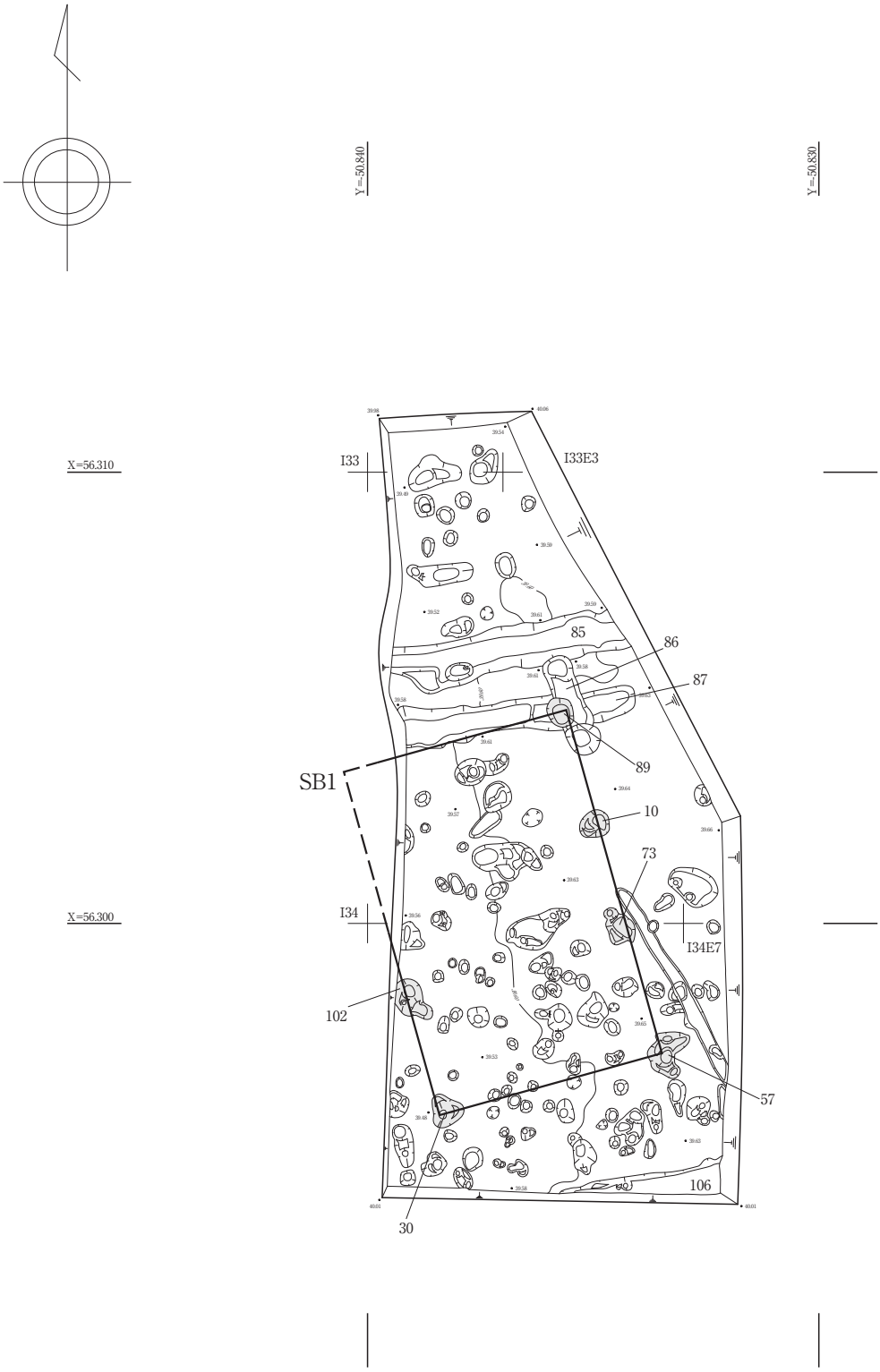
重複する3条の溝状遺構である。内SD85とSD87は北東−南西方向に並行して伸び、SD86はほぼ直交する。SD85は幅80から100cm程度、深さは検出面から30cm程度と浅いものである。SD87は幅約85cm、深さは25cm程度とSD85より若干細いものである。溝間は芯々距離で1.5m程度である。SD86は南北2.3m、幅60cmほどの溝状遺構である。掘り込みは20cm程度と他の溝と比べ浅い。

先後関係は土層の観察からSD86が古く、SD85とSD87が後出する。また先述の掘立柱建物SB1のP89がSD87に切られる。

出土遺物はSD85から須恵器坏蓋 (第33図36) 、SD87から土師器有台埦 (同図37) が出土している。

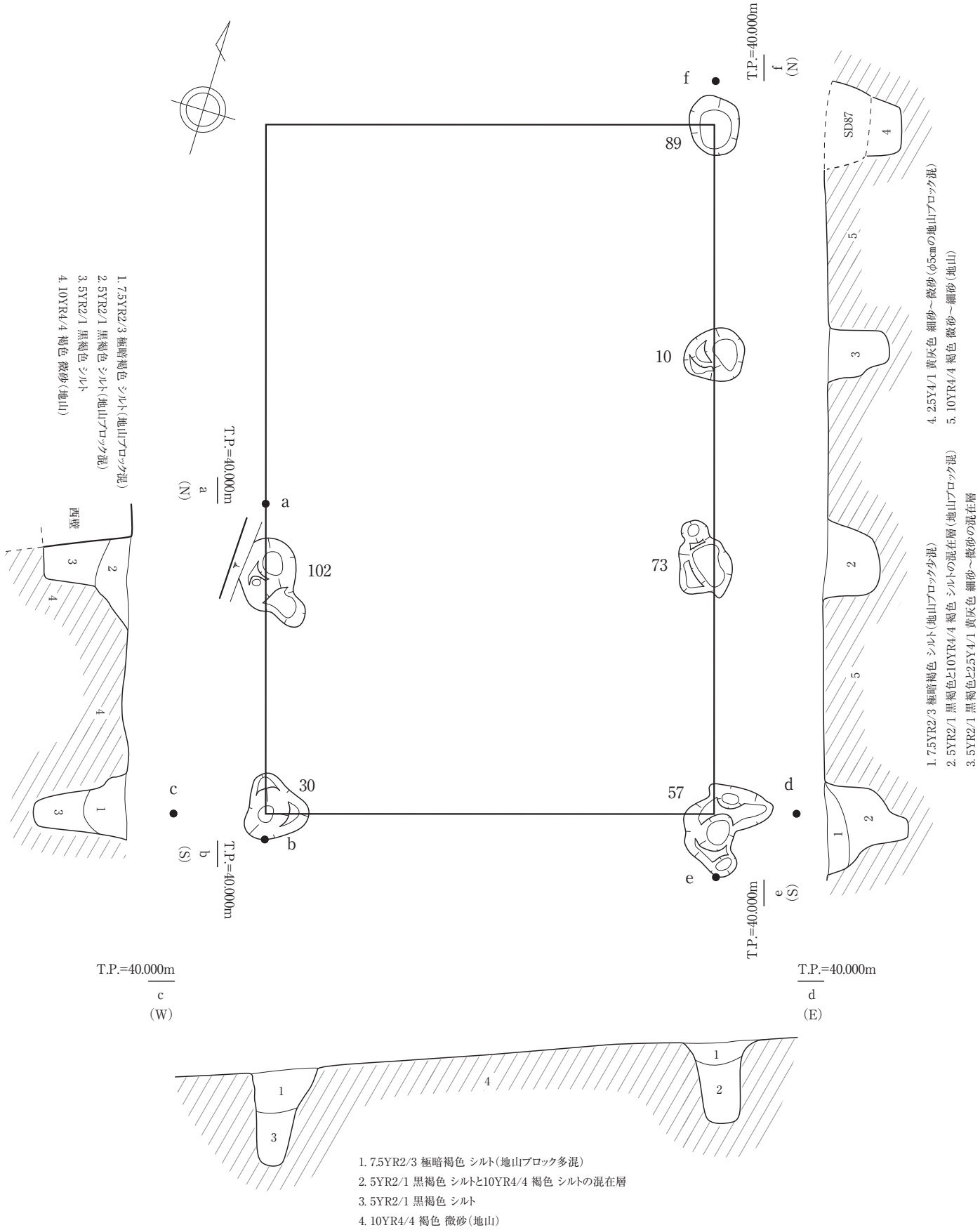
SD106 (第 24 図)

調査区南東隅で検出した溝状の遺構である。遺構の大半が調査区外に伸びるため形状は不明であるが、北東−南西方向に伸び、SD85とほぼ同じ方向である。



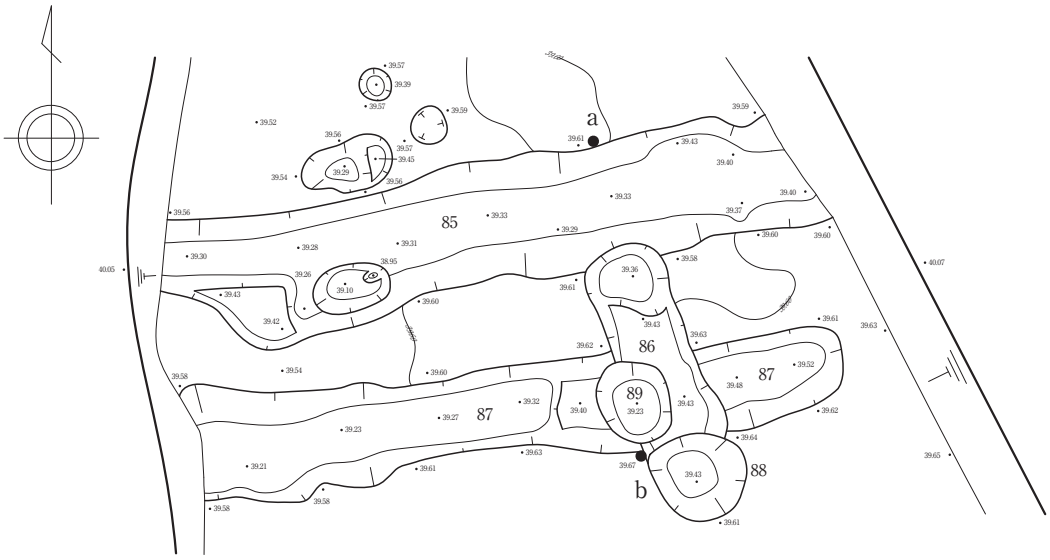
第 21 図　1区平面図（S=1/150）

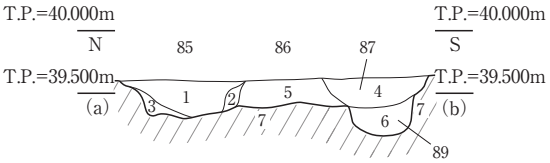
0　S=1/150　5m



第 22 図　SB1 平面･断面図（S=1/60）

0　S=1/60　2m





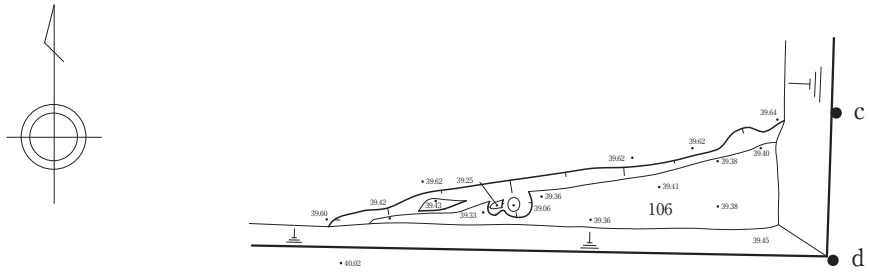
1. 5YR2/1 黒褐色 シルト
2. 5YR2/1 黒褐色 シルト(地山ブロック混)
3. 2.5Y5/1 黄灰色 細砂～微砂

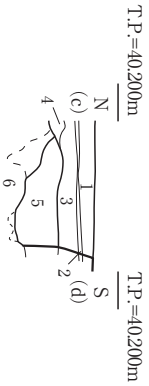
} SD85

5. 7.5YR2/3 極暗褐色 微砂シルト(SD86)
4. 5YR2/1 黒褐色 シルト(地山ブロック混)(SD87)
6. 2.5Y4/1 黄灰色 細砂～微砂(φ5㎜の地山ブロック少混)(SD89･SB1)
7. 10YR4/4 褐色 微砂(地山)

第 23 図　SD85･86･87、SK89 平面･断面図 (S=1/60)

0　S=1/60　2m





1. 現耕土
2. 現床土
3. 5Y7/1 灰白色 細～微砂(Fe沈)
4. 3層と10YR3/3 暗褐色 シルトの混在層
5. 5YR2/1 黒褐色 シルト(SD106)
6. 10YR4/4 褐色 微砂(地山)

第 24 図　SD106 平面･断面図 (S=1/60)

0　S=1/60　2m

2. 2区（第25・26図）

南北56m、幅9mほどの南北方向にのびる調査区で、北西隅から西にL字状に屈曲する。遺構密度は1区と比べて全体として非常に高く、小穴が隙間なく密集している。検出した遺構は掘立柱建物4棟、溝1条、小穴などである。小穴の中にはほぼ完形の土師器埦が底部付近から出土したものがある。以下に主な遺構について概要を記す。

SD640（第 27 図）

調査区南側で検出した東西方向の溝である。調査区壁で確認できた最大幅は3m、深さ90cmと幅広く掘り込みの深い溝出る。断面形状は中段でテラス状の平坦面を持ち、底部は平坦である。土層堆積も概ね水平堆積で人為的に埋没した痕跡は認められず、また水流を示す痕跡も認められなかった。出土遺物は内面黒色有台埦の底部（第33図56）が出土している。

P501（第 29 図）

調査区中央付近で検出した小穴である。SB4の内側に位置している。不整形な平面プランで掘り込みも検出面から約12cm程である。覆土中から土師器埦（第33図43）が出土している。外面が赤彩され、胎土に海綿骨針を多く含む。

P284（第 29 図）

調査区北側の東壁際で検出した小穴である。不整形な平面プランで掘り込みは地山検出面から 28cm 程である。覆土中から土師器有台埦（第 33 図 48）が出土している。

P268（第 29 図）

調査区北側の中央部で検出した小穴である。長軸36cm程の平面楕円形で、掘り込みは20cm程と浅いものである。底部から完形の土師器皿（第33図39）が伏せた状態で出土している。9世紀後半頃のものと考えられる。

P250（第 29 図）

調査区北側の西壁際で検出した小穴である。長軸46cm程のやや不整形な平面円形で、掘り込みは42cm程である。土師器有台埦（第33図47）が出土している。

P197（第 29 図）

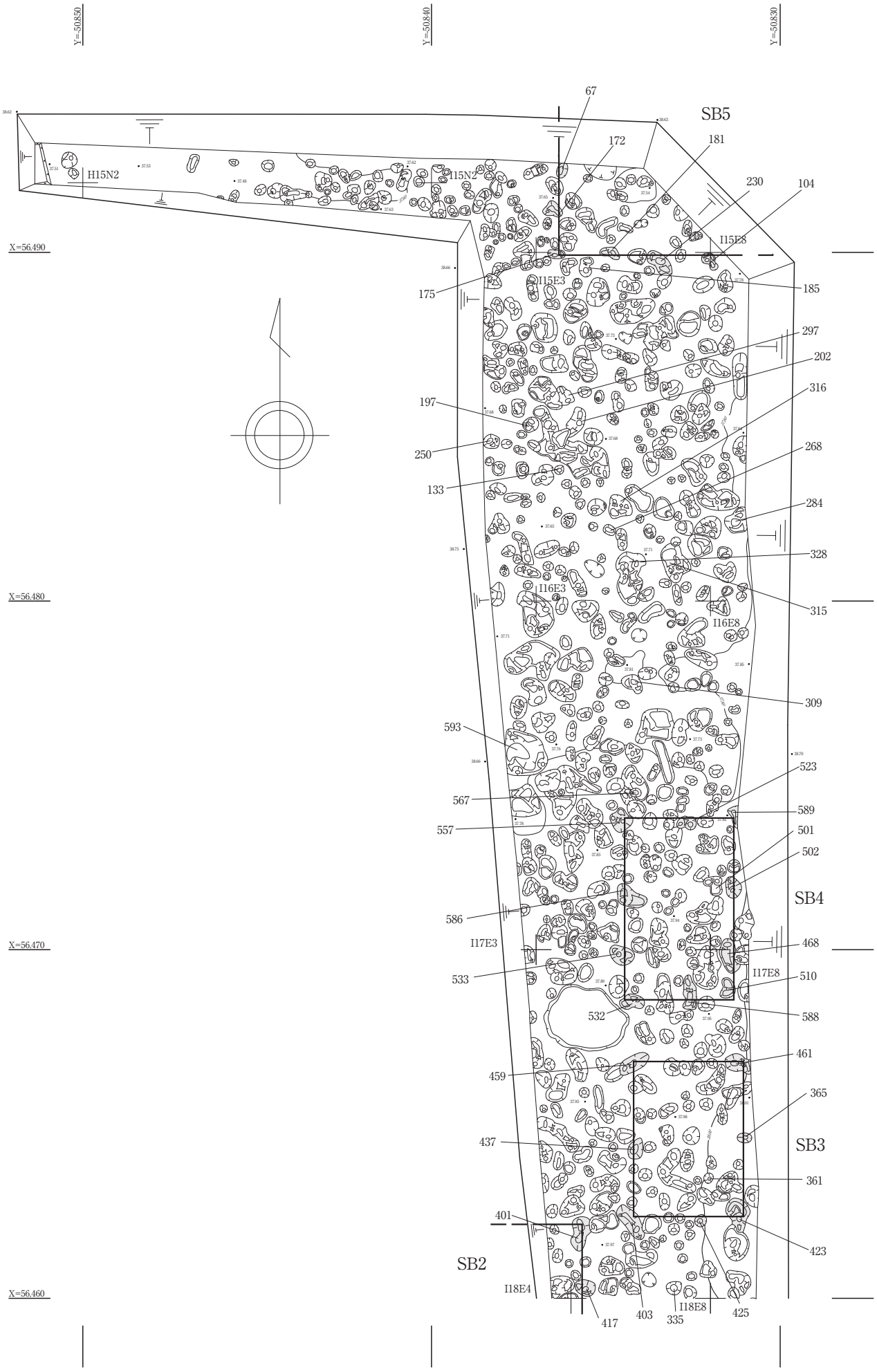
調査区北側で検出した長軸46cm程のやや不整形な平面円形で、掘り込みは最も深い点で検出面から40cm程である。土師器有台埦（第33図45）が出土している。

P185（第 29 図）

調査区北側のSB5南側で検出した小穴である。南北で2基の小穴が切りあっており、南側のより深いものから10世紀前半頃のものと考えられる完形の土師器埦（第33図42）が出土している。2基合わせて長軸56cm程、掘り込みは最も深い点で約40cmである。

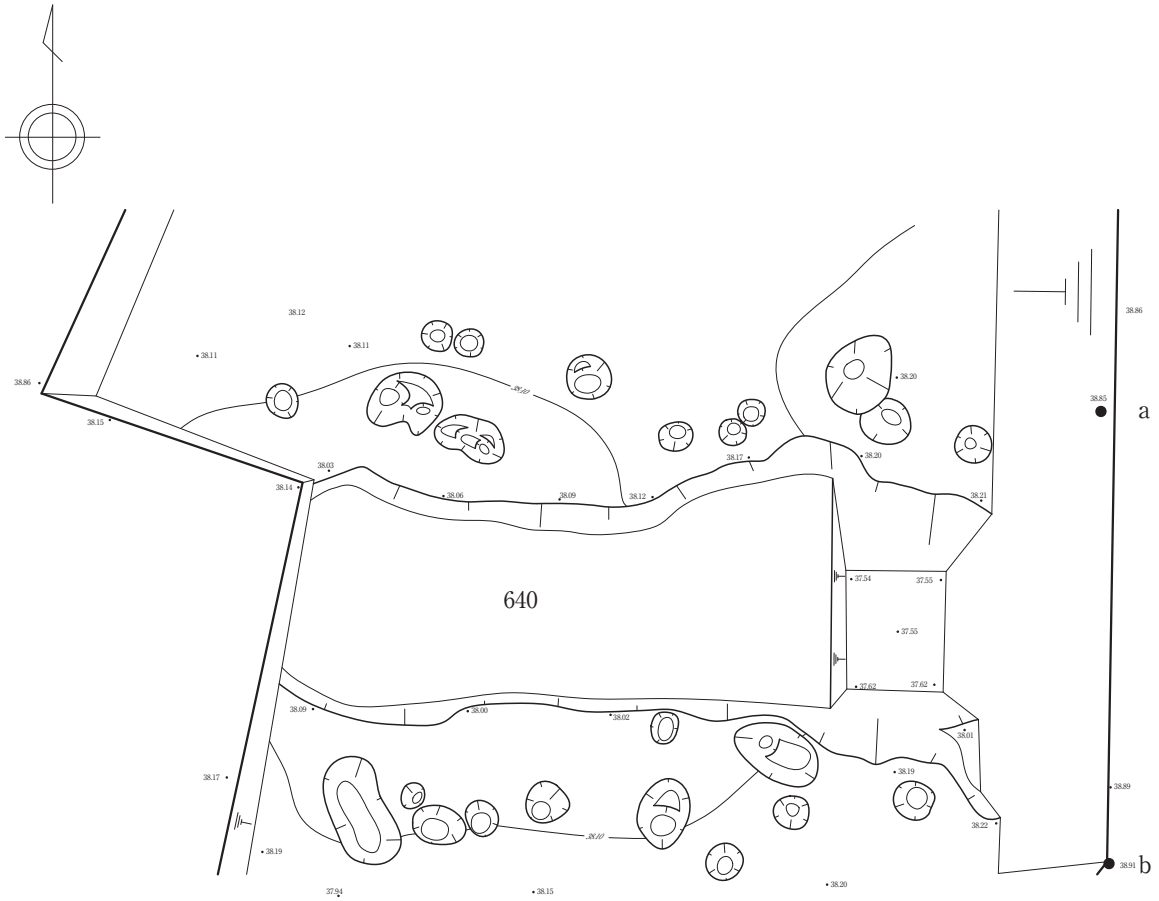
第 25 図　2区平面図1(南側)(S=1/150)

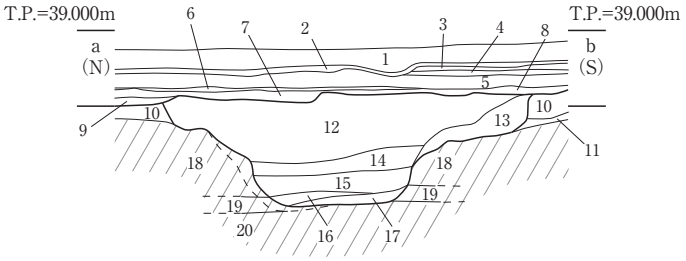
0　S=1/150　5m



第 26 図　2区平面図2(北側)(S=1/150)

0　S=1/150　5m

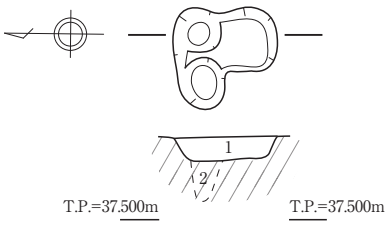




1. 現耕土
2. 現床土
3. 10YR6/8 明黄褐色 粘質土(Fe沈着)(旧耕土)
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色 微砂(Fe沈着)(旧床土)
5. 10YR5/8 黄褐色 微砂(Fe沈着)(旧耕土)
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 微砂(Fe多沈着)(旧床土)
7. 10YR5/8 黄褐色 細～微砂(Mn沈)(旧耕土)
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
9. 10YR4/4 褐色 シルト(炭化物少混、遺物混)
10. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土(遺物混)
11. 9層と地山の混在層
12. 10YR4/2 灰黄褐色 微砂(φ1～20cmの礫層、炭化物混)
13. 12層と地山12の混在層
14. 10YR4/2 灰黄褐色 微砂混シルト(炭化物少混)
15. 10YR4/4 褐色 シルト(φ5cm礫混)
16. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト(Fe沈着)
17. 2.5Y6/2 にぶい黄色 シルト(Fe沈着)
18. 10YR4/4 褐色 微砂(地山)
19. 10YR4/1 褐灰色 細砂(地山)
20. 礫層(φ5～10cmの礫)(地山)

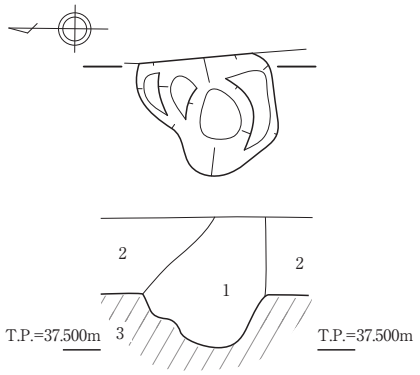
第 27 図　SD640 平面･断面図 (S=1/60)

0　S=1/60　2m



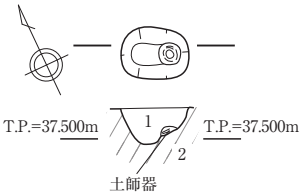
1. 7.5YR2/3 極暗色シルト
2. 10YR4/4 黒褐微砂（地山）

P501



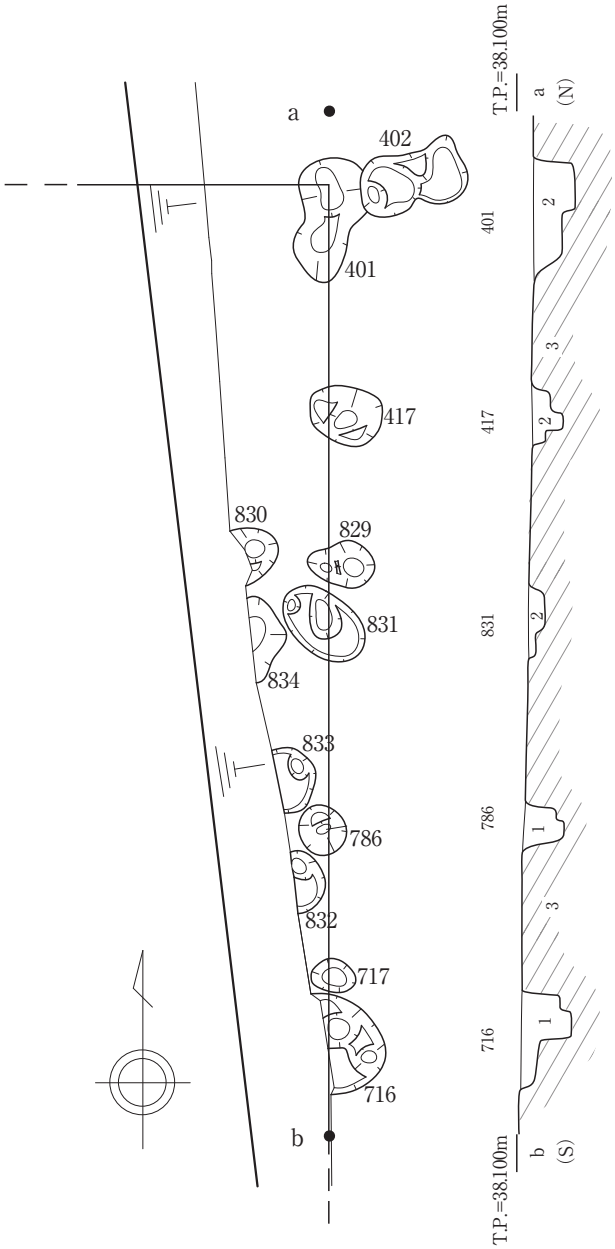
1. 5YR3/1 黒褐色と5YR4/1 褐灰色の混在層粘質土（地山ブロック混）
2. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土
3. 10YR4/4 褐色 微砂（地山）

P284



1. 5YR2/1黒褐色 シルト（地山ブロック混）
2. 10YR4/4黒褐色 微砂（地山）

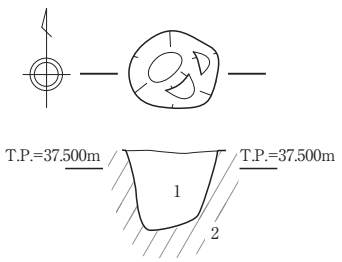
P268



1. 5YR2/1 黒褐色 細砂
2. 5YR2/1 黒褐色 細砂（2.5Y5/3 黄褐色 中～細砂のブロック混）
3. 10YR4/4 褐色 微砂～シルト（地山）

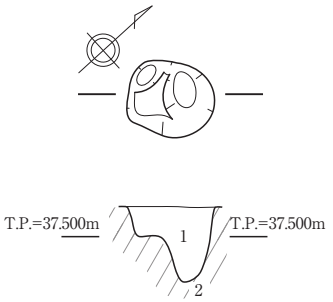
第 28 図　SB2 平面･断面図（S=1/60）

0　S=1/60　2m



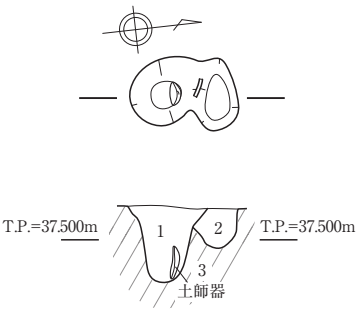
1. 5YR2/1 黒褐色 シルト
2. 10YR4/4 黒褐色 微砂（地山）

P250



1. 5YR2/1 黒褐色 シルト
2. 10YR4/4 褐色 微砂（地山）

P197

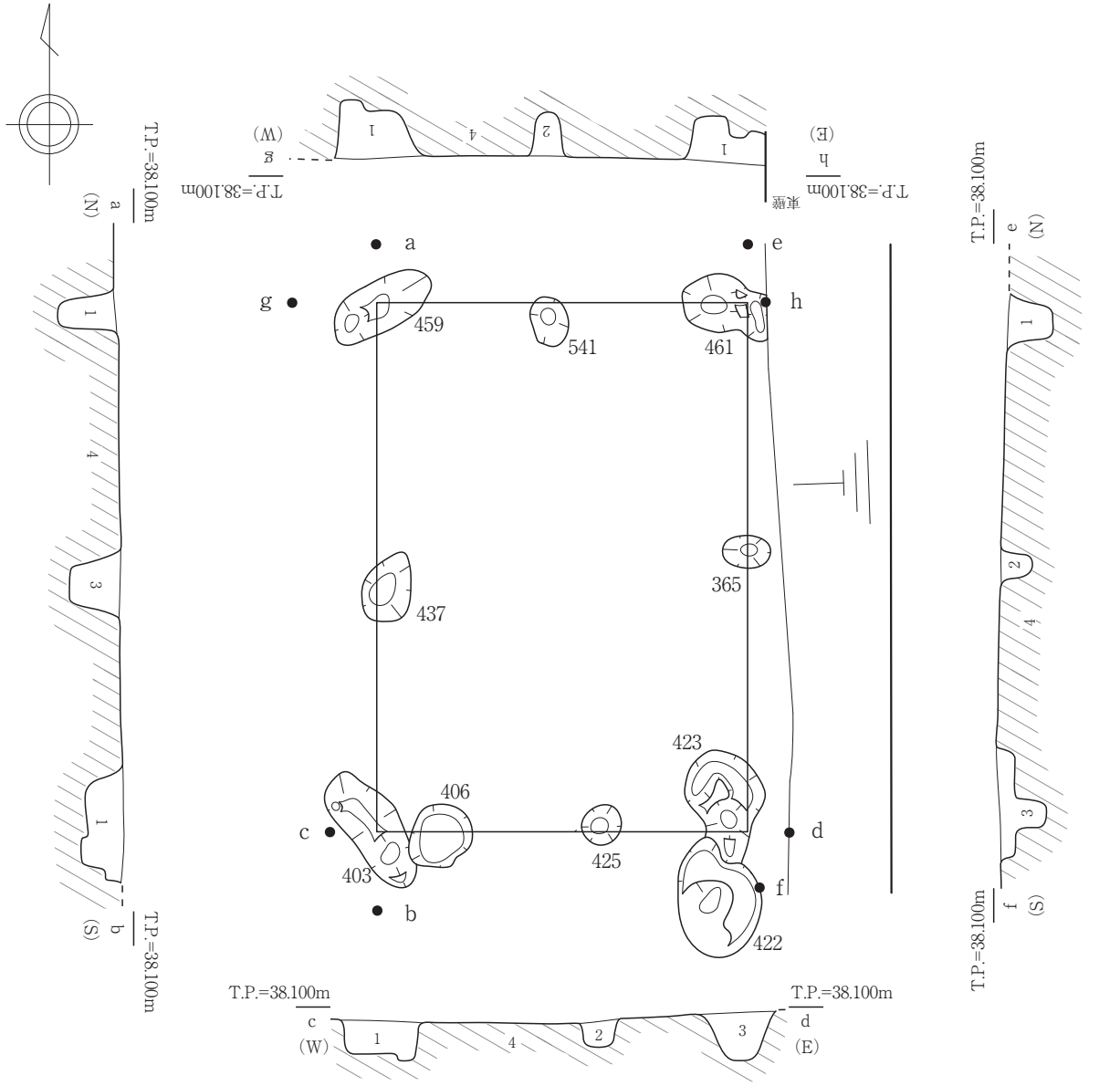


1. 5YR2/1 黒褐色 シルト（地山ブロック混）
2. 10YR2/3 暗褐色 シルト
3. 10YR4/4 褐色 微砂（地山）

P185

第 29 図　P501･284･268･250･197･185 平面･断面図（S=1/40）

0　S=1/40　2m



1. 5YR2/1 黒褐色 シルト
2. 5YR3/1 黒褐色 シルトと5YR4/1 褐灰色 粘質土の混在層
3. 5YR2/1 黒褐色 シルト(2.5YR3/3 暗褐色 細砂のブロック混)
4. 10YR4/4 褐色 微砂～シルト(地山)

第 30 図　SB3 平面･断面図（S=1/60）

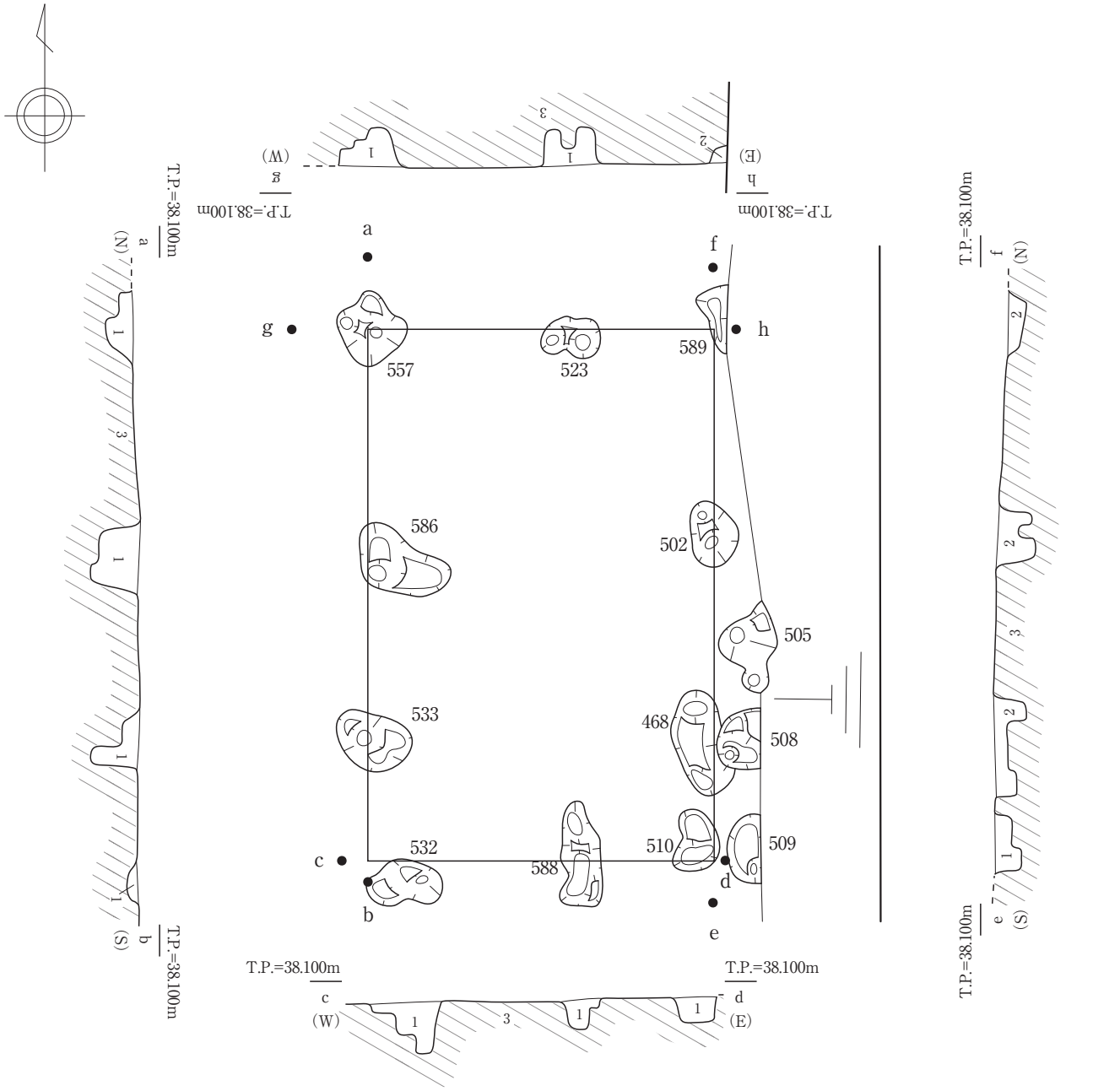
0　S=1/60　2m

SB2（第 28 図）

調査区南側の西壁際で検出した掘立柱建物である。構成する柱穴は北からP401、P417、P831、P786、P716で、建物の東筋にあたる。西側は調査区外に延びるため正確な規模は不明である。南北4間で南北長は6.7m、1間当たりの柱間は平均1.6m～1.7mほどである。柱の掘り込みも総じて浅く、顕著な柱痕跡が残るものも確認できなかった。出土遺物は無いため時期は不明である。

SB3（第 30 図）

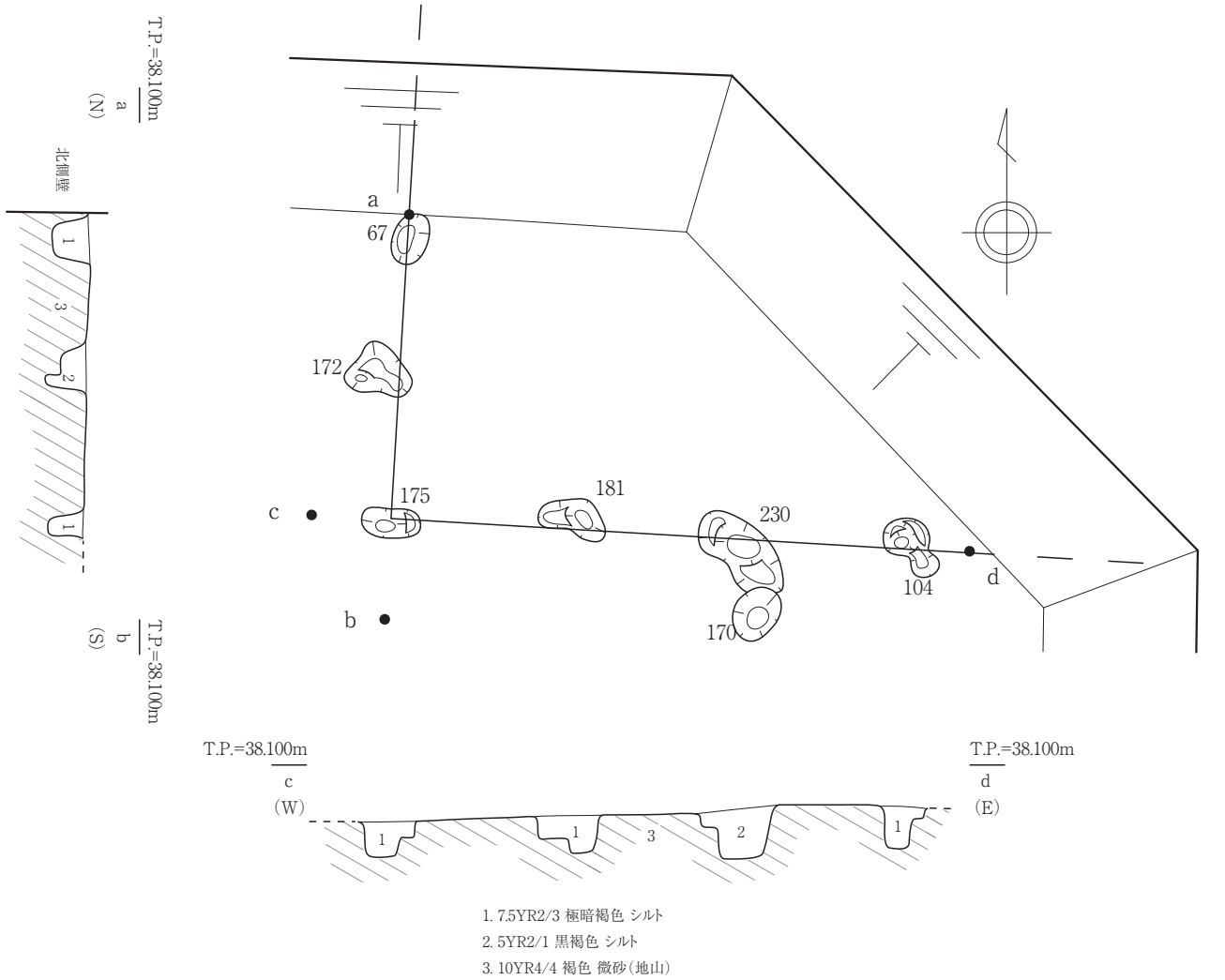
調査区中央の東壁際で検出した掘立柱建物である。構成する柱穴はP459、P541、P461、P437、P365、P403、P425、P423である。東西2間、南北2間の側柱建物で、東西3.2mに対して南北4.6mと南北に長い建物となる。柱間は東西で1.5から1.7m、南北で2.3から2.5mである。四隅の柱穴若干大きいものであるが総じて掘り込みは40から50cm程度となる。出土遺物は無いため時期は不明である。



第 31 図　SB4 平面･断面図（S=1/60）

SB4（第 31 図）

調査区中央のSB3の北に接する掘立柱建物である。構成する柱穴の柱筋はSB3より若干西にずれるもののおおむね同一軸線上に位置しており、一連の建物と考えられる。東西3.2m、南北5.2mの南北方向に長軸を持つ建物で、柱間は東西2間、南北3間である。柱間は1.6mから1.7m程で、柱穴はいずれも不整形で掘り込みも浅く、明確な柱痕跡が残るものは無い。遺物も出土しておらず時期は不明である。



第 32 図　SB5 平面･断面図（S=1/60）

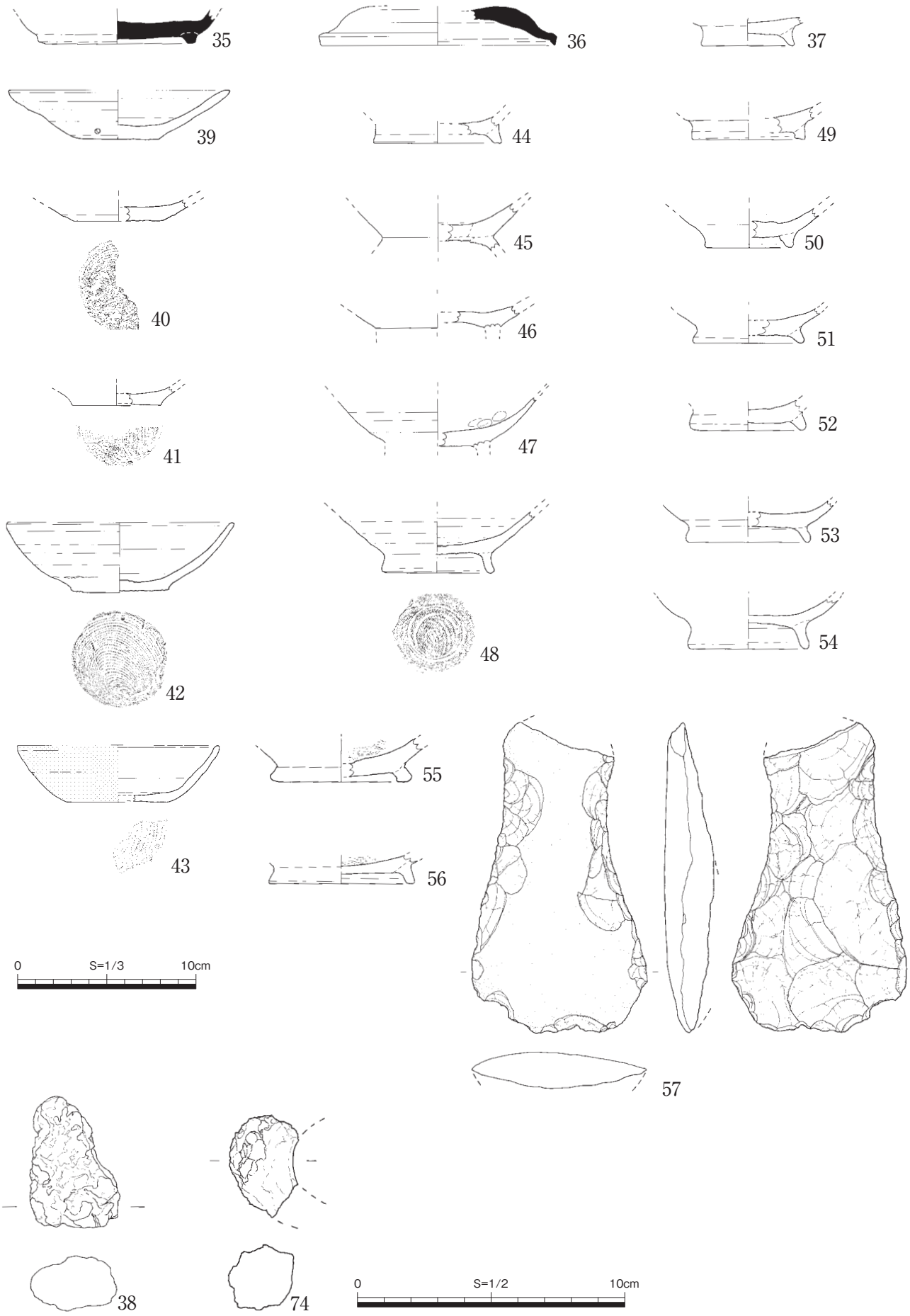
SB5（第 32 図）

調査区北東隅で検出した掘立柱建物である。建物の南西部のみの検出であり、全体像は把握できなかった。構成する柱穴はP67、P172、P175、P181、P230、P104であり、東西3間以上、南北2間以上となる。検出できた範囲で南北2.6m、東西4.6mであり、柱間は1.3～1.5mほどと他の掘立柱建物と比べて狭い。柱穴はいずれも不整形で長軸50cm程度の小ぶりなものであり、掘り込みは検出面から30cm程と浅い。柱痕跡が残るものは確認できなかった。柱穴から出土した遺物は無く時期は不明である。

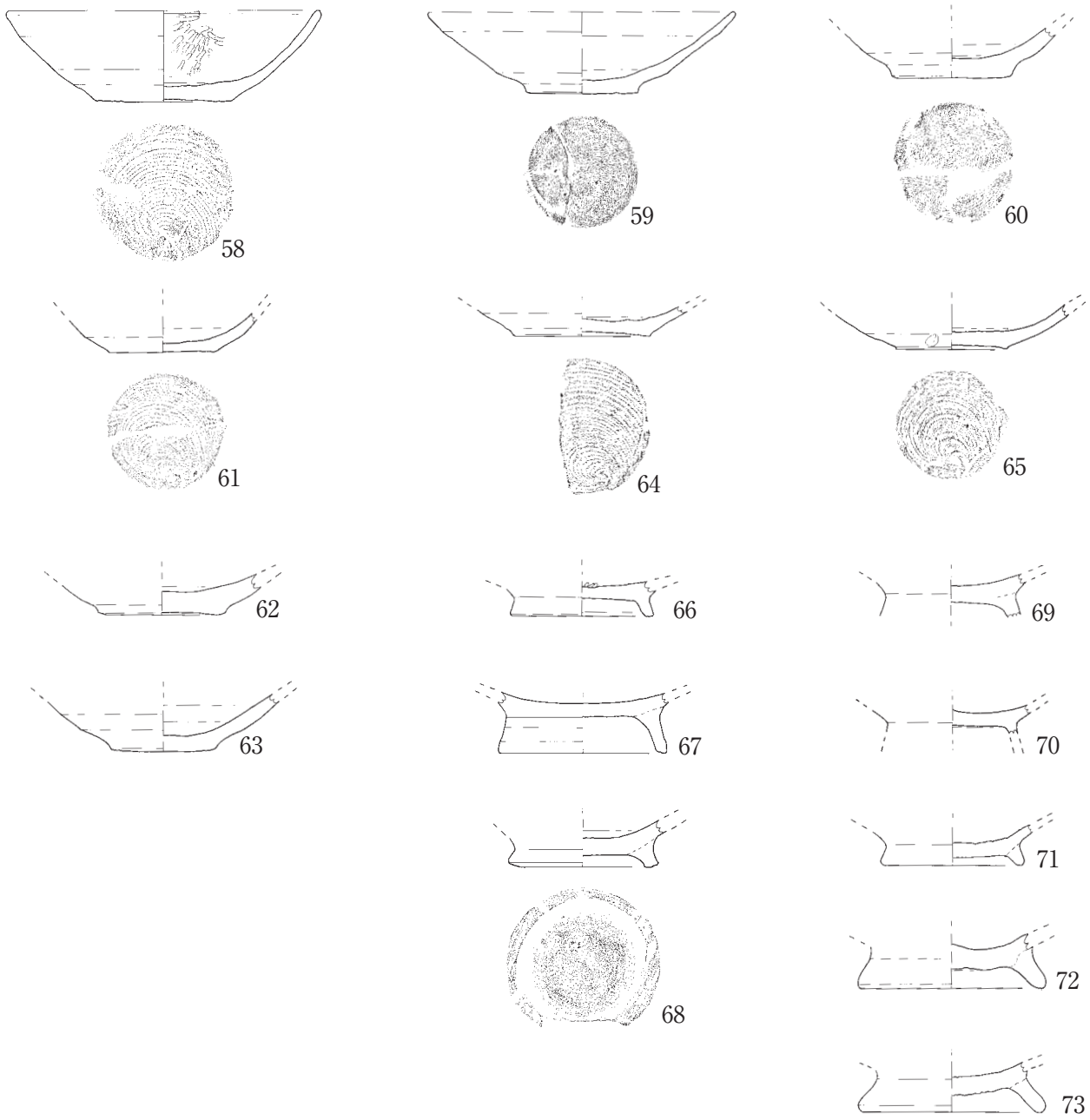
第 3 節　出土遺物（第33・34図）

出土遺物は各遺構で述べたものもあるが、ここで再び整理する。1区、2区ともに出土した遺物は打製石斧1点を除き古代、特に9世紀から10世紀代を中心とする時期に属するものと考えられる。

35、36はいずれも1区から出土した須恵器で、35は重機掘削時に出土した坏の底部である。36はP85から出土した坏蓋である。37から73は土師器の供膳具で、底部のみで全体像が把握できないものが多いが、埦器形のものが主で、明らかに皿器形と考えられるものは39がある。また大別すると、内面を黒色化したもの（55、56、58、66、67）と外面に赤彩を施すもの（43）、内外面ともに無調整であるものがある。また胎土には海綿骨針を多く含むもの（28、43、49、51、53等）と、含まないまたは微量含むものに大別できる。



第 33 図　平成29年度末松遺跡出土遺物実測図1



第 34 図　平成29年度末松遺跡出土遺物実測図2

0　S=1/3　10cm

第 5 表　平成29年度遺物観察表（土器）

番号	遺構 出土位置	器種	口径（㎜）	残存高（㎜）	底径（㎜）	調整（外） 調整（内）	色調（外） 色調（内）	残存率	備考
35	1区 重機掘削	須恵器 有台坏	—	(18.0)	(88.0)	回転ナデ 回転ナデ	5BG6/1青灰 5BG6/1青灰	底部1/6	
36	1区 85	須恵器 坏蓋	134.0	(22.0)	—	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y5/1黄灰 5Y6/1灰	1/7	かえし高3㎜ 内面に降灰
37	1区 87	土師器 有台埦	—	—	52.0	不明 不明	7.5YR7/6橙 7.5YR7/6橙	底部1/2	
39	2区 268	土師器 皿	124.5	27.5	51.0	回転ナデ 回転ナデ	5YR7/8橙 5YR7/6橙	完形	穿孔あり 底部に回転ヘラ痕
40	2区 133	土師器 埦	—	—	50.0	ナデ ナデ	5YR6/6橙 7.5YR6/6橙	底部1/2	底部回転糸切り痕
41	2区 315	土師器 埦	—	(11.0)	50.0	ナデ ナデ	5YR7/6橙 5YR7/6橙	底部1/3	底部回転糸切り痕
42	2区 185	土師器 埦	127.0	39.5	54.5	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR8/4浅黄橙 5YR7/8橙	完存	外面赤彩 底部回転糸切り痕
43	2区 501	土師器 埦	114.0	32.0	56.0	ナデ ナデ	5YR7/8橙 7.5YR7/4にぶい橙	1/4	底部糸切り痕
44	2区 104	土師器 有台埦	—	—	72.0	ナデ ナデ	7.5YR6/6橙 10YR7/4にぶい黄橙	底部1/4	
45	2区 197	土師器 有台埦	—	—	(62.0)	ナデ ナデ	10YR8/4浅黄橙 10YR6/4にぶい黄橙	底部2/3	底部回転ヘラ切り痕
46	2区 202	土師器 有台埦	—	—	70.0	ナデ ナデ	7.5YR4/2灰褐 7.5YR4/2灰褐	底部1/3	高台欠損
47	2区 250	土師器 有台埦	—	体部径 110.0	(59.0)	ナデ、ユビオサエ ナデ	10YR6/4にぶい黄橙 7.5YR7/6橙	1/2	高台欠損
48	2区 284	土師器 有台埦	—	—	63.0	回転ナデ 回転ナデ	5YR6/6橙 7.5YR6/6橙	底部完存	底部は糸切りのちナデか
49	2区 361	土師器 有台埦	—	(18.0)	64.0	ナデ ナデ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR8/6浅黄橙	底部1/3	
50	2区 297	土師器 有台埦	—	—	50.0	ナデ ナデ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR7/6橙	底部1/2	底部回転ヘラ切り痕
51	2区 593	土師器 有台埦	—	(20.0)	63.0	ナデ ナデ	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR7/4にぶい橙	底部2/3	底部回転ヘラ切りのちナデか
52	2区 328	土師器 有台埦	—	(17.0)	66.0	ナデ ナデ	7.5YR6/2灰褐 7.5YR8/4浅黄橙	底部完存	外面全て煤付着
53	2区 309	土師器 有台埦	—	(21.0)	70.0	ナデ ナデ	10YR7/4にぶい黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	底部1/4	底部は糸切りのちナデか
54	2区 316	土師器 有台埦	—	(28.0)	68.0	ナデ ナデ	2.5YR6/6橙 7.5YR7/6橙	底部1/3	底部回転糸切りのちナデか
55	2区 567	土師器 内黒有台埦	—	(19.0)	80.0	ナデ ミガキ	7.5YR7/6橙 10YR3/1黒褐	底部1/3	
56	2区 640	土師器 内黒有台埦	—	(16.0)	82.0	ナデ ミガキ	7.5TR8/4浅黄橙 10YR3/1黒褐	底部完存	底部回転ヘラ切り痕
58	2区 黒色包含層	土師器 内黒埦	141.0	41.0	60.0	回転ナデ ミガキ	7.5YR6/6橙 7.5YR2/1黒	1/4	底部回転糸切り痕
59	2区 黒色包含層	土師器 埦	141.0	37.5	51.0	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR8/6浅黄橙 7.5YR8/6浅黄橙	1/2	底部回転糸切り痕
60	2区 黒色包含層	土師器 埦	—	—	55.0	ナデ ナデ	7.5YR8/6浅黄橙 7.5YR7/6橙	1/4	底部回転糸切り痕
61	2区 黒色包含層	土師器 埦	—	—	52.0	ナデ ナデ	10YR7/4にぶい黄橙 10YR6/2灰黄褐	1/2	底部回転糸切り痕

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外) 調整(内)	色調(外) 色調(内)	残存率	備考
62	2区 黒色包含層	土師器 埦	—	—	58.0	ナデ ナデ	10YR6/4にぶい黄橙 5YR7/6橙	1/2	
63	2区 黒色包含層	土師器 埦	—	—	49.0	ナデ ナデ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR7/4にぶい橙	底部完存	底部糸切り痕
64	2区 黒色包含層	土師器 埦	—	—	62.0	ナデ ナデ	7.5YR7/6橙 7.5YR7/6橙	1/2	底部回転糸切り痕
65	2区 黒色包含層	土師器 埦	—	—	51.0	ナデ ナデ	7.5YR6/6橙 7.5YR6/6橙	1/4	底部回転糸切り痕
66	2区 黒色包含層	土師器 内黒有台埦	—	—	66.0	ナデ ミガキ	7.5YR7/6橙 2.5YR3/1黒褐	底部完存	
67	2区 黒色包含層	土師器 内黒有台埦	—	—	77.0	ヨコナデ ミガキ	7.5YR7/6橙 7.5YR2/1黒	底部2/3	
68	2区 黒色包含層	土師器 有台埦	—	—	68.0	ヨコナデ ナデ	5YR6/6橙 5YR6/6橙	底部完存	底部糸切り痕
69	2区 黒色包含層	土師器 有台埦	—	—	60.0	ナデ ナデ	7.5YR8/6浅黄橙 5YR7/6橙	底部完存	底部回転ヘラ切り痕
70	2区 重機掘削	土師器 有台埦	—	—	—	ヨコナデ ナデ	7.5YR7/6橙 7.5YR6/6橙	底部完存	底部回転ヘラ切り痕
71	2区 黒色包含層	土師器 有台埦	—	—	65.0	ヨコナデ ナデ	7.5YR6/6橙 7.5YR6/6橙	底部完存	底部回転ヘラ切り痕
72	2区 黒色包含層	土師器 有台埦	—	—	84.0	ヨコナデ ナデ	7.5YR8/6浅黄橙 7.5YR7/6橙	底部2/3	底部回転ヘラ切り痕
73	2区 黒色包含層	土師器 有台埦	—	—	86.0	ナデ ナデ	7.5YR8/6浅黄橙 7.5YR7/6橙	底部1/2	

第 6 表　平成29年度遺物観察表(土製品)

番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
74	2区 黒色包含層	フイゴ羽口	38.0	26.0	25.0	16.6	内側ガラス状となる

第 7 表　平成29年度遺物観察表(石製品)

番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石　材	備考
57	2区 335	打製石斧	174.5	98.0	28.0	450	砂岩	上部欠損

第 8 表　平成29年度遺物観察表(金属製品)

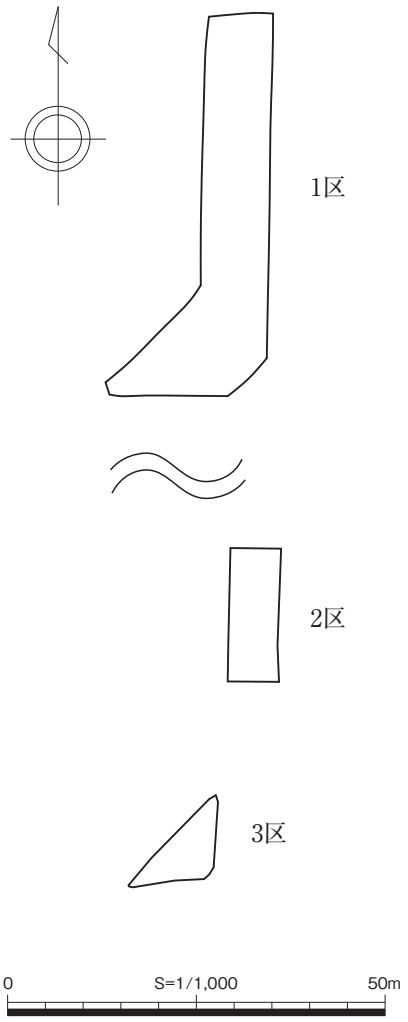
番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
38	1区 106	鉄滓	49.0	34.0	21.0	33.3	

第 5 章　平成30 (2018) 年度の調査成果

第 1 節　調査の概要

平成30年度調査区は中林交差点の南側の1区、平成29年度1区の南側に位置する2区と3区の計3か所を調査した。2区は東西7m、南北18mの調査区である。3区は東西・南北それぞれ11m程の三角形状の小調査区である。

調査は1区から開始した。重機で地山まで掘削して検出した結果、調査区全面で非常に高い遺構密度があることが明らかになった。また南側に南東―北西方向の溝が確認でき、土層の検討の結果近世以降の流路であると判断した（SD1・2）。なおこの溝の延長は令和4年度に実施した調査区で検出している。遺構掘削は南側から着手し、種別を問わず通し番号を附番した。小穴は半裁後土層の記録写真撮影、注記を行ったのち完掘した。溝についてはベルトを残して掘削し記録を行った。2区と3区は1区の調査が完了後に着手した。2区は発掘以前はコンクリート舗装された駐車場として利用されていた部分であり、すでに既存施設で破壊が確実であった部分を除いての調査である。また、北側約4分の1の範囲は地山が急激に落ち込む地形であり、遺構は検出できなかったため土層堆積の記録のみを行った。3区は全面に遺構が検出できたが、遺構の数は1区と比べて疎らである。検出できた遺構は小穴のみである。



第 35 図　平成30年度調査区配置略図
（S=1/1,000）

第 2 節　遺構

1. 1区（第36・37図）

1区は東西9m、南北50mのトレンチ状の調査区である。比較的大型の土坑や竪穴状遺構などの遺構は北壁にかかる形でわずかに検出したが、全体的な傾向としては小穴が密集する様相である。以下に主だった遺構および遺物が出土した遺構について概要を記す。

SD3（第 38 図）

調査区南側で検出した溝である。南東―北西方向に直線的に伸びる。東端はSD2に合流する。幅30cm、深さ25cmで断面はV字に近い。底部は凹凸が多く北西方向に向かって緩やかに傾斜する。

SD4（第 38 図）

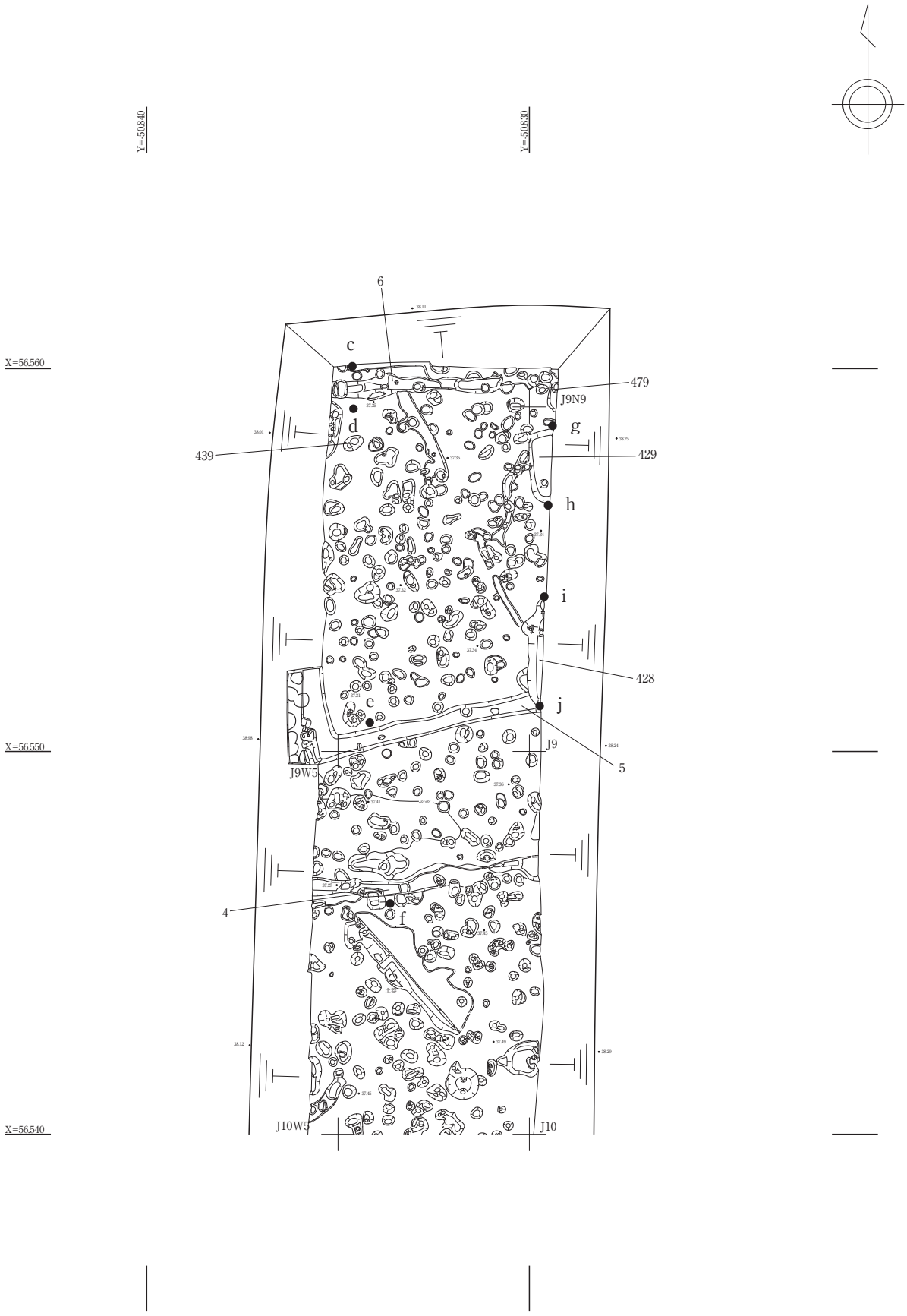
調査区北側で検出した溝である。東西方向からやや南西に振った方向に直線的に伸びる。掘り込みはごく浅いため上部は削平されてしまっているものと考えられる。また同様に幅も検出できた部分で30cm程であり、上端の幅は不明である。

SD5（第 38 図）

調査区北側で検出した溝である。検出当初は東西方向にのびる溝と考えたが、西壁際が不明瞭であったため調査区を拡張した結果、溝がL字状に屈曲する構造であることが確認できた。方位は東西方向からやや南西に振れる。幅45cmほどの狭い溝であり、深さも検出面から15cm程と浅い。東壁際でSI429に切られている。

第 36 図　1区 平面図1(南側)(S=1/150)

0　S=1/150　5m



第 37 図　1区 平面図2(北側)(S=1/150)

0　S=1/150　5m

SD6（第 38 図）

調査区北壁際で検出した溝である。方位はほぼ東西方向に直線的に伸びる。幅40cm、深さ30cm程を測り、断面形は不整形なU字状である。底部は凹凸が多く、また重複する小穴が多数あるため溝の形状が把握できない部分も多い。

SI428（第 38 図）

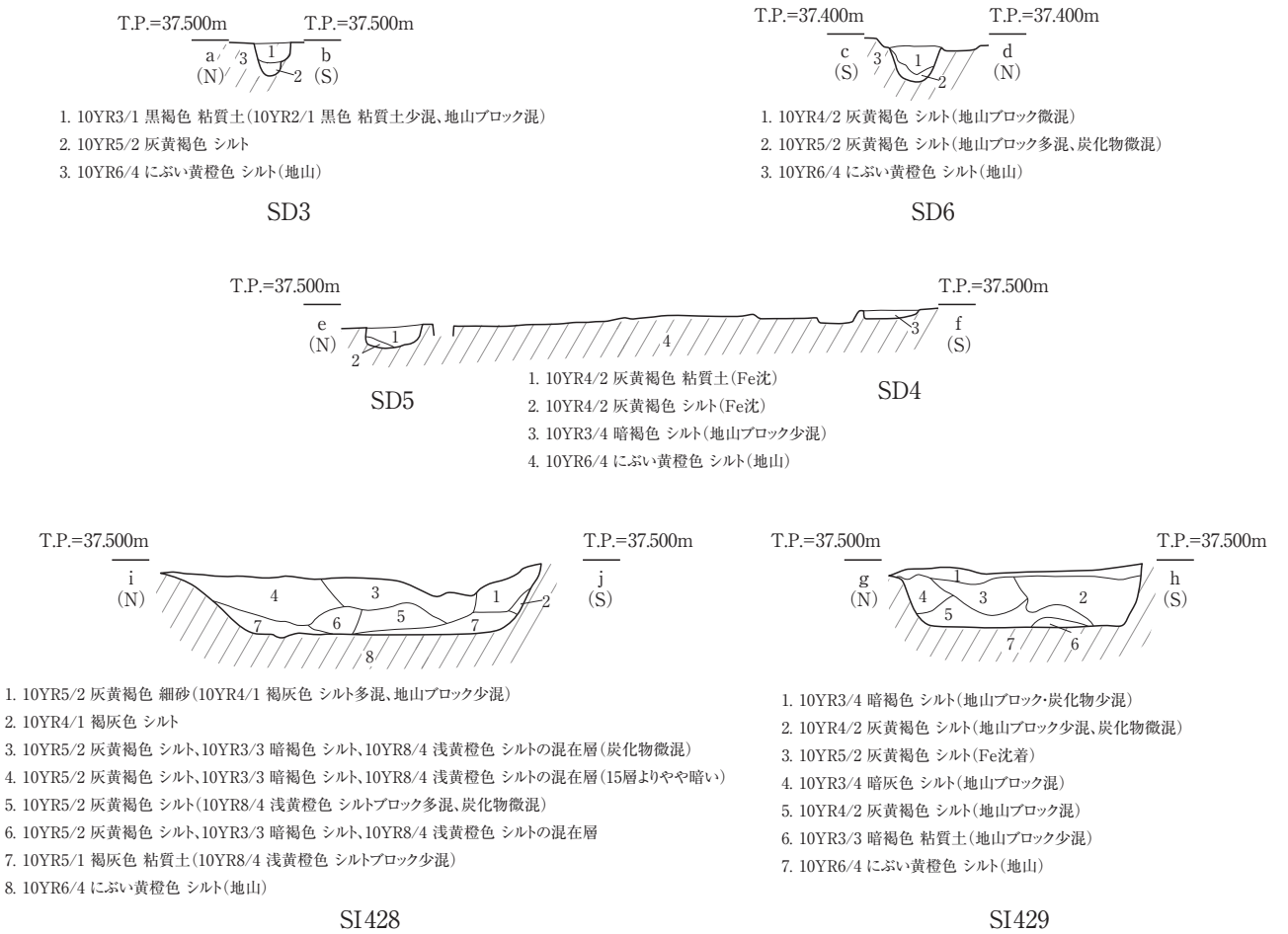
調査区北東隅で検出した遺構である。検出できた部分は遺構の西側のみであるため全体像は不明である。南北310cm程の平面方形プランで、深さは50cm程を測る。底部は平坦で、壁の立ち上がりゆるやかである。遺構覆土はブロック土を多く含むもので、人為的に埋没したものと考えられる。検出時の状況からSD5と切ると判断した。

SI429（第 38 図）

調査区北東隅で検出した遺構である。SI428検出できた部分は遺構の西側のみであるため全体像は不明である。南北200cm程の平面方形プランで、深さは45cm程を測る。底部は平坦で、壁の立ち上がりは急である。遺構覆土はブロック土を多く含むもので、人為的に埋没したものと考えられる。

P170（第 39 図）

調査区南側で検出した小穴である。直径35cm程の平面円形プランで、深さ最大で30cmを測る。出土遺物は土師器有台埦の底部（第41図77）が出土している。



第 38 図　SD3･4･5･6、SI428･429 平面･断面図（S=1/60）

P180（第 39 図）

調査区南側で検出した小穴である。長軸54cm程の平面円形プランで、いびつな掘方であるが深さ最大で35cmを測る。出土遺物は外面が赤彩された内黒土師器有台埦の底部（第41図75）が出土している。

P186（第 39 図）

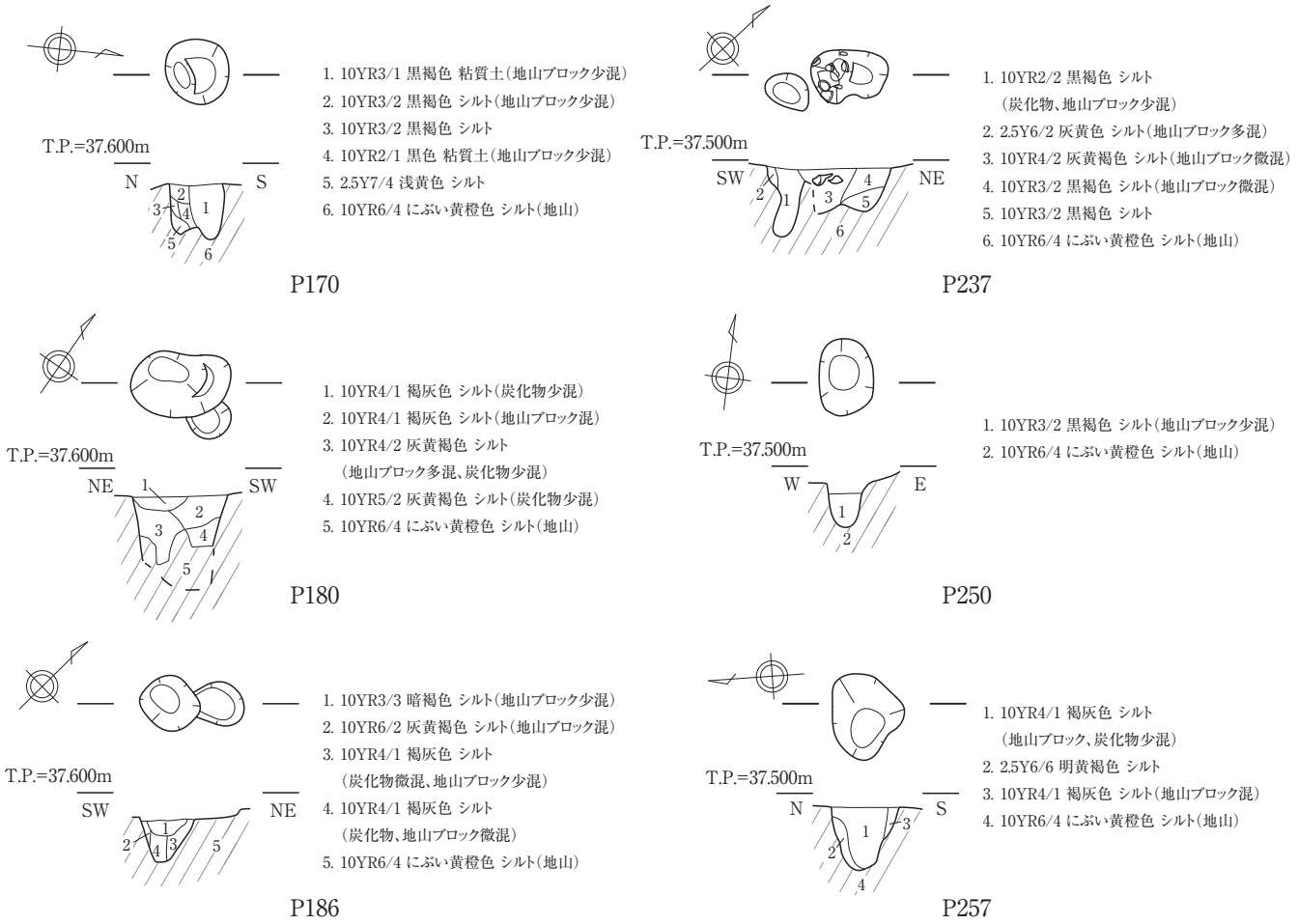
調査区南側で検出した小穴である。長軸30cm程の平面隅丸方形プランで、深さ22cmを測る。出土遺物は外面が赤彩された内黒土師器有台埦の底部（第41図76）が出土している。

P237（第 39 図）

調査区南側で検出した小穴である。長軸40cm程の不整形な平面楕円形プランで、深さ25cmを測る。遺構の検出面に近い覆土中から土師器が集中して出土している（第41図80～83）。このうち81は柱状高台の有台皿で時期が11世紀後半頃まで下るものであり、残る82～84は9世紀中頃のものと考えられる。出土状況から81が混ざりこんだと考えにくいことから11世紀後半頃の遺構と考えられる。

P250（第 39 図）

調査区南側で検出した小穴である。長軸42cm程の不整形な平面楕円形プランで、深さ25cmを測る。出土遺物は土師器有台埦の底部（第41図79）が出土している。



第 39 図　P170･180･186･237･250･257 平面･断面図（S=1/40）

P257（第 39 図）

調査区南側で検出した小穴である。長軸45cm程の不整形な平面楕円形プランで、深さ35cmを測る。出土遺物は土師器埦の底部（第41図84）が出土している。

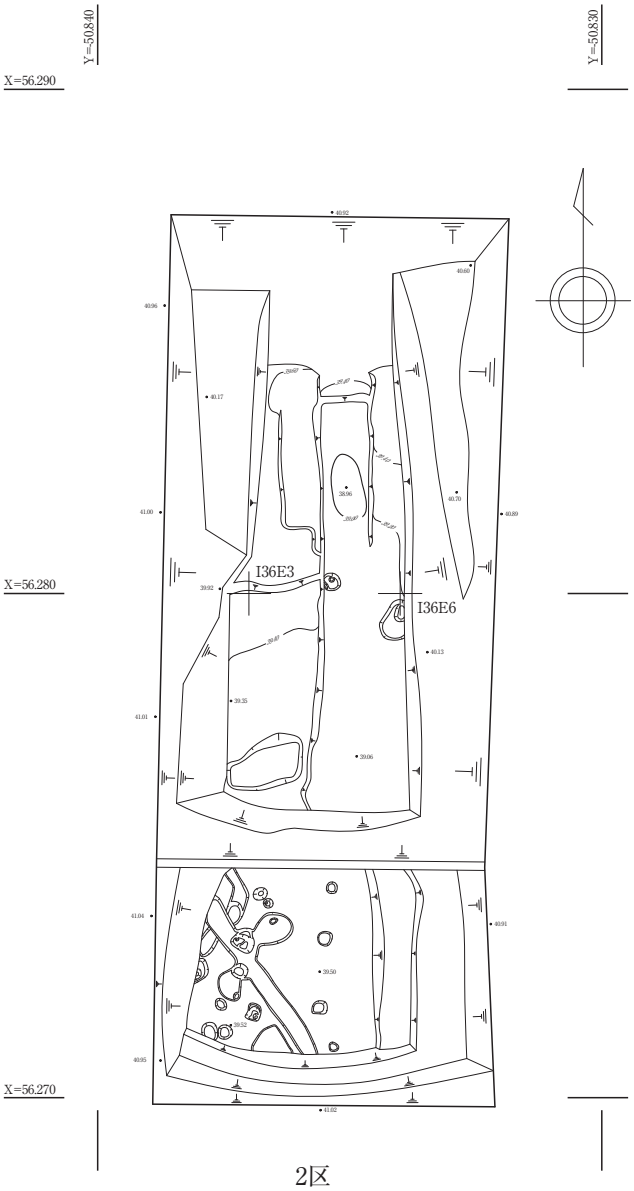
2. 2区・3区（第40図）

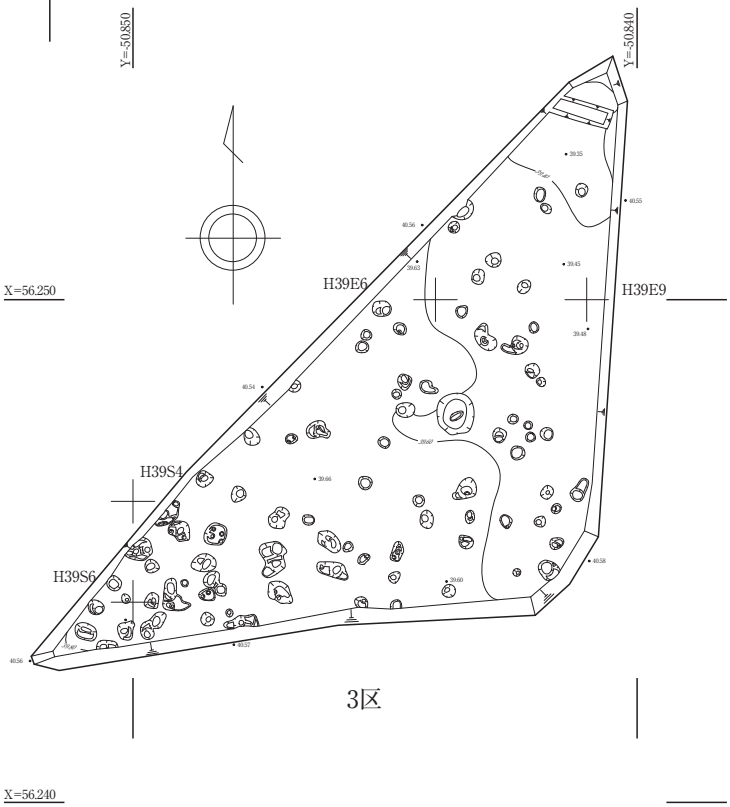
2区は北側の大半が遺構を検出できず、わずかに確認できた遺構も小穴や不整形な溝がみられる程度である。また3区も全面に遺構の分布を確認できたが、小穴のみであり遺物も包含層中から1点土師器埦が出土したのみである。いずれの調査区ともに特筆すべき遺構がないが、今後周辺で調査を重ねることによって集落変遷を検討すべきものと考えられる。

第 3 節　出土遺物（第41・42図）

他の調査区と比べると土師器埦皿類が集中して出土する様相が複数確認できた。先に述べたP237のほか、明確な遺構はとらえられなかったものの地山付近で土器が集中する個所（土器集中①・②）を検出しており、具体的な内容は不明であるが何らかの土器祭祀の場であった可能性も想起される。

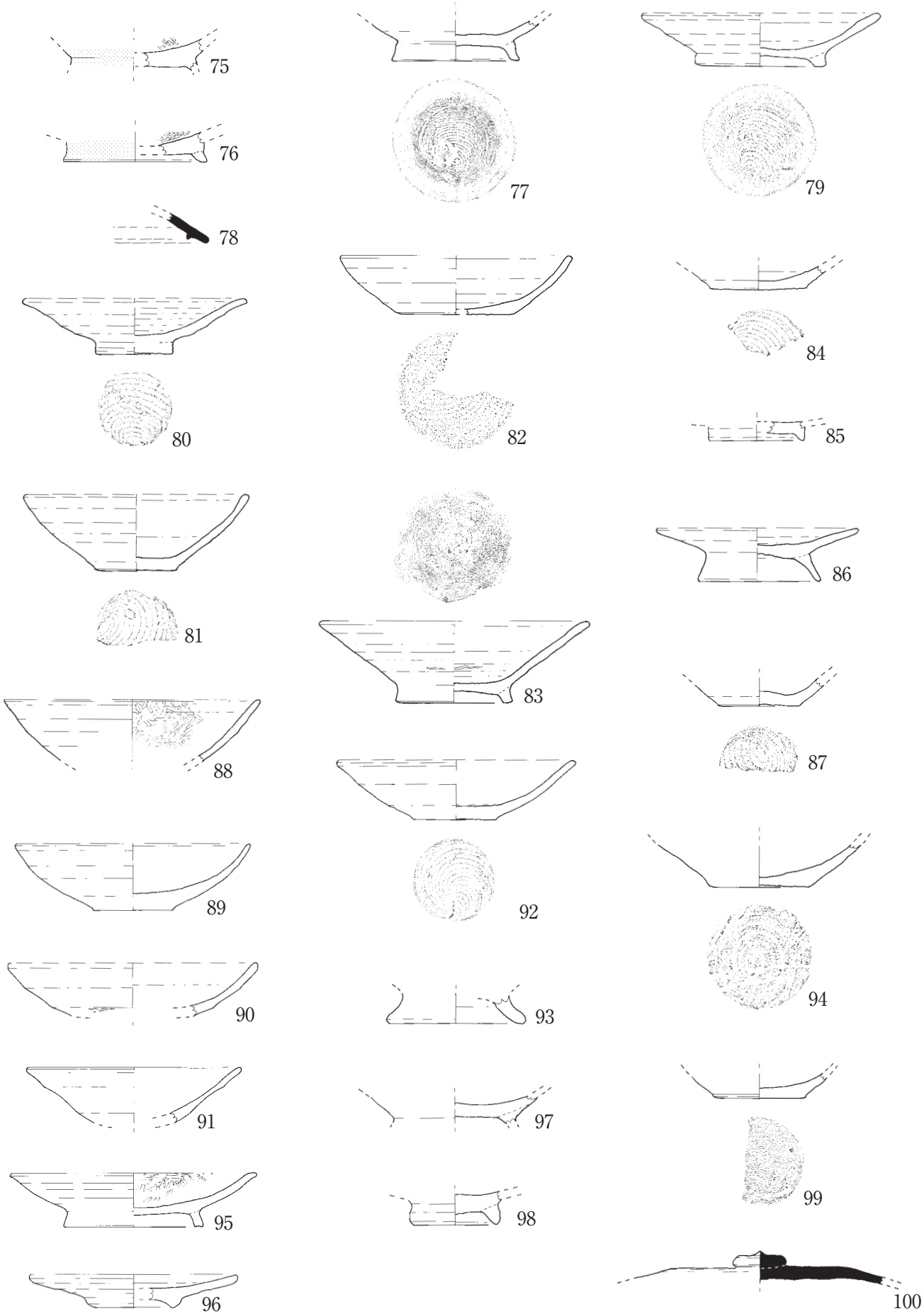
遺物の全体的な時期は9世紀中頃から後半の土師器が多いほか、若干遡る外面が赤彩された内黒土師器が出土している。中世の遺物はP237で出土した柱状高台を持つ皿を除くと近世以降の流路SD1・2から出土したものである。



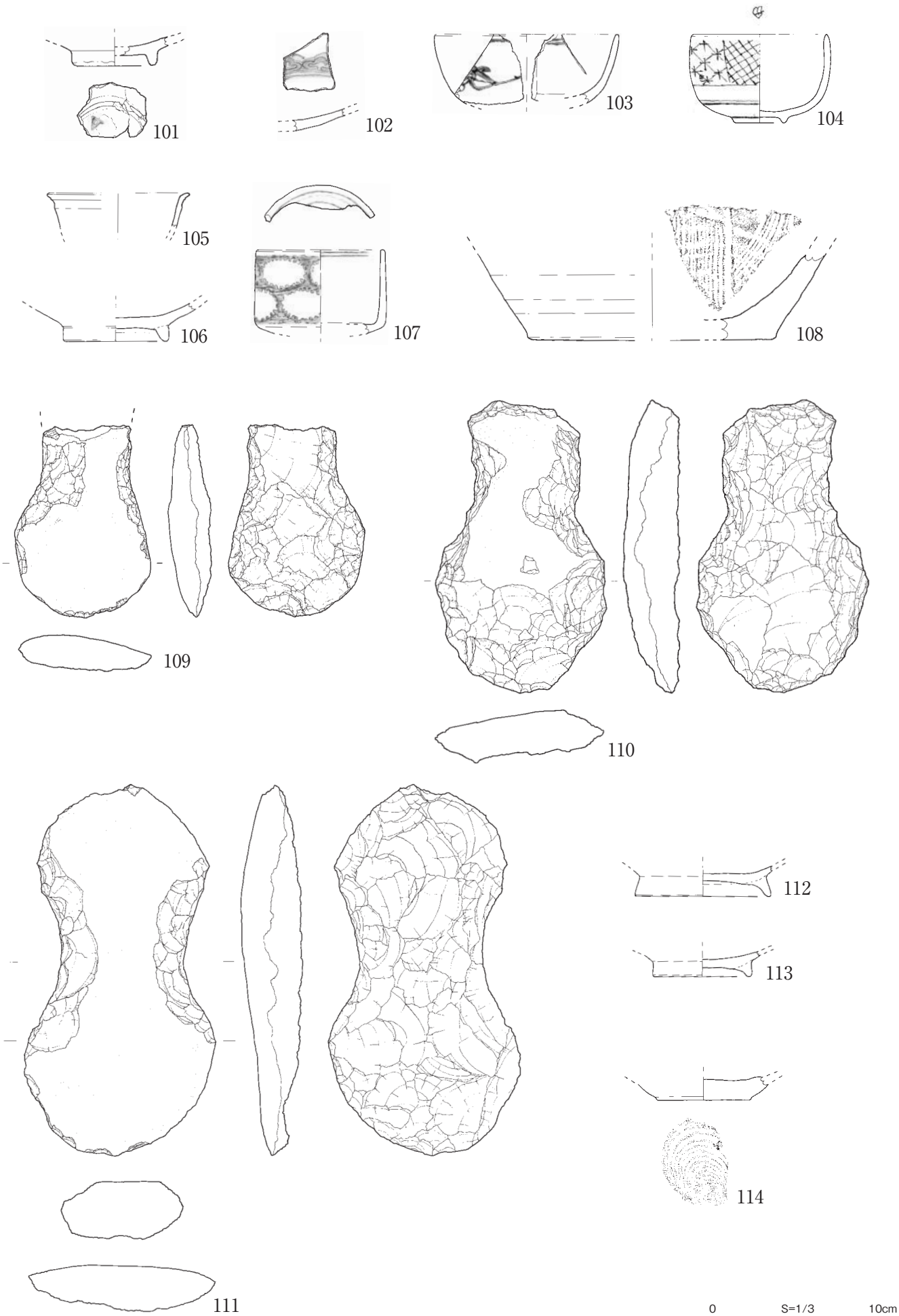


第 40 図　2区･3区平面図（S=1/150）

0　S=1/150　5m



第 41 図　平成30年度末松遺跡出土遺物実測図1



第 42 図　平成30年度末松遺跡出土遺物実測図2

第 9 表　平成30年度遺物観察表（土器）

番号	遺構 出土位置	器種	口径 （㎜）	残存高 （㎜）	底径 （㎜）	調整（外） 調整（内）	色調（外） 色調（内）	残存率	備考
75	1区 180	土師器 内黒有台埦	—	—	(70.0)	ナデ ミガキ	7.5YR6/4にぶい褐 10YR2/1黒色	底部1/4	外面赤彩
76	1区 186	土師器 内黒有台埦	—	—	80.0	ナデ ミガキ	7.5YR7/6橙 10YR3/1黒褐	底部1/6	外面赤彩
77	1区 170	土師器 有台埦	—	—	72.0	ナデ ナデ	7.5YR7/6橙 7.5YR7/4にぶい橙	底部完存	底部回転糸切り痕
78	1区 204	須恵器 坏蓋	不明	—	—	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y7/1灰白 10YR7/2にぶい黄橙	小片	
79	1区 250	土師器 有台皿	134.0	30.0	73.0	回転ナデ 回転ナデ	10YR7/4にぶい黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	2/3	底部回転糸切り痕
80	1区 237土器一括	土師器 有台皿	126.0	31.5	43.0	ナデ ナデ	7.5YR6/6橙 7.5YR7/6橙	底部完存	底部回転糸切り痕
81	1区 237土器一括	土師器 埦	127.0	43.0	46.0	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR6/6橙 7.5YR7/6橙	2/3	底部回転糸切り痕
82	1区 237土器一括	土師器 埦	130.0	33.0	66.0	回転ナデ 回転ナデ	10YR7/4にぶい黄橙 10YR8/4浅黄橙	2/3	底部回転糸切り痕
83	1区 237土器一括	土師器 有台埦	152.0	41.0	66.0	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR6/8橙 7.5YR6/6橙	完存	底部回転糸切り痕
84	1区 257	土師器 埦	—	—	54.0	ナデ ナデ	10YR6/4にぶい黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	底部1/3	底部回転糸切り痕
85	1区 254	土師器 有台埦	—	—	52.0	ナデ ナデ	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR7/6橙	底部1/4	削り出し高台
86	1区 439	土師器 有台皿	114.0	30.0	69.0	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR7/6橙 5YR7/8橙	2/3	
87	1区 439	土師器 埦	—	—	46.0	ナデ ナデ	7.5YR7/6橙 7.5YR7/6橙	底部1/2	底部回転糸切り痕
88	1区 479	土師器 内黒埦	144.0	—	—	ナデ ミガキ	7.5YR6/6橙 10YR3/1黒褐	1/3	
89	1区 土器集中	土師器 埦	132.0	37.5	44.0	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR8/6浅黄橙	底部完存	マメツ大 底部ヘラ切り
90	1区 土器集中	土師器 埦	140.0	—	—	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR7/6橙 7.5YR7/6橙	1/4	
91	1区 土器集中	土師器 埦	120.0	—	—	ナデ ナデ	7.5YR8/6浅黄橙 7.5YR7/6橙	1/6	
92	1区 土器集中	土師器 埦	134.0	33.5	46.0	回転ナデ 回転ナデ	7.5YR7/6橙 7.5YR7/6橙	2/3	底部回転糸切り痕
93	1区 土器集中	土師器 高台部	—	—	78.0	ナデ ナデ	7.5YR7/6橙 7.5YR7/6橙	1/2	
94	1区 土器集中	土師器 埦	—	—	56.0	ナデ ナデ	5YR7/6橙 5YR7/8橙	底部完存	底部ヘラ切り
95	1区 包含層	土師器 内黒有台皿	138.0	30.0	78.0	回転ナデ ミガキ	7.5YR7/6橙 7.5YR2/1黒	1/2	底部回転ヘラケズリ
96	1区 包含層	土師器 有台皿	117.0	18.5	52.0	回転ナデ 回転ナデ	10YR7/4にぶい黄橙 10YR7/4にぶい黄橙	1/2	削り出し高台
97	1区 包含層	土師器 有台埦	—	—	70.0	ナデ ナデ	7.5YR7/6橙 7.5YR8/6浅黄橙	底部完存	全体的に摩耗
98	1区 包含層	土師器 有台埦	—	—	46.0	ナデ ナデ	7.5YR5/3にぶい褐 7.5YR7/6橙	底部完存	外面に煤付着
99	1区 包含層	土師器 埦	—	—	52.0	ナデ ナデ	7.5YR7/8黄橙 7.5YR7/6橙	底部1/2	底部回転糸切り痕

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (㎜)	残存高 (㎜)	底径 (㎜)	調整(外) 調整(内)	色調(外) 色調(内)	残存率	備考
100	1区 包含層	須恵器 坏蓋	—	—	天井部 112.0	回転ナデ 回転ナデ	5Y5/1灰 5Y6/1灰	天井部1/4 つまみ部完形	つまみ径30㎜ 天井部回転ヘラ切りのちナデ
101	1区 SD1	近世磁器 染付碗	—	—	50.0	— —	10Y7/1灰白 2.5GY8/1灰白	底部1/4	砂目あり 呉須の発色うすい
102	1区 SD1	近世磁器 染付皿	—	—	—	— —	2.5GY8/1灰白 —	小片	貫入 呉須の発色うすい
103	1区 SD1	近世磁器 染付碗	92.0	—	—	— —	10Y7/1灰白 5GY8/1灰白	1/6	呉須の発色濃い
104	1区 SD1･2	近世磁器 染付碗	80.0	51.5	30.0	— —	N8/灰白 2.5GY8/1灰白	1/4	呉須の発色うすい 見込み寿文か?
105	1区 SD2	白磁 碗	84.0	—	—	— —	7.5YR8/1灰白 7.5Y7/1灰白	小片	
106	1区 SD2	土師器 有台碗	—	—	62.0	ナデ ナデ	7.5YR7/6橙 7.5YR7/6橙	底部完存	
107	1区 SD1	近世磁器 染付碗	76.0	—	—	— —	10YR8/1灰白 5Y7/1灰白	1/3	瀬戸焼か
108	1区 SD1	珠洲焼 擂鉢	—	—	14.0	回転ナデ 回転ナデ	N4/灰色 N7/灰白	1/12	
112	2区 重機掘削	土師器 有台埦	—	—	80.0	ナデ ナデ	5YR7/8橙 5YR7/8橙	1/3	全体的に摩耗
113	2区 重機掘削	土師器 有台埦	—	—	58.0	ナデ ナデ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR8/6浅黄橙	底部完存	
114	3区 包含層	土師器 埦	—	—	54.0	ナデ ナデ	10YR8/3浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	底部1/2	回転糸切り痕

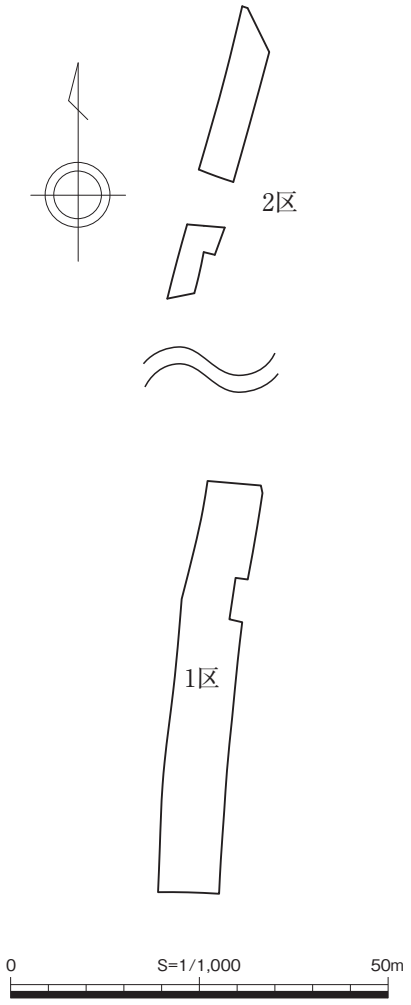
第 10 表　平成30年度遺物観察表(石製品)

番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (㎜)	最大幅 (㎜)	最大厚 (㎜)	重量 (g)	石　材	備考
109	1区 SD1	打製石斧	113.0	80.0	25.0	245	安山岩	上部欠損
110	1区 SD2	打製石斧	171.0	100.5	33.0	520	粗粒凝灰岩	完形
111	1区 SD1	打製石斧	217.0	112.5	36.0	940	凝灰岩	完形

第 6 章　令和2 (2020) 年度の調査成果

第 1 節　調査の概要

令和2年度の調査は平成30年度調査範囲の北側で、南北約100mの範囲である。調査区は大きく南北に分かれ、南側を1区、北側を2区とした上で、さらに2区は北側のN区と南側のS区に分かれての調査となった。2区は北端を除くと比較的遺構の密度が低く、また遺構の種類も小穴のみである。一方1区は全体的に遺構が密集しており、特に中央から南側は大型の土坑状の遺構が複数みられることが全体的な様相といえる。また1区から古代と中世の遺物が多く出土しており、大きく時期が異なる集落が存在したと考えられる。なお、1区の西側は令和4年度に広範囲を調査しており、上記と同様に古代と中世の遺構が存在することが明らかになっている。この調査の報告時に本章の成果を改めて検討すべきものと考えられるため、ここでは事実関係を列記する形で報告としたい。



第 43 図　令和2年度調査区配置略図
(S=1/1,000)

第 2 節　遺構

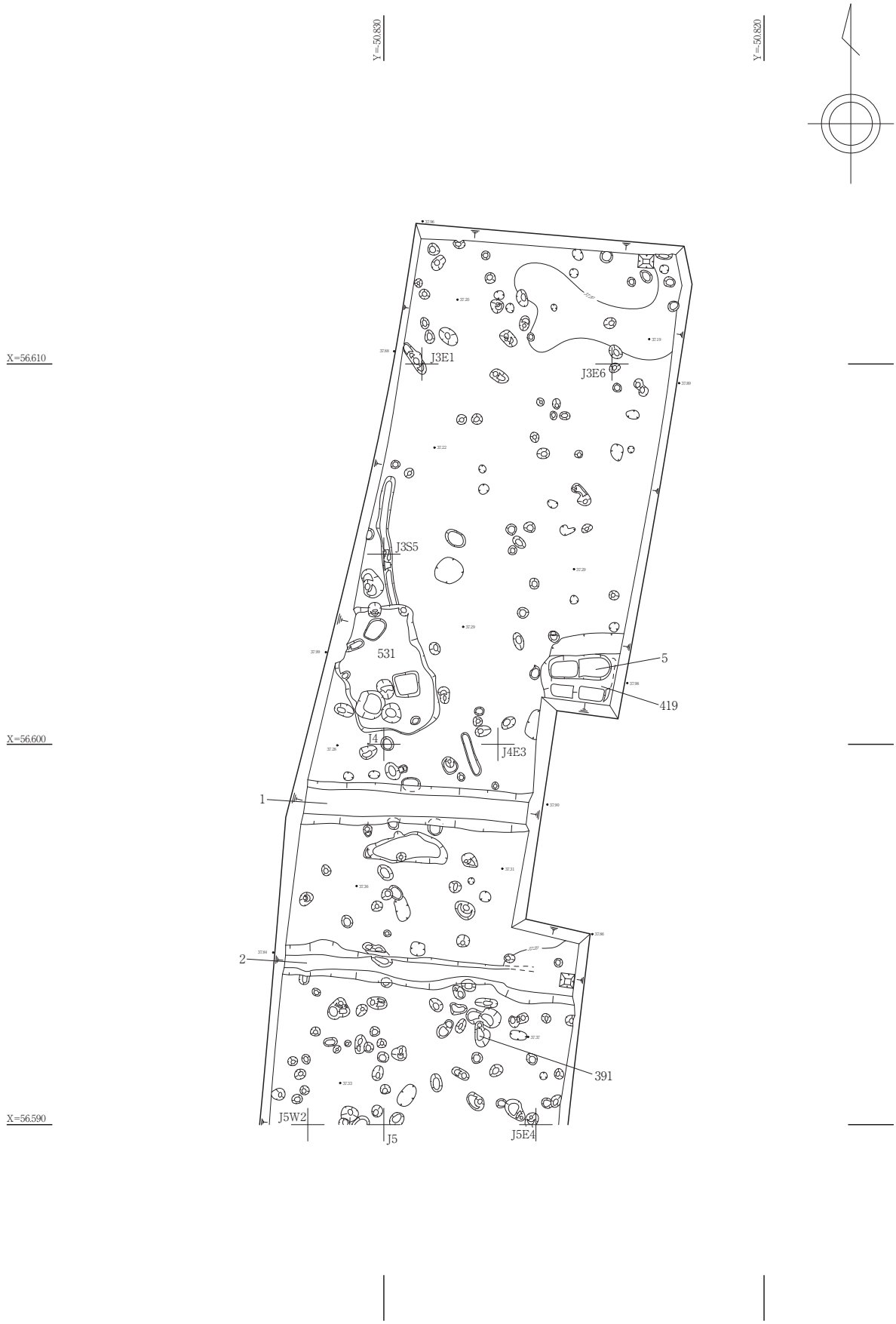
1. 1区 (第44・45図)

南北74m、幅約8mほどの南北に長い調査区である。調査は重機で地山検出面まで掘り下げ検出できた遺構を掘削した。遺構番号は当初の遺構検出時に明らかに大型の遺構として認識できたものを先行して附番し、以下遺構種別を問わず通し番号を割り振った。調査の過程で覆土の色調から中世 (上層) の遺構と古代 (下層) の遺構に識別できると判断し、各遺構の覆土を観察・記録する際の基準とした。

検出できた遺構は溝3条、竪穴建物1棟、竪穴状遺構または土坑27基及び小穴である。以下に主な遺構を列記する。

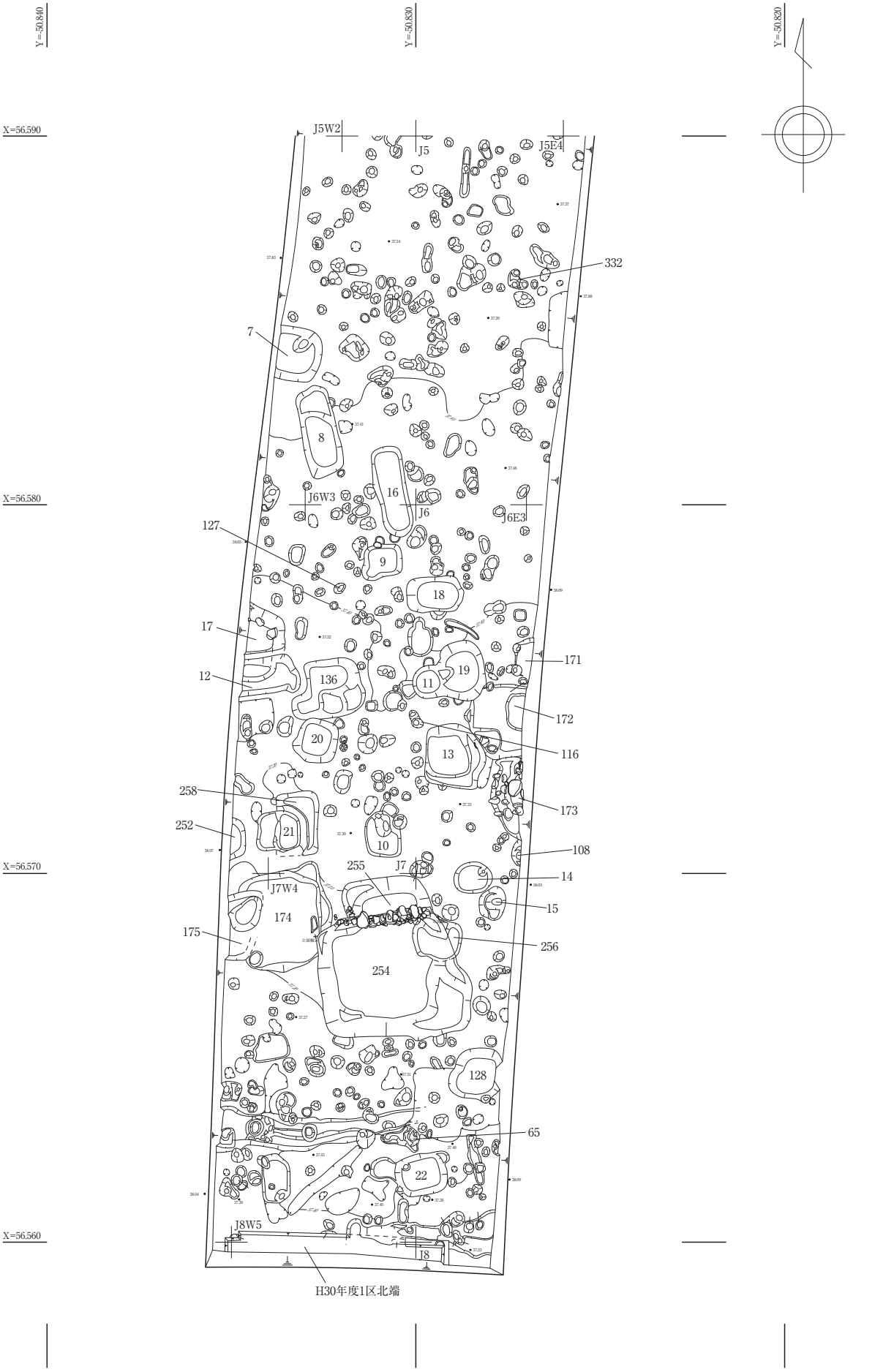
SI531 (第 46 図)

調査区北側の西壁際で検出した竪穴建物である。北西隅は調査区外であるものの、おおむね全体像を把握することができた。北西－南東方向に長軸をもつ平面隅丸長方形プランで、南北3.4m、東西2.3m程である。検出面からの掘り込みは20cm程度と浅く、上部は削平されたものと考えられる。周溝は確認できず、伴う柱穴や竈も不明である。床面は凹凸が大きく、貼り床の痕跡は認められない。覆土は古代 (下層) のもので、焼土や炭化物が多数含まれている。出土遺物は覆土中から複数出土しており、うち実測できた5点を掲載した。(第58図115～119) 煮炊具は115の土師器堝と119の長胴甕がある。115は口縁部を摘み挙げるように屈曲し、胴部上位は横方向のカキ目が残り、下部は削り調整を行っている。119は胴部上段のみが出土しているが、外面に横方向のカキ目が残る。供膳具は116の内外面赤彩の土師器坏蓋と117の土師器高坏脚部、118の須恵器坏がある。

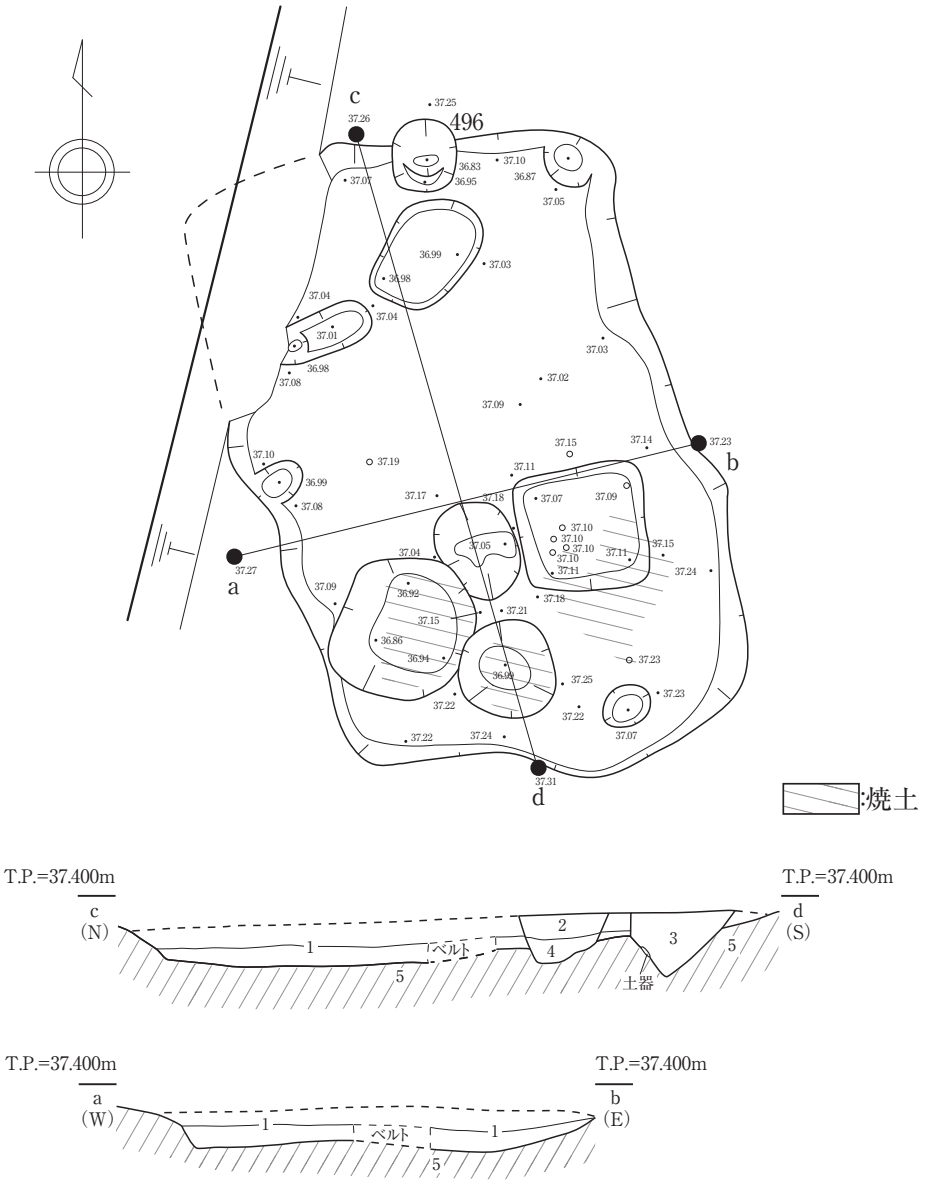


第 44 図　1区平面図1(北側)(S=1/150)

0　S=1/150　5m



第 45 図　1区平面図2(南側)(S=1/150)



1. 10YR2/2 黒褐色 細～微砂（地山ブロック少）
2. 10YR6/3 にぶい黄橙色 微砂（焼土・炭化物）
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 微砂（焼土・炭化物）
4. 10YR2/2 黒褐色 中～細砂
5. 10YR5/4 にぶい黄褐色 微砂（地山）

第 46 図　SI531 平面・断面図（S=1/40）

0　S=1/40　2m

SD1・2（第 48 図）

調査区北側で検出した、東西方向にのびる2条の並行する溝である。北側のSD1は地山で確認できたもので幅50cm程であるが、調査区東壁で最大幅1.8m、最上部から底部まで50cm程の溝である。断面形は緩やかに窪む断面U字形で、特に北側の立ち上がりは緩やかである。SD2はSD1と比べると幅が狭く、掘り込みも浅い溝である。両溝とも覆土は中世（上層）のものと判断した。遺物は出土していない。この並行する溝は道路状遺構と考えられる。道路幅はおおよそ4.4mを図る。

SK5・419（第 49 図）

調査区北側の東壁際で検出した、方形プランの土坑（SK419）及びこれを切る東西長の土坑（SK5）である。SI419は遺構の北西隅のみが検出できており、全容は不明である。いずれも覆土は中世（上層）のものと判断した。SI419は南北1.3m、東西2mの範囲を検出した、地山からの掘り込みは約40cmである。SI5は東西1.7m、南北60cm程の土坑で、掘り込みは約18cmと非常に浅い。出土遺物はSI419から5点掲載した（第58図121～125）。いずれも古代の土師器・須恵器であり、覆土から想定できる時期とずれがあることから、後世の混ざり込と考えられる。

SK7（第 49 図）

調査区中央の西壁際で検出した土坑である。西側は調査区外にのびるため東西幅は不明である。南北1.4m、東西1.2m以上の平面隅丸方形プランで、覆土から古代（下層）に属すると判断した。掘り込みは西壁で最大36cmほど掘りこまれている。遺物は出土していない。

SK8（第 49 図）

調査区中央で検出した南北方向にのびる平面隅丸方形プランの土坑である。南北2.4m、東西98cmを測り、検出面からの深さは約50cmである。断面は箱状で底部は平坦となる。覆土は上下2層に分かれ、上層は地山土が多く混じり人為的に堆積した様相を呈する。覆土から中世のものと判断した。出土遺物は3点掲載している（第58図129～131）。129と130は中世土師器である。129が底部から内湾しつつ口縁まで立ち上がるもので、130は平底風の底部から口縁まで若干外反しつつ立ち上がる。14世紀後半ごろのものか。131は古瀬戸瓶子の小片である。

SK9（第 50 図）

調査区南側で検出した土坑である。南西隅が若干突出する平面方形プランで、南北90cm、東西1.4m、深さ約30cmの浅い遺構である。出土遺物はない。覆土から中世（上層）と判断した。

SK16（第 50 図）

SI8と類似する土坑である。南北2.5m、東西85cm程の南北に長い平面プランで、断面は箱状に95cmほど掘りこまれる。覆土は中世のものが主体であり、南から北方向へブロック土や炭化物が混じる覆土で埋没したと考えられる。遺物は出土していない。

SK18（第 50 図）

調査区南側で検出した平面隅丸方形プランの土坑である。東西1.56m、南北92cm、深さ80cm程で、断面は箱状に掘りこまれている。覆土は中世のもので、炭化物を含む。出土遺物は青磁埦1点が出土している（第58図132）。小片であるが外面に箆彫りの連弁文が刻まれており、14世紀後半頃のものと考えられる。

SK11・19（第 50 図）

調査区南側で検出した土坑である。十字にベルトを残し掘削した結果、2 基の土坑が重複していると判断した。新しいものを SK11、切られる古いものを SK19 とした。SK11 は平面円形プランで、南北 90cm、東西 110cm、深さ 76cm 程を測る。SK19 は平面隅丸方形プランで南北の長軸 164cm、東西は約 100cm となる。断面形は箱状で地山から 60cm 程掘りこまれ、南から北方向へブロック土や炭化物を多く含む覆土が流れ込むように埋め戻されていることが確認できた。出土遺物は SK19 から青磁埦底部の小片が 1 点出土している（第 58 図 134）。

SK20（第 51 図）

調査区南側で検出した平面隅丸方形プランの土坑である。一辺110から160cm、深さ34cm程で、断面は緩やかなU字状となる。覆土は上層主体である。出土遺物はない。

SK13（第 51 図）

調査区南側で検出した土坑である。平面形は不整形な長方形プランで、南側と東側には中段にテラス状の段を持つ。南北170cm、東西120cm程で、掘り込みは最も深い点で検出面から約64cmである。中世土師器の皿1点が出土している。（第58図135）

SK136（第 51 図）

調査区南側で検出した土坑である。SK12、SK20と重複しており、いずれの遺構にも切られている。平面隅丸方形プランで東西方向に長軸を持つ。東西194cm、南北158cm、断面は箱状で最も深い点で約100cm掘りこまれる。覆土は上層主体で、ブロック土を多く含む。遺物は出土していないが、中世の遺構と考えられる。

SK21（第 51 図）

調査区南側で検出した土坑である。SI258に切られている。平面隅丸方形プランで東西115cm、南北106cm、断面は箱状で最も深い点で約40cm掘りこまれる。覆土は上層主体である。遺物は出土していないが、中世の遺構と考えられる。

SK12・17（第 52 図）

調査区南側の西壁にかかる形で検出した土坑である。SI12がSI17を切る。いずれの土坑も調査区外まで続くため全体像は不明である。SI12は東西方向に長い土坑で、南北98cm、東西は150cm以上となる。掘り込みはSI17より浅く、最も高い位置から底部まで約50cmである。SI17はSI12に切られるものの、掘り込みが深いため底部で平面形を確認することができた。南北220cm、東西は100cm以上の平面方形プランと考えられる。底部は平坦で肩口にかけてゆるやかにたちあがる。覆土は上層主体である。遺物は出土していないが中世の遺構と考えられる。

SK171・172・173（第 53 図）

調査区南側の東壁際にかかる形で検出した土坑である。断面の検討の結果3基の土坑と1基の小穴（P108）が重複しており、さらにSI172がSK19とSK13にそれぞれ切られている。SI171は南北134cm以上、東西45cm以上の平面方形プランである。掘り込みは約20cm程度と浅い。SI172はSI171とSI173を切る。南北200cm、東西150cm以上の土坑で、掘り込みは約34cmである。SI173は南北230cm以上、東西90cm以上で、P180に切られる。掘り込みは約45cmで、底部で礫が多数出土した。またこの礫につぶされる形で石製の行火（第59図139）及び珠洲焼片口鉢（第59図137）が出土している。底部のみの出土であり口縁形態が不明であるため時期の絞り込みに苦しむが、14世紀後半から15世紀中頃のものであろうか。

SI174・175、SK252（第 54 図）

調査区南西隅で検出した土坑である。地山で検出した時点で遺構上部は削平してしまっている。SI174とSI175は重複しており、SI175が切る。SI174は平面隅丸方形プランで、一辺270cm、掘り込みは約5cm程度と非常に浅く、底面は西に向かって傾斜している。SI175は調査区西壁で南北210cm程の土坑である。大半が調査区西壁外に延びるため規模は不明である。掘り込みは最も高い位置から約40cmを測る。SK252は断面図で最大幅222cmを測る。上部から20cm程でテラス状の段を持ち、さらに幅118cm程の土坑状遺構となる。掘り込みは最上部から58cm程となる。いずれも覆土は上層主体で、SI175から14世紀中頃の珠洲焼の壺口縁部が出土している（第58図136）。

SI254・255、SK256（第 55 図）

調査区南側で検出した大型の竪穴状遺構である。SI254がSI255およびSK256を切る。SI254は東西380cm、南北332cm、検出面からの掘り込みは約60cmを測る。南東隅は一段高い平坦面を持つ。

SI254で特に着目されるものは北壁際に築かれた石積である。拳大から人頭台程の大ぶりな河原石を2段から4段ほど積み上げており、SI255との重複部分を補強するためのものと考えられる。出土遺物は中世陶磁器類が数点出土しており、（第59図143・144、第60図145）特に145の折縁深皿と考えられる小片はP116から出土したものと接合した。

SI255はSI254に切られるため規模は不明であるが、東西230cm程の平面方形プランである。SK256は長軸135cm程の平面楕円形の土坑である。覆土からいずれも中世でSI254との時期差は大きくないものと考えられる。SI255の覆土はブロック土を非常に多く含むもので、人為的に埋め戻された後にSI254に建て替えられたものと想定できる。

SK22（第 56 図）

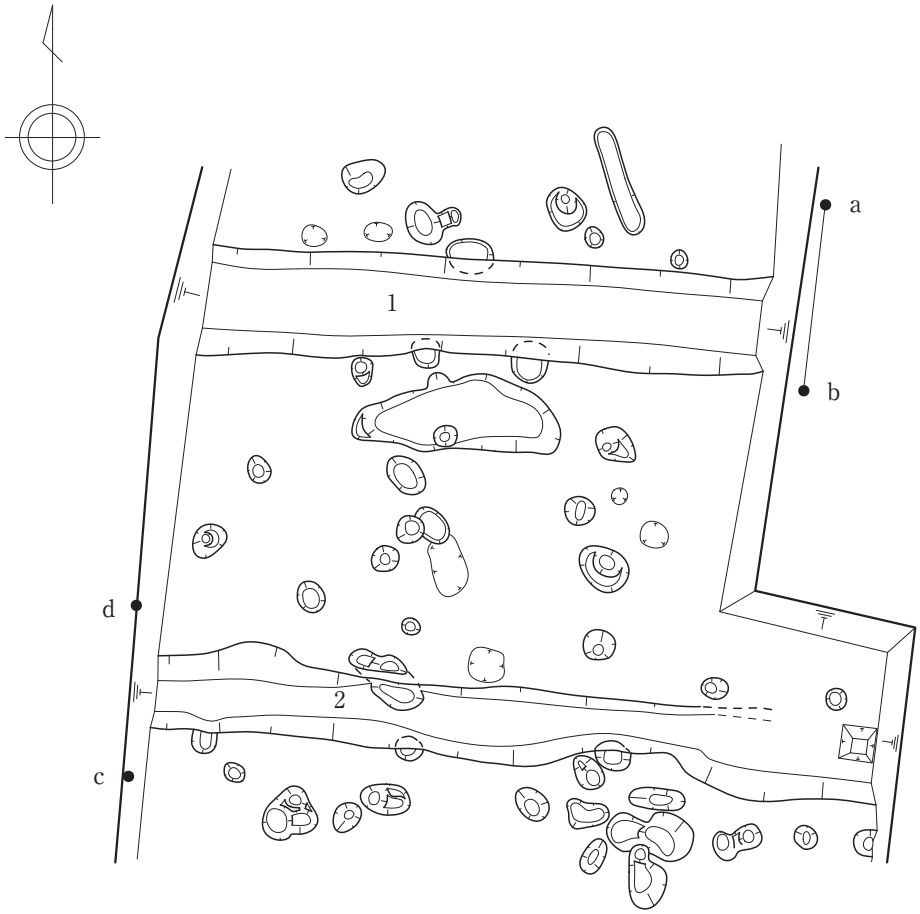
調査区南東隅で検出し隅丸方形プランの土坑である。北西隅が突出するいびつな形状であるが、長軸150cm、深さ約40cmを測る。覆土は上下層に分けられ、最終的に埋没した層から大ぶりな礫とともに珠洲焼擂鉢1点が出土している（第60図147）。口縁部が内傾気味に肥厚し、口縁部の櫛目波状文帯は見られない。14世紀後半から15世紀初頭のものか。

SK128（第 56 図）

調査区南側の東壁際で検出した土坑である。東端は調査区外であるがおおむね全体像は把握できた。平面形は楕円に近い隅丸方形プランで、長軸140cm、深さ86cmを測る。覆土は中世のもので炭化物を多く含む。

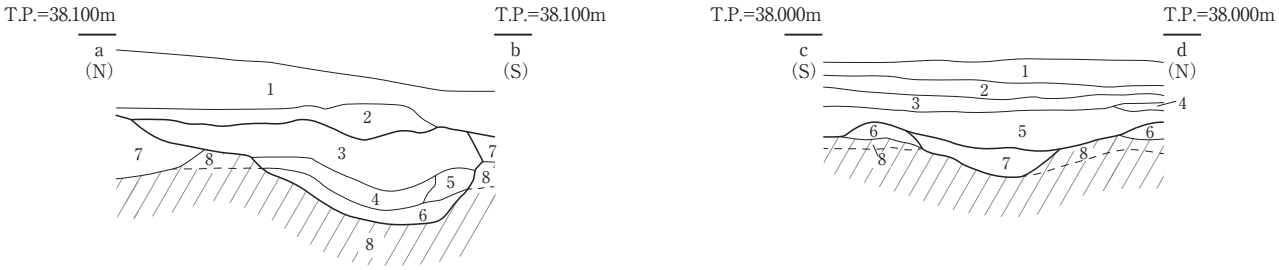
SK15（第 56 図）

調査区南側で検出した小土坑である。長軸90cm程の平面楕円形で、掘り込みは約34cm、覆土は下層主体のものである。



第 47 図　SD1･2 平面図（S=1/80）

0　S=1/80　4m



1. 7.5Y5/1 灰色 シルト質粘土（現耕土）
2. 7.5Y5/1 灰色と2.5Y5/6 黄褐色の混在層 粘質土（旧耕土と旧床土の混在層）
3. 2.5Y3/1 黒褐色 粘質土と地山の混在層（炭化物混）
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色 シルト質粘土（炭化物混）
5. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト質粘土（Fe沈着）
6. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト質粘土（炭化物多混）
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粘質土（Mn沈着）
8. 2.5Y6/4 にぶい黄色 中～細砂（地山）

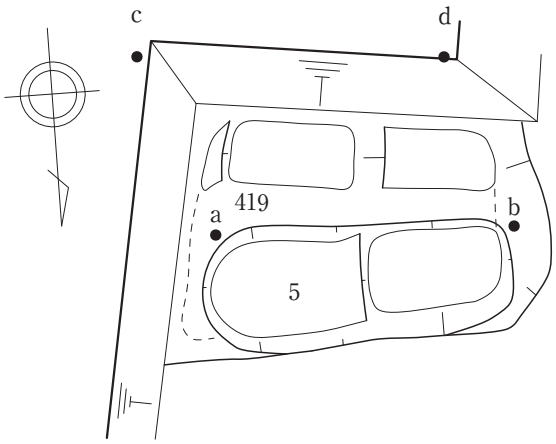
SD1

1. 7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂質土（現耕土）
2. 7.5Y5/1 灰色 砂質土（旧耕土）
3. 2.5Y5/6 黄褐色 粘質土（旧床土）
4. 10YR4/2 灰黄褐色 砂質土（Mn、Fe沈着）
5. 10YR3/2 黒褐色 シルト質粘土（炭化物混）
6. 10YR3/3 暗褐色 シルト
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト質粘土（SD2）
8. 2.5Y5/3 黄褐色 細砂（地山）

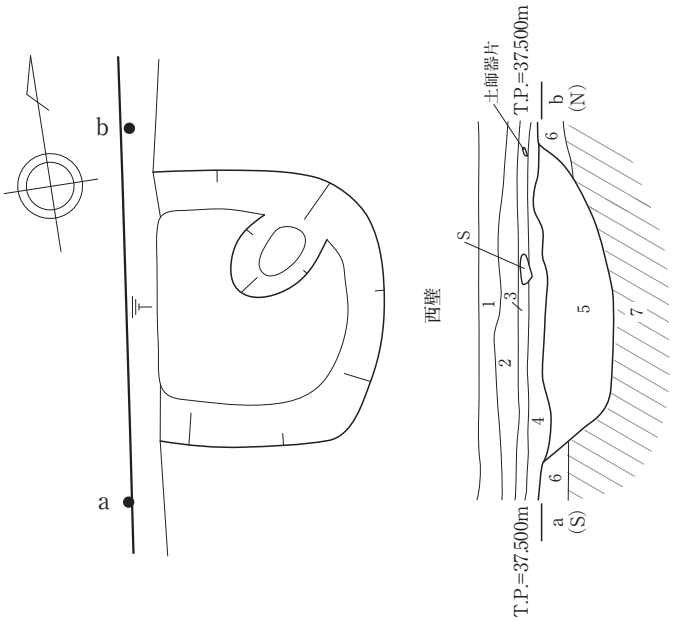
SD2

第 48 図　SD1･2 断面図（S=1/40）

0　S=1/40　2m

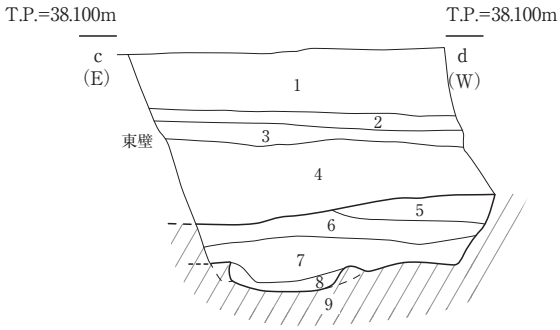


SK5·419 平面図



1. 7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂質土(旧耕土)
2. 2.5Y5/6 黄褐色 粘質土(旧床土)
3. 7.5Y5/1 灰色 砂質土
4. 10YR3/2 黒褐色 砂質土(下半にFe沈着)
5. 10YR2/2 黒褐色 粘土(炭化物混)(SI7)
6. 10YR2/2 黒褐色 シルト
7. 10YR5/2 にぶい黄褐色 細砂(地山)

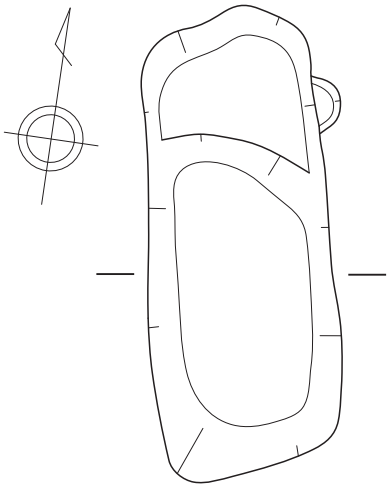
SK7 平面･断面図

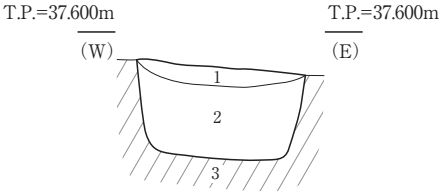


1. 2.5YR4/1 黄灰色 粘質土(現耕土)
2. 10YR4/4 褐色 粘質土(Fe多沈)(旧床土)
3. 7.5YR3/2 黒褐色 粘質土(Fe多量沈着)
4. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト質粘土
5. 2.5Y3/1 黒褐色 細砂(φ1cm前後の地山ブロック少混)
6. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト(φ1cm～2cmの地山ブロック少混)
7. 6層と7層の混在層
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 細砂(炭化物少混)
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色 微砂(地山)

} SI419

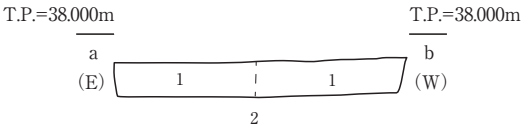
SK419 断面図





1. 10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂～微砂(Fe微沈着)(10YR2/2 黒褐色 粘土が少量混)
2. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘質土
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色 細砂(地山)

SK8 平面･断面図



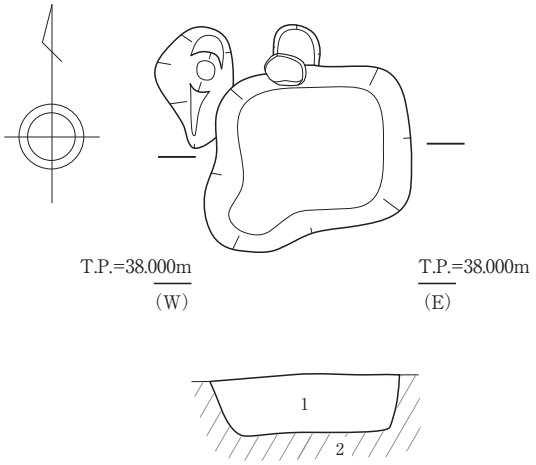
1. 2.5Y3/2 黒褐色 砂質土(炭化物多混)
(2.5Y5/1 黄灰色 粘土ブロックと地山ブロック混)
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 細砂微砂(SI419)

} SI5

SK5 断面図

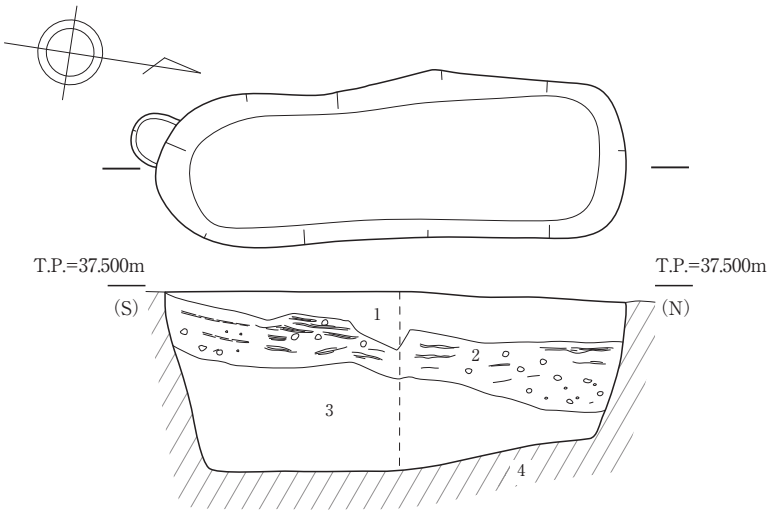
第 49 図　SK5·419·7·8 平面･断面図 (S=1/40)

0　S=1/40　2m



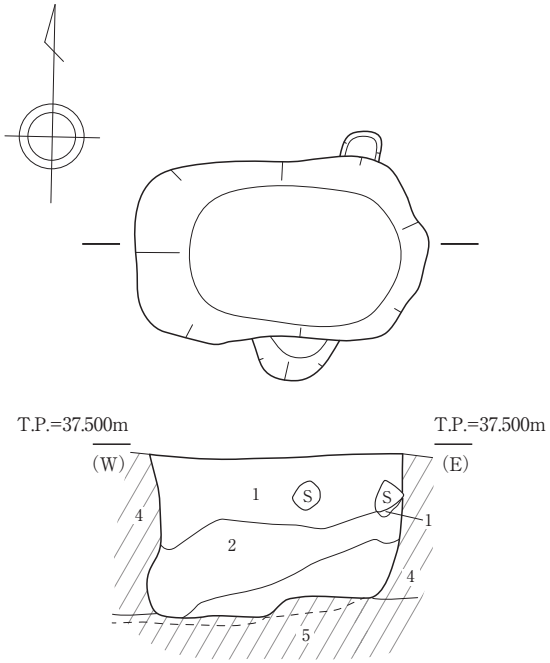
1. 10YR3/2 黒褐色 砂質土(炭化物混)
(10YR5/4 にぶい黄褐色 の粘土ブロック(φ2cm程)混)
2. 10YR4/4 褐色 粗砂

SK9 平面･断面図



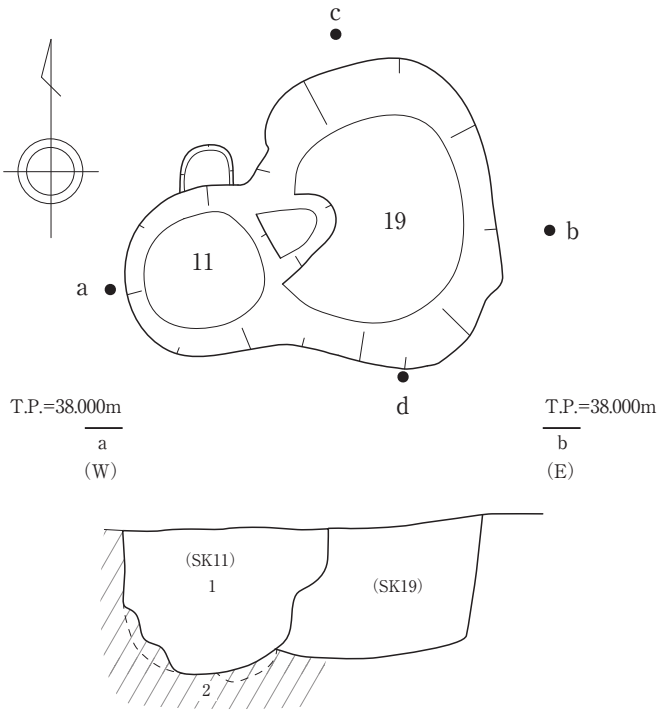
1. 10YR3/ 2黒褐色 砂質土
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂と1層の互層(炭化物混)
(φ1～2cmの明黄褐色 粘質土ブロック少混)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂(φ1cmの10YR3/2黒褐色 砂質土ブロック土少混)
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂(地山)

SK16 平面･断面図

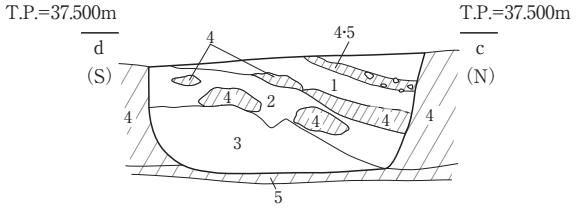


1. 10YR3/1 黒褐色 シルト
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂に1層が混じる(炭化物混)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂(炭化物混)
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂(地山)
5. 5Y4/2 灰オリーブ色 砂礫(粗砂主体)(地山)

SK18 平面･断面図



1. 10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質土(φ1～2cmの黒色 ブロック少混)(こぶし大礫少混)
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗砂(最下層は灰色 砂礫層)(地山)

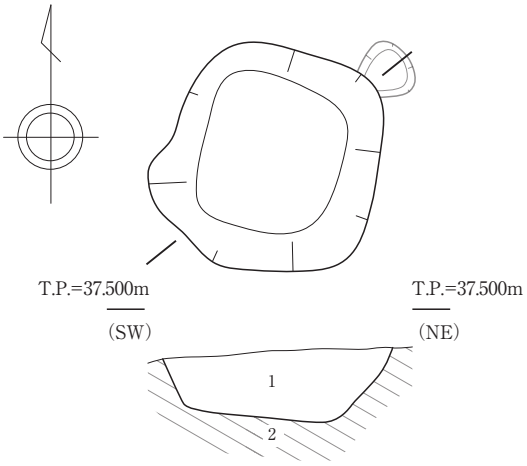


1. 10YR3/1 黒褐色 シルトと地山の混在層(炭化物混)
2. 10YR3/1 黒褐色 シルトと地山の混在層(炭化物多混)
3. 10YR3/1 黒褐色 シルト(炭化物多混)
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細～微砂(地山)
5. 5Y4/2 灰オリーブ色 礫層(こぶし大礫)(地山)

SK11･19 平面･断面図

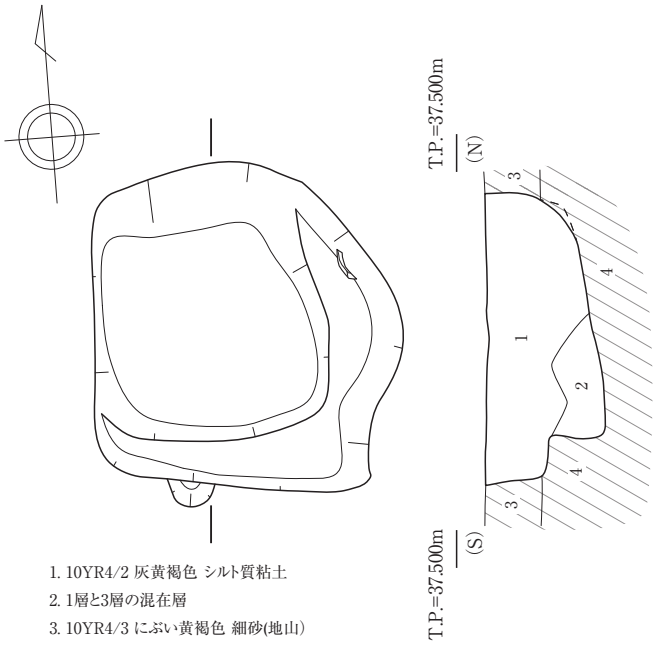
第 50 図　SK9･16･18･11･19 平面･断面図 (S=1/40)

0　S=1/40　2m



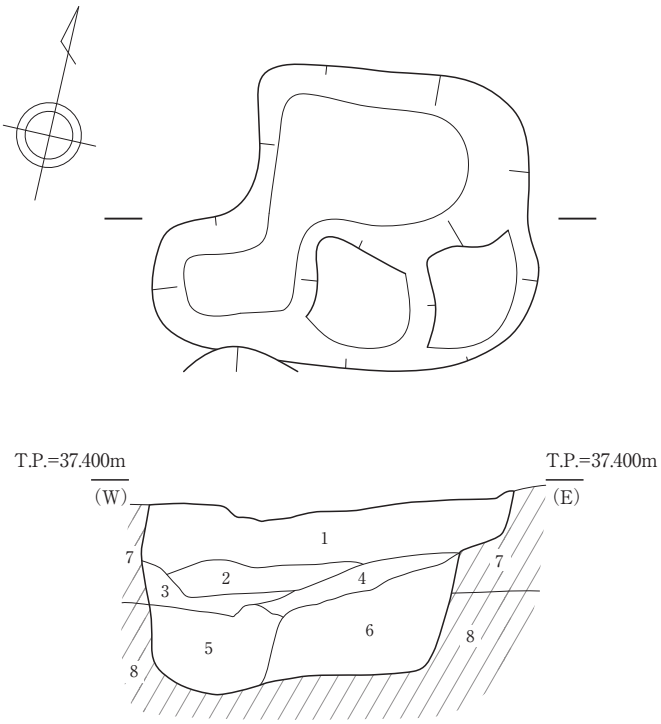
1. 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂（地山）

SK20 平面･断面図



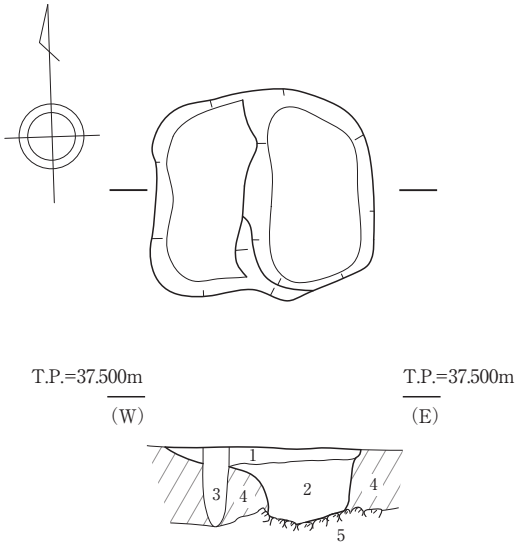
1. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質粘土
2. 1層と3層の混在層
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂(地山)
4. 5Y4/2 灰オリーブ色 粗砂（φ5㎝礫多混）（地山）

SK13 平面･断面図



1. 10YR4/1 褐灰色 シルトと地山ブロックの混在層（φ2～3㎝の礫少混）
2. 10YR4/1 褐灰色 シルト質粘土
3. 10YR4/1 褐灰色 粘土に10YR6/1 褐灰色 粘土ブロック多混じる（Fe沈着）
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト質粘土と10YR4/1 褐灰色 シルトの混在層
5. 10YR4/1 褐灰色 シルトと地山ブロックの混在層
6. 10YR4/1 褐灰色 シルト（炭化物混）
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト（地山）
8. 礫層（地山）

SK136 平面･断面図

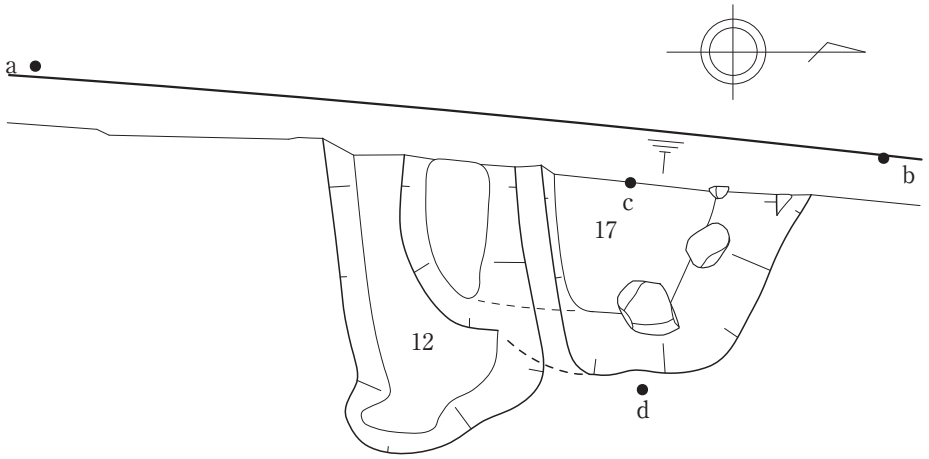


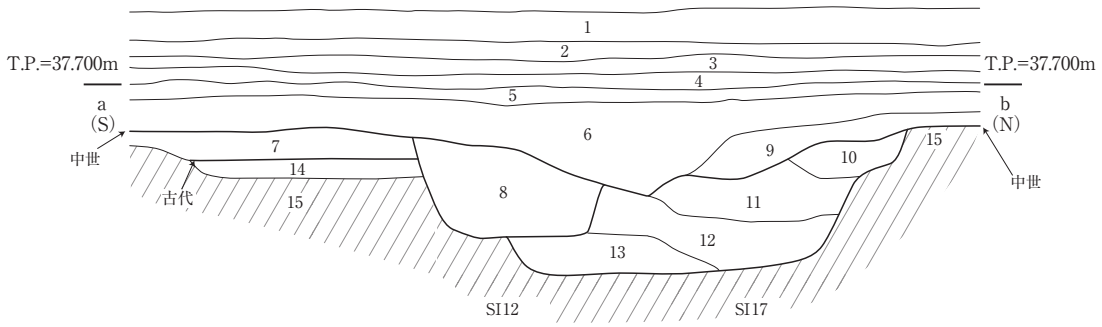
1. 2.5Y4/2暗灰黄色 粘質土
2. 2.5Y5/3黄褐色 シルト質粘質土
3. 2.5Y4/1黄灰色 砂礫混粘質土（上層からの切合）
4. 10YR4/3にぶい黄褐色 粗砂（地山）
5. こぶし大礫層（地山）

SK21 平面･断面図

第 51 図　SK20･21･136･13 平面･断面図（S=1/40）

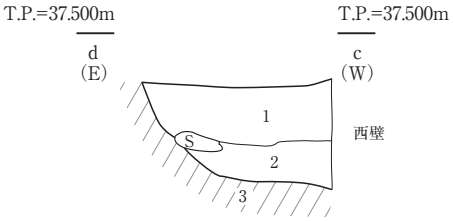
0　S=1/40　2m





1. 7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂質土(現耕土)
2. 2.5Y5/6 黄褐色 粘質土(現床土)
3. 7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂質土(旧耕土)
4. 3層と5層の混在層
5. 2.5Y5/1 灰色 砂質土(旧耕土)
6. 10YR3/2 黒褐色 砂質土
7. 10YR3/3 暗褐色 粗砂～中砂(Fe沈着)(炭化物混)
8. 10YR3/2 黒褐色 砂質土(炭化物混)(SI12)
9. 10YR3/3 暗褐色 シルト質粘土
10. 10YR3/3 暗褐色 粘質土(Fe沈、炭化物混)
11. 10YR3/1 黒褐色 粘質土と地山の混在層
12. 10YR3/1 黒褐色 砂礫混粘質土
13. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト
14. 10YR2/3 黒褐色 シルト
15. 10YR4/4 褐色 粗砂～10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂(地山)

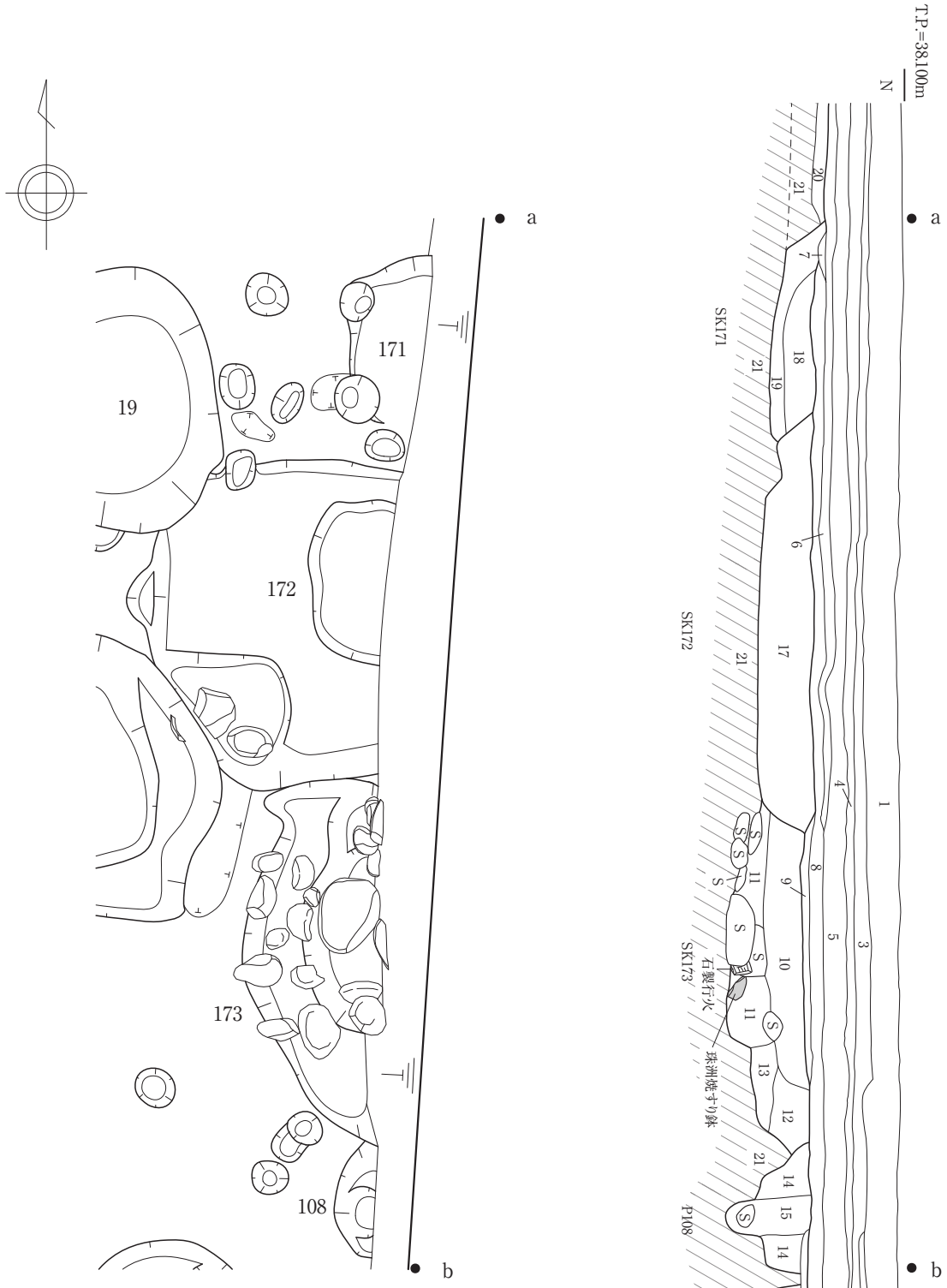
SI17



1. 10YR3/1 黒褐色 粘質土と地山の混在層
2. 10YR3/1 黒褐色 砂礫混粘質土
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂(地山)

第 52 図　SK12･17 平面･断面図 (S=1/40)

0　S=1/40　2m

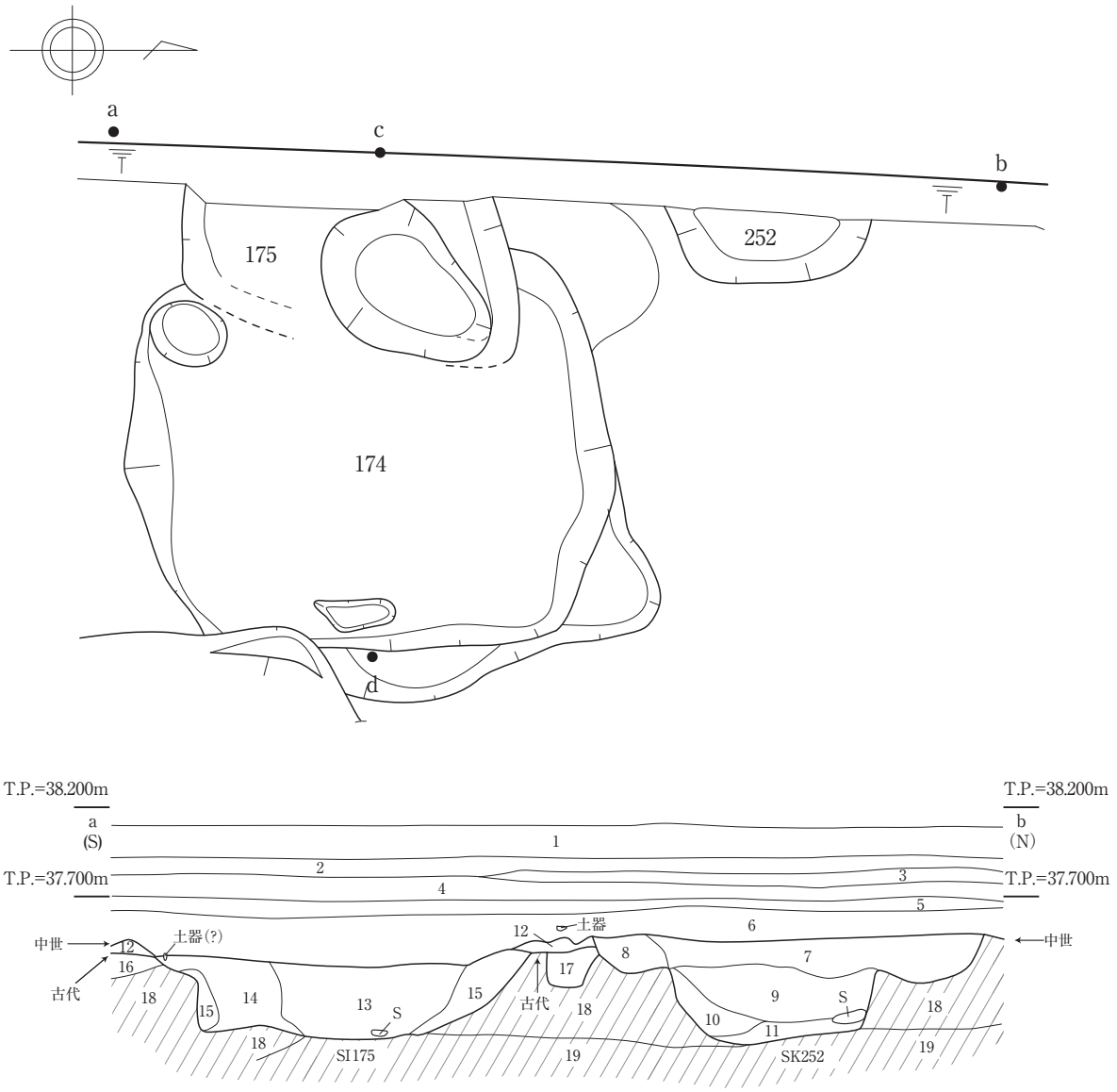


1. 2.5YR4/1 黄灰色 粘質土(現耕土)
2. 2.5Y6/8 明黄褐色 粘質土(現床土)
3. 2.5Y 5/1 黄灰色 粘質土(旧耕土)(Fe多沈着)
4. 2.5Y5/1 黄褐色 細砂(旧床土)
5. 2.5Y6/3 にぶい黄色 粘質土(旧床土)
6. 2.5Y 6/8 明黄褐色 微砂(旧床土)
7.(中世素掘溝)2.5Y6/3 にぶい黄色 細砂
8. 10YR3/3 黄褐色 シルト(Fe沈着)
9. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 微砂(Fe･Mn沈着)
10. 10YR3/2 暗褐色 砂礫混シルト(φ1cmの地山ブロック少混)
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト(φ2～3cmの地山ブロック混)
12. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 微砂(Fe沈着)
13. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 φ1cm前後の地山ブロック多混
14. 10YR4/1 褐灰色 シルトに地山ブロック混
15. 10YR4/1 褐灰色 砂礫混じりシルト(シルト主体)
16. 10YR4/1 褐灰色 シルト
17. 10YR3/3 明褐色 砂質土(SI172)
18. 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト
19. 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト(φ1cmの地山ブロック混)
20. 2.5Y2/1 黒色 シルト(下半にFe沈着)
21. 10YR5/4 にぶい黄褐色 微砂(地山)

SI173: 10～13
P108: 14～15
SI171: 18～19

第 53 図　SK171･172･173、P108 平面･断面図 (S=1/40)

0　S=1/40　2m



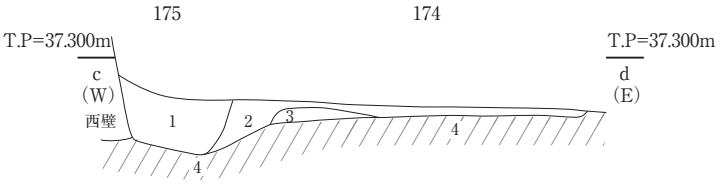
1. 7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂質土(現耕土)
2. 2.5Y5/6 黄褐色 粘質土(現床土)
3. 7.5Y5/2 灰オリーブ色 砂質土(旧耕土)
4. 3層と5層の混在層
5. 2.5Y5/1 灰色 砂質土(旧耕土)
6. 10YR3/2 黒褐色 砂質土
7. 10YR2/2 黒褐色 シルト質粘土と地山ブロックの混在層
8. 10YR3/2 黒褐色 細砂(Fe沈着)
9. 2.5Y5/2 暗灰黄色 砂質土(Fe多沈着)
10. 10YR3/2 黒褐色 砂質土(φ5cmの礫多混)
11. 10YR3/2 黒褐色 粘質土(φ5cmの礫多混)
12. 10YR3/2 黒褐色 細砂(18層地山ブロック混)

SK252

13. 10YR3/2 黒褐色 シルト(Fe沈着)
14. 10YR3/2 黒褐色 細砂(Mn、Fe沈着)
15. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土(Fe、Mn沈着)

SI175

16. 10YR4/2 灰黄褐色 粘質土と10YR4/4 褐色 シルトの混在層
17. 10YR2/2 黒褐色 シルト(φ1～2cmの18層地山ブロック混)
18. 10YR4/4 褐色 シルト(地山)
19. 礫層(地山)



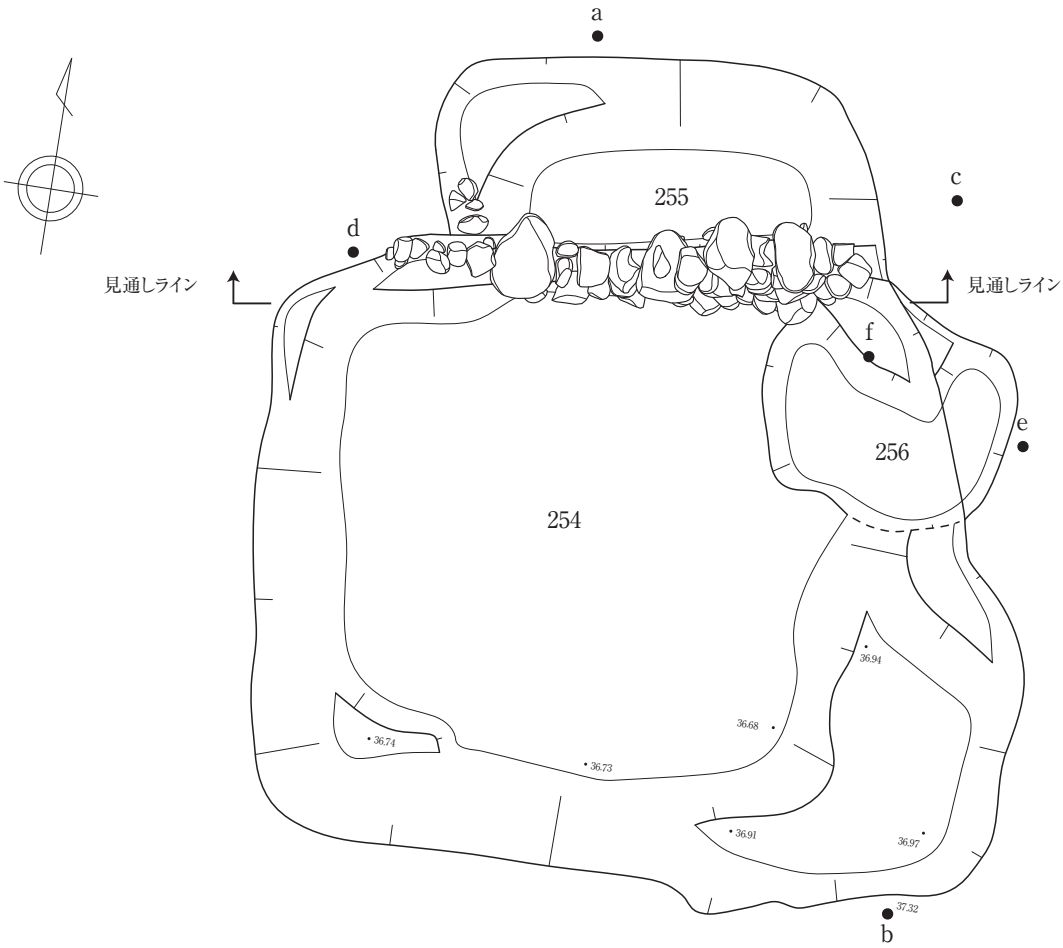
1. 10YR3/2 黒褐色 シルト(Fe沈着)(SI175)
2. 10YR3/2 黒褐色 シルトと10YR6/1 褐灰色 粘土ブロックの混在層にφ2～3cmの地山ブロック混
3. 10YR3/2 黒褐色 シルト(炭化物混)

SI174

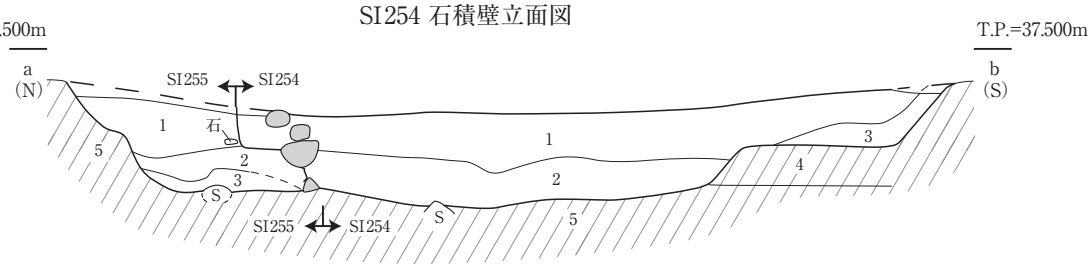
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色 微砂(地山)

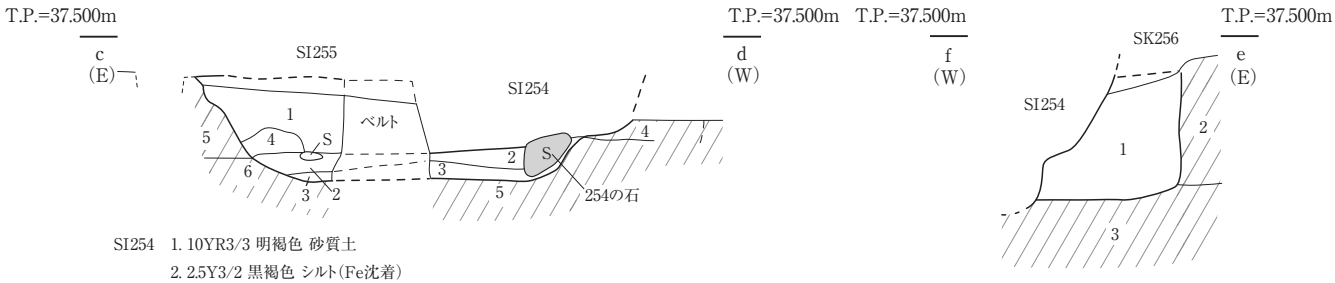
第 54 図　SI174･175、SK252 平面･断面図 (S=1/40)

0　S=1/40　2m



SI254 石積壁立面図





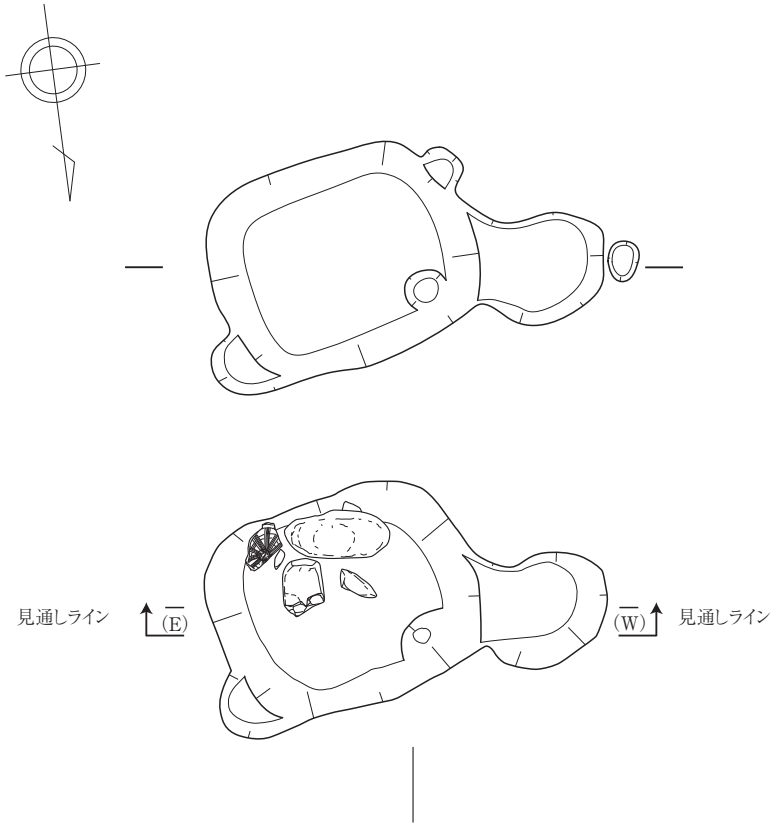
SI254　1. 10YR3/3 明褐色 砂質土
2. 2.5Y3/2 黒褐色 シルト(Fe沈着)
3. 2.5Y3/2 黒褐色 シルトにφ2～3cmの4層地山ブロック混
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色 微砂(Fe多量沈着)(地山)
5. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗砂(Fe多量沈着)(こぶし大礫少混)

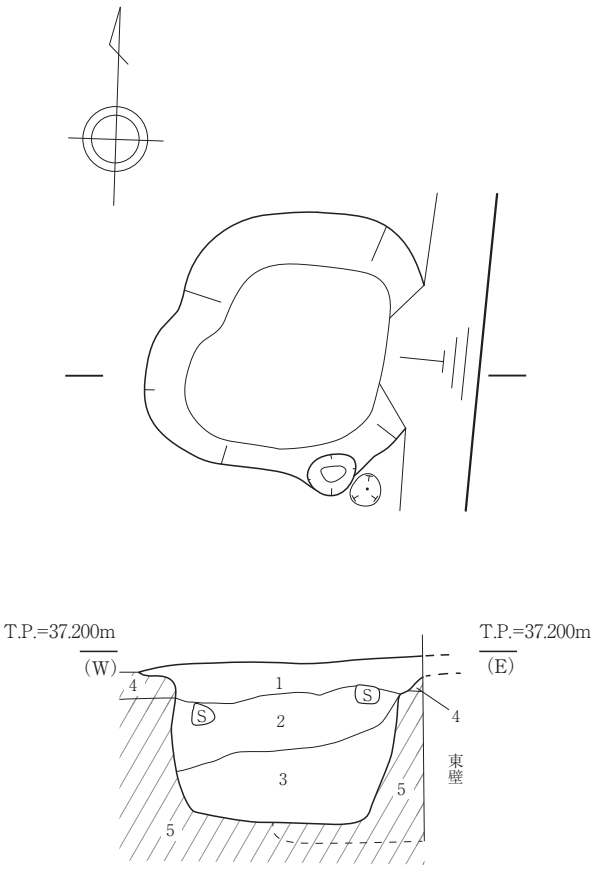
SK256　1. 2.5Y4/2 暗灰黄色 中～細砂(Mn沈着、Fe少沈着)
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色 微砂(地山)
3. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗砂(こぶし大礫混)(地山)

SI255　1. 10YR3/2 黒褐色 シルトと地山4層の混在層
2. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗砂
3. 10YR3/2 黒褐色 シルト(Fe沈着)
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色 微砂
5. 2.5Y4/4 オリーブ褐色 粗砂(こぶし大礫混)(地山)
6. 10YR5/4 にぶい黄褐色 微砂と2.5Y3/2 黒褐色 シルトの混在層(地山)

第 55 図　SI254･255、SK256 平面･立面･断面図 (S=1/40)

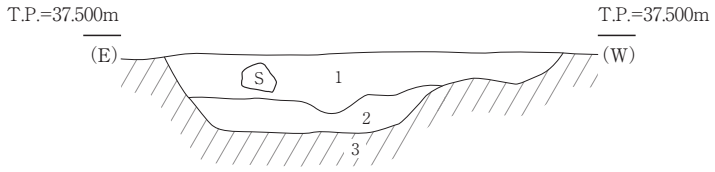
0　S=1/40　2m





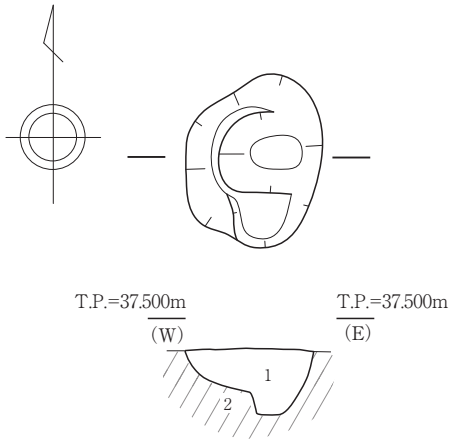
1. 10YR3/2 黒褐色 シルト(炭化物多混、下半Fe沈着)
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色 粗砂～中砂
(φ1cmの地山ブロック混)(炭化物少混)
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 粗砂
(φ1cmの地山ブロック混)(炭化物少混)
4. 2.5Y5/3 黄褐色 微砂(地山)
5. 5Y4/2 灰オリーブ色 砂礫(粗砂主体)(地山)

SK128



1. 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト質粘土
2. 10YR3/1 黒褐色 砂礫混粘質土
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色 細～微砂(Fe多沈着)(地山)

SK22



1.2.5Y3/2 暗オリーブ褐色 シルト質粘土(Mn沈着)
2.10YR4/3 にぶい黄褐色 微砂(地山)

SK15

第 56 図　SK22･128･15 平面･立面･断面図 (S=1/40)

0　S=1/40　2m

2. 2区（第57図）

2区は1区の北側に位置している。1区の調査が終了後に着手した。調査区の中央は既存施設のため調査ができず、その南北の調査区を北側（N区）と南側（S区）に分けて調査を実施した。

検出した遺構は小穴及びのびのあいまいな浅い溝状遺構のみである。記録は各遺構で半裁またはベルトを残して土色を観察・記録し、完掘した。

この調査区において特段注目すべき遺構は無い。全体の傾向としてはN区の北側は遺構密度が急に高くなり、令和3年度調査区に続いていく様相が見て取れる。

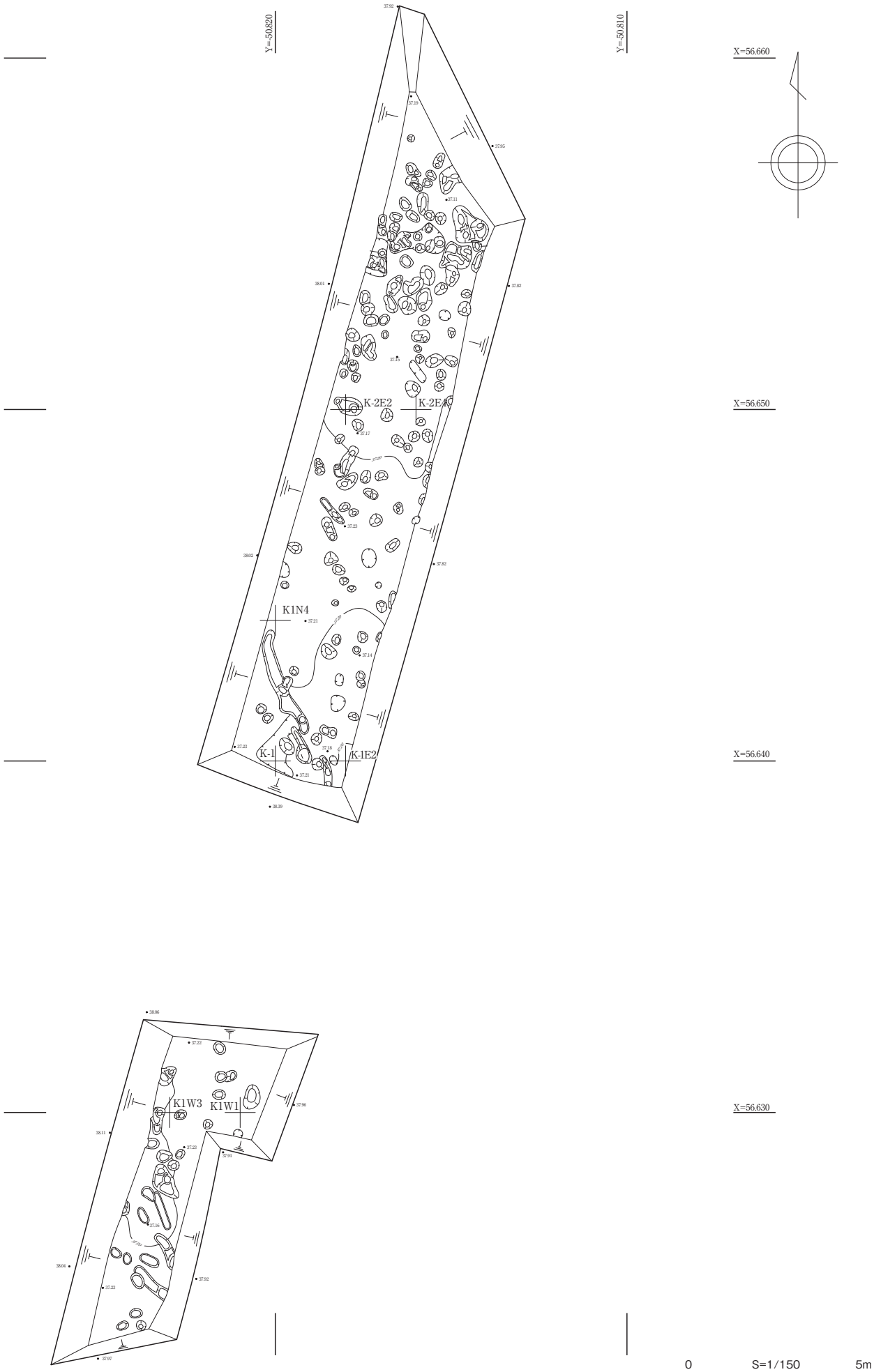
第 3 節　出土遺物（第58・59・60図）

令和2年度調査で出土した遺物のうち掲載したものは36点である。各遺構の説明において取り上げたものもあるが、本節で改めて概観する。出土した遺物は遺構の傾向と同じく古代と中世に大別され、遺物量は中世のものが多い。

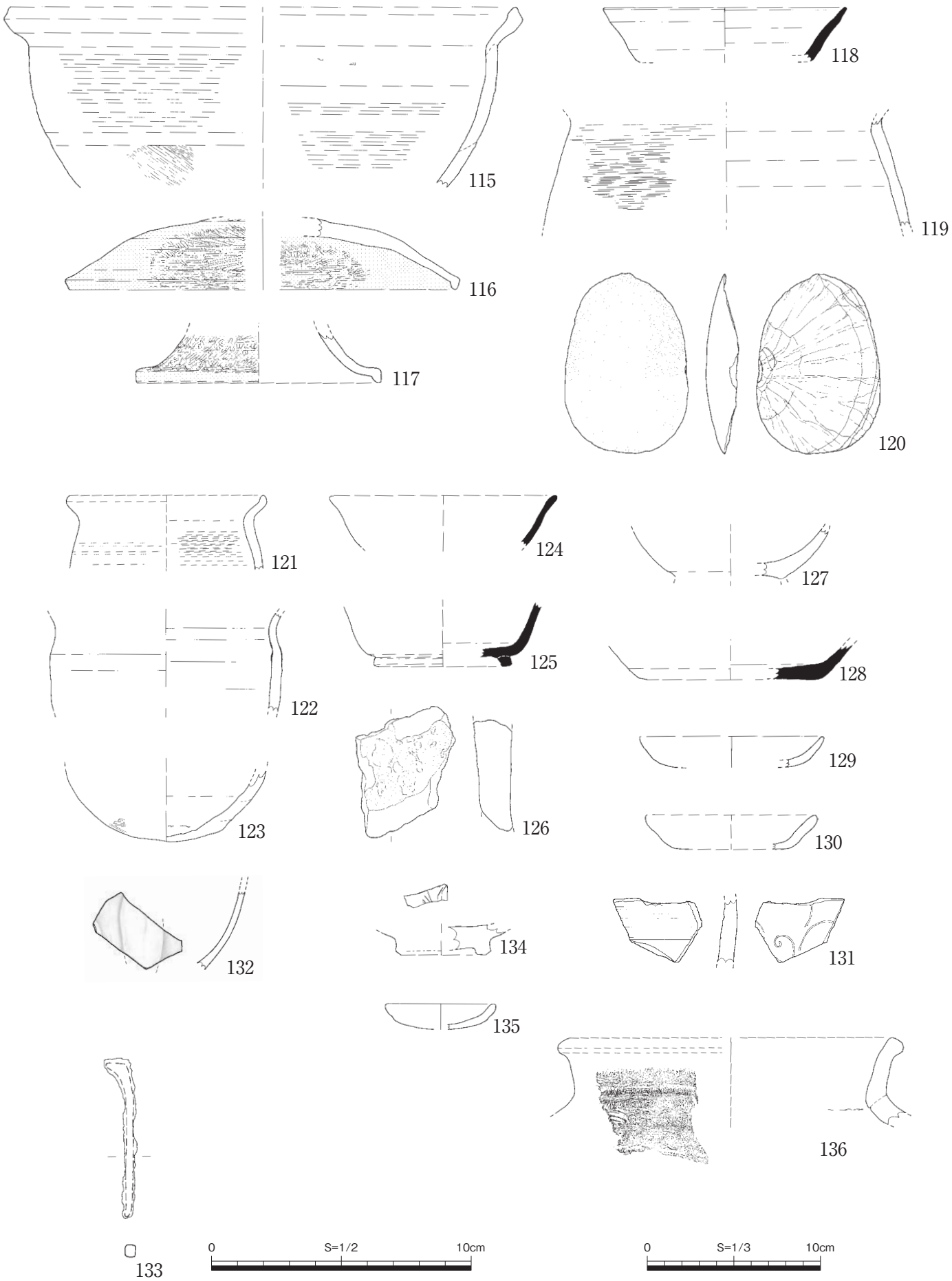
古代のものとしては第58図115から128がある。115は土師器堝で口縁部の断面三角形に近い形状のものである。116は土師器の坏蓋で、内外面ともに赤彩が施される。口縁部は小さく三角形状を呈する。117は高坏の脚部で、外面が赤彩される。118は須恵器坏で、底部から口縁部に向けて外傾して口径14.1cmに対して残存器高3.1cmと扁平な形状である。これらはおおむね8世紀の範疇と考えられる。このほか、土師器は煮炊具（121～124）、供膳具（127）などがあり、須恵器は124・125・128などの坏が出土している。

中世のものとしては、土師器皿（129・130・135）、青磁（132・134）、瀬戸焼（131・140・141・145・149）、珠洲焼（136～138・142・147・148）などがある。土師器皿は計6cm前後（135）と10cm前後（129・130）に分かれ、129には灯明痕が確認できる。これらの傾向は藤田邦雄氏の編年で末松遺跡A6埋納ピットが指標となっているⅣ期の特徴と考えられ、14世紀後半から末頃と位置付けられる（藤田1997）。青磁はいずれも小片であるが、132は鎬や間弁は省略されたやや不明瞭な連弁文を描く埦である。瀬戸焼は唐草文が施された瓶子（131）、卸皿（141）、折縁深皿（145）などが出土している。珠洲焼は片口鉢が吉岡康暢氏の編年でⅣ期後半からⅤ期、14世紀後半から15世紀中頃の中で収まるものと考えられる（吉岡1994）。

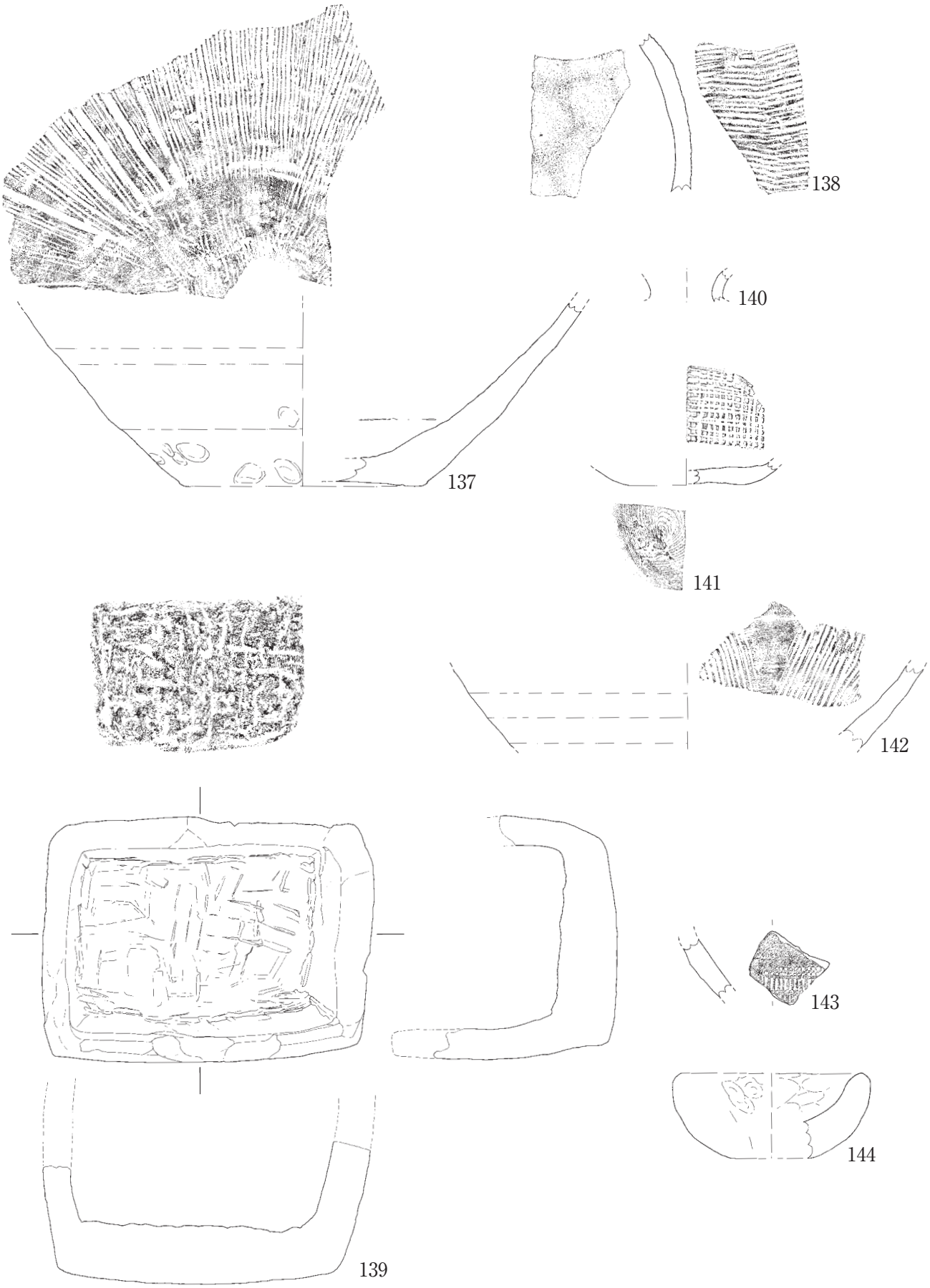
このほか石製品として、行火（139）や砥石（150・151）が出土している。砥石はいずれも目が細かく薄手に整形された仕上げ砥石とみられる。



第 57 図　2区平面図（S=1/150）

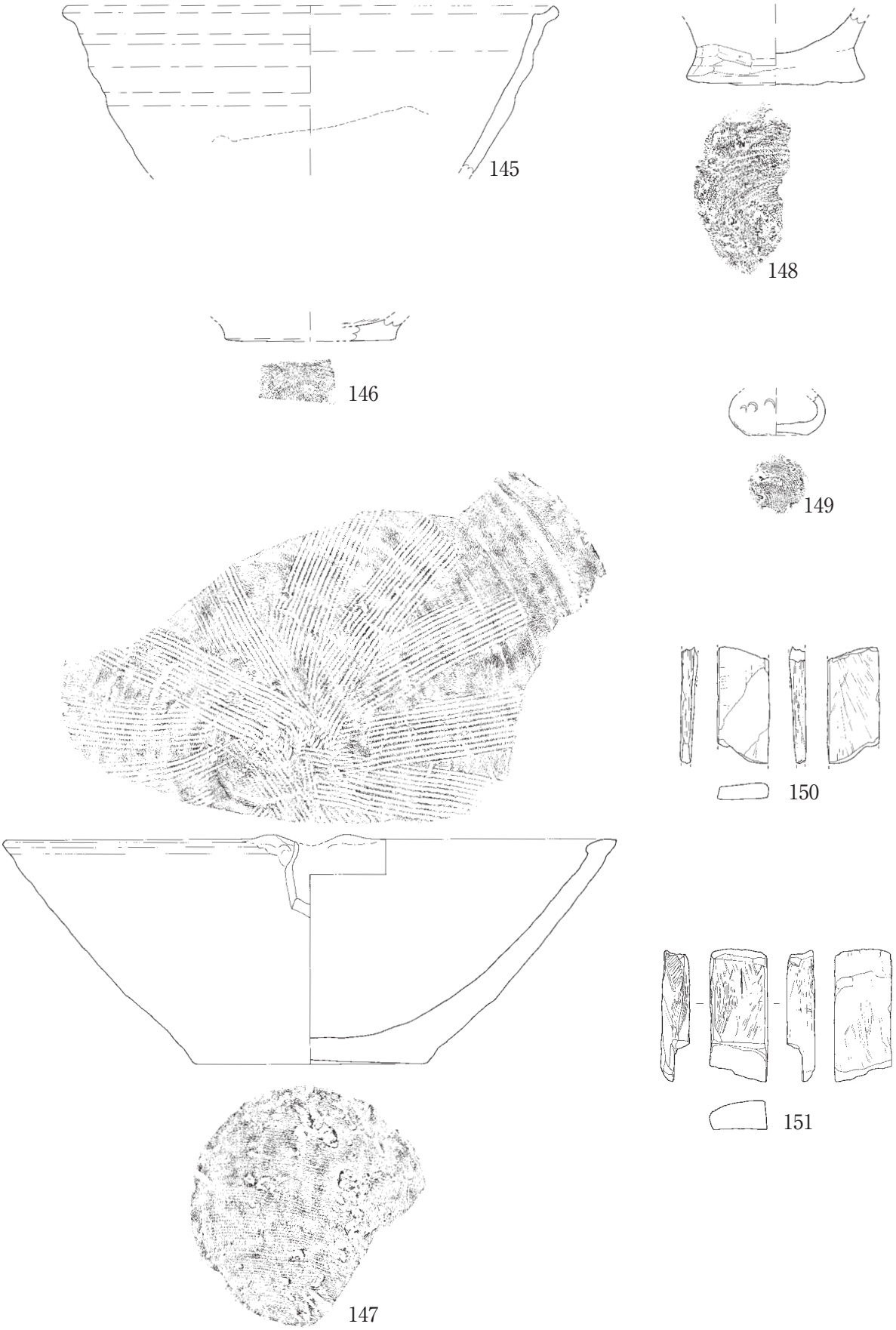


第 58 図　令和2年度末松遺跡出土遺物実測図1



第 59 図　令和2年度末松遺跡出土遺物実測図2

0　S=1/3　10cm



第 60 図　令和2年度末松遺跡出土遺物実測図3

第 11 表　令和2年度遺物観察表（土器）

番号	遺構 出土位置	器種	口径（㎜）	残存高（㎜）	底径（㎜）	調整（外） 調整（内）	色調（外） 色調（内）	残存率	備考
115	1区	土師器	300.0	—	頚部径	カキメ、ハケ	7.5YR7/6橙	口縁部1/9	内外面に煤付着
	531	堝			271.0	カキメ、ケズリ	7.5YR7/6橙		
116	1区	土師器	228.0	—	—	ミガキ	5YR5/8明赤褐	口縁部1/9	内外面に赤彩
	531	坏蓋				ミガキ	5YR5/8明赤褐		
117	1区	土師器	—	—	脚部径	ミガキ	5YR6/8橙	2/3	外面に赤彩
	531	高坏脚裾部			142.0	ヨコナデ	7.5YR7/6橙		
118	1区	須恵器	141.0	(31.5)	—	回転ナデ	2.5Y7/2灰黄	1/4	
	531	坏身				回転ナデ	2.5Y6/2灰黄		
119	1区	土師器	—	63.0	頚部径	カキメ	7.5YR7/6橙	頸部1/6	外面に煤付着
	531	甕			180.0	ヨコナデ	7.5YR7/6橙		
121	1区	土師器	116.0	—	頚部径	カキメ	7.5YR7/4にぶい橙	1/7	
	419	甕			101.0	カキメ	7.5YR7/6橙		
122	1区	土師器	—	(58.0)	頚部径	ヨコナデ	5YR7/6橙	1/4	体部径134㎜ 内外面頸部に炭化物付着
	419	甕			128.0	ヨコナデ	7.5YR8/4浅黄橙		
123	1区	土師器	—	(43.0)	68.0	ケズリ後ハケ、ナデ	7.5YR7/3にぶい橙	2/3	内面に炭化物付着 外面に煤付着
	419	甕または堝				指頭圧痕ありヨコナデ	7.5YR6/2灰褐		
124	1区	須恵器	132.0	(30.0)	—	回転ナデ	5B7/1明青灰	1/4	
	419	坏				回転ナデ	5Y7/2灰白		
125	1区	須恵器	—	(37.0)	80.0	回転ナデ	N7/灰白	1/4	
	419	有台坏				回転ナデ	N7/灰白		
127	1区	土師器	—	(29.0)	高台径	ナデ	5YR7/6橙	底部1/3	内外面に赤彩の可能性あり
	391	有台埦			56.0	—	5YR8/4淡橙		
128	1区	須恵器	—	(20.0)	106.0	回転ナデ	10YR8/1灰白	底部1/4	
	391	坏				回転ナデ	10YR8/1灰白		
129	1区	土師器	107.0	(18.0)	—	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	1/5	灯明皿か?
	8	皿				ナデ	7.5YR7/3にぶい橙		
130	1区	土師器	(100.0)	(20.0)	(80.0)	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	小片	
	8	皿				ナデ	7.5YR8/4浅黄橙		
131	1区	古瀬戸	—	(36.0)	—	—	10Y7/2灰白	小片	唐草彫文様あり
	8	瓶子（胴部）				—	2.5Y8/1灰白		
132	1区	青磁	—	—	—	—	2.5GY7/1明オリーブ灰	小片	内外面貫入あり 蓮弁文
	18	碗				—	2.5GY7/1明オリーブ灰		
134	1区	青磁	—	(18.0)	高台径	—	2.5GY5/1オリーブ灰	1/4	見込みに文様あり
	19	碗			57.0	—	5GY6/1オリーブ灰		
135	1区	土師器	64.0	(15.0)	—	ナデ	5YR8/4淡橙	1/5	
	13	皿				ナデ	7.5YR8/6浅黄橙		
136	1区	珠洲焼	(200.0)	(44.0)	—	ヨコナデ	5B5/1青灰	小片	頸部に波状文か?
	175	壺口縁				ヨコナデ	5PB6/1青灰		
137	1区	珠洲焼	—	(102.0)	138.0	ナデ	5PB6/1青灰	1/4	一部降灰あり
	173	片口鉢				ナデ（粗雑）	5PB5/1青灰		
138	1区	珠洲焼	—	(89.0)	—	タタキ	5PB5/1青灰	小片	
	172	甕または壺				ユビオサエ	5PB6/1青灰		
140	1区	陶器（古瀬戸）	—	(17.0)	—	ヨコナデ	10Y6/1灰	1/4	降灰釉厚い 貫入
	15	瓶頚部				ナデ	N8/灰白		
141	1区	陶器（瀬戸）	—	(13.0)	76.0	ナデ	5Y8/1灰白	1/4	内外面に炭化物付着 底部回転糸切り痕
	15	卸皿				卸目	5Y8/1灰白		
142	1区	珠洲焼	—	(47.0)	胴部径	ヨコナデ	5B7/1明青灰	体部1/7	内面一部炭化物付着
	15	擂鉢			222.0	ナデ、卸目	5B6/1青灰		
143	1区	陶器	—	—	—	ナデ、文様	10BG7/1明青灰	小片	
	254	壺?（肩部）				ナデ	5B6/1青灰～ 10BG7/1明青灰		

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (㎜)	残存高 (㎜)	底径 (㎜)	調整(外) 調整(内)	色調(外) 色調(内)	残存率	備考
144	1区 254	土製品 塝	(110.0)	(48.0)	—	ヘラ状工具用いてナデ上げ ユビオサエ、ナデ	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR8/6浅黄橙	1/9	
145	1区 254･116	陶器(古瀬戸) 折縁深皿	262.0	(89.0)	—	ヨコナデ、施釉 ヨコナデ	5Y6/3オリーブ黄 7.5Y5/3灰オリーブ	1/7	254･116から出土した2片。 漆継ぎの痕跡あり
146	1区 22	土師器 内黒埦	—	(12.0)	(90.0)	ナデ ミガキ	7.5YR8/4浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	1/6	内黒 底部回転ヘラ切り痕か?
147	1区 22	珠洲焼 片口鉢	(324.0)	121.0	125.0	ヨコナデ ナデのちタテハケ	N6/灰～N7/灰白 N6/灰～N7/灰白	底部完存	
148	1区 332	珠洲焼 壺または甕底部	—	(38.0)	95.0	ナデ、ケズリ ナデ	10BG4/1暗青灰 7.5Y7/1灰白	1/2	底部静止糸切り痕
149	1区 127	陶器(古瀬戸) 水滴	—	(22.0)	34.0	— —	5Y6/4オリーブ黄 2.5Y8/1灰白	1/3	胴径51㎜ 丸鑿による画花文

第 12 表　令和2年度遺物観察表(石製品)

番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (㎜)	最大幅 (㎜)	最大厚 (㎜)	重量 (g)	石　材	備考
120	1区 531	石製品	104.5	72.0	19.0	145.6	凝灰岩	
126	1区 2	石製品	76.0	58.0	24.0	43.8	凝灰岩	強く被熱、内面煤付着
139	1区 173	行灯	184.0	136.0	32.0	1055.0	軽石凝灰岩	高さ125㎜
150	1区 65	砥石	62.0	28.0	8.5	21.2	砂岩	
151	1区 遺構検出	砥石	70.0	30.0	15.0	44.9	砂岩	

第 13 表　令和2年度遺物観察表(金属製品)

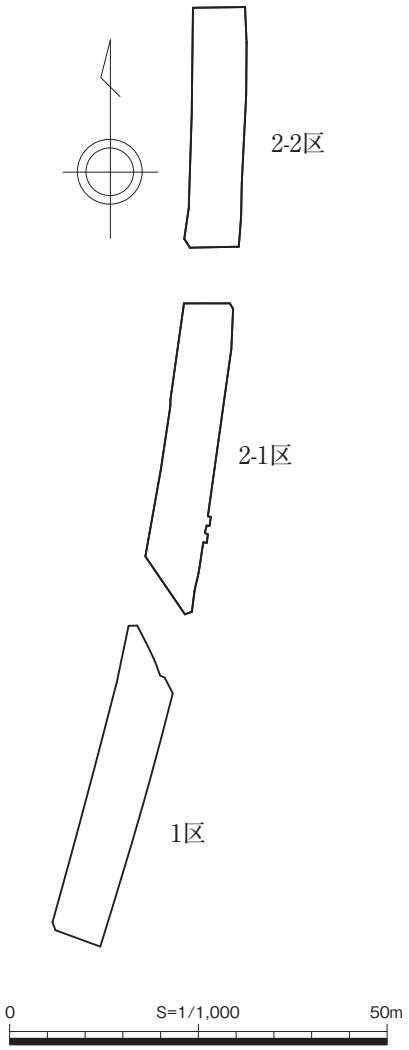
番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (㎜)	最大幅 (㎜)	最大厚 (㎜)	重量 (g)	備考
133	1区 18	和釘	62.0	13.0	5.0	4.7	

第 7 章　令和3（2021）年度の調査成果

第 1 節　調査の概要

調査区は末松遺跡北東に位置する。末松遺跡は郷用水の周辺に広がる遺跡で、その広がりは、林口川の南北方向の流れが一旦西方向に折れ、中林集落に当たる手前で再び北方向に流れを変える周辺一帯にあたる。

調査区は3区に分けて行った（第61図）。調査工程の関係上、先行して調査を実施した順番で調査区を設定した。第61図で示したように、南端に位置する調査区を1区とし、耕作地の稲刈り後に調査を実施した調査区を2区としている。2区については、農道により分断されている南側を2-1区、北側を2-2区として調査区を設定した。



第 61 図　令和3年度調査区配置略図
（S=1/1,000）

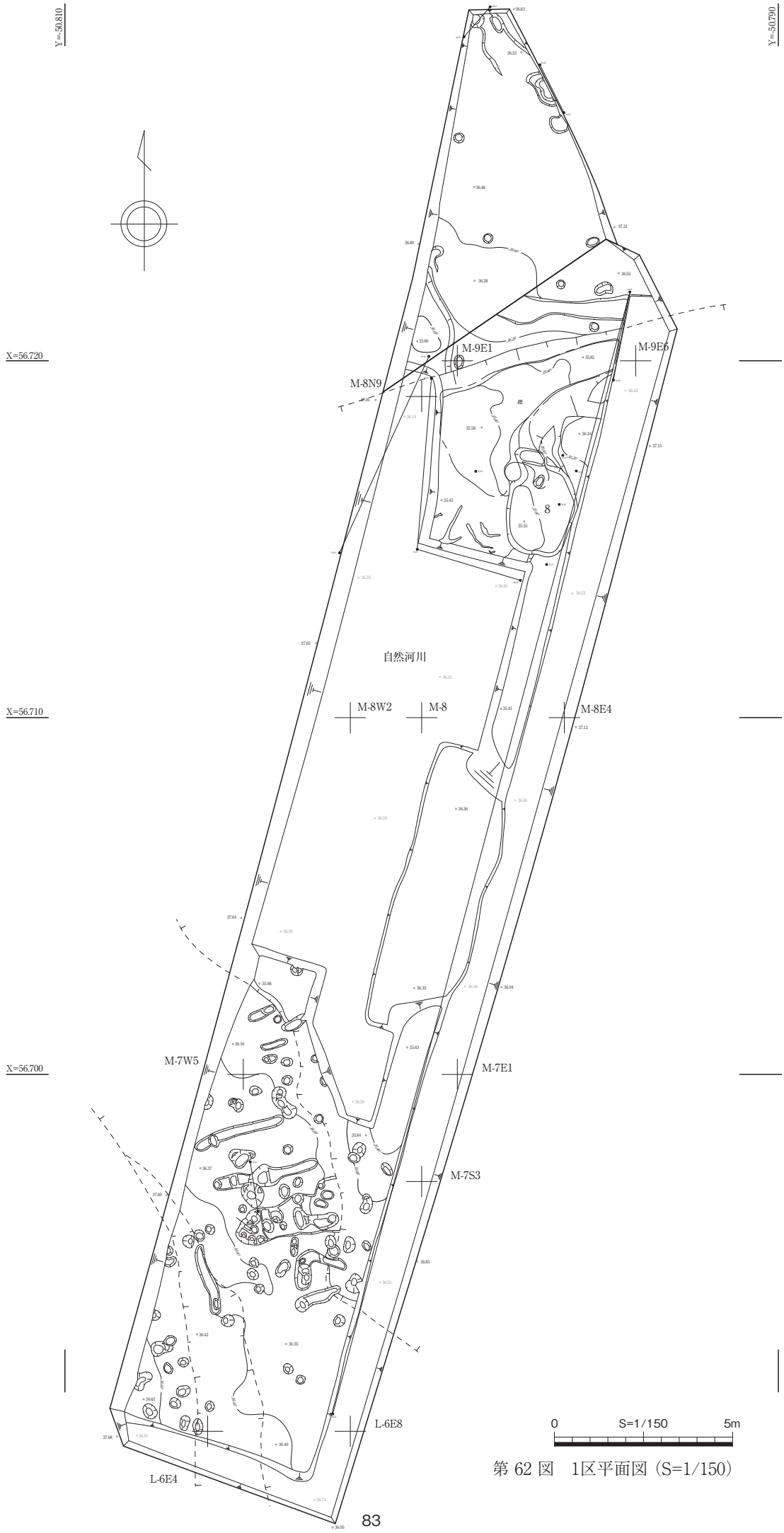
第 2 節　遺構

1. 1区（第62図）

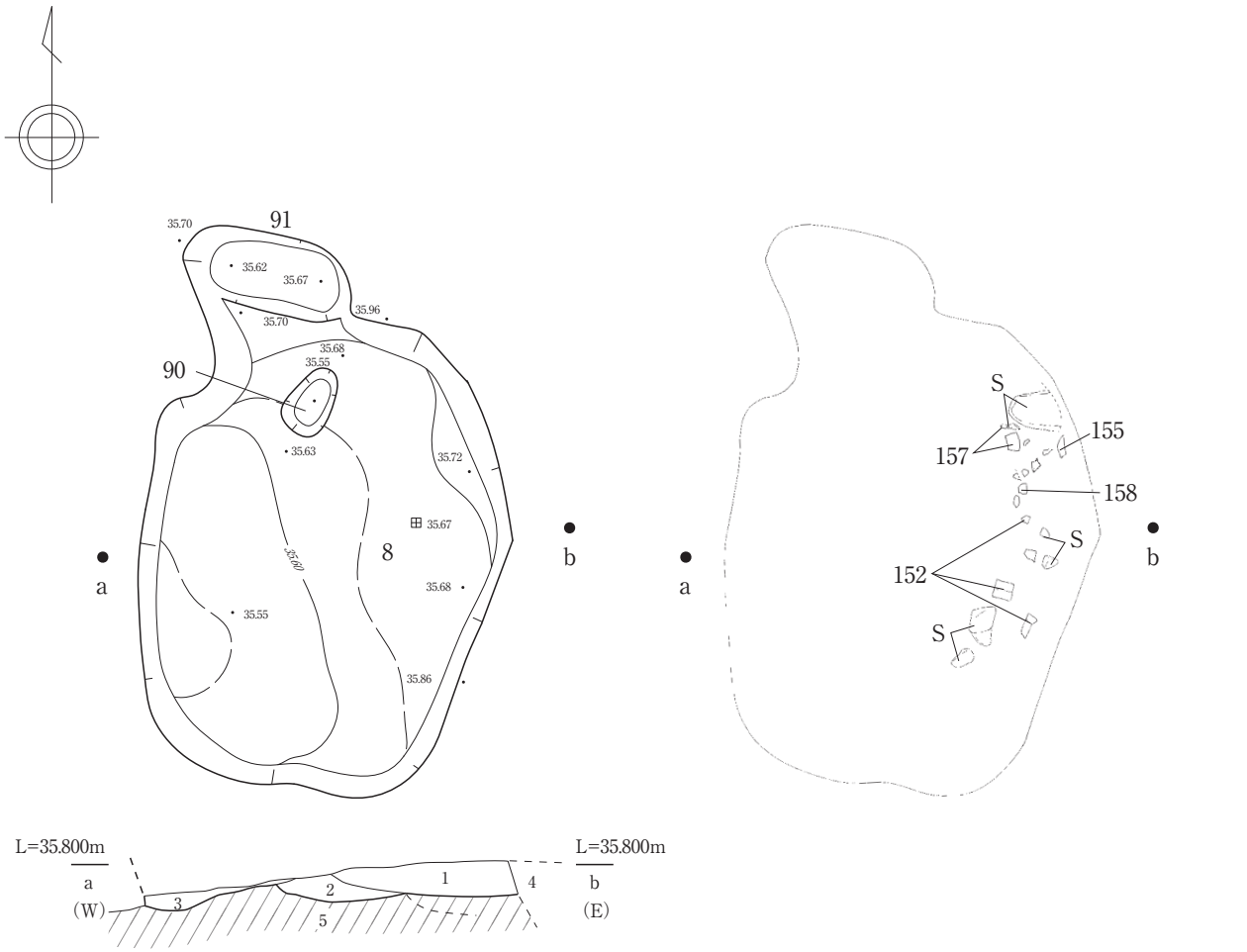
南北約40.0m×東西約6.5mの調査区である。調査区中央には近代以降の自然河川が東西に流れ、自然河川の南側でピットや溝、北側でSK8を検出した。

SK8（第63図）

調査区北側で検出した長軸2.6m、短軸2.0mの不定形な土坑である。自然流路掘り下げ時の下層で確認しており、深さは確認できた箇所で20㎝であった。北側には長径94㎝、短径40㎝、最深部8㎝のP91が所在し、土坑内部には長径40㎝、短径22㎝、深さ15㎝のP90が存在する。遺物は東部分で集中して出土しており、土師器堝（152）、土師器長胴甕（153）、須恵器長頸瓶（154）、須恵器瓶（155）須恵器坏（156）、（157）、（159）須恵器無台坏（158）が出土している。年代は8世紀後半から9世紀前半と考えられる。



第 62 図　1区平面図（S=1/150）



1. 10YR3/1 黒褐色 粘質土
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土（地山ブロック混）
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土（4層と地山ブロック混）
4. 5B6/1 青灰色 粘質土（近代自然河川）
5. 2.5Y8/6 黄色 粘質土（地山）

第 63 図　SK8 平面･断面図（S=1/40）

0　S=1/40　2m

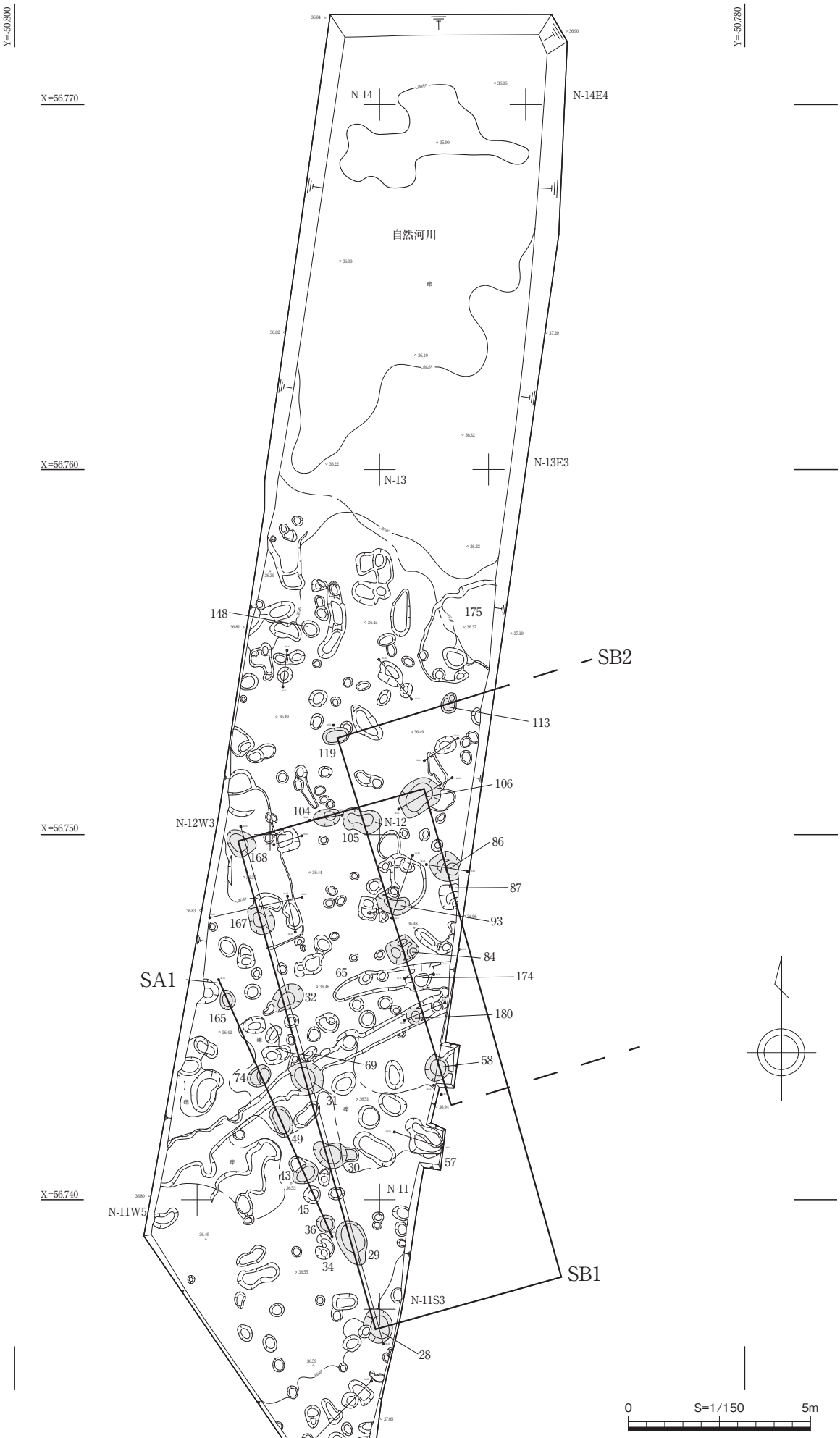
2. 2-1区（第64図）

南北38.5m、東西6.5mの調査区である。調査区南側ではSB1、SB2、SA1の他、多数のピットなどを確認した。また、調査区西壁付近ではSI102を検出している。調査区北側では遺構は希薄となり、1区で確認したものと同様に東西に流れる自然河川を確認している。

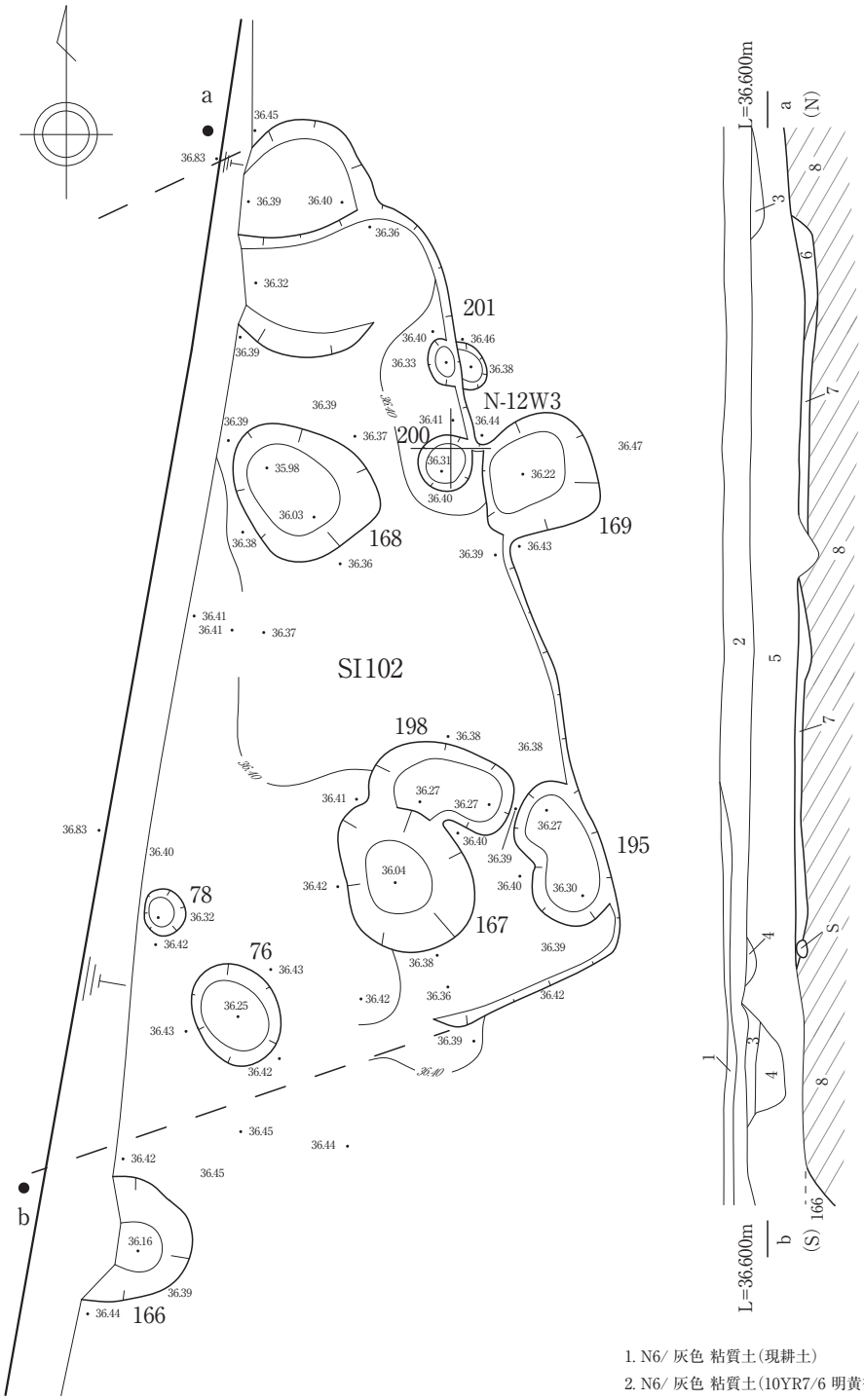
以下は主要遺構の概要である。

SI102（第65図）

調査区南側西壁付近で検出した方形の竪穴建物で、西側部分の大半は調査区外となっているため、全容は不明である。北西－南東4.3m、北東－南西2.9m以上、面積8.3㎡以上、深さ約6㎝を測る。床面には貼床が施されており、竪穴南東隅では炭化物を確認した。カマドは確認していない。竪穴内では複数のピットを検出しているが、SI102に付属するような柱穴は確認できなかった。遺物は、土師器の甕（187）が出土している。



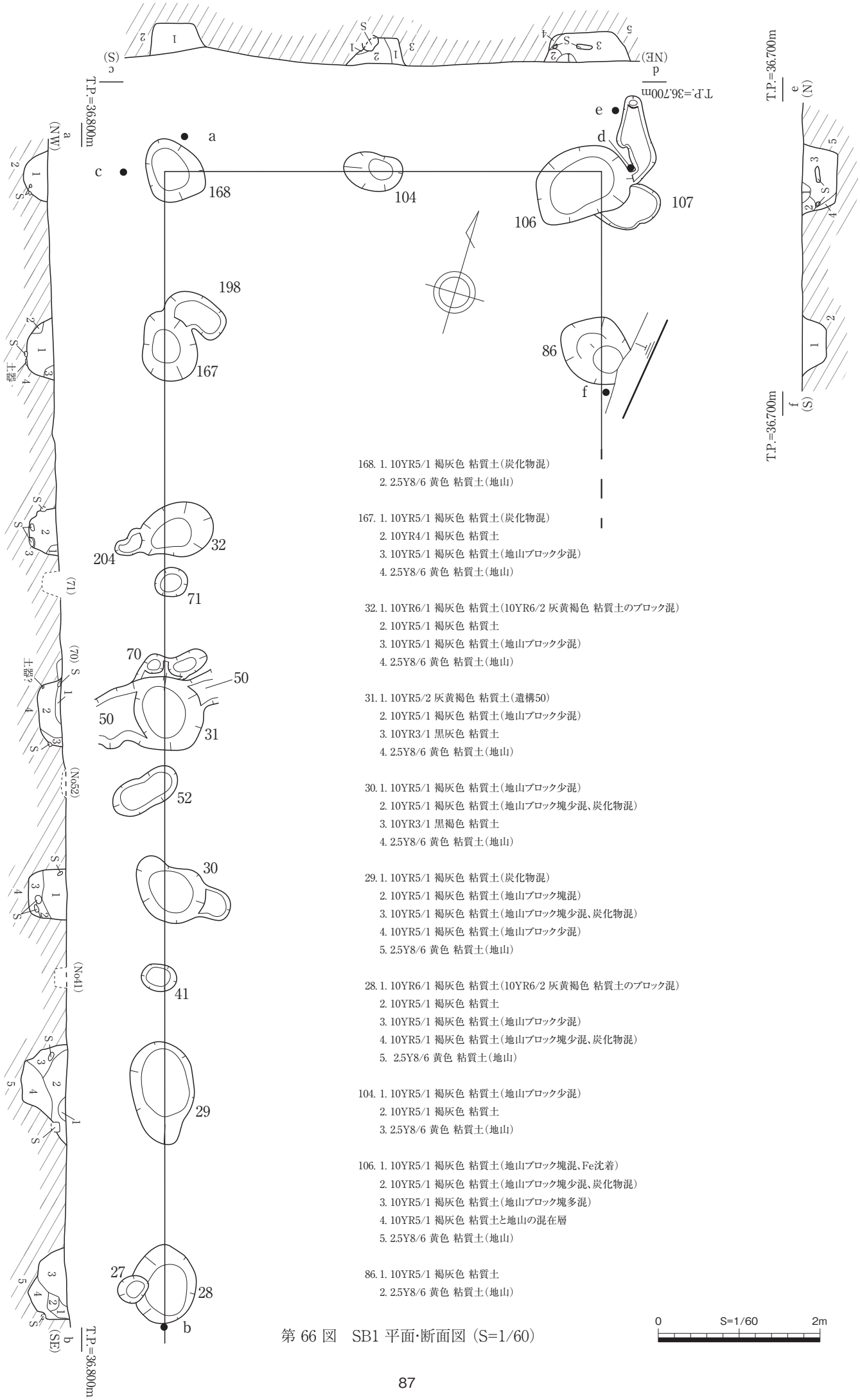
第 64 図　2-1区平面図（S=1/150）



1. N6/ 灰色 粘質土(現耕土)
2. N6/ 灰色 粘質土(10YR7/6 明黄褐色 粘質土混)(旧耕土)
3. 2.5Y6/ 黄灰色 粘質土(10YR7/6 明黄褐色 粘質土混) } SK166
4. 10YR4/1 褐灰色 粘質土(2.5Y7/1 灰黄色 粘質土混) } SK166
5. 10YR4/1 褐灰色 粘質土
6. 10YR5/1 褐灰色 粘質土 } SI102
7. 2.5Y8/6 黄灰色 粘質土(10YR4/1 褐灰色 粘質土混)(貼床) } SI102
8. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

第 65 図　SI102、SK166 平面･断面図 (S=1/40)

0　S=1/40　2m



168. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(炭化物混)
2. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

167. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(炭化物混)
2. 10YR4/1 褐灰色 粘質土
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
4. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

32. 1. 10YR6/1 褐灰色 粘質土(10YR6/2 灰黄褐色 粘質土のブロック混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
4. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

31. 1. 10YR5/2 灰黄褐色 粘質土(遺構50)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
3. 10YR3/1 黒灰色 粘質土
4. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

30. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック塊少混、炭化物混)
3. 10YR3/1 黒褐色 粘質土
4. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

29. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(炭化物混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック塊混)
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック塊少混、炭化物混)
4. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
5. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

28. 1. 10YR6/1 褐灰色 粘質土(10YR6/2 灰黄褐色 粘質土のブロック混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
4. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック塊少混、炭化物混)
5. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

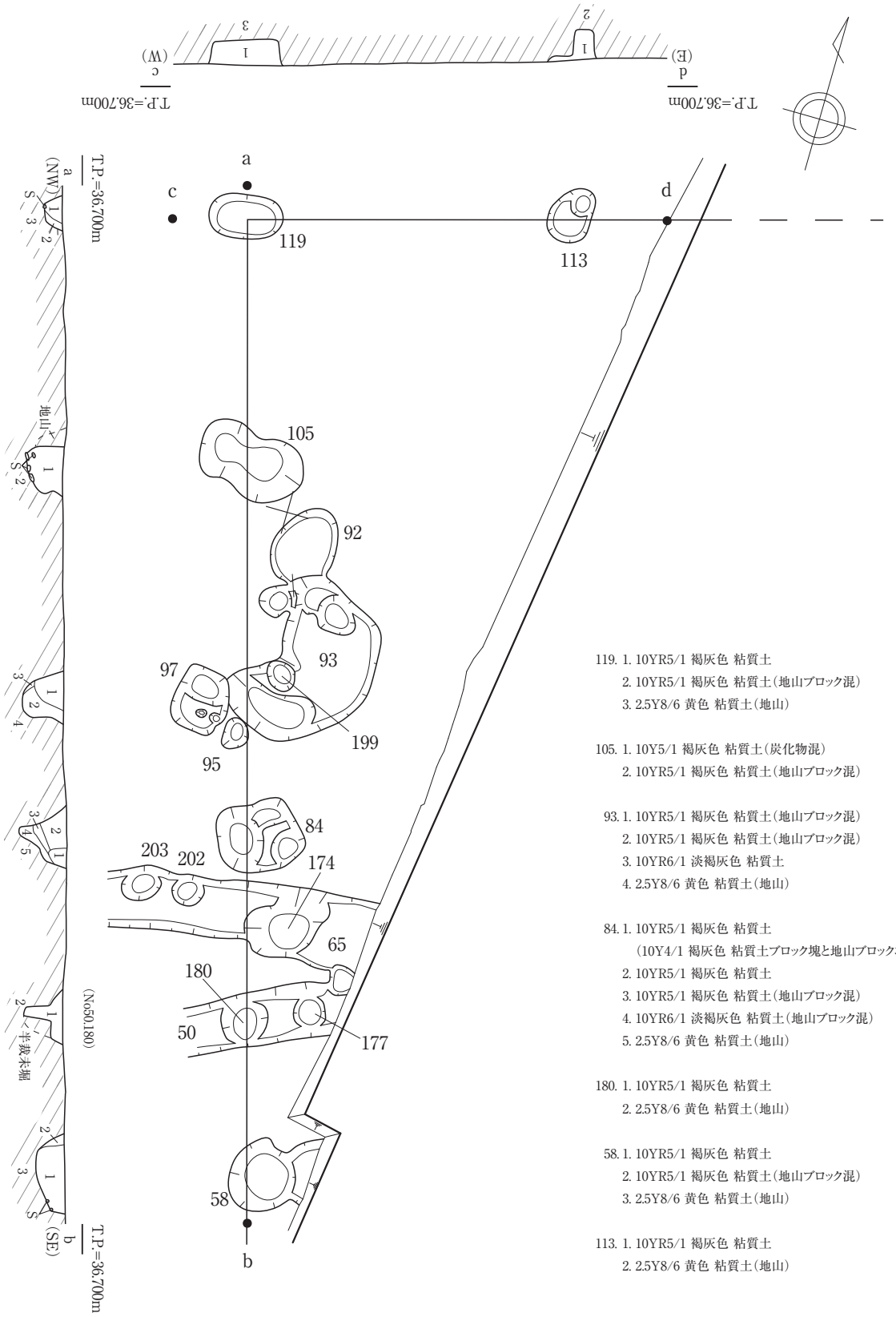
104. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
3. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

106. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック塊混、Fe沈着)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック塊少混、炭化物混)
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック塊多混)
4. 10YR5/1 褐灰色 粘質土と地山の混在層
5. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

86. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
2. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

0 S=1/60 2m

第 66 図　SB1 平面･断面図 (S=1/60)



119. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
3. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

105. 1. 10Y5/1 褐灰色 粘質土(炭化物混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)

93. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
3. 10YR6/1 淡褐灰色 粘質土
4. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

84. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
(10Y4/1 褐灰色 粘質土ブロック塊と地山ブロック塊混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
4. 10YR6/1 淡褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
5. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

180. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
2. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

58. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
3. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

113. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
2. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

第 67 図　SB2 平面･断面図 (S=1/60)

0　S=1/60　2m

SB1（第66図）

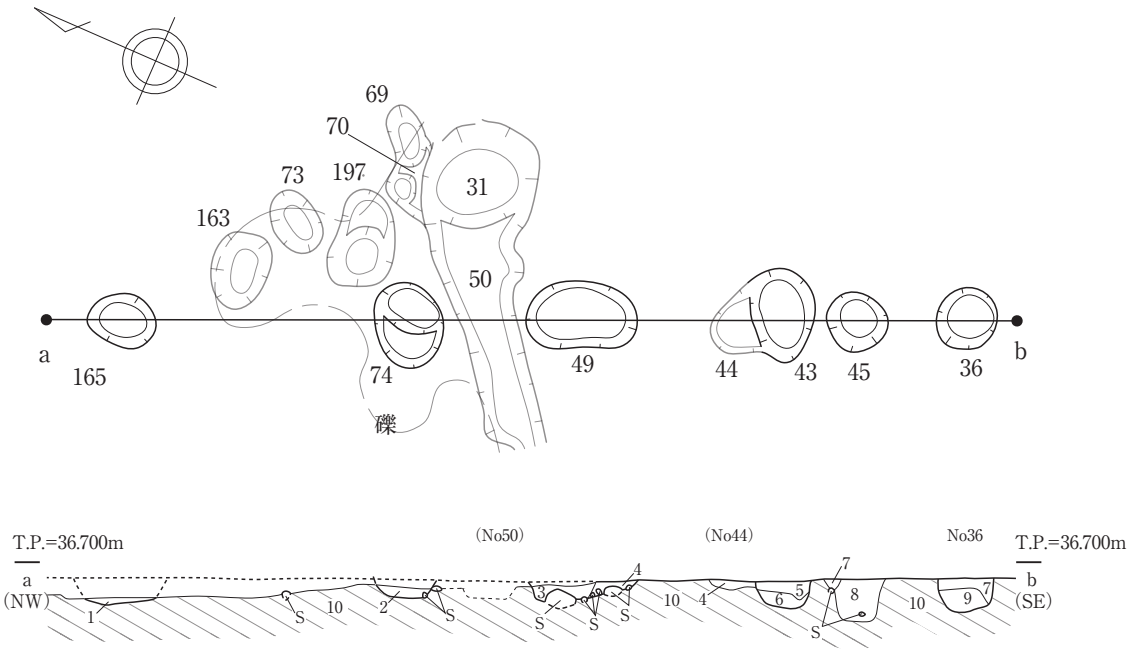
調査区南側に位置する掘立柱建物である。建物は北西－南東桁行6間以上、南西－北東梁行1間以上の建物で、建物の方位はN12°－Wである。建物の東側と南側は調査区外となるため、全体の様相はわからない。P167及びP168はSI102内で検出した。確認できる範囲での建物規模は北西－南東が14.0m、南西－北東5.2m、面積94.2㎡である。柱間の長さは北西－南東ラインのP168－P167間2.2m、P167－P32間2.2m、P32－P31間2.2m、P31－P30間2.3m、P30－P29間2.5m、P29－P28間2.6mで、P30－P29－P28間の柱間が長くなる。南西－北東ラインでP168－P104間2.6m、P104－P106間2.6mである。柱穴の形状は不定形で、長径70㎝～125㎝、短径45㎝～85㎝、深さは35㎝～46㎝を測る。

SB2（第67図）

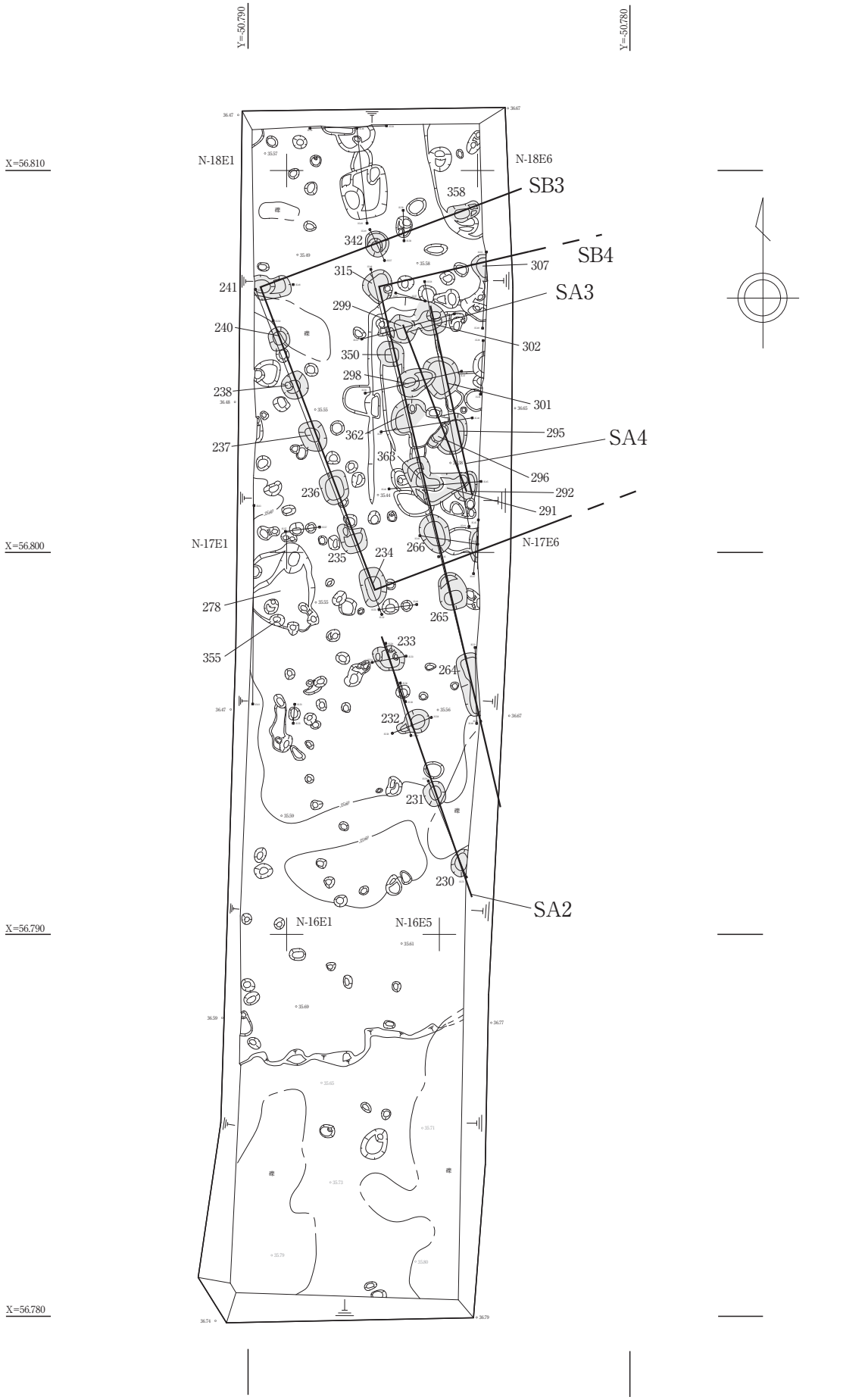
調査区の中央部よりやや南に位置する掘立柱建物である。SB1の北東部分と重複する。建物は北西－南東桁行5間以上、南西－北東梁行1間以上の建物で、建物の方位はN17°－W、重複するSB1とほぼ同方位である。建物の東側と南側は調査区外となるため、全体の様相は確認できない。確認できる範囲での建物規模は北西－南東が9.5m、南西－北東が3.2m、面積30.4㎡である。柱間の長さは北西－南東ラインでP119－P105間2.4m、P105－P93間2.4m、P93－P84間1.35m、P84－P180間1.8m、P180－P58間1.55m、南西－北東ラインでP119－P113間3.2mである。柱穴の形状はやや崩れた楕円形が多く、長径50㎝～110㎝、短径45㎝～65㎝、深さは25㎝～46㎝を測る。

SA1（第68図）

調査区南側に位置する北西－南東方向の柵列である。SB1の西側に近接する。P165より北西部分は調査区外となるため、明確な長さは不明である。穴の形状は略円形から不定形なものと様々で、大きさは長径50㎝～90㎝、短径45㎝～50㎝、深さ11㎝～28㎝である。列の長さは約6.8mで、穴の間隔は1.3m～2.4mとばらつきがある。方位はN25°－Wである。



第 68 図　SA1 平面･断面図（S=1/60）



第 69 図　2-2区平面図（S=1/150）

0　S=1/150　5m

3. 2-2区（第69図）

南北30.5m、東西6.0mの調査区である。調査区南側は遺構が希薄で、2−1区北側の自然河川と同じ流路と考える。調査区の北側に向かうに従ってピット等遺構の数が多くなる。大きさや形状は様々であるが、しっかりと掘られたピットが多い。錯綜するピット群の中で掘立柱建物や柵列などを重複する形で検出した。

本調査区ではSB3、SB4、SA2、SA3、SA4を確認した。

SA2（第70図）

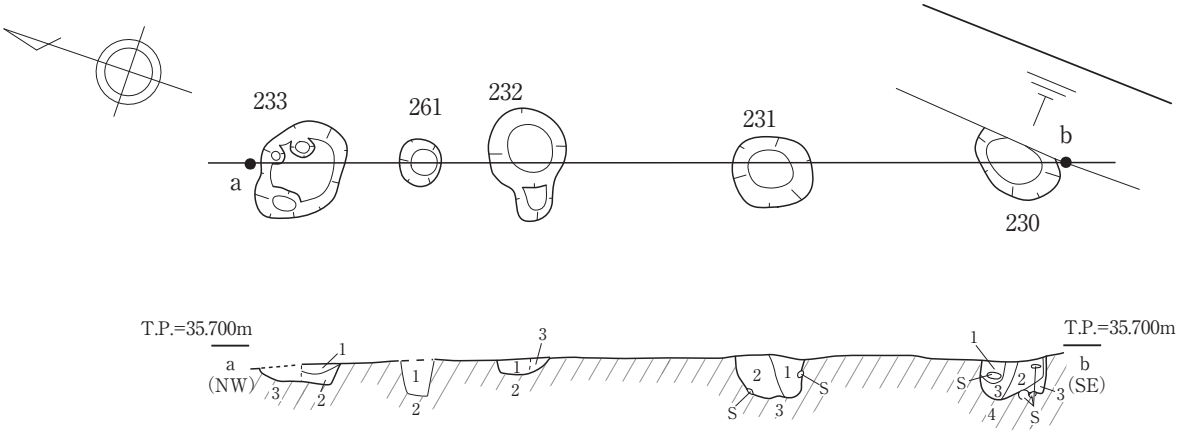
調査区中央付近に位置する北西−南東方向の柵列である。SB3の南側、SB4の西側に位置する。P230より南東部分は調査区外となる。穴の形状は略円形、楕円形、不定形と様々である。大きさは長径65㎝〜90㎝、短径55㎝〜70㎝で、深さ22㎝〜34㎝である。列の長さは5.6mで、穴の間隔はP233−P232間1.8m、P232−P231間1.85m、P231−P230間1.95mである。方位はN20°−Wである。

本報告では柵列としているが、北東側調査区外に柱穴が存在することも想定されることから、掘立柱建物になる可能性もある。

SA3（第71図）

調査区北側のピット群の中から確認した柵列である。北西−南東方向の柵列で穴の形状は、そのほとんどが他の遺構と重複するため不明瞭である。大きさも他遺構と重複するため明確ではないが、確認できたところで長径70㎝〜100㎝、短径50㎝〜75㎝、深さ17㎝〜38㎝を測る。列の長さは4.3mで、P299−P298間1.45m、P298−P296間1.5m、P296−P291間1.35mである。方位はN20°−Wである。

本報告では柵列としているが、北東側調査区外に柱穴が存在することも想定されることから、掘立柱建物になる可能性もある。



233. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
2. 2.5Y6/2 灰黄褐色 粘質土(2.5Y6/2褐灰色 粘質土混)
3. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)
261. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
2. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)
232. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
2. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)
231. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック混、地山ブロック多混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
3. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)
230. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混)
4. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

第 70 図　SA2 平面･断面図（S=1/60）

0　S=1/60　2m

299. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
3. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

296. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
2. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

298. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
(10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロックと地山ブロックが混じる)
4. 10YR4/1 褐灰色 粘質土
5. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

291. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロックと10YR3/1 黒褐色 粘質土が混じる)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック多混)
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
(2.5Y8/1 黄色 粘質土ブロック多混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック少混)
4. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

SA3

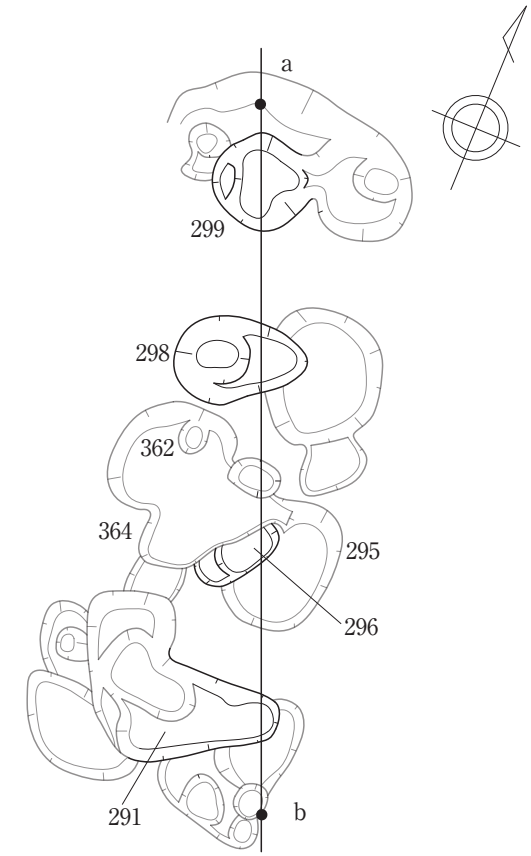
302. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック少混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック多混)
3. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

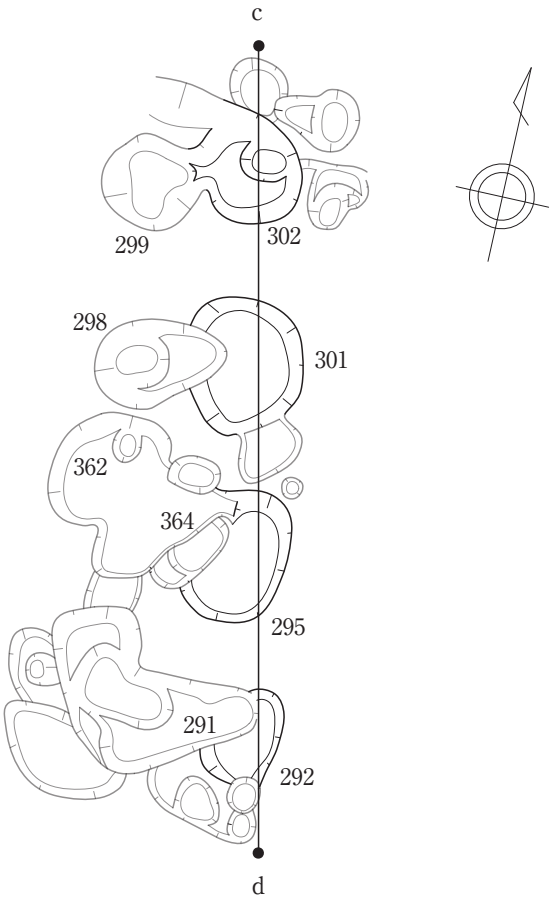
301. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック少混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック多混)
3. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

295. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック少混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック混)
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック多混)
4. 10YR6/1 褐灰色 粘質土
(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック多混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック混)
5. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック多混)
6. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

292. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック少混)
2. 10YR4/1 褐灰色 粘質土
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
(2.5Y8/6 黄色 粘質土と10YR3/1 黒褐色 粘質土混)
4. 10YR6/1 褐灰色 粘質土
(2.5Y8/6 黄色 粘質土ブロック、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック多混)
5. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

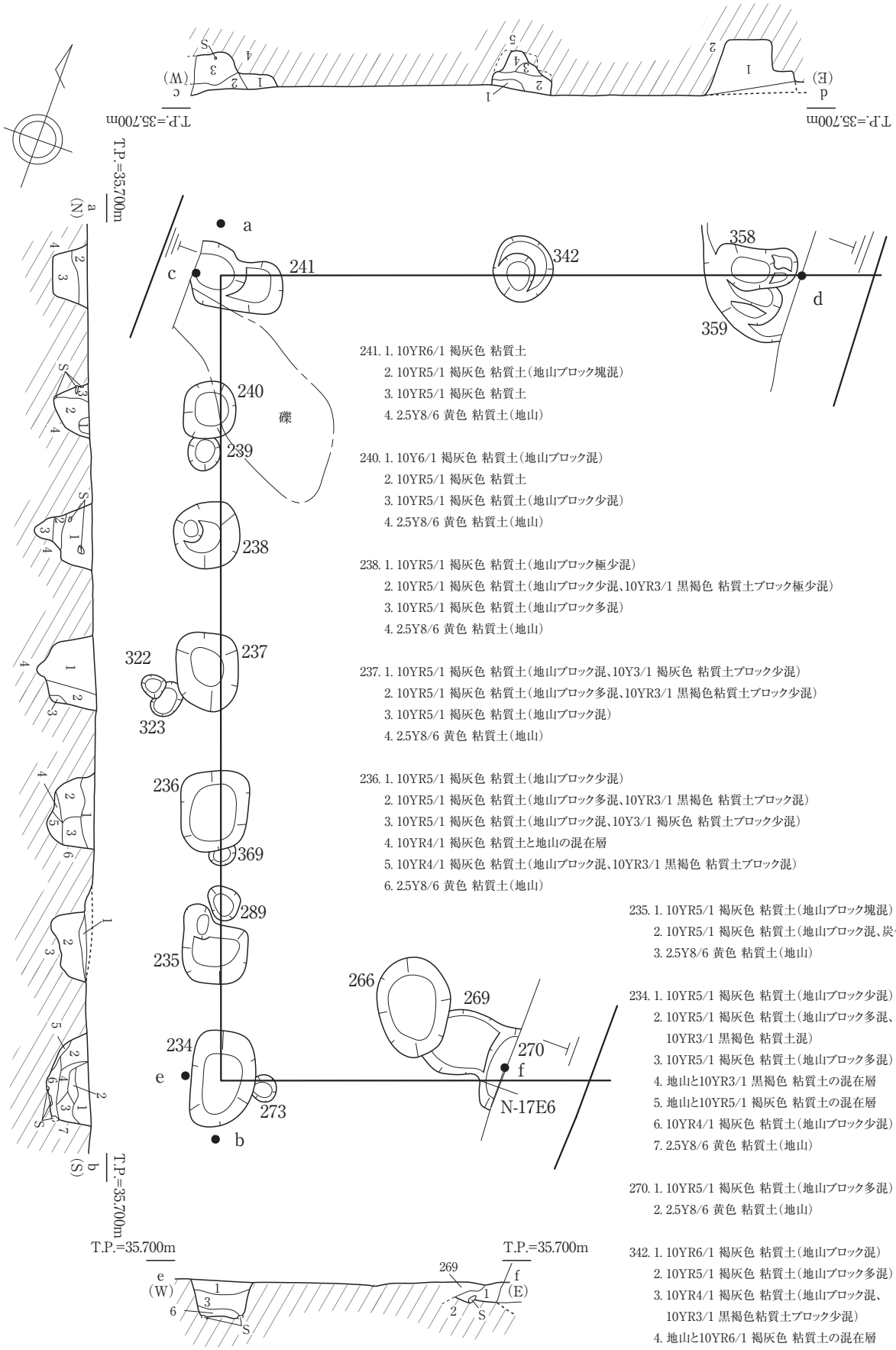
SA4





第 71 図　SA3･4 平面･断面図(S=1/60)

0　S=1/60　2m



241. 1. 10YR6/1 褐灰色 粘質土
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック塊混)
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
4. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

240. 1. 10Y6/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
4. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

238. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック極少混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック極少混)
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混)
4. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

237. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混、10Y3/1 褐灰色 粘質土ブロック少混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混、10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック少混)
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
4. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

236. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック混)
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混、10Y3/1 褐灰色 粘質土ブロック少混)
4. 10YR4/1 褐灰色 粘質土と地山の混在層
5. 10YR4/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック混)
6. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

235. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック塊混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混、炭化物少混)
3. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

234. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混、10YR3/1 黒褐色 粘質土混)
3. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混)
4. 地山と10YR3/1 黒褐色 粘質土の混在層
5. 地山と10YR5/1 褐灰色 粘質土の混在層
6. 10YR4/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
7. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

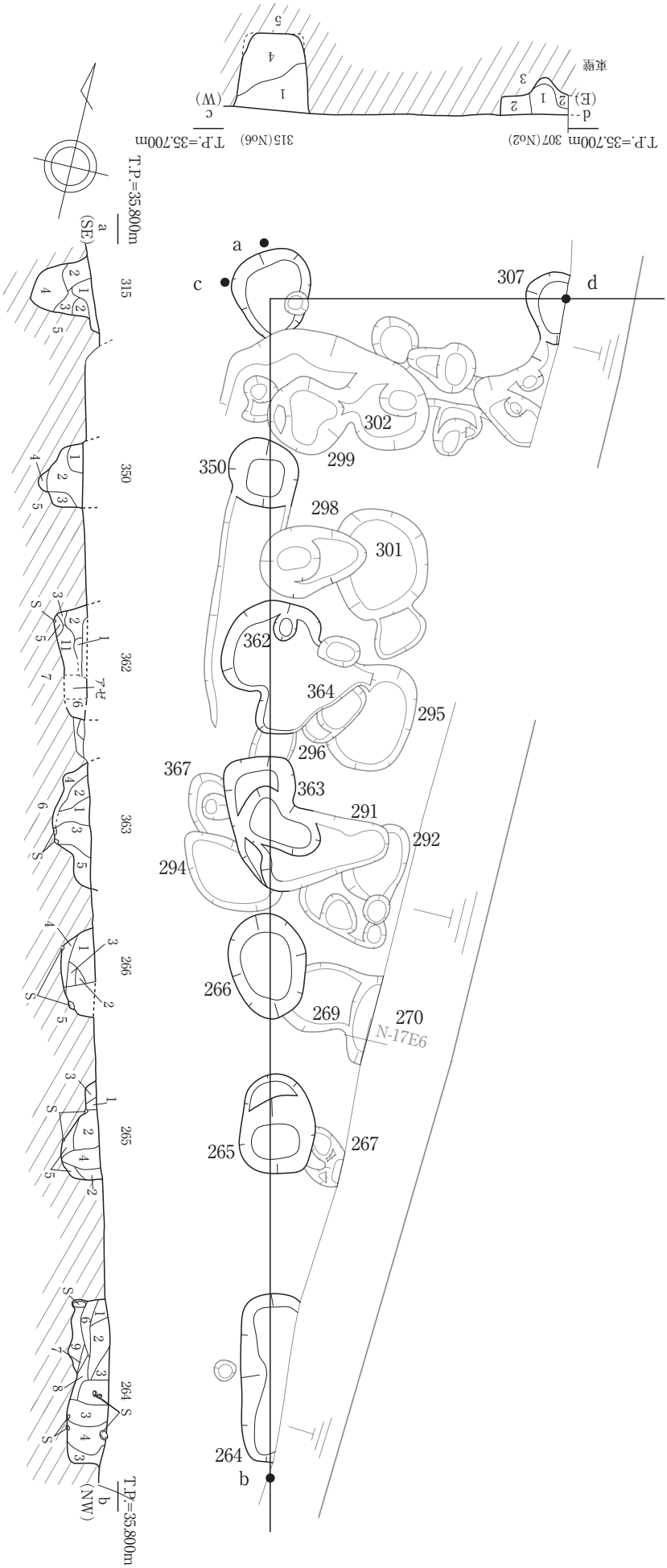
270. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混)
2. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

342. 1. 10YR6/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混)
3. 10YR4/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混、10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック少混)
4. 地山と10YR6/1 褐灰色 粘質土の混在層
5. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

358. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山と10YR3/1 黒褐色 粘質土の混在層)
2. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

第 72 図　SB3 平面･断面図 (S=1/60)

0　S=1/60　2m



315. 1. 10Y5/1 褐灰色 粘質土(炭化物混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
3. 10YR4/1 褐灰色 粘質土
4. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
5. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

350. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
3. 10YR4/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック少混)
4. 10YR4/1 褐灰色粘質土(地山ブロック混)
5. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

362. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混、10YR3/1 黒褐色粘質土ブロック少混)
3. 10YR6/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
4. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混、10YR3/1 黒褐色ブロック多混)
5. 10YR6/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混、小礫混)
6. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
7. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

363. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
3. 10YR6/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック多混)
4. 10YR5/1 褐灰色 粘質土と地山の混在層
5. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック多混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック少混)
6. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

266. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混)
2. 10YR6/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック多混)
3. 10YR6/1 褐灰色 粘質土と地山の混在層
4. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック混)
5. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

265. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土
2. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック混)
3. 10YR6/1 褐灰色 粘質土
4. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(柱痕)
5. 地山と10YR3/1 黒褐色 粘質土の混在層
6. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

307. 1. 10YR5/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
2. 10YR6/1 褐灰色 粘質土(地山ブロック混、10YR3/1 黒褐色 粘質土ブロック混)
3. 2.5Y8/6 黄色 粘質土(地山)

264. 1. 10YR4/1褐灰色 粘質土(φ3～5cmの礫混)
2. 10YR4/1褐灰色 粘質土(地山ブロック多混、10YR3/1黒褐色 粘質土ブロック混)
3. 10YR5/1褐灰色 粘質土(地山ブロック多混、10YR3/1黒褐色 粘質土ブロック混)
4. 10YR5/1褐灰色 粘質土
5. 10YR5/1褐灰色 粘質土(小礫多混)
6. 10YR5/1褐灰色 粘質土(地山ブロック混、φ1～5cmの礫混)
7. 10YR4/1褐灰色 粘質土と地山の混在層
8. 10YR5/1褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
9. 10YR4/1褐灰色 粘質土(地山ブロック少混)
10. 2.5Y8/6黄色 粘質土(地山)

第 73 図　SB4 平面･断面図 (S=1/60)

0　S=1/60　2m

SA4（第71図）

SA3と方向は少し異なるがほぼ同じ場所に位置する柵列である。北西－南東方向の柵列で、穴の形状は略円形、楕円形で大きさは長径80㎝～110㎝、短径55㎝～90㎝で、深さは24㎝～35㎝である。列の長さは4.45mで穴の間隔はP302－P301間1.5m、P301－P295間1.5m、P295－P292間1.45mとほぼ等間隔である。方位はN13°－Wである。

本報告では柵列としているが、北東側調査区外に柱穴が存在することも想定されることから、掘立柱建物になる可能性もある。

SB3（第72図）

調査区北側に位置する掘立柱建物である。建物は北西－南東桁行6間、南西－北東梁行2間以上の建物で、建物の方位はN20°－W、2－1区SB2と同方位である。P241－P234の西側桁行ラインの南延長上にSA2が所在する。両遺構は同方向のため、同一遺構の可能性も考えたが、両遺構の柱穴間の距離に差異があること、P234とP233で少しずれが見られることから別遺構としている。建物の北東部分は調査区外となるため、全体の様相は確認できない。確認できる範囲での建物規模は北西－南東が8.4m、北側の南西－北東が5.5m、南側の南西－北東が2.9mである。柱間の長さは北西－南東ラインのP241－P240間1.35m、P240－P238間1.35m、P238－P237間1.4m、P237－P236間1.5m、P236－P235間1.45m、P235－P234間1.35m、北側の南西－北東ラインのP241－P342間3.05m、P342－P358間2.45mである。柱穴の形状は略円形、略方形など不定形で長径70㎝～115㎝、短径45㎝～65㎝、深さは23㎝～58㎝を測る。P235、P238、P241、P342、P358の柱穴内部にテラスがある。

SB4（第73図）

調査区北側に位置する掘立柱建物である。SA3、SA4と隣接し、SB3と重複する。建物は北西－南東桁行6間以上、南西－北東梁行1間以上の建物で、建物の方位はN13°－Wで、SA4と同方位である。建物の北東部分は調査区外となる。確認できる範囲での建物規模は北西－南東が10.25m、南西－北東が2.3mである。柱間の長さは北西－南東ラインのP315－P350間1.75m、P350－P362間1.7m、P362－P363間1.7m、P363－P266間1.5m、P266－P265間1.7m、P265－P264間1.9mで、南西－北東ラインのP315－P307間2.3mである。柱穴の形状は不定形で長径70㎝～155㎝、短径70㎝～80㎝、深さ23㎝～71㎝を測る。P265、P363は内部にテラスを持つ。

第 3 節　出土遺物（第74・75・76図）

出土遺物については、古代・中世の土器・磁器、及び土製品や鉄製品を図示した。

152から168は1区から見つかった遺物である。

152～159はSK8から出土した。152は土師器の堝で、外面口縁部の一部には煤が付着する。153の器種も土師器の堝の口縁部であるが、小片のため長胴甕になるかもしれない。154は須恵器長頸瓶の口縁部、155も瓶の口縁部で、内外面に自然釉がみられる。156は須恵器の無台坏で、口縁端部は焼成時に重ね置きしたことにより体部と色調が変わっている。157は口径21㎝の大型の坏の口縁部で、丁寧な仕上がりをみせている。158と159は無台坏の底部で、159の内面には自然釉が認められる。

160～162は自然河川からの出土である。自然河川は近世・近代にかけての流路で、当該時期の陶磁器が大量に見つかっているが、古代・中世の遺物も見つかっている。本報告では古代の遺物で、実測可能なものを掲載した。160は須恵器甕の体部片である。内面調整は、同心円状のタタキの後にハケを施し、丁寧に仕上げている。161は須恵器長頸壺と考えられる肩部の破片、162は土師器壺の底部である。外底部には回転糸切りの痕跡が確認できる。

163～168はSK8で見つかった鉄製品である。表15観察表では器種名を入れているが、錆の付着が著しいことから、違う器種となる可能性がある。164は棒状の製品で、断面の一端が尖頭になっていることから刀子と推定した。166は鉄釘になるかもしれない。

1区における古代の主要な時期については8世紀後半から9世紀前半に位置付けられると考えられる。

167～198は2-1区から出土した遺物である。

174を除く167～178は、掘立柱建物SB1の柱穴から見つかった土器である。167は土師器内黒埦、169は内黒皿の小片である。169の外面には赤彩痕が認められる。168は須恵器壺の底部で、内外面に煤が付着している。170と171は土師器甕の口縁部で、両者とも外面の一部に煤が認められる。172～175は土師器内黒埦である。173は台付でその他は無台である。173は外面に赤彩を施している。

176は須恵器甕の体部片で、外面の一部には煤が付着している。177は土師器埦、178は土師器内黒埦である。外面には赤彩が認められる。

179～186は掘立柱建物SB2の柱穴から出土した遺物である。179は須恵器の盤で、内外面に煤が付着する。180は円形の石製品であるが、用途不明である。181は土師器小型の甕、182は土師器の甕もしくは堝の口縁部で、外面の一部に煤が見られる。183と184は内黒埦で、183は外面に赤彩が認められる。185は須恵器有台坏で、口縁部は弱く反り返る。186は焼土の塊片である。

187はSI102から見つかった土師器甕の体部片である。

188～194は2-1区内におけるピットなどの遺構から出土した土器である。188は土師器内黒埦の底部で、外面に赤彩を施す。189は須恵器無台坏の底部、190はフイゴ羽口と考えられる土製品である。191は須恵器甕の体部片で、焼成がやや甘い。192と193は土師器内黒埦で、192の外面には赤彩が認められる。194は須恵器甕の体部で、外面の一部に煤が付着している。

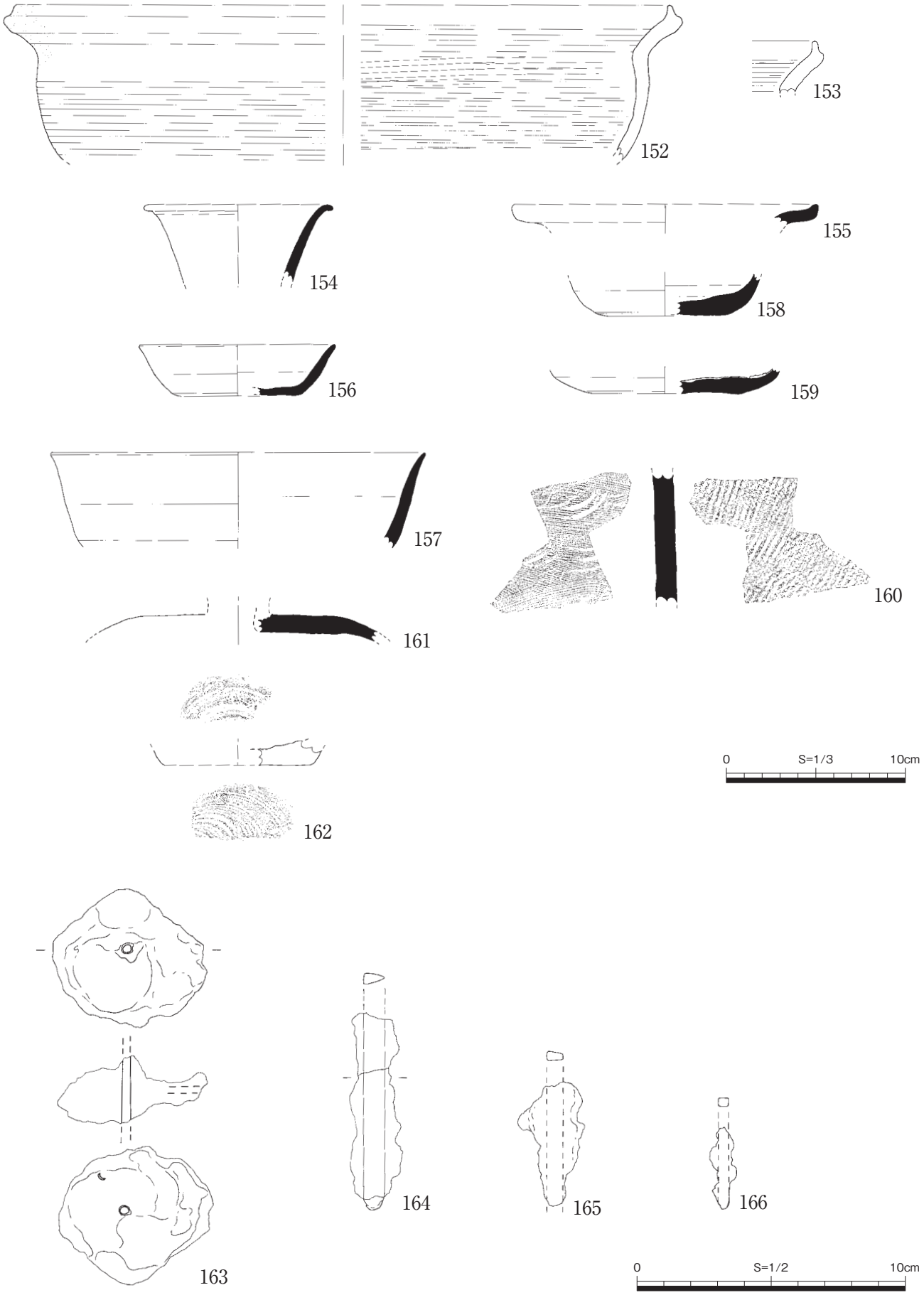
195～197は2−1区北側で確認した自然河川から出土した土器である。195は須恵器蓋で、扁平な形状をしたつまみが認められる。196は須恵器双耳瓶の体部片、197は土師器壺の底部で、外面から底部にかけて煤が付着する。また、外底部には回転糸切り痕が認められる。198は不定形な遺構175から見つかった鉄製品であるが、錆の付着が著しく器種はわからない。

2−1区では古代の遺物が主体となり、須恵器坏・甕や土師器埦の出土が目立つ。主体となる時期は9世紀中頃から後半頃と考えられる。

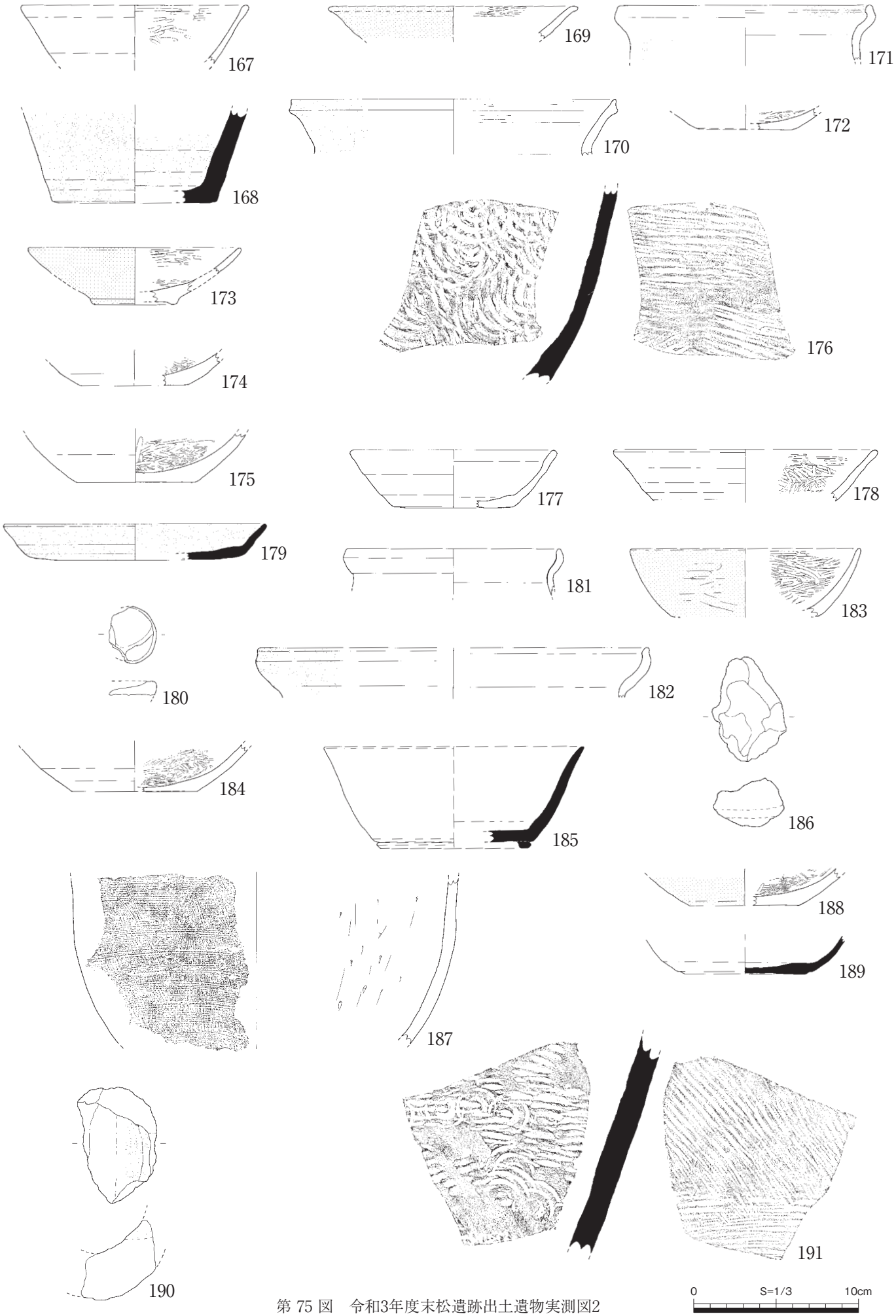
199～207は2−2区から見つかった遺物である。

199はSB3の柱穴にあたるP238から出土した土師器壺の体部片である。200はSB4の柱穴のひとつであるP266の中から発見された須恵器有台坏の底部である。201と205、206は中世の遺物である。201と205は口径8～9㎝の小型の土師器皿である。201は不定形な土坑状遺構278からの出土である。206は白磁皿であるが、焼成がやや甘く、色調は光沢のないうすい灰色となっている。207は排土から見つかった須恵器双耳瓶の体部で、外面には自然釉が認められる。

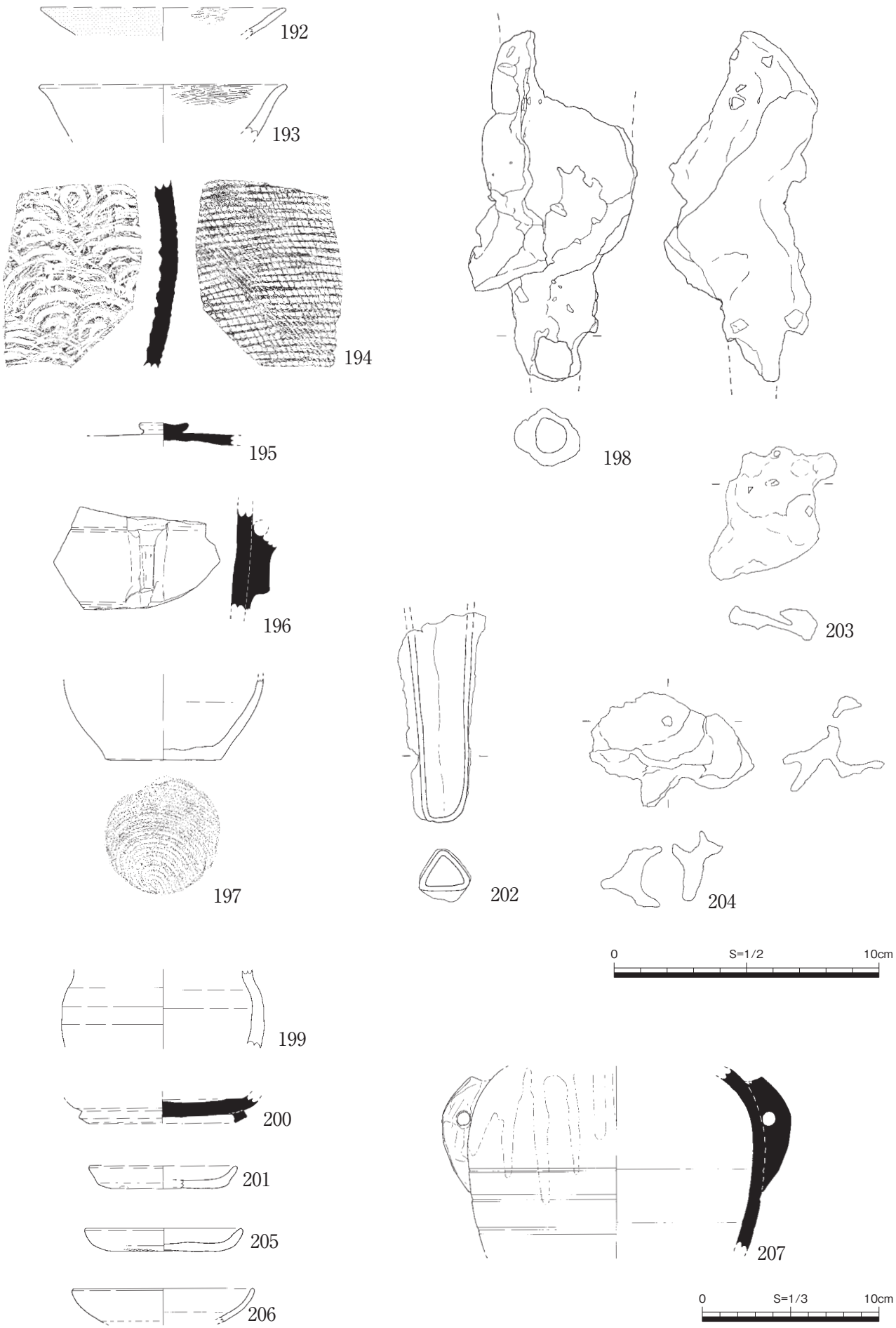
202は鉄製品であるが、錆の付着が著しく器種は不明である。203と204は鉄滓である。201の土師器皿が出土した不定形な土坑状遺構278内にあるP355で見つかっていることから中世の時期と考えられる。



第 74 図　令和3年度末松遺跡出土遺物実測図1



第 75 図　令和3年度末松遺跡出土遺物実測図2



第 76 図　令和3年度末松遺跡出土遺物実測図3

第 14 表　令和3年度 1区 遺物観察表(土器)

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (㎜)	残存高 (㎜)	底径 (㎜)	調整(外) 調整(内)	色調(外) 色調(内)	残存率	備考
152	1区	土師器 堝	380.0	(87.0)	—	ナデ、カキ目	7.5YR7/3にぶい橙	1/6	外面煤付着
	8					ナデ、カキ目	7.5YR7/4にぶい橙		
153	1区	土師器 長胴甕	—	(29.0)	—	ヨコナデ	7.5YR7/6橙	小片	内面煤付着
	8					カキ目	7.5YR8/4浅黄橙		
154	1区	須恵器 長頸瓶	106.0	(43.0)	—	ヨコナデ	10YR5/2灰黄褐	1/6	
	8					ヨコナデ	2.5Y7/1灰白		
155	1区	須恵器 瓶	172.0	(12.0)	—	回転ナデ	N7/灰白	口縁1/9	
	8					回転ナデ	5Y3/2オリーブ黒		
156	1区	須恵器 坏	110.0	29.0	74.0	回転ナデ	N8/灰白	1/5	
	8					回転ナデ	N7/灰白		
157	1区	須恵器 坏	210.0	(54.0)	—	回転ナデ	5B7/1明青灰	口縁1/6	
	8					回転ナデ	N8/灰白		
158	1区	須恵器 無台坏	—	(23.0)	(80.0)	回転ナデ	N7/灰白	底部1/4	底部回転ヘラ切り後ナデ
	8					回転ナデ	N8/灰白		
159	1区	須恵器 坏	—	(14.0)	94.0	回転ナデ	N7/灰白	底部1/6	内面に10YR7/6明黄褐の有機物付着 底部回転ヘラ切り後ナデ
	8					回転ナデ	N7/灰白		
160	1区	須恵器 甕	—	—	—	格子状タタキ	5PB7/1明青灰	小片	
	NR					ハケのち青海波状タタキ	N7/灰白		
161	1区	須恵器 長頸壺	—	(15.0)	—	回転ナデ	N7/灰白	肩部1/6	
	NR					回転ナデ	5PB6/1青灰		
162	1区	土師器 壺	—	(9.0)	(40.0)	回転糸切り	7.5YR7/4にぶい橙	底部1/4	
	NR					ヨコナデ	7.5YR8/6浅黄橙		

第 15 表　令和3年度 1区 遺物観察表(金属製品)

番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (㎜)	最大幅 (㎜)	最大厚 (㎜)	重量 (g)	備考
163	1区	鉄製紡錘車	57.0	—	軸径2.5～3.0 円盤部3.0	38.0	7.5YR4/1褐灰
	8						
164	1区	鉄製刀子か？	73.5	17.0	4.0	15.3	10YR3/1黒褐
	8						
165	1区	鉄釘か？	46.5	6.0	3.0	1.3	7.5YR4/1褐灰
	8						
166	1区	鉄錐	3.5	4.0	3.0	8.8	7.5YR4/1褐灰
	8						

第 16 表　令和3年度 2区 遺物観察表（土器）

番号	遺構 出土位置	器種	口径（㎜）	残存高（㎜）	底径（㎜）	調整（外） 調整（内）	色調（外） 色調（内）	残存率	備考
167	2-1区 28（SB1）	土師器 内黒埦	138.0	（36.0）	—	ヨコナデ ヨコナデ、ミガキ	7.5YR6/4にぶい橙 N3/暗灰	口縁1/8	
168	2-1区 28（SB1）	須恵器 壺底部	—	（57.0）	100.0	回転ナデ 回転ナデ	5B5/1青灰 10BG7/1明青灰	1/3	
169	2-1区 29（SB1）	土師器 内黒皿	152.0	（20.0）	—	ヨコナデ ミガキ	2.5YR7/6橙 N2/黒	口縁部小片	外面赤彩
170	2-1区 29（SB1）	土師器 甕	198.0	（34.0）	—	ヨコナデ ヨコナデ、カキ目	5YR7/6橙 10YR8/4浅黄橙	口縁部小片	外面煤付着
171	2-1区 30（SB1）	土師器 甕	155.0	（33.0）	—	ヨコナデ ナデ	10YR6/2灰黄褐 10YR8/3浅黄橙	小片	外面煤付着
172	2-1区 30（SB1）	土師器 内黒埦	—	（13.0）	60.0	ヨコナデ ミガキ	5YR7/6橙 N3/暗灰	底部1/3	底部回転糸切り
173	2-1区 31（SB1）	土師器 内黒埦	130.0	—	52.0	ヨコナデ ミガキ	N4/灰、2.5YR7/6橙 N3/暗灰または2/黒	底部1/4 口縁1/9	外面赤彩、図上復元
174	2-1区 69	土師器 内黒埦	—	（20.0）	（66.0）	ケズリ ミガキ	10YR8/3浅黄橙 N3/暗灰	底部1/6	
175	2-1区 167（SB1）	土師質 内黒埦	—	（30.0）	72.0	回転ヘラケズリ ミガキ	5YR8/3淡橙 N2/黒	1/3	底部回転ヘラ切り
176	2-1区 168（SB1）	須恵器 甕	—	—	—	タタキ タタキ	N6/灰 N6/灰	小片	内面青海波状のタタキ 外面煤付着
177	2-1区 86（SB1）	土師器 埦	126.0	（35.0）	72.0	ヨコナデ ヨコナデ	10YR8/3浅黄橙 10YR8/3浅黄橙	小片	接合不可同一個体 図上復元
178	2-1区 86（SB1）	土師器 内黒埦	160.0	（31.0）	—	ヨコナデ ミガキ	10YR7/4にぶい黄橙 N4/灰	小片	
179	2-1区 58（SB2）	須恵器 盤	160.0	22.0	134.0	回転ナデ ナデ	5B6/1青灰 5B5/1青灰	1/6	内外面煤付着
181	2-1区 93（SB2）	土師器 小型甕	130.0	（29.0）	頚部径 121.0	ヨコナデ ヨコナデ	7.5YR7/4にぶい橙 7.5YR7/3にぶい橙	口縁部小片	内面煤付着
182	2-1区 93（SB2）	土師器 堝	（238.0）	（30.0）	頚内径 （20.0）	ヨコナデ ヨコナデ	7.5YR8/3浅黄橙 7.5YR8/3浅黄橙	口縁小片	外面煤付着
183	2-1区 93（SB2）	土師器 内黒埦	140.0	（50.0）	（88.0）	ヨコナデ ヨコナデ後ミガキ	7.5YR7/3にぶい橙 N3/暗灰	小片	外面赤彩
184	2-1区 93（SB2）	土師質 内黒埦	—	（29.0）	76.0	ケズリ ミガキ	7.5YR7/4にぶい橙 N2/黒	底部1/3	底部回転ケズリ後ナデ
185	2-1区 93（SB2）	須恵器 有台坏	158.0	62.0	94.0	回転ナデ 回転ナデ	5B5/1青灰 N6/灰	1/4	
187	2-1区 102（SI）	土師器 甕	—	—	体部径 238.0	カキメ、ハケ 縦方向のケズリ	10YR7/3にぶい黄橙 10YR8/2灰白	小片	
188	2-1区 65	土師器 内黒埦	—	（23.0）	66.0	削り後ヨコナデ ミガキ	7.5YR7/3にぶい橙 N2/黒	底部1/3	外面赤彩
189	2-1区 174	須恵器 坏	—	（24.0）	74.0	回転ナデ ヨコナデ	N8/灰白 N8/灰白	底部1/3	
191	2-1区 57	須恵器 甕	—	—	—	タタキ タタキ後一部ナデ	10YR7/2にぶい黄橙 10YR7/2にぶい黄橙	小片	焼成不良
192	2-1区 45	土師器 内黒埦	（150.0）	（16.0）	—	ヨコナデ ヨコナデ後ミガキ	5YR6/4にぶい橙 N2/黒	口縁部小片	外面赤彩
193	2-1区 148	土師器 内黒埦	140.0	（20.5）	—	ヨコナデ ヨコナデ後ミガキ	10YR7/4にぶい黄橙 N3/暗灰	1/7	
194	2-1区 34	須恵器 甕	—	—	—	タタキ 青海波状のタタキ	N7/灰白 5PB7/1明青灰	小片	外面煤付着

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	残存高 (mm)	底径 (mm)	調整(外) 調整(内)	色調(外) 色調(内)	残存率	備考
195	2-1区 北側礫部	須恵器 つまみ付蓋	—	つまみ径 28.0	—	ヨコナデ ヨコナデ	N6/灰 N7/灰白	つまみ完存	
196	2-1区 北側礫部	須恵器 双耳瓶	—	(58.0)	—	ナデ ナデ	10BG6/1青灰 10BG7/1明青灰	小片	
197	2-1区 北側礫部	土師器 小壺	—	(46.0)	65.0	ヨコナデ、底部回転糸切り ヨコナデ、ナデ	10YR6/3にぶい黄橙 10YR6/4にぶい黄橙	底部完存	外面煤付着 底部回転糸切り痕
199	2-2区 238(SB3)	土師器 小壺	頚部径 101.0	(44.0)	体部径 115.0	ヨコナデ ヨコナデ	10YR5/3にぶい黄褐 10YR5/2灰黄褐	1/5	
200	2-2区 266(SB4)	須恵器 有台坏	—	(16.0)	96.0	ヨコナデ ヨコナデ	N7/灰白 N7/灰白	底部1/4	
201	2-2区 278	土師器 皿	84.0	13.0	75.0	ヨコナデ ヨコナデ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR8/4浅黄橙	1/9	
205	2-2区 包含層	土師器 皿	90.0	13.0	56.0	ヨコナデ ヨコナデ	7.5YR8/4浅黄橙 7.5YR8/4浅黄橙	1/4	底部静止糸切り痕
206	2-2区 包含層	磁器 白磁皿	104.0	(19.0)	—	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y8/1灰白 7.5Y8/1灰白	小片	
207	2-2区 排土	須恵器 双耳瓶	—	(104.0)	—	ヨコナデ ヨコナデ	5Y6/2灰オリーブ N8/灰白	小片	外面自然釉

第 17 表　令和3年度 2区 遺物観察表(土製品)

番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
186	2-1区 93(SB2)	焼土塊	63.5	(45.0)	27.5	51.2	
190	2-1区 87	フイゴ羽口	70.5	48.0	28.0	55.9	

第 18 表　令和3年度 2区 遺物観察表(石製品)

番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石　材	備考
180	2-1区 58(SB2)	不明	35.0	—	9.0	7.5	凝灰岩	径：35mm

第 19 表　令和3年度 2区 遺物観察表(金属製品)

番号	遺構 出土地点	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
198	2-1区 175	不明	130.0	59.0	不明	127.8	サビがひどく器厚不明
202	2-2区 355	不明	79.0	33.0	2.0	26.6	鍋や瓶の脚部か？
203	2-2区 355	鉄滓	50.0	48.5	3.0	15.4	
204	2-2区 355	鉄滓	43.0	62.5	4.0	34.5	

第 8 章　総括

第 1 節　上林イシガネ遺跡の調査成果まとめ

本遺跡における今回の調査では、縄文土器や、古代及び中世の遺物が見つかっているが、主体となる時期は14世紀を中心とした集落の一部と想定される。

当該時期の主要な遺構としては、3区で確認した東西約9m、南北12m以上の区画溝SD1と、区画内に存在するSK25・26の土坑が挙げられる。3区の区画溝内に限らず、調査区全域には複数のピットがみられるが、掘立柱建物の柱穴として認められるものは確認していない。検出した区画溝SD1は北方へ延びていることからも、生活拠点となる集落の中心は、本調査区北側一帯になると考えられる。

区画された溝SD1の区域内には、楕円形土坑SK25や円形土坑SK26を検出している。SK25の埋土には人頭大の自然石が集中して入っており、その下からは完形に近い珠洲焼擂鉢（10）が出土している。

SK25に隣接するSK26は、遺物は確認できないものの、SK25と同様の覆土が人為的に入っている。

また、3区SD1からは、鉄製小刀（19）の完形品が出土している。

以上のように、土坑の埋土の状況、10の珠洲焼擂鉢や19の鉄製小刀は埋納品と推されることから、本調査区で見つかった3区の区画溝内は、集落から離れた信仰対象のエリアにあたると考えられる。

第 2 節　末松遺跡の調査成果まとめ

本調査区では、古代及び中世の集落を確認した。

古代では、令和3年度調査の1区で8世紀後半を主体とするSK8が見つかっているが、当該時期における他の遺構は確認していない。本時期の集落の中心は、令和3年度調査1区の周辺部に展開していると想定される。

現在の中林集落内を横断する市道額谷・末松線と県道堀内・上林線が交差する平成29年度調査2区では掘立柱建物5棟、本遺跡の北端にあたる令和3年度調査2区では掘立柱建物4棟及び柵列、本遺跡南端にあたる平成29年度調査1区からは掘立柱建物1棟を確認した。

いずれの調査区からも、9世紀半ば～後半の土師器埦を中心とした土器が出土しており、当該時期の集落域がそれぞれ存在したと考えられる。

また、平成29年度調査2区の北方にある平成30年度調査1区からは、完形品及び完形品に近い9世紀半ば～後半の土師器埦や皿が複数のピットから見つかっている。これらの土器は埋納によるものと考えられ、この一帯は、古代後半の集落外に展開する信仰対象地と推察される。

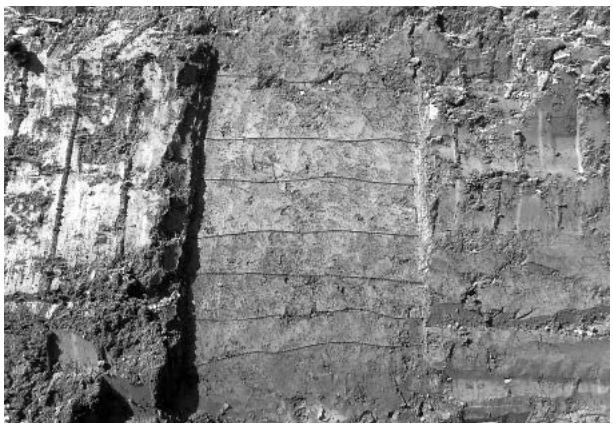
令和2年度調査1区では、14世紀を中心とした集落を確認した。主要な遺構では、竪穴状遺構や土坑、溝などで、遺物は生活用品にあたる土師器皿や珠洲焼擂鉢、青磁埦、石製行火などが出土した。SI174・175・254などの竪穴状遺構は集落内の同一箇所で造り替えしており、SI254は造り替えにより掘方が脆弱となる部分を、自然石を積み上げて補強している。これら竪穴状遺構の北側には、SK8・16・18など様々な形状をもった土坑群が点在する。土坑群のさらに北側には東西方向のSD1・2が走っており、両溝については、道路状遺構の側溝と推される。

これらの遺構の配置状況から、計画的な宅地割りを有した集落があり、その北側には集落間を結ぶ道路が走るというような中世の景観を復元することができる。

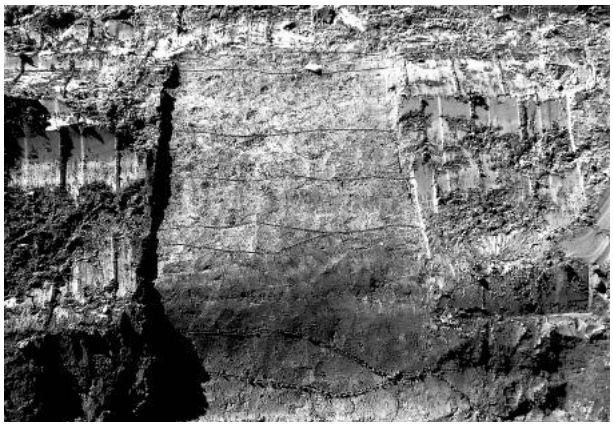
≪参考文献≫

・末松遺跡調査団　1971『史跡末松廃寺』　石川県教育委員会
・北野博司　1989『末松遺跡　石川県農業短期大学付属農業資源研究所増築工事に係る埋蔵文化財報告書』
（財）石川県埋蔵文化財センター
・安英樹・立原秀明・藤井秀明　2000『野々市町末松遺跡群　農村活性化住環境整備事業（野々市地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
（財）石川県埋蔵文化財センター
・横山貴広　2001『末松A遺跡・末松しりわん遺跡　民間開発・地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
野々市町教育委員会
・柿田祐司・布尾和史　2005『野々市町末松遺跡一般国道157号線鶴来バイパス改築工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書』
（財）石川県埋蔵文化財センター
・垣内光次郎・伊藤雅文・金山哲哉・山田由布子　2006『末松遺跡　石川県立大学整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
（財）石川県埋蔵文化財センター
・安中哲徳・西田昌弘・空 良寛　2009『末松遺跡　石川県立大学大学院棟建設工事及び大学連携インキュベータ整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）石川県埋蔵文化財センター
・腰地孝大　2017『末松遺跡　ふるさと農道緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　野々市市教育委員会
・藤田邦雄　1997「中世加賀国の土師器様相」『中・近世の北陸―考古学が語る社会史―』　北陸中世土器研究会
・吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
・田嶋明人　1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』　石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

1区 1トレンチ全景（東から）


1区 1トレンチ西壁土層断面（東から）

1区 2トレンチ全景（南西から）

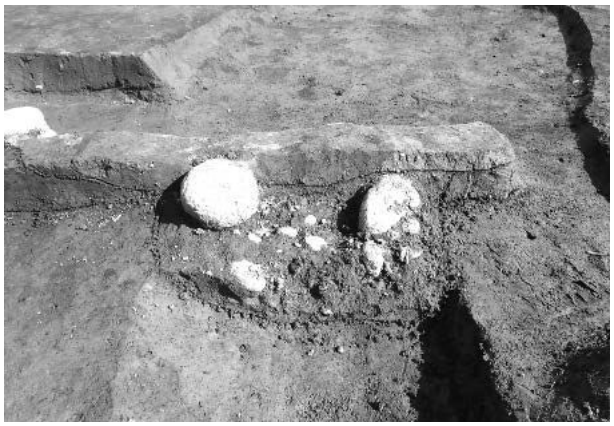

1区 2トレンチ西壁土層断面（東から）

2区 全景（北西から）

3区 全景（南東から）

3区 西半全景（完掘状況）（北東から）

3区 北壁土層断面（南東から）

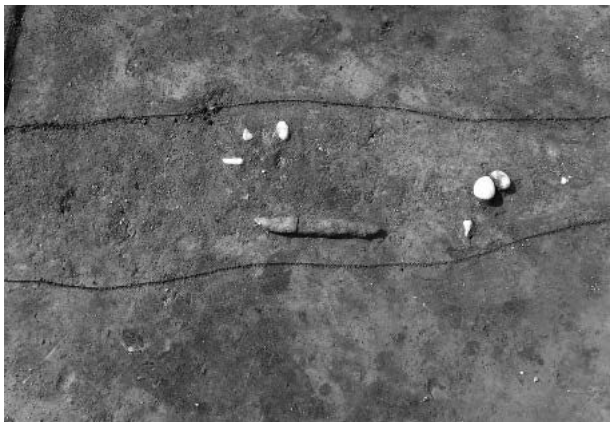


3区 サブトレンチ1　SD1（e-f）断面（西から）

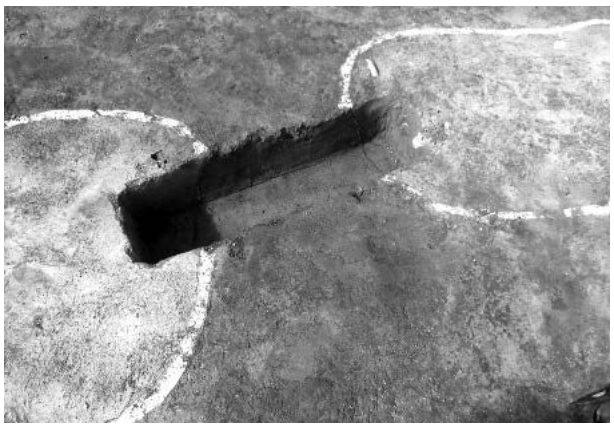
3区 サブトレンチ2　SD1（g-h）断面（北から）

3区 SD1（i-j）断面（北から）

3区 西壁土層断面（北東から）


3区 SD1（k-l）小刀出土状況（東から）

3区 P3 土層断面（南から）


3区 SK25・26 遺構検出状況（東から）

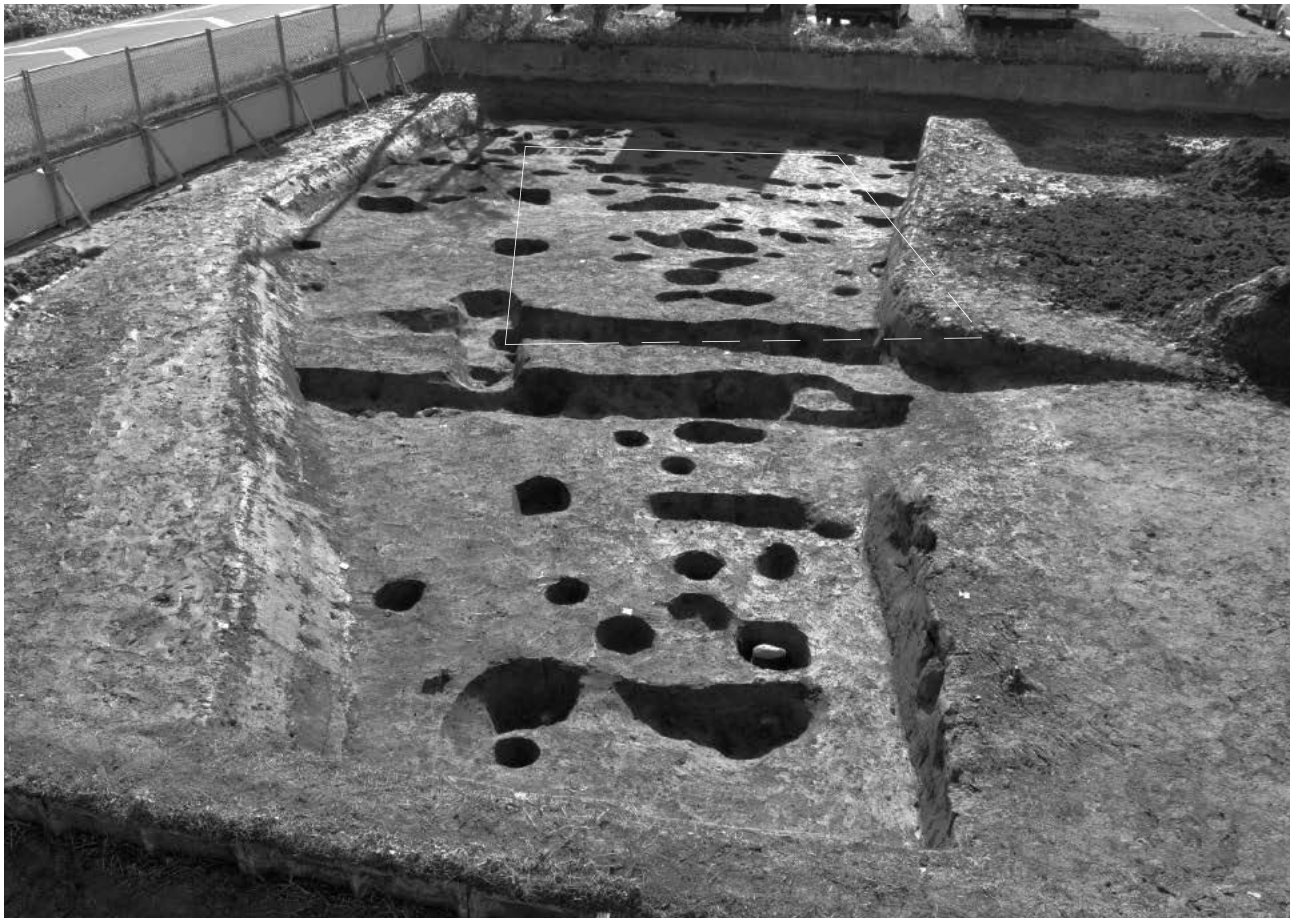
3区 SK25 遺物出土状況（東から）

3区 SK25・26 完掘状況（東から）

3区 上層遺構面検出状況（南西から）

写真図版4　上段：平成28年度調査（上林イシガネ遺跡）　下段：平成29年度調査（末松遺跡）

4区 全景（南東から）



1区 全景（北から）

1区 SD85・86（西から）

1区 SD86・87、SK89（東から）

1区 SD85 遺物出土状況（西から）

2区 調査区南端全景（SD640 以南）（北から）

2区 調査区南半全景（SB2 付近）（南から）

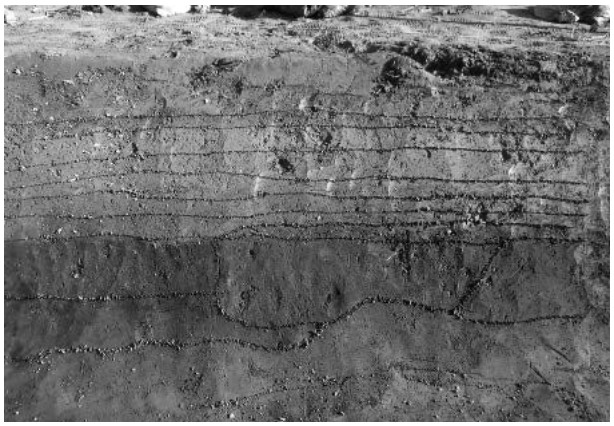
2区 調査区北半全景（SB3・4 付近）（南から）

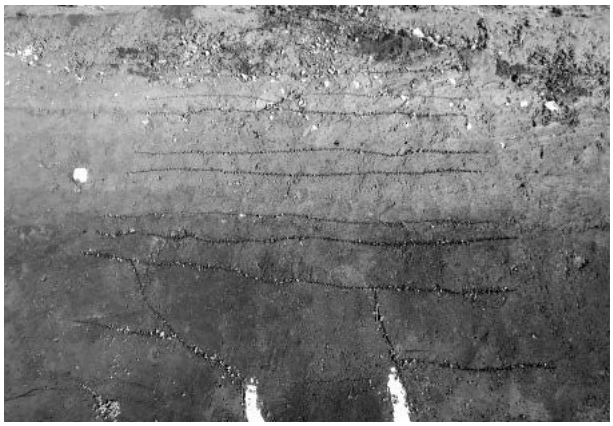
2区 調査区北端全景（SB5 付近）（南から）

2区 調査区北端東西トレンチ全景（西から）

2区 調査区北半 東壁土層（南西から）

2区 調査区南半 東壁土層①（西から）


2区 調査区南半 東壁土層②（西から）


2区 調査区南半 東壁土層③（西から）

2区 SD640 土層断面（北西から）

2区 P268 遺物出土状況（南から）

2区 P185 遺物出土状況（東から）

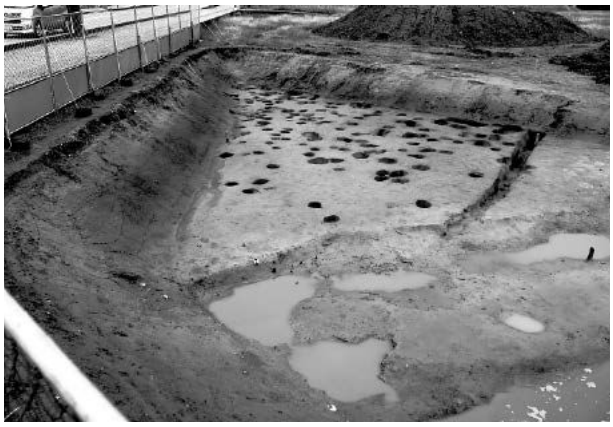
2区 SK533 土層断面（南から）

1区 全景垂直航空写真（右が北）

1区 SD1･2･3 完掘（南から）

1区 全景（北から）

1区 全景（南から）



1区 南西部（東から）

1区 P237 遺物出土状況1（南東から）

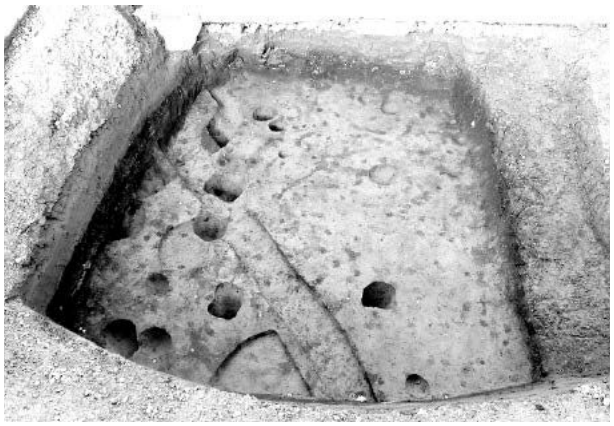
1区 P237 遺物出土状況2（南から）

1区 P250 遺物出土状況（西から）

1区 SD4・5 完掘（西から）

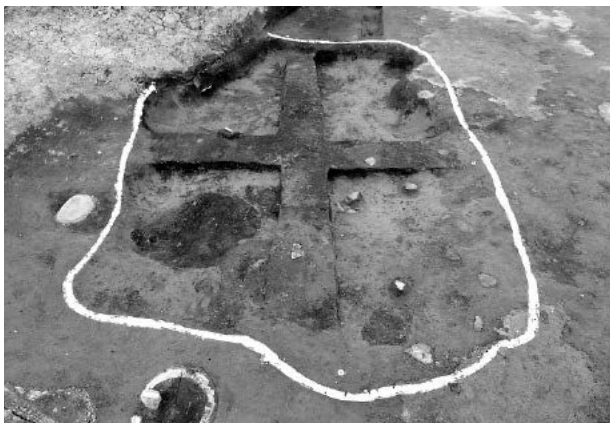
1区 SI428 土層断面（北西から）

1区 SI429 土層断面（西から）


2区 南半全景（南から）

3区 全景（北から）

1区 SD1・2 完掘（北東から）


1区 SI531（竪穴住居）遺物出土状況（南から）

1区 SK419・5 完掘（北西から）

1区 SK7 完掘（北東から）

1区 SK8 完掘（北東から）

1区 SK9 完掘（南から）

1区 SK16 完掘（北東から）

1区 SK18 土層（南から）

1区 SK11・9 完掘（南東から）

1区 SK20・136 完掘（北東から）

1区 SK13 完掘（北東から）

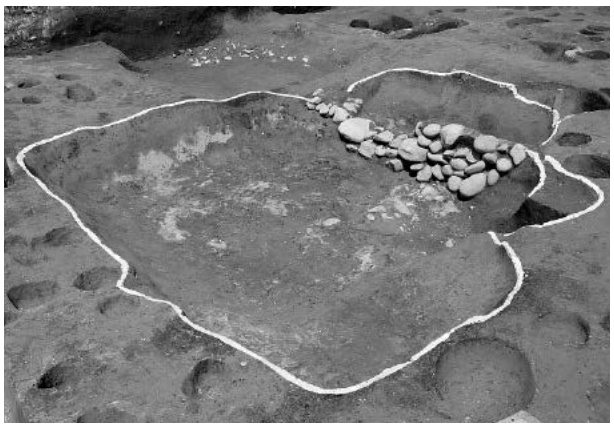
1区 SK21・258 完掘（南東から）

1区 SK12・17 完掘（東から）

1区 SK171・172・173、P108 完掘（北西から）

1区 SK173 遺物出土状況（南西から）

1区 SI174・175 土層断面（南から）


1区 SI254・255、SK256 完掘（南東から）

1区 SI254・255 土層断面（西から）

1区 SK22 遺物出土状況（北から）

2区 全景（南から）

1区 全景（南から）

1区 全景（北から）

1区 全景（南から）

1区 SK8 遺物出土状況（北東から）

2-1区 SI102（竪穴住居）完掘（南西から）

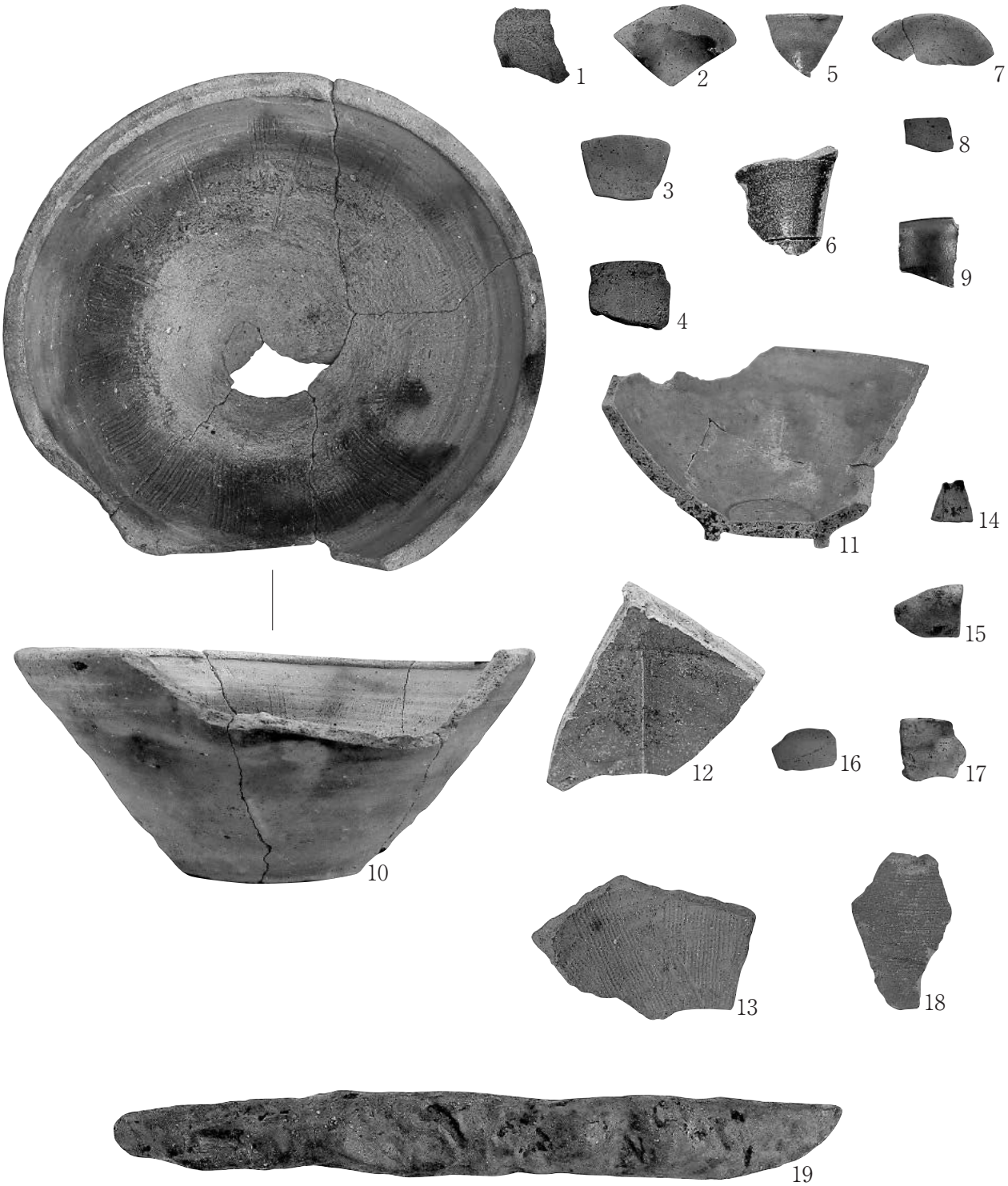
2-1区 SB1・2（北西から）

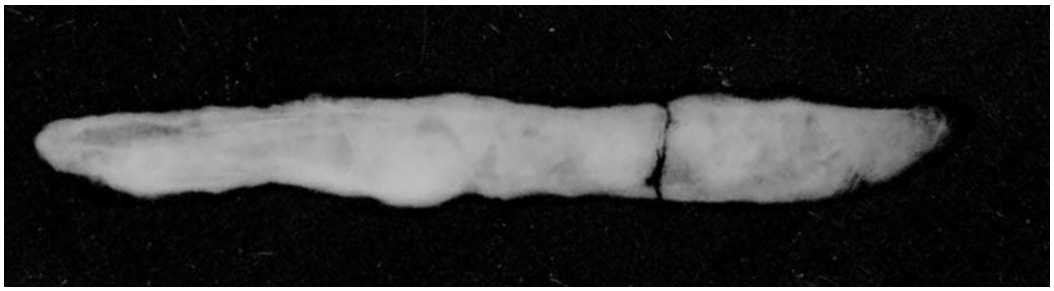
2-1区 全景（南から）

2-2区 全景（南から）

2-2区 SB3・4、SA3・4（北西から）

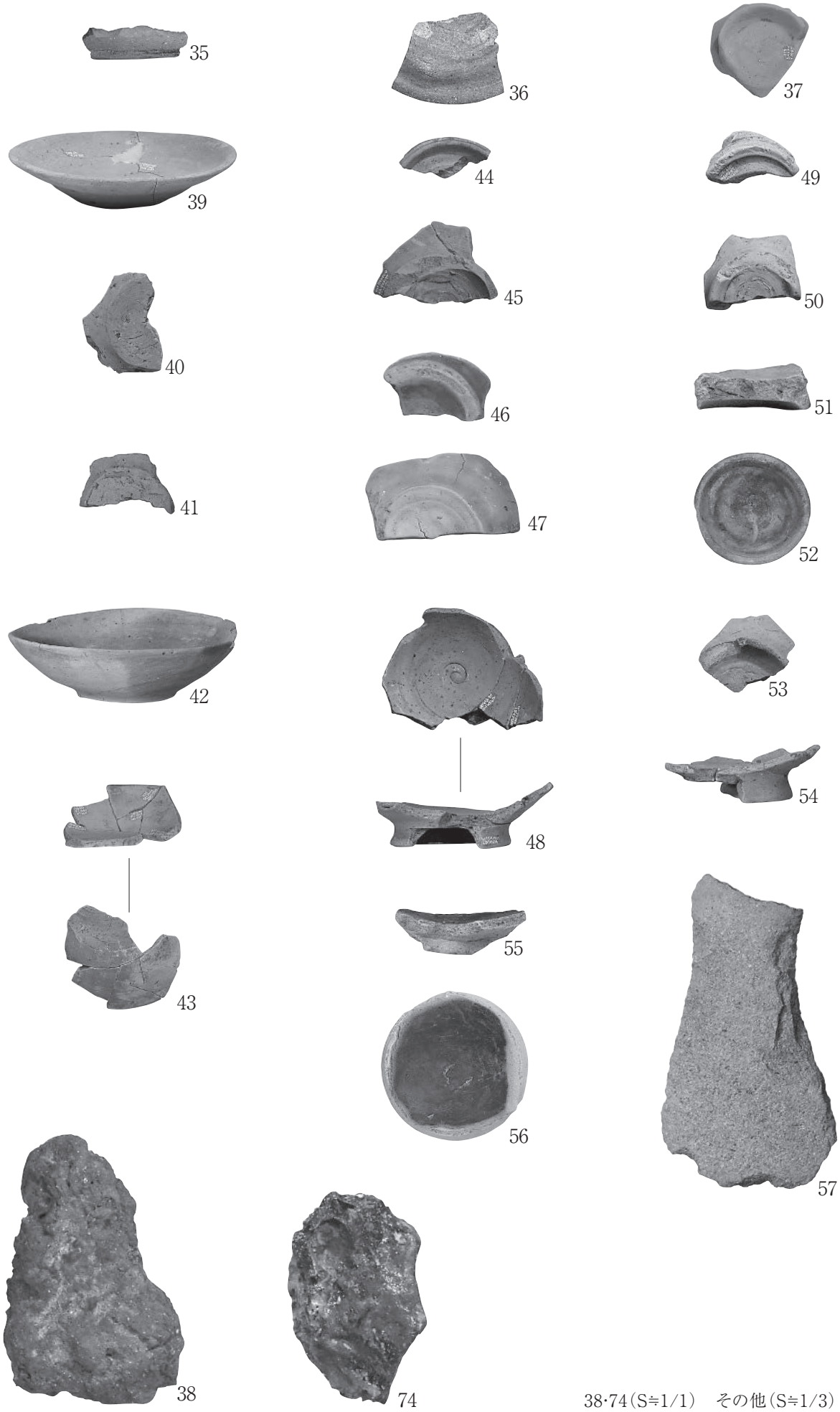
2-2区 全景（北から）





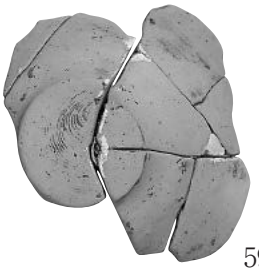
19（レントゲン）

10（S≒1/4）　19（S≒1/2）　その他（S≒1/3）



38·74（S≒1/1）　その他（S≒1/3）

58


59

60

65

71

61

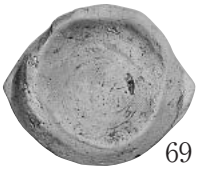
64

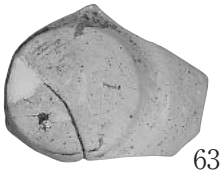
68

72

62

66


69


63

67

70

73

75

76

78

80

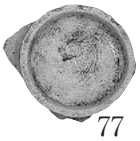
81

88

89

90

91


77

82

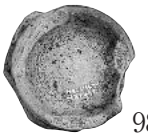
83

92

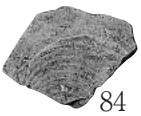
93

94

97


98

79


84

85

86

87

95

96

99

100

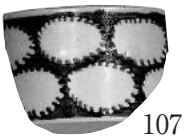
101

102

103

104

105


107

108

106

109

110

111

112

113

114

115

116

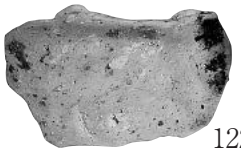
117

118

119

120

121


122

123

124

125

126

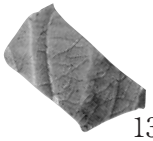
127

128

129

130

131


132

133

134

135

136

133（S≒1/2）　その他（S≒1/3）

137

138

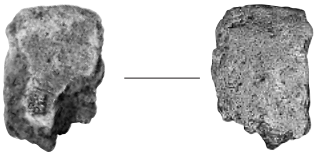
140

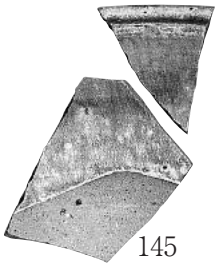
141

139

142

143


144


145

146

148

149

150

147

151

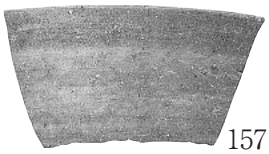
152

153

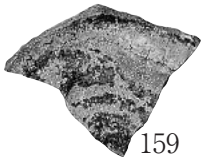
154

155

156


157

158


159

160

161

162

163

164

165

166

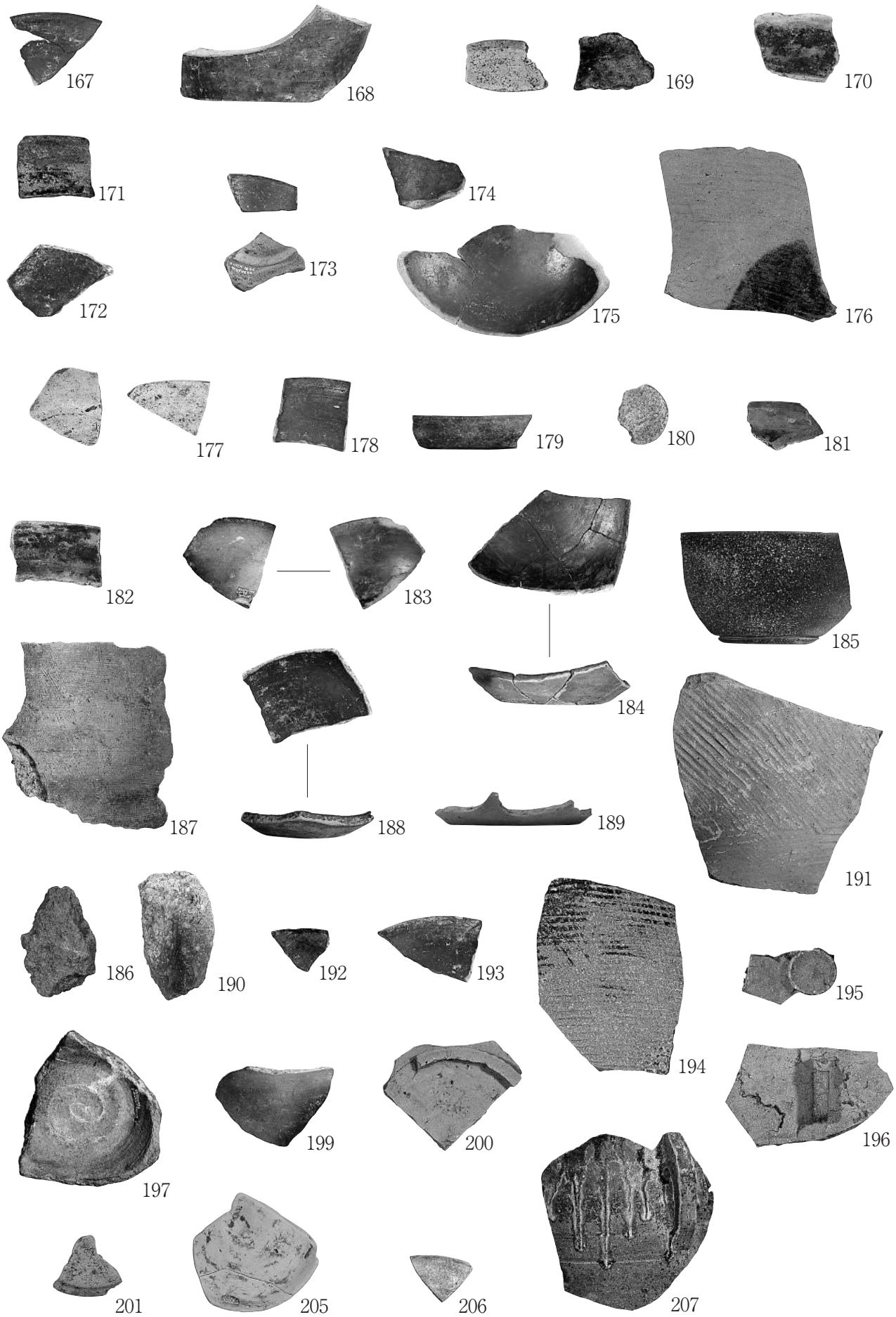
198

202

203

204

163~166、198、202～204（S≒1/2）　その他（S≒1/3）


167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
199
200
201
205
206
207

報　告　書　抄　録

ふりがな	かんばやしいしがねいせき　すえまついせき
書名	上林イシガネ遺跡　末松遺跡
副書名	野々市市中林土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1（都市計画道路 四十万末松線・堀内上林線）
シリーズ名	野々市市中林土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	1
編著者名	西村　慈子、腰地　孝大、徳野　裕子、田村　昌宏
編集機関	野々市市教育委員会
所在地	〒921−8510　石川県野々市市三納一丁目1番地　　Tel:076−227−6122
発行機関	野々市市教育委員会
発行年月日	西暦　2023年3月27日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
上林イシガネ遺跡（かんばやし） 平成28年度調査	石川県（いしかわけん） 野々市市（ののいちし） 中林二丁目（なかばやしにちょうめ） 上林三丁目（かんばやしさんちょうめ）	17344	1205800	36° 50′ 58″	136° 60′ 30″	2016年9月16日～ 2016年11月30日	1,570	記録 保存 調査
末松遺跡（すえまつ） 平成29年度調査	石川県（いしかわけん） 野々市市（ののいちし） 中林二丁目（なかばやしにちょうめ）	17344	1205800	36° 50′ 77″	136° 59′ 92″	2017年11月7日～ 2018年1月23日	600	記録 保存 調査
末松遺跡（すえまつ） 平成30年度調査	石川県（いしかわけん） 野々市市（ののいちし） 中林二・三丁目（なかばやしに・さんちょうめ）	17344	1205800	36° 50′ 80″	136° 59′ 92″	2018年9月10日～ 2018年12月12日	589	記録 保存 調査
末松遺跡（すえまつ） 令和2年度調査	石川県（いしかわけん） 野々市市（ののいちし） 中林三丁目（なかばやしさんちょうめ）	17344	1205800	36° 50′ 92″	136° 59′ 93″	2020年6月25日～ 2020年9月30日	560	記録 保存 調査
末松遺跡（すえまつ） 令和3年度調査	石川県（いしかわけん） 野々市市（ののいちし） 中林三丁目（なかばやしさんちょうめ）	17344	1205800	36° 50′ 95″	136° 59′ 94″	2021年7月26日～ 2021年12月6日	755	記録 保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上林イシガネ遺跡 平成28年度調査	集落	縄文、古代 中世、近世	土坑、溝、自然河川	縄文土器、須恵器、古代・中世土師器 中世・近世陶磁器、打製石斧、砥石 鉄製小刀	
末松遺跡 平成29年度調査	集落	縄文、古代 中世	掘立柱建物、溝、小穴	須恵器、土師器、打製石斧、鉄滓 フイゴ羽口	
末松遺跡 平成30年度調査	集落	縄文、古代 中世、近世	溝、小穴	縄文土器、須恵器、古代土師器 中世・近世陶磁器、打製石斧	
末松遺跡 令和2年度調査	集落	古代、中世	竪穴状遺構、土坑、溝	須恵器、古代・中世土師器 中世陶磁器、砥石、行火	
末松遺跡 令和3年度調査	集落	古代、中世	竪穴建物、掘立柱建物、 柵列、土坑、自然河川	須恵器、古代・中世土師器、中世磁器 鉄製小刀・釘	

要　約	上林イシガネ遺跡は、縄文、古代、中世、近世の遺跡である。縄文や古代については、縄文土器や須恵器など遺物は出土しているが、遺構は確認していない。中世は14世紀を中心とした集落の一端を確認した。区画された溝のエリア内からは、土坑2基を検出し、埋土の状況や出土遺物の状況から信仰地の可能性がある。近世は、自然河川が見つかっている。 末松遺跡は、縄文、古代、中世、近世の遺跡である。縄文時代は、少量ではあるが、土器や打製石斧を確認することができた。古代は、8世紀後半と、9世紀中～後半の集落跡を確認した。本報告においては、8世紀後半は土坑1基のみの検出で、集落の中心は確認した土坑の周囲に存在すると考えられる。9世紀中～後半の集落は、本遺跡の北端、中央部、南端でそれぞれ確認しており、掘立柱建物が複数棟建っている。また、集落から離れた箇所では、ピットに土師器椀や皿を埋納するエリアがあり、当該時期の信仰の場であったと思われる。中世では、14世紀を主体とする集落跡を確認した。竪穴状遺構や土坑が計画的に造られ、これらの遺構の北側に側溝を有した道路状遺構を検出した。当該時期の集落の景観を復元するうえで興味深い調査成果となった。

野々市市中林土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書1
（都市計画道路 四十万末松線・堀内上林線）

上林イシガネ遺跡・末松遺跡

発行日　令和5（2023）年3月27日
発行者　野々市市教育委員会
〒921-8510
野々市市三納一丁目1番地
電話 076-227-6122
E-mail shougai@city.nonoichi.lg.jp
印　刷　高桑美術印刷株式会社